

古代學研究所研究報告 第3輯

大分県 丹生遺跡群の研究

鈴木忠司 編

平成4年

財團法人 古代學協會

序

この度、大分県の丹生遺跡群の研究書に序文を草する機会に至ったのは、洵に欣快に堪えぬことである。発掘調査に着手以来、殆ど30年を経た後なのである。

(脚)古代学協会が、わが学界の石器時代関係の主要な研究者を総動員して丹生遺跡群の発掘調査を遂行したのは、昭和37~42年のことであった。発掘者の当然の責任として毎年『調査概報』を刊行し、成果を公表すると共に学界に批判と教示を乞うて来た。

調査の終結後も当協会は、同遺跡群発見の遺物の研究に重大な関心を抱き、43年に平安博物館を設立すると同時に、研究部に考古学第1研究室をおき、専門家を研究員に充て、丹生遺跡群を中心とする岩宿文化の研究に当たらせた。また昭和63年、平安博物館を改組し、替わって古代学研究所を設立した時には、そこに第2研究室を置き、前記の研究を継承させ、引き続いて丹生遺跡群の証示する岩宿文化の研究に従事せしめた。その間、類似の石器を追跡して福岡県の清水山遺跡等を発掘したり、研究員をタンザニア、ケニア、シベリア方面に派遣したりするなど、恒にこの分野での研究を怠らないで来た。

にも拘わらず丹生遺跡群に示現された岩宿文化の研究は遅々として進捗しなかった。その要因は、①日本の旧石器文化(岩宿文化)の研究は発足したばかりで、全国的にその様相が明確に把握出来ていなかつたこと、②丹生遺跡群を特色づけている石器に類似する石器(所謂『祖型標様』)を出土する遺跡が殆ど知られていないことであった。専任研究員の力量不足もさることながら、これら二つの要因は研究を至難となしたのである。

しかしここ二十数年間に、岩宿文化の研究は格段の展開を遂げ、研究は微細に亘って進められるに至った。その意味では①の要因はほぼ解消したと言えるが、しかし②の要因は依然として研究の行手を阻み続けている。当協会は嘗て幾多の研究者を6箇年に亘って動員し、また文部省より多額な研究助成金を受けて大規模な調査を遂行した。こうした諸事情に鑑みて当協会は、いつまでも研究成果の再整理を逕延せることは許されなくなつた。

ここに至って当協会は、第2研究室の鈴木忠司助教授を中心に全国的に岩宿文化の研究者を選び、衆智を聚めて丹生遺跡群出土の遺物の再検討に乗り出したのである。遷延も甚だしい報告・研究ではあるけれども、それはあながち当協会の怠慢にのみ帰されるものではなかろう。

感謝に堪えないのは、現在、岩宿文化研究の第一線に立って活躍されている、織笠昭、木村英明、佐川正敏、竹岡俊樹、橋昌信の諸氏が当協会の懇請を容れ、共同研究者として研究に参画され、それぞれの勤務地と京都との間を幾度となく往復し、遺物の検討や討論に加わられたことである。さらに中国の中国科学院古脊椎動物・古人類研究所の黄慰文氏が共同研究をお受けいただいたのは、光榮とするところである。

本書のうち第一部は、第2研究室員の手になる。それは鈴木忠司が中心となって執筆したもので、

謂わば最終報告に該当する。第二部は各研究員がそれぞれ丹生遺跡群の存在と出土物を念頭において各地の初期旧石器文化を検討された論考からなっている。丹生遺跡群に関する諸問題が本書によってすべて解明されたとは言えない。そうした結論を導出するためには、この遺跡群の様相は余りにも複雑である。しかし本書の刊行によってその解明に向けて新たに一步が踏み出されたことは疑いがなかろう。

丹生遺跡群の調査には、豫備調査、第1～6次調査を通じて実に多数の研究者が参加された。考古学を中心とし、地質学を含めた調査団の構成は、本書の3～5頁に掲げた通りである。当協会は、これら多数の方々の厚意ある勞に感謝の意を表する。

ただ整理、研究が長期に亘ったため、協力者の中には、本書の印行を見ずに他界された方も少なくない。いま期間中に黄泉に帰した方々の芳名と歿年を列記すると、以下の通りである。

石附喜三男(昭和61年3月27日)	磯崎正彦(昭和55年7月22日)	小江慶雄(昭和63年11月7日)
小林知生(昭和64年1月6日)	酒詰仲男(昭和40年5月31日)	中村俊一(平成3年11月10日)
長谷部学(平成元年)	藤原光輝(昭和40年10月20日)	三上貞二(昭和54年8月9日)
三森定男(昭和52年11月7日)	望月信成(平成2年5月28日)	

研究調査に熱意をもって当たられた以上の協力者には更めて哀悼の意を表すると共に御生前に本報告書を呈示出来なかったことを深くお詫びしたいと思う。就中、丹生遺跡群の最初の発見者である中村俊一氏は、報告書の未公刊について終生焦慮を覚えておられたであろう。ここに更めて同氏の冥福をお祈りする次第である。

本書の内容に関しては、研究の段階では最善を尽くした。しかし丹生文化の研究は、本書によつて最初の橋頭堡が築かれたに過ぎない。当協会は、丹生遺跡群に対しては強い関心をもち続け、向後もこれを中心とする岩宿文化の究明に微力を捧げたいと念じている。

なお6箇年に及んだ調査の期間中、現地においては、太田亘、清原宣雄、賀川光夫、富来隆、野村秋子の諸氏、並びに大分県教育委員会社会教育課の厚意に浴することが多大であった。ここにその芳情を銘記し、謹んで御礼の辞を申し述べておきたい。

平成4年麦秋

財團法人 古代学協会
理事長 角田文衛

INTRODUCTION

It is my pleasure to have an opportunity to write an introduction for the study of Nyū sites, Oita Prefecture, after passing almost 30 years since the excavation began.

The Paleological Association of Japan, Inc. has executed the excavation of the Nyū sites from 1962 to 1967 with the cooperations of eminent scholars in Japan, and preliminary reports were published every year. Since then the study of the finds always had been our main concern, and researchers of the Institute of Paleological Studies (former Heian Museum of Ancient History) continued the study on the Iwajuku (paleolithic) culture of Japan. Nevertheless, the study on the Nyū sites did not see much progress. The reasons for it were: 1) Study on the paleolithic culture of Japan was still in its early stage and country-wide figure was obscure, 2) other sites that yield similar artifacts (so-called proto-handaxe) were not found.

During recent 20 years, the study on the Iwajuku culture has seen remarkable progress and the first problem has been already resolved, but the second problem is still an obstruction. However, having been aided a vast amount of funds by the Ministry of Education and accomplishing large scale excavations with the participation of so many researchers, we could no longer delay the publications of the researches.

We decided to publish a re-examination of the finds by selected researchers with assistant professor CHŌJI SUZUKI as leader. We would like to express our deep gratitude for those able researchers of Iwajuku culture who kindly participated in our project, gathered and made discussions at Kyoto for several times. Those are; AKIRA ORIKASA, HIDEAKI KIMURA, MASATOSHI SAGAWA, TOSHIKI TAKEOKA, and MASANOBU TACHIBANA. Also we feel honoured to have HUANG WEIWEN (黃惠文) of the Institute of Vertebrate Paleontology and Paleoanthropology of Academia Sinica of China as a co-researcher.

The first part is, so to say, the final report of the excavations, written by the members of the second section of the Institute. In the second part, seven researchers contribute studies on early paleolithic cultures of each district in the world with the finds of the Nyū sites on mind. As the problems of the Nyū sites are so complicated that we cannot say this publication would be the solution, but it is surely a new step towards the elucidation of the problems. We shall keep our interest on these finds, and intend to contribute for the study of Iwajuku culture.

We would like to thank for all who participated in the research, and to express our regret over those who died during past thirty years. Especially we feel sorry not being able to show

this publication to Mr. SHUN-ICHI NAKAMURA, the first finder of the sites. During the six years of excavation, we were met by courtesy of WATARU ŌTA, NOBUO KIYOHARA, MASAO KAGAWA, TAKASHI TOMIKU, AKIKO NOMURA and by the educational board of Ōita Prefecture. Their contributions are gratefully appreciated.

BUN-EI TSUNODA
*general director of the Paleological Association
of Japan, Inc.*

例　　言

- 1) 本書は大分県大分市丹生遺跡群の正式報告書である。構成は第1部発掘報告篇、第2部共同研究篇から成る。
- 2) 発掘報告は、原則として地区地点順とするが、第1地区B地点があらゆる点で重要な位置を占めるので、これを第一番目に報告した。
- 3) 本書は6次にわたる調査の成果報告であるので、下記の4冊の概報のまとめの意味も含んでいる。従って、本書の記載中“発掘の経過”“位置・地形・トレンチ”“土層”“出土状況”に関しては、既刊概報の整理・再録であり、記載事実と判断は発掘当時における報告者のものであることをお断りしておきたい。
- 4) 註は原則として各節の末尾にまとめる。なお、丹生遺跡の4冊の概報(P.5参照)は、引用が頻繁であるので、以下のよう略式表記を行う。

『丹生1・2次概報』(昭和39年)。

『丹生3次概報』(昭和40年)。

『丹生4次概報』(昭和41年)。

『丹生総括編』(昭和43年)。
- 5) 石器実測図の縮尺は、原則として斧状石器・打器・石核などの大型石器を1/2、その他を2/3とする。但し、表採品の太田コレクションを1/3(第214図～第223図)、未検討資料の再録部分(第224図～第231図)は紙幅の関係で一括1/4とした。
- 6) 本文・図・表中で一部に以下のように略号を用いることがある。

1) 石器類別

A : トゥール類, B : 剥片類, C : 砕片類, D : 石核・母岩類

Kn : ナイフ形石器, Sc : 削器, Gr : 彫器, PS : ピエース・エスキュー

RF : 加工痕ある剥片, UF : 使用痕ある剥片, CRF : 打面再生剥片,

2) 石材

安 : 安山岩, 珪 : チャート, 頁 : 頁岩, 玄 : 玄武岩, 黒 : 黒曜石, 砂 : 砂岩, 泥 : 泥岩, メ : メノー, 流 : 流紋岩。

- 3) 実測図中の表現のうち、網点部は破損・剝落を、細かい線条は研磨痕を示す。但し、線条の方向は研磨痕の方向を意味するものではない。なお、手書きのドットは自然(疊)面を、交叉する細線にドットが加えられたものは節(層)理面をそれぞれ示す。
- 7) 斧状石器の断面作成については、A)報告書作成にかかわっての作図と、B)共同研究篇における竹岡氏の分析目的にそった作図との二つの要請を1枚の図面に表現してあることに留意されたい。

A)はごく一般的な作図法であり、横断面は中心部あたりの適当な位置で任意に作成している。これに対しB)の場合は、実測図中の正面観図に、分析者によって指定された縦断面用の中心軸を示し、この垂線に直交するかたちで横断面は作成される。さらに横断面は全長の1/2, 1/4, 1/8の位置で作成され、上から順にa・b・c・dと記号を付することにする。

このように二つの要請を同一図に表示したために、竹岡氏の分析用に設定された中心軸と横断面軸は、実測図中では傾いて表示される結果を生むことがしばしばある。上記の点を斟酌の上譲解されたい。

- 8) 第1部発掘報告篇までの石器実測図は通し番号とする。同一資料に対しては、実測図・写真の別にかかわらず同一で固有の单一番号をあたえるものとする(第238~240図を除く)。1-B地点北区の挿図中、Sの文字は表採品、OSは太田亘氏採集品(太田コレクション)を意味する。
- 9) 石器における使用・加工痕表示は、破線と実線を添えてその範囲を示す。破線は断続的な、実線は連続的な使用・加工痕を示す。
- 10) 石質は旭地研・岩田修一氏による代表サンプルに対する肉眼鑑定にならって、鈴木が判断した。
- 11) 執筆分担は以下の通りである。詳細は各担当部分の文末に示した。

序	角田文衛	
はじめに	鈴木忠司	
I章	鈴木忠司	
II章	安部慎一・黒坪一樹・後藤和風・鈴木忠司・竹内義治・高田里美・ 田鶴谷京・宮内智加・宮本康治・山口晴子・湯村功	
III章	第1・3・4節 鈴木忠司	
	第2節 木村元浩	
IV章	A) 共同研究の主旨	鈴木忠司
	B) シベリアの旧石器と「礫器伝統」について	木村英明
	C) 中国旧石器時代の礫器	佐川正敏
	D) 中国華南地方の初期人類の残した礫器文化	黄 恵文
	E) 朝鮮半島の旧石器文化と丹生石器群	鈴木忠司
	F) 九州における旧石器時代 ・繩文時代早期の礫器と斧状石器	橋 昌信
	G) 日本列島における片刃礫器と丹生1-B地点 北区第2群石器の位置付け	織笠 昭
	H) 石器研究の目的と方法	竹岡俊樹
おわりに	鈴木忠司	

目 次

序	i
例 言	v
はじめに	1
第1部 発掘報告篇	
I章 調査の経過と本書の目的	3
第1節 丹生遺跡群の発見とその後の調査経過	3
1. 発 見	3
2. 調査の経過	3
3. 従来の研究経過と本書の位置	6
4. 本書の目的と方法	6
第2節 丹生遺跡群の調査と丹生論争—経過と現在—	8
第3節 “砾器”という用語について	12
II章 丹生遺跡群の石器群	15
第1節 丹生遺跡群の概観と検討対象	15
1. 遺跡群の位置	15
2. 報告対象の限定	17
第2節 第1地区B地点の細分	19
1. 発掘の経過	19
2. 位置・地区・トレンチ	19
3. B地点の細分	20
第3節 第1地区B地点北区	22
1. 土 層	22
2. 遺物の出土状況	23
3. 石器群の構成と分類	23
1) 石 質	23
2) 石器の分類	26
4. 斧状石器の類型間関係	34
1) 類型間の異同	34
2) 石質から見た類型間比較	102
3) 素材の形態から見た類型間比較	102
4) 研磨痕および刃部背面の 使用痕から見た類型間比較	102
5. 石器の分布	104
6. 1-B地点北区の性格	105
7. 斧状石器の特徴とその位置付け	105
8. 石器群の共伴関係	117
9. 小 結	120
第4節 第1地区B地点東南区	122
第5節 第1地区B地点西区	128
第6節 第1地区A地点	130
第7節 第1地区D地点	134
第8節 第2地区E地点	137
第9節 第2地区F地点	140
第10節 第2地区H地点	147
第11節 第2地区I地点	151
第12節 第3地区B地点	153
第13節 第4地区A地点	155
第14節 第4地区B地点	160
第15節 第4地区D地点	164
第16節 第7地区A地点	167
第17節 第7地区D地点	179

第18節 第8地区A地点	202	第24節 第12地区A地点	253
第19節 第8地区B地点	221	第25節 第13地区A地点	259
第20節 第9地区B地点	243	第26節 第14地区A地点	262
第21節 第9地区C地点	245	第27節 第14地区C地点	264
第22節 第10地区A地点	249	第28節 その他の資料	284
第23節 第11地区B地点	250		
Ⅲ章 丹生遺跡群と岩宿文化—総括に代えて—			307
第1節 斧状石器の位置付けをめぐって			307
1. 九州地方における比較	307	2. 本州以東との対比	308
第2節 斧状石器の製作技法と類型の性格			313
1. はじめに	313	5. 斧状石器の製作技法	321
2. 用語について	313	6. 各類型における属性	322
3. 対象資料	313	7. 類型の性格	324
4. 斧状石器の分類	313		
第3節 原位置出土資料の再検討			326
第4節 丹生遺跡群と岩宿文化			327
英文要旨			333
第2部 共同研究篇			
Ⅳ章 共同研究 東北アジアの始原文化と丹生石器群			341
—いわゆる礫器をめぐって—			
A) 共同研究の主旨		付 英文要旨	341
B) シベリアの旧石器と「礫器伝統」について		付 英文要旨	345
C) 中国旧石器時代の礫器		付 英文要旨	389
D) 中国華南地方の初期人類の残した礫器文化		付 英文要旨	407
E) 朝鮮半島の旧石器文化と丹生石器群		付 英文要旨	417
F) 九州における旧石器時代・縄文時代早期の礫器と斧状石器		付 英文要旨	433
G) 日本列島における片刃礫器と			
丹生1-B地点北区第2群石器の位置付け		付 英文要旨	461
H) 石器研究の目的と方法			
—丹生遺跡群1-B地点の斧状石器の分析を例として—		付 仏文要旨	525
おわりに			559
図 版			

挿 図 目 次

第1図	丹生遺跡群位置図	16
第2図	丹生遺跡群内地区・地点位置図 1)	17
第3図	丹生遺跡群内地区・地点位置図 2)	18
第4図	1-B 地点 (北区、東南区、西区) 地形・トレンチ配置図	21
第5図	1-B 地点北区 G トレンチ東壁土層断面図	22
第6図	1-B 地点北区石器平面・垂直分布図	24
第7図	1-B 地点北区石器実測図 1)	35
第8図	1-B 地点北区石器実測図 2)	36
第9図	1-B 地点北区石器実測図 3)	37
第10図	1-B 地点北区石器実測図 4)	38
第11図	1-B 地点北区石器実測図 5)	39
第12図	1-B 地点北区石器実測図 6)	40
第13図	1-B 地点北区石器実測図 7)	41
第14図	1-B 地点北区石器実測図 8)	42
第15図	1-B 地点北区石器実測図 9)	43
第16図	1-B 地点北区石器実測図 10)	44
第17図	1-B 地点北区石器実測図 11)	45
第18図	1-B 地点北区石器実測図 12)	46
第19図	1-B 地点北区石器実測図 13)	47
第20図	1-B 地点北区石器実測図 14)	48
第21図	1-B 地点北区石器実測図 15)	49
第22図	1-B 地点北区石器実測図 16)	50
第23図	1-B 地点北区石器実測図 17)	51
第24図	1-B 地点北区石器実測図 18)	52
第25図	1-B 地点北区石器実測図 19)	53
第26図	1-B 地点北区石器実測図 20)	54
第27図	1-B 地点北区石器実測図 21)	55
第28図	1-B 地点北区石器実測図 22)	56
第29図	1-B 地点北区石器実測図 23)	57
第30図	1-B 地点北区石器実測図 24)	58
第31図	1-B 地点北区石器実測図 25)	59
第32図	1-B 地点北区石器実測図 26)	60

第33図	1 - B 地点北区石器実測図 27)	61
第34図	1 - B 地点北区石器実測図 28)	62
第35図	1 - B 地点北区石器実測図 29)	63
第36図	1 - B 地点北区石器実測図 30)	64
第37図	1 - B 地点北区石器実測図 31)	65
第38図	1 - B 地点北区石器実測図 32)	66
第39図	1 - B 地点北区石器実測図 33)	67
第40図	1 - B 地点北区石器実測図 34)	68
第41図	1 - B 地点北区石器実測図 35)	69
第42図	1 - B 地点北区石器実測図 36)	70
第43図	1 - B 地点北区石器実測図 37)	71
第44図	1 - B 地点北区石器実測図 38)	72
第45図	1 - B 地点北区石器実測図 39)	73
第46図	1 - B 地点北区石器実測図 40)	74
第47図	1 - B 地点北区石器実測図 41)	75
第48図	1 - B 地点北区石器実測図 42)	76
第49図	1 - B 地点北区石器実測図 43)	77
第50図	1 - B 地点北区石器実測図 44)	78
第51図	1 - B 地点北区石器実測図 45)	79
第52図	1 - B 地点北区石器実測図 46)	80
第53図	1 - B 地点北区石器実測図 47)	81
第54図	1 - B 地点北区石器実測図 48)	82
第55図	1 - B 地点北区石器実測図 49)	83
第56図	1 - B 地点北区石器実測図 50)	84
第57図	1 - B 地点北区石器実測図 51)	85
第58図	1 - B 地点北区石器実測図 52)	86
第59図	1 - B 地点北区石器実測図 53)	87
第60図	1 - B 地点北区石器実測図 54)	88
第61図	1 - B 地点北区石器実測図 55)	89
第62図	1 - B 地点北区石器実測図 56)	90
第63図	1 - B 地点北区石器実測図 57)	91
第64図	1 - B 地点北区石器実測図 58)	92
第65図	1 - B 地点北区石器実測図 59)	93
第66図	1 - B 地点北区石器実測図 60)	94
第67図	1 - B 地点北区石器実測図 61)	95

第68図	1 - B 地点北区石器実測図 62)	96
第69図	1 - B 地点北区石器実測図 63)	97
第70図	1 - B 地点北区石器実測図 64)	98
第71図	1 - B 地点北区石器実測図 65)	99
第72図	1 - B 地点北区石器実測図 66)	100
第73図	出土地点不明石器実測図	101
第74図	1 - B 地点北区斧状石器分類区分図	103
第75図	1 - B 地点北区第 1 群石器平面分布図	106
第76図	1 - B 地点北区第 2 群石器平面分布図	108
第77図	1 - B 地点北区第 3 群石器平面分布図	110
第78図	1 - B 地点北区第 4 群石器平面分布図	112
第79図	1 - B 地点北区第 5 群石器平面分布図	114
第80図	1 - B 地点北区斧状石器長/幅比(上)・長さ/重量比分布グラフ(下)〔欠損品を含む〕	118
第81図	1 - B 地点東南区 A ₄ ～C ₄ トレンチ北壁土層断面図(上), STトレンチ東壁土層断面図(下)	123
第82図	1 - B 地点東南区 A トレンチ深掘状況	123
第83図	1 - B 地点東南区斧状石器出土位置図	124
第84図	1 - B 地点東南区石器実測図 1)	125
第85図	1 - B 地点東南区石器実測図 2)	126
第86図	1 - B 地点東南区石器実測図 3)	127
第87図	1 - B 地点西区 A トレンチ北壁土層断面図	128
第88図	1 - B 地点西区石器実測図	129
第89図	1 - A 地点地形・トレンチ配置図	130
第90図	1 - A 地点第 1 トレンチ東壁土層断面図	130
第91図	1 - A 地点石器実測図 1)	132
第92図	1 - A 地点石器実測図 2)	133
第93図	1 - D 地点地形・トレンチ配置図	135
第94図	1 - D 地点トレンチ北壁土層断面図	135
第95図	1 - D 地点石器実測図	136
第96図	2 - E 地点地形・トレンチ配置図	137
第97図	2 - E 地点 A トレンチ北壁土層断面図	137
第98図	2 - E 地点石器実測図 1)	138
第99図	2 - E 地点石器実測図 2)	139
第100図	2 - F 地点石器実測図 1)	141
第101図	2 - F 地点石器実測図 2)	142

第102図	2 - F 地点石器実測図 3)	143
第103図	2 - F 地点石器実測図 4)	144
第104図	2 - F 地点石器実測図 5)	145
第105図	2 - H 地点地形・トレンチ配置図	148
第106図	2 - H 地点第1トレンチ東北壁土層断面図	148
第107図	2 - H 地点石器実測図 1)	150
第108図	2 - H 地点石器実測図 2)	151
第109図	2 - I 地点地形・トレンチ配置図	151
第110図	2 - I 地点第1トレンチ西南壁土層断面図	152
第111図	2 - I 地点石器実測図	152
第112図	3 - B 地点Cトレンチ土層断面図	154
第113図	3 - B 地点石器実測図	154
第114図	4 - A 地点地形・トレンチ配置図	155
第115図	4 - A 地点第1トレンチ北壁土層断面図	156
第116図	4 - A 地点石器実測図 1)	158
第117図	4 - A 地点石器実測図 2)	159
第118図	4 - B 地点地形・トレンチ配置図	161
第119図	4 - B 地点Bトレンチ土層断面図	161
第120図	4 - B 地点石器実測図	162
第121図	4 - D 地点地形・トレンチ配置図	164
第122図	4 - D 地点第1・2・3トレンチ土層断面図	165
第123図	4 - D 地点石器平面分布図	165
第124図	4 - D 地点石器実測図	166
第125図	7 - A 地点1~4区西南壁土層断面図	168
第126図	7 - A 地点石器平面分布図	168
第127図	7 - A 地点石器実測図 1)	171
第128図	7 - A 地点石器実測図 2)	172
第129図	7 - A 地点石器実測図 3)	173
第130図	7 - A 地点石器実測図 4)	174
第131図	7 - D 地点地形・トレンチ配置図	180
第132図	7 - D 地点第12トレンチ北壁土層断面図	182
第133図	7 - D 地点石器実測図 1)	189
第134図	7 - D 地点石器実測図 2)	190
第135図	7 - D 地点石器実測図 3)	191
第136図	7 - D 地点石器実測図 4)	192

第137図	7-D地点石器実測図 5)	193
第138図	7-D地点石器実測図 6)	194
第139図	7-D地点石器実測図 7)	195
第140図	7-D地点石器実測図 8)	196
第141図	7-D地点石器実測図 9)	197
第142図	7-D地点石器実測図 10)	198
第143図	7-D地点石器実測図 11)	199
第144図	7-D地点石器実測図 12)	200
第145図	8-A地点石器実測図 1)	207
第146図	8-A地点石器実測図 2)	208
第147図	8-A地点石器実測図 3)	209
第148図	8-A地点石器実測図 4)	210
第149図	8-A地点石器実測図 5)	211
第150図	8-A地点石器実測図 6)	212
第151図	8-A地点石器実測図 7)	213
第152図	8-A地点石器実測図 8)	214
第153図	8-A地点石器実測図 9)	215
第154図	8-A地点石器実測図 10)	216
第155図	8-A地点石器実測図 11)	217
第156図	8-A地点石器実測図 12)	218
第157図	8-B地点、10-A地点付近地形図	221
第158図	8-B地点トレンチ配置図	222
第159図	8-B地点Aトレンチ南壁土層断面図	222
第160図	8-B地点石器平面分布概念図	223
第161図	8-B地点個体別資料分布概念図	223
第162図	8-B地点接合資料分布概念図	223
第163図	8-B地点石器実測図 1)	226
第164図	8-B地点石器実測図 2)	227
第165図	8-B地点石器実測図 3)	228
第166図	8-B地点石器実測図 4)	229
第167図	8-B地点石器実測図 5)	230
第168図	8-B地点石器実測図 6)	231
第169図	8-B地点石器実測図 7)	232
第170図	8-B地点石器実測図 8)	233
第171図	8-B地点石器実測図 9)	234

第172図	8-B地点石器実測図 10)	235
第173図	8-B地点石器実測図 11)	236
第174図	8-B地点石器実測図 12)	237
第175図	8-B地点石器実測図 13)	238
第176図	8-B地点石器実測図 14)	239
第177図	8-B地点石器実測図 15)	240
第178図	9-B地点地形・トレンチ配置図	243
第179図	9-B地点Iトレンチ西壁土層断面図	243
第180図	9-B地点石器実測図	244
第181図	9-C地点地形・トレンチ配置図	246
第182図	9-C地点Aトレンチ西壁土層断面図	246
第183図	9-C地点石器実測図	247
第184図	10-A地点地形・トレンチ配置図	249
第185図	10-A地点打器採集崖面実測図	250
第186図	11-B地点石器実測図	252
第187図	12-A地点地形・トレンチ配置図	253
第188図	12-A地点第1トレンチ1区試掘溝柱状模式図	254
第189図	12-A地点石器平面分布概念図	254
第190図	12-A地点石器実測図 1)	257
第191図	12-A地点石器実測図 2)	258
第192図	12-A地点石器実測図 3)	259
第193図	13-A地点地形・トレンチ配置図	260
第194図	13-A地点第1トレンチ土層断面図	260
第195図	13-A地点石器実測図	262
第196図	14-A地点地形・トレンチ配置図	263
第197図	14-A地点石器実測図	263
第198図	14-C地点地形・トレンチ配置図(上)および区画名区分図(下)	265
第199図	14-C地点Cトレンチ(上), 第6次調査トレンチ土層断面図(下)	265
第200図	14-C地点石器実測図 1)	269
第201図	14-C地点石器実測図 2)	270
第202図	14-C地点石器実測図 3)	271
第203図	14-C地点石器実測図 4)	272
第204図	14-C地点石器実測図 5)	273
第205図	14-C地点石器実測図 6)	274
第206図	14-C地点石器実測図 7)	275

第207図	14-C地点石器実測図 8)	276
第208図	14-C地点石器実測図 9)	277
第209図	14-C地点石器実測図 10)	278
第210図	14-C地点石器実測図 11)	279
第211図	14-C地点石器実測図 12)	280
第212図	14-C地点石器実測図 13)	281
第213図	1-E, 1-J, 2-A, 4-C, 10-B地点石器実測図	286
第214図	表採資料実測図(太田コレクション) 1)	287
第215図	表採資料実測図(太田コレクション) 2)	288
第216図	表採資料実測図(太田コレクション) 3)	289
第217図	表採資料実測図(太田コレクション) 4)	290
第218図	表採資料実測図(太田コレクション) 5)	291
第219図	表採資料実測図(太田コレクション) 6)	292
第220図	表採資料実測図(太田コレクション) 7)	293
第221図	表採資料実測図(太田コレクション) 8)	294
第222図	表採資料実測図(太田コレクション) 9)	295
第223図	表採資料実測図(太田コレクション) 10)	296
第224図	表採資料実測図 1)	297
第225図	表採資料実測図 2)	298
第226図	表採資料実測図 3)	299
第227図	表採資料実測図 4)	300
第228図	表採資料実測図 5)	301
第229図	表採資料実測図 6)	302
第230図	表採資料実測図 7)	303
第231図	表採資料実測図 8)	304
第232図	九州出土石斧実測図(後期岩宿・縄文時代) 1)	309
第233図	九州出土石斧実測図(後期岩宿・縄文時代) 2)	310
第234図	本州出土石斧実測図(前期岩宿時代)	311
第235図	素材形態分類図	314
第236図	加工形態分類図	315
第237図	斧状石器類型区分図	316
第238図	斧状石器類型別集成図 1)	318
第239図	斧状石器類型別集成図 2)	319
第240図	斧状石器類型別集成図 3)	320
第241図	斧状石器類型別集成図 4)	321

第242図	刃部形態分類図	324
第243図	シベリアの「ハンド・アックス」 (1・モホヴォ II, 2・ボゴロツコエ, 3・トガルイク I)	347
第244図	ゴルノアルタイ・ジェニソワ洞穴出土の石器	349
第245図	ゴルノアルタイ・カラボム遺跡出土の石器	351
第246図	コロリエヴォ I 遺跡 2 b 層の「ルヴァロワ尖頭器技法」と同 II 遺跡 2 層の石刃技法	352
第247図	マカラヴォル遺跡出土の石器群	354
第248図	マリタ遺跡及びウスチ・コヴァー遺跡出土の石器	356
第249図	ジュクタイ洞穴出土の石器群と地層断面図	358
第250図	ヴェルホレンスク山遺跡出土の石器と骨角器	359
第251図	シベリアの楔形細石刃核	359
第252図	オシュルコヴォ遺跡出土の石器と骨角器	360
第253図	シベリアの「前期旧石器」	366
第254図	ディリング・ユリヤフ遺跡の地形図と発掘区、地層断面図及び第14遺物集中地点出土状況	368
第255図	ディリング・ユリヤフ遺跡出土のチョッパーとピック様礫器	371
第256図	ディリング・ユリヤフ遺跡出土のチョッパー、スクレプロ、使用痕ある剝片及びノッチ	372
第257図	第14遺物集中地点出土のチョッパーと剝片、ツルハシ様石器及びハンマー	373
第258図	第14遺物集中地点出土の接合資料	374
第259図	シベリア中期旧石器時代のスクレプロ、ルヴァロワ石核、ムステリアン尖頭器、ピック様礫器	378
第260図	地理学協会洞穴出土の剝片類	379
第261図	シベリア後期旧石器時代のチョッパーとスクレプロ	380
第262図	中国旧石器時代の礫器の分類	391
第263図	前期旧石器時代の礫器出土遺跡分布図	392
第264図	前期旧石器時代の礫器 1)	393
第265図	前期旧石器時代の礫器 2)	395
第266図	中期旧石器時代の礫器出土遺跡分布図	396
第267図	中期旧石器時代の礫器	397
第268図	後期旧石器時代・前期旧石器時代の礫器等出土遺跡分布図	398
第269図	華北地方の後期旧石器時代の礫器を含む石器群	399
第270図	華南地方の後期旧石器時代の礫器を含む石器群	401
第271図	華南地方の新石器時代の礫器	402
第272図	中国陝西省梁山遺跡の礫器	409

第273図	中国広西チワン族自治区百色遺跡群の砾器	410
第274図	朝鮮半島主要遺跡分布図	418
第275図	全谷里遺跡出土の石器	420
第276図	全谷里一帯における堆積断面の模式図と年代測定層準	421
第277図	全谷里E O S I区における遺物の平面分布と層位の位置復原図	422
第278図	イムジン盆地の考古学地点分布図	423
第279図	クムグル出土の石器	423
第280図	九州出土の斧状石器および大型石器	444
第281図	九州出土の大型石器	445
第282図	九州出土の大型石器	446
第283図	早水台遺跡出土の大型石器	447
第284図	標高別片刃砾器出土文化層数	466
第285図	片刃砾器の大きさ	469
第286図	片刃砾器の重量	469
第287図	片刃砾器の刃角	471
第288図	日本列島における片刃砾器集成図 1)	482
第289図	日本列島における片刃砾器集成図 2)	483
第290図	日本列島における片刃砾器集成図 3)	484
第291図	日本列島における片刃砾器集成図 4)	485
第292図	日本列島における片刃砾器集成図 5)	486
第293図	日本列島における片刃砾器集成図 6)	487
第294図	日本列島における片刃砾器集成図 7)	488
第295図	日本列島における片刃砾器集成図 8)	489
第296図	日本列島における片刃砾器集成図 9)	490
第297図	日本列島における片刃砾器集成図 10)	491
第298図	日本列島における片刃砾器集成図 11)	492
第299図	日本列島における片刃砾器集成図 12)	493
第300図	日本列島における片刃砾器集成図 13)	494
第301図	日本列島における片刃砾器集成図 14)	495
第302図	日本列島における片刃砾器集成図 15)	496
第303図	日本列島における片刃砾器集成図 16)	497
第304図	日本列島における片刃砾器集成図 17)	498
第305図	日本列島における片刃砾器集成図 18)	499
第306図	日本列島における片刃砾器集成図 19)	500
第307図	日本列島における片刃砾器集成図 20)	501

第308図	日本列島における片刃礫器集成図 21)	502
第309図	日本列島における片刃礫器集成図 22)	503
第310図	日本列島における片刃礫器集成図 23)	504
第311図	日本列島における片刃礫器集成図 24)	505
第312図	日本列島における片刃礫器集成図 25)	506
第313図	日本列島における片刃礫器集成図 26)	507
第314図	日本列島における片刃礫器集成図 27)	508
第315図	日本列島における片刃礫器集成図 28)	509
第316図	日本列島における片刃礫器集成図 29)	510
第317図	日本列島における片刃礫器集成図 30)	511
第318図	日本列島における片刃礫器集成図 31)	512
第319図	日本列島における片刃礫器集成図 32)	513
第320図	日本列島における片刃礫器集成図 33)	514
第321図	日本列島における片刃礫器集成図 34)	515
第322図	日本列島における片刃礫器集成図 35)	516
第323図	石器の置き方	527
第324図	斧状石器の基本的な構成	527
第325図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 1)	529
第326図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 2)	530
第327図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 3)	531
第328図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 4)	532
第329図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 5)	533
第330図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 6)	534
第331図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器 7)	535
第332図	丹生 1 - B 地点北区の斧状石器・その他	536
第333図	丹生 1 - B 地点北区の石器	537
第334図	斧状石器の部分名称と測定ヶ所	538
第335図	斧状石器の素材とされた礫の模式図	540
第336図	斧状石器の先端部形成の方法	541

表 目 次

第1表 発掘地点と調査次・担当班一覧表	4
第2表 丹生台地の第4系の対比表	15
第3表 第1地区B地点各区黒縞石・チャート占有比率表	22
第4表 第2地区H地点出土石器一覧表	149
第5表 第4地区A地点出土石器一覧表	157
第6表 第7地区A地点出土石器一覧表	169
第7表 第8地区A地点出土石器一覧表	204
第8表 第8地区B地点出土石器一覧表	224
第9表 第8地区B地点接合・個体別資料一覧表	241
第10表 第12地区A地点出土石器一覧表	255
第11表 第14地区C地点出土石器一覧表	266
第12表 素材類型区分表	316
第13表 類型別・研磨痕表	323
第14表 類型別・ダメージ痕表	323
第15表 類型別・刃部形態分類表	323
第16表 類型別・石質分類表	324
第17表 九州における岩宿(旧石器)時代の編年(橘昌信氏作成)	328
第18表 丹生遺跡群の時期別構成	330
第19表 シベリアにおける旧石器文化の変遷	346
第20表 シベリアの主な遺跡から発見された動物の化石	355
第21表 中部アジアの石器時代遺跡に関する編年試案	364
第22表 ディリング・ユリヤフ旧石器時代遺跡出土遺物	369
第23表 朝鮮半島第4紀の自然環境と旧石器文化	423
第24表 片刃礫器地域別出土数	465
第25表 片刃礫器時期別文化層數	465
第26表 片刃礫器時期別出土数	465
第27表 片刃礫器時期別平均値	469
第28表 日本列島における片刃礫器集成一覧	517
第29表 斧状石器の先端部・側辺の剥離角の比較	528
第30表 斧状石器の先端から2cmでの厚さ	538
第31表 剥離角の比較	538
第32表 先端から2cmでの厚さの比較	538

第33表 長さ／幅の比率の比較	538
第34表 斧状石器A群の胸部の加工 1)	540
第35表 斧状石器A群の胸部の加工 2)	540
第36表 斧状石器A群の先端部の加工方法	541
第37表 先端部の輪郭と素材との関係	541
第38表 先端部の輪郭と胸部の加工との関係 1)	542
第39表 先端部の輪郭と胸部の加工との関係 2)	542
第40表 斧状石器B・C群の先端部の加工	542
第41表 先端部の輪郭と先端部の剝離角・先端角との関係	542
第42表 先端部の輪郭と厚さとの関係 1)	543
第43表 先端部の輪郭と長さとの関係 2)	543
第44表 先端部の輪郭と幅との関係	543
第45表 先端部の輪郭と長さ／幅比率との関係	543
第46表 先端部の輪郭と厚さとの関係	543
第47表 先端部の輪郭と重さとの関係	543
第48表 斧状石器A群の素材別厚さ	543
第49表 斧状石器C群の素材別厚さ	543
第50表 斧状石器の基部の幅	544
第51表 斧状石器の基部の厚さ	545
第52表 宮添遺跡の打製石斧の重さ	546
第53表 宮添遺跡の打製石斧の長さ	546
第54表 斧状石器A群の素材別重さ	546
第55表 斧状石器A群の素材別長さ	546
第56表 斧状石器A群の素材別幅	546

図版目次

図版第1 錄入式・紀念写真

上段：第1次調査錄入式

下段：第3次調査紀念 昭和39年10月9日 調査団本部前にて

図版第2 調査風景

上段左：第1地区B地点における試掘

上段右：第7地区A地点における発掘

下段：第10地区A地点打器出土崖面

図版第3 遺跡遠景

上段：丹生台地の眺瞰

下段：第1地区B地点北区

図版第4 遺跡遠景

上段：第7地区D地点

下段：第8地区A・B地点および第10地区A地点

図版第5 石器

第1地区B地点北区出土の斧状石器 1)

図版第6 石器

第1地区B地点北区出土の斧状石器 2)

図版第7 石器

第1地区B地点北区および東南区出土の斧状石器

図版第8 石器

第1地区A地点出土の斧状石器、第1地区B地点北区出土の打・割器／石核および第10

地区A地点出土の打器

はじめに

本書は、大分市坂ノ市所在の“丹生台地”上に点在する丹生遺跡群の正式報告書という性格と、丹生遺跡群の今日的評価に係わる研究論文集という二面の性格を兼ね具えた研究報告書である。このために、第1部発掘報告篇と第2部共同研究篇の2部構成とした。遺跡が発見され、最初に発掘調査のメスが加えられてから今日までに、一人の人間の半生に近い30年という気の遠くなるような年月が経過した。この間に概報4冊が刊行され、論文誌上で“丹生論争”が戦わされたが、この論争も未決着のまま人々の記憶からも薄れかけようとしている。

こうした時に、いままた何故に再報告・正式報告かという点と丹生論争の経過については1章第1・2節で詳しく触れたとおりである。ここで意図したところが十分に果たしたかどうかと自問自答してみると、はなはだ心もとないところがある。とりわけ、丹生論争で一番問題となった地質学的な裏付けに関して再検討をなしえなかつたこと、共同研究篇において東南アジア部門の研究を組み込むことができなかつたことである。それぞれ止むを得ない事情があったにしろ、心残りな点である。

とは言え、丹生遺跡の発掘以降に経過した歳月は、日本の前期岩宿(旧石器)文化の研究に大きな進展を齎し、こうした研究の進展の恩恵に浴しながら、とりあえず丹生遺跡群の再評価を果たすことができたことは幸いであった。30年の時間の推移が無駄ではなかつたことを改めて実感している。発掘報告篇に盛られた事実報告は、当時の目的意識・発掘規模・精度からして、今日的には一定の限界が存するには止むを得ないとしても、共同研究の成果を併せて掲げることができたということは、これに勝る成果と言うことができると思う。

共同研究は、古代学研究所の共同研究計画の一環として、平成2・3年度の2ヶ年に亘って実施された。研究員の合同討議に十分な時間を割きえなかつたという憾みはあるにせよ、この2年間に亘る共通の目的意識の延長線上に成立している。各論者の主張するところは、丹生遺跡群の発掘者の従来の主張に対して、また、本書の見解に対して否定的であったり、直接的な回答を含んでいかなかったりして、共同研究員間に意見の一致を見ない部分もある。いずれにしろ、丹生遺跡群がはじめて、日本の前期岩宿文化に対する新しい認識と東南アジア的なパースペクティブの中で光が当てられたという点にこそ意義があると考えている。また、石器分析の方法論上の課題が、実際の資料を用いながら現実の諸議論と対比される中で実現したことも、中国側から黄慰文氏の寄稿を得られたことも大きな収穫であった。

“丹生論争”的存在ゆえに、それに拘泥し、発掘後30年目にして最終報告が成ろうとしている。この際、丹生論争の真の解決は、我々にとっては、丹生論争を越えたところで計られる必要があった。そのために、まず第1部に示した現状で可能な限りの資料提示があり、第2部での共同研究が設けられた。このような新たな資料提示、広い視野からの検討、石器分析法の方法論的検討の三要素がないまぜになつて、今後の岩宿時代研究に一筋の光明を投げかけてくれることを心から願うものである。

(鈴木)

第1部 発掘報告篇

I 章 調査の経過と本書の目的

第1節 丹生遺跡群の発見とその後の調査経過

1. 発見

昭和37年2月、当時大分大学助教授富木隆氏と共同通信社大分支局の(故)中村俊一氏が、日暮しの池の東側に連なる丘陵頂部付近で何点かの礫器を採集されたのが、その後の調査の発端であった。この地は、地籍上大分市大字丹生字辻に属し、調査団によって第1地区A地点と命名された。

2. 調査の経過

この発見の重要性を痛感した(財)古代学協会は、すぐさま(昭和37年3月)調査団(団長角田文衛)を派遣し、発見の意義を再確認したうえで、本格的継続調査の体制作りに着手した。その結果、同年5月には《日本旧石器文化研究委員会》が組織され、この委員会のもとに5ヶ年の調査計画がたてられた。次下に調査年次と調査団の編成を列記しておく(第1表、図版I・II)。

予備調査

期 間 昭和37年6月5日～8日

調査団 角田文衛・富木 隆・藤原光輝・大西郁夫・太田 亘・中村俊一・三上貞二・藤田純子

調査概要 大字丹生字長迫(第1地区B地点)に小規模なトレンチ調査を実施。地質調査の実施。

第1次発掘調査

期 間 昭和37年10月5日～31日

調査団 本 部 望月信成・角田文衛・西井芳子・藤田純子・長 照代・鮎沢 寿・

加藤不二男・太田 亘・中村俊一・八坂直義

考古学班 酒詰仲男・堅田 直・富木 隆・藤原光輝・小林知生・三上貞二

地質学班 首藤次男・大西郁夫・日高 稔・酒井潤一・野田雅之

第2次発掘調査

期 間 昭和38年10月8日～21日

調査団 本 部 望月信成・角田文衛・西井芳子・藤田純子・鮎沢 寿・山副洋治・

太田 亘・中村俊一・秦 敷雄

考古学班 小林知生・藤原光輝・小江慶雄・早川正一・三上貞二

地質学班 首藤次男・大西郁夫・大塚裕之

補助員 長谷部 學・矢部真美・池田一郎・同志社大学・大阪市立大学・

南山大学・大分大学学生

第3次発掘調査

期 間 昭和39年10月4日～22日

第1表 発掘地点と調査次・担当班一覧表

地区名	地点名	第一次調査	第二次調査	第三次調査	第四次調査	第五次調査	第六次調査
第1地区	A地点	藤原班			三上班	試小試鑑	
	B地点	酒詰木班				掘野提木班	
	D地点		三上班			班班	
	E地点		早川班				
	F地点			三上班		三上班	
	G地点				小林班		
	H地点						三上班
第2地区	I地点						三上班
	J地点						三上班
	B地点	安井班					
	E地点	田井班					
	F地点		小江班				
第3地区	G地点						
	H地点				早川班		
	I地点				早川班		
第4地区	A地点	藤原班					
	B地点	藤原班					
	C地点		藤原班				
	D地点				江坂班		
第6地区	A地点		地質班				
	B地点	藤原班					
	C地点					三上班	
第7地区	A地点	小林班					
	B地点	小林班					
	C地点		小林班				
	D地点			三上班			
	E地点				三上班		
第8地区	A地点		早川班				
	B地点			小林班			
	C地点				小江班		
	D地点				小江班		
第9地区	B地点				三上班		
	C地点				小林班		
	D地点				小林班	江坂班	
第10地区	A地点			早川班			
	B地点				早川班		
第11地区	A地点				早川班		
	B地点				小林班		
	C地点				小林班		
第12地区	A地点				小林班		
					藤原班		
第13地区	A地点					堅田班	
第14地区	A地点					富木班	三上班
	B地点					森班	三上班
	C地点					森班	三上班
	D地点					早川班	三上班

調査団本部 望月信成・角田文衛・西井芳子・藤田純子・鮎沢 寿・石田明子・
太田 亘・中村俊一・秦 敏雄
考古学班 酒詰仲男・小林知生・藤原光輝・三上貞二
地質学班 首藤次男・大西郁夫・日高 稔
補助員 石附喜三男・長谷部 學・長 照代・江谷 寛・池田一郎・岡村広法・
吉居政雄・南山大学・大阪市立大学・同志社大学・京都学芸大学・
大分大学学生

第4次発掘調査

期間 昭和40年10月13日～11月2日

調査団本部 望月信成・角田文衛・西井芳子・鮎沢 寿・藤田純子・石田明子・
長 照代・太田 亘・中村俊一・秦 敏雄
考古学班 小林知生・小江慶雄・江坂輝弥・堅田 直・藤原光輝・安井良三・
三上貞二・早川正一・川村喜一
地質学班 首藤次男・井間弘太郎・大西郁夫・日高 稔
補助員 長谷部 學・杉浦昭夫・池田一郎・奈良トシコ・片岡 肇・江谷 寛・
岡村広法・市野哲哉・矢部真美・早稲田大学・南山大学・
京都学芸大学・同志社大学・大阪市立大学・帝塚山大学・大分大学学生
および大分県立東高等学校生徒

第5次発掘調査

期間 昭和41年9月27日～10月12日

調査団本部 望月信成・角田文衛・西井芳子・鮎沢 寿・藤田純子・石田明子・
小西瑛子・太田 亘・中村俊一・秦 敏雄
考古学班 小林知生・杉浦昭夫・三森定男・藤本英夫・佐藤忠雄・石附喜三男・
江坂輝弥・渡辺 誠・富木 隆・杉崎重臣・内藤喜六・小野忠熙・
佐藤 晓・鎌木義昌・藤井 修・早川正一・片岡 肇・三上貞二・
大山正風・江谷 寛・岡村広法・中谷雅治・長 照代
地質学班 首藤次男・日高 稔

第6次発掘調査

期間 昭和42年8月19日～31日

調査団本部 鮎沢 寿・中村俊一
考古学班 三上貞二・早川正一・磯崎正彦・渡辺 誠・日高 稔・片岡 肇・
中谷雅治

これらの発掘調査の成果は以下に示す4冊の概報集にまとめられている。ただし、第6次調査について、その性格が独立した調査というよりも前年度までの調査の補足調査ということもあって報告は未刊である。

- 1) 『鶴古代学協会』『大分県丹生遺跡第1、第2次発掘調査概報』(大阪・京都、昭和39年)。
- 2) 『鶴古代学協会・日本旧石器文化研究委員会』『大分県丹生遺跡第3次発掘調査概報』(大阪・京都、昭和40年)。
- 3) 『鶴古代学協会・日本旧石器文化研究委員会』『大分県丹生遺跡第4次発掘調査概報』(大阪・京都、昭和41年)。
- 4) 『鶴古代学協会・日本旧石器文化研究委員会』『丹生 大分県丹生遺跡発掘調査概報 総括編』(京都、昭和43年)。

3. 従来の研究経過と本書の位置

先に示したように、丹生遺跡群の研究は、発掘調査と平行するかたちで着実に進められた。しかし、昭和43年11月の『総括編』の刊行以後、第6次調査の報告書および全体の正式報告書の刊行が未だ実現していないことも含めて、その後の研究は停滞しがちであった。それは、一にかかるて、当初、検出を目指した石器群を決定的なかたちで、予想した年代を示す地層中に原位置で確認できなかつたという事情によつていて推測される。そして、その後は永い“丹生論争”の未決着の状態が続く。

このように、本書に課せられた最初の課題は、第1～5次調査の報告が概報集であることに関連して、この正式報告を作成することである。

丹生遺跡調査地点は第1地区～第14地区に含まれる48地点である。しかし、資料的な現実からみて、既刊分の概報に加えて詳報を要すると思われるものは、第1地区A地点以下第14地区C地点までの計25地点である(P.19参照)。その他の地点については、再報告の必要が認められる資料群を一括掲示した。さらに、これまでの論議がいわゆる“縦器”(打・削器、粗型握斧類)などの大型石器に集中していた経過をふまえて、上記報告地点以外出土の表探類例資料も集成した。この際、地元在住の郷土史家・太田亘氏の採集品(太田コレクション)を中心とする未発表資料、発掘概報集以外のレポートに掲載された丹生遺跡群発見の関連資料の集成にも心懸けた。これによって、大森(織文)時代以降の発掘品を除いて、丹生遺跡群出土の主要な資料の報告が完成したことになり、最終報告とは言えないまでも正式報告としての実質を保ちえたのではないかと考えている。

課題の第2は“丹生論争”に今日的な解決を与えることである。これは第2部共同研究篇の役割である。共同研究篇の冒頭に示した目的意識と執筆陣容をもってこれにあたった。

4. 本書の目的と方法

丹生遺跡群の発掘成果は、3冊の概報と概報総括編1冊として既に公にされている。しかしながら、上記4冊の報告書は、総括編を含むとはいえ、あくまで概報集に留まっており、したがって、発掘報告書の基本的使命としての“事実報告”という点で欠けるところが多かった。とりわけ丹生問題に関する論議の基礎となる1-B地点を主とする石器群の資料提示が不十分であり、論議を不毛なものとしていた。これはもっぱら報告者側に責任があり、まずこの点を第三者的な検討に耐えうるものとする必要があった。本書刊行の目的の第1はこの欠を補うことにある。本書の第1部がこれに當てられる。

丹生遺跡群が注目され、《日本旧石器文化研究委員会》が組織され、台地上の遺跡群に発掘調査のメスが加えられたその最大の理由は、各地点から多数発見された“打・割器、祖型握斧類”が、日本列島最古の居住者がもたらした、前期旧石器文化の存在の証拠になるのではないかといった期待感にあった。1949年(昭和24年)の岩宿遺跡における発見は、大森(縄文)文化以前の日本列島に、洪積(更新)世人類の広汎な居住のあったことを明らかにし、日本各地における岩宿文化の実態の解明も着々と進んだ。そして、新人の残したこれらの文化に先行して、旧人・原人段階から既に人類の活動があったのではなかったかという問題意識が現実味を増しはじめていた。このような学界内部の研究意識の芽生えに呼応するかのように登場したのが、丹生遺跡群であった。

こうした背景のために、調査は、いきおい、打・割器などの包含層の確認と所属年代を追究することに主眼がおかることになった。台地上に点在する14地区、48地点にわたる小規模で多数のトレシチの設定は、このような調査目的に由来している。また、調査の概報も、打・割器などの大型の石器に重点が置かれ、検出資料全てに均等な配慮がなされ、十分の記載が行われなかつた憾みがある。検出資料の所属する年代が、当初期待した所と比較していさか新しさがあったとしても、そして、今日の考古学的状況が確実な地層から広範囲に検出される資料群を多数擁しているのに対し、ここに示す資料群は今日的価値という点で多少物足りないものであったとしても、全資料を検討紹介し当初の目的意識にかかわらず丹生遺跡群の全容を明らかにすることが求められている。

ところで、丹生遺跡群調査の眼目が、前期旧石器文化あるいは旧・原人段階の日本列島最古の文化の存在の確実な証拠を得るためにあったことは先に記したとおりであるが、発掘調査を契機に、発掘者側からこの目的意識に対する肯定的な評価と第三者の否定的な論評とが交叉し、いわゆる“丹生論争”を生んだ。この論争は未だ決着せざる状況にあるとはいゝ、“否”的方に大きく傾いて現在に至っていると言える。

論争の未決着の要因の多くは、問題の石器の原位置でのまとまった検出例が少ないうえに、遺跡の土層の堆積環境の悪さによって、石器包含層の確定、換言すれば所属年代が確定していないところにあった。しかし、問題はそればかりではなかった。概報集の資料提示が第三者的検討という観点からは、必ずしも十分な客觀性を有していたとは言い難かった。また、縄器の紹介に主眼がおかれたために、各地点における石器群のインダストリーレベルでの十分な内容解説が果たされなかつたことも大きな要因であったとしなければならない。丹生遺跡群の全容を示すにあたっては、多数の発掘地点のうち、第1地区B地点を最初に行う。多数の大形石器と問題の資料を含む1-B地点の石器群こそ、丹生問題の帰趨を決する資料だからである。

1-B地点他から多数発掘・採集された縄素材の大形石器は、発掘所見からは所属年代が明確でなかったが、これらの帰属が発掘者の初期の目的意識どおり、日本列島最古の石器群である可能性を主張する道は、発掘当時にあっては、大陸側諸文化との型式学的比較に頼らざるをえなかつた。このことは丹生問題自体が、当初から列島内の問題というより、少なくとも東北アジア的な視野の中で検討されねばならないことを意味していた。また、丹生論争以降の学界の大きな状況変化として、座敷乱木遺跡の発見によって、前期岩宿(旧石器)時代存否論争に決着がついたということがあ

る。すなわち、日本における前期岩宿(旧石器)文化の真の姿が明らかになり、国内資料との現実的な対比が可能になった訳である。丹生遺跡はその所属年代を示す地層中において、原位置での石器の十分な検出に到らなかったという決定的な弱点があるにしても、こうした1980年代以降の学界の蓄積の中から再検討をすることが今日初めて可能になったという新しい現実が生じた訳である。

このような、日本における過去30年以上の研究史の中で起こった大きな変化は、ひとり国内の問題にとどまっているとは考えられない。たとえば、モービウスの“ショッパー・ショッピングトゥール文化”というとらえ方も、再考を要するところが多分にある。こうした観点からの検討が第2の目的である。このために第2部共同研究篇に示されるような地域区分とそれぞれの地域での専門家の参加をえて、共同研究の形で問題に接近を試みた。共同研究の目的や方法・研究の枠組み、執筆陣容等については第2部を参照されたい。

(鈴木)

第2節 丹生遺跡群の調査と丹生論争

—経過と現在—

丹生遺跡群の調査とその後の論争の発端は昭和37年(1962)2月のことであった。当時、大分在住の富木隆(大分大学助教授)・中村俊一(共同通信社大分支局)の両氏は、大分県坂ノ市町大字丹生字辻、後に第1地区A地点と命名されたいわゆる丹生台地上でかねてから採集されていた特異な石器の重要性に気付き、学界各方面に通報した。¹⁾

発見の報に対する学界の反応は早かった。山内清男氏の要請をうけて、佐藤達夫・小林達雄氏らは、3月に現地調査を実施し、いち早く予報を公けにした。また、歴古代学協会では、3月現地に予備調査団を派遣し、課題に対処しようとしていた。同年4月に開催された第28回日本考古学協会総会では、金闇丈夫・山内清男・佐藤達夫3氏連名の発表とともに角田文衛氏による研究発表がなされる一方、現地発掘のための特別委員会の設置案が、山内清男氏によって提案されたりもした。

歴古代学協会では、いちはやく《日本旧石器文化研究委員会》を組織し、昭和37年秋～昭和42年夏(1962～1967)にかけて、計6次にわたる調査を開始した。²⁾

こうして、丹生遺跡は発見の当初から先陣争いの様相を呈し、波乱含みの状況の中で動き出していった。

丹生遺跡の重要性が各方面から唱えられ、地元研究者も中央の研究者も丹生台地での石器群の発見の報に一喜一憂していた昭和30年代後半のこの時期は、学史的にもそれなりの背景があった。岩宿の発見から10数年が経過し、日本全土に岩宿(旧石器)文化の存在が確認され、構成の大要があらかた捉えられつつあった頃で、これまでの研究の推進役を果たしてきたバイオニア・ワーカー達は次なる目標を意識し、それに挑みかかろうとしていた。

岩宿発見の石器群を典型とする後期岩宿(旧石器)時代以前の文化、すなわちいわゆる前期旧石器文化の存在を予測する考え方には、丹生遺跡発見以前から現れていたし、その後の前期岩宿(旧石器)研究を主導された芹沢長介氏は、丹生遺跡の調査期間に併行して早水台遺跡の調査に着手し、これ

について星野遺跡の調査に手をそめ始めていた。このように、この後長く続く“前期旧石器存否論争”という、当時の学界の焦眉の課題に対する婬艶な議論がこの時既に始まっていた。そして、丹生問題もその先覺的学界意識の一端に連なっていた。

日本考古学協会総会以降、丹生問題に関する論議はしばらくの間華々しかった。しかし、それは永くは続かなかった。そして、昭和46年刊行の「第4紀研究」誌上における論議が、論争らしい論争の最後の頁を飾るものとなつたのではないかと判断される。¹⁾学界で、論文の中で、あるいは研究者の口の端にのぼる噂話の中で、丹生問題が様々に語られる度毎に、その眞の姿、その本来の年代的帰属、検証の方法の如何などよりも、それに係わったメインキャスト達の強烈な個性が織りなす人間ドラマに一層の興味が注がれ、揺れ動いていたかのようであった。

今日から見れば、つわものどもが夢のあとのような丹生論争の経過であった。当時、手入れの行き届いた耕地であった丹生台地が、今日、ただ開発の波を待つて茫茫々の中に埋もれているごとくである。

丹生論争あるいは芹沢長介氏を中心に長く激しい応酬の交わされた、“前期旧石器存否論争”的経過は、加藤稔・岡村道雄両氏の論文等に詳しく述べて解説が加えられている。ここでは、丹生遺跡群の発見から論争に至るまでのやり取りを具体的に辿るのではなく、正式報告書に課せられた課題の主要部分を記し、発掘後30年を経過した今日、いままた何故“再報告”，“正式報告”なのかを明らかにしておきたい。

丹生文化(丹生遺跡群から発見される石器群中、特に前期岩宿[旧石器]時代に属するものではないと考えられた一群を指標とする)については、早水台・星野遺跡例とは相違して、それが人工品であるか否かはさして問題とならなかつた。問題の焦点は、丹生文化の石器群を構成する石器群を原位置で確認し、確かな出土層準を確認することができたかどうかという点であった。

しかし、調査者側は第10地区A地点の石器の検出例などを挙げて次のように主張する。¹⁰⁾

以下に少し長い引用をしておく。

1)ここに掲げた疊を疊器として認められるのかどうか。

2)この疊が丹生遺跡第10地区A地点(大分市板ノ市字丹川小字惣本2561番ノ5)の崖面の砂疊層に固く包含されていた事実を認められるのかどうか。この疊を抜き取った跡の穴の写真は、丹生遺跡の第3次報告書の図版第10に掲げられているし、またこれをそのまま保存し、見学に来られた研究者達に実地に見ていただいた。

3)上の崖面を構成する砂疊層を第1次堆積と認められるかどうか。もし認められるとすれば、その根拠をお示し願いたい。

4)もしそれが第1次堆積であると認められた場合、それを志村砂疊層と認められるかどうか。認められぬとすれば、それをいかなる砂疊層と認められるか。

丹生遺跡群の調査は、開拓者的意義をもつものであり、もとより評者は、それらから得た結論を固執しようとは意図していない。しかし発掘調査によって得られた僅かではあるが、若干の動かし難い確実な事実は、あくまで尊重さるべきであって、何人と雖もこれを無視し

について星野遺跡の調査に手をそめ始めていた。このように、この後長く続く“前期旧石器存否論争”という、当時の学界の焦眉の課題に対する激しい議論がこの時既に始まっていた。そして、丹生問題もその先駆的学界意識の一端に連なっていた。

日本考古学協会総会以降、丹生問題に関する論議はしばらくの間華々しかった。しかし、それは永くは続かなかった。そして、昭和46年刊行の「第4紀研究誌上における論議」が、論争らしい論争の最後の頁を飾るものとなつたのではないかと判断される。⁶⁾ 学界で、論文の中で、あるいは研究者の口の端にのぼる尋話の中で、丹生問題が様々に語られる度毎に、その真の姿、その本来の年代的帰属、検証の方法の如何などよりも、それに係わったメイソニカスト達の強烈な個性が織りなす人間ドラマに一層の興味が注がれ、掘れ動いていたかのようであった。

今日から見れば、つわものどもが夢のあとのような丹生論争の経過であった。当時、手入れの行き届いた耕地であった丹生台地が、今日、ただ開発の波を待つて茫茫々の草叢の中に埋もれているごとくである。

丹生論争あるいは芹沢長介氏を中心に長く激しい応酬の交わされた、“前期旧石器存否論争”の経過は、加藤穂・岡村道雄両氏の論文等に詳しく述べてある。⁷⁾ ここでは、丹生遺跡群の発見から論争に至るまでのやり取りを具体的に辿るのではなく、正式報告書に譲せられた課題の主要部分を記し、発掘後30年を経過した今日、いままた何故“再報告”，“正式報告”なのかを明らかにしておきたい。

丹生文化(丹生遺跡群から発見される石器群中、特に前期岩宿[旧石器]時代に属するものではないかと考えられた一群を指標とする)については、早水台・星野遺跡例とは相違して、それが人工品であるか否かはさて問題とならなかった。問題の焦点は、丹生文化の石器群を構成する石器群を原位置で確認し、確かな出土層準を確認することができたかどうかという点であった。

しかし、調査者側は第10地区A地点の石器の検出例などを挙げて次のように主張する。⁸⁾
以下に少しだけ引用をしておく。

- 1)ここに掲げた疊を疊器として認められるのかどうか。
- 2)この疊が丹生遺跡第10地区A地点(大分市坂ノ市字丹川小字惣本2561番ノ5)の崖面の砂疊層に固く包含されていた事実を認められるのかどうか。この疊を抜き取った跡の穴の写真は、丹生遺跡の第3次報告書の図版第10に掲げられているし、またこれをそのまま保存し、見学に来られた研究者達に実地に見ていただいた。
- 3)上の崖面を構成する砂疊層を第1次堆積と認められるかどうか。もし認められるとすれば、その根拠をお示し願いたい。
- 4)もしそれが第1次堆積であると認められた場合、それを志村砂疊層と認められるかどうか。認められぬとすれば、それをいかなる砂疊層と認められるか。

丹生遺跡群の調査は、開拓者の意義をもつものであり、もとより評者は、それらから得た結論を固執しようとは意図していない。しかし発掘調査によって得られた僅かではあるが、若干の動かし難い確実な事実は、あくまで尊重さるべきであって、何人と雖もこれを無視し

てはならない。学間に忠実であるならば、丹生遺跡の調査報告書類に記載されている僅かではあっても動かし難い事實を、無視するわけには行かないであろう。もしそれを認めぬならば、認め難い理由を明示すべきである。他の遺跡にみられた不確実な所見によってではなく、あくまで第10地区A地点の砾器それ自体、地層それ自体の観察を論拠として批判すべきである。こうした適切な批判に対して評者は白紙をもって臨み、以前に出した結論にいさかも膠泥しようとは思っていない。

丹生遺跡に関しては、第3地区B地点で得られた事實なども、今後は真剣に検討さるべきである。

上記の引用文中の地点の他に同様の主張が、第1地区B地点、第9地区B地点等の出土事例についてもなされている。そこにおける原報告者側の主張が理に叶ったものであるにせよ、第10地区A地点の発掘調査では、事實の追認に失敗していること、第1地区B地点の検出例がまことにわずかであるうえに、報告書にも記されている通りの未擾乱土層であっても、その包含層が1次堆積であるかどうか、上部からの食い込みではありえないかどうかといった疑念には十分にこたえられていない。論理上の可能性の問題としてではなく、万人を納得させるに足る資料の確保に至らなかったとしなければなるまい。このことが、丹生文化の帰属を縄文早期との関連で考えようとする例にみられるような、根強い反対意見となってくる最大の要因であろう。

ところで、上に引いた報告者側の主張への再反論は実は不可能に近い。むしろ、これは調査者側がなすべき問題であって、第三者に投げつける問題ではないと見ることもできる。すなわち、再報告者に課せられた課題の第1はこの点の解決である。しかし、考古学的にも、その後現地調査を実施していない以上、本書でもこの点に正面から答えることができない。ここでなしうるのは、わずかといえども原位置で出土したといわれる石器資料の再検討である。石器と言われるものは果たして人工品かどうか、そうであれば今日からみてどのような性格を有するものと判断されるべきかである。この点はⅢ章第3節において再説する。

問題点の第2は資料提示の方法である。先にも記したように、丹生論争はその当初の華々しさに比較して、そして早水台・星野等を介して激しい応酬のあった“前期旧石器存否論争”と較べても意外に短く、主張と反論の1回性の交替にすぎず、実りある実質的な議論に乏しかった。それは資料提示にいま一つ不十分なところがあり、出土層位・検出状況に問題があるとするならば、その次の段階すなわち石器群構成全体にかかる組成・分布・製作方法等様々な観点からの、インダストリー・レベルでの第三者的検討ができないことによると思われる。前期岩宿文化の追求という丹生問題の学史的性格に起因すると思われるが、調査者達の注意はいきおい大形のいわゆる砾器に集中し、出土の全資料を出土状態のままに客觀的に呈示するという点に大いに欠けるところがあったと、再報告者としては反省しなければならないと考えている。あたり前のことがあたりまえに報告されていれば、論争はもう少し実りあるものとなりえたであろう。本研究報告の前半部によってこの点に応えたい。

第3点は、問題の捉え方・視点の問題である。丹生論争の中では、丹生との対比という場合、カ

フ・オルドヴァイ・バジータン・ソーアンと、当時としては止むを得なかったとしても、硯器に注目するあまり、彼我の間に横たわる地理空間を意に介さない対比がしばしば行われた。これは岡村道雄氏が正しく指摘するとおり¹⁰⁾、日本最古の石器群は“チョッパー・チョッピングトゥール”的文化であるはずだという、モービウス的あるいは1940年代的観念が大きく影を落としていた。

昭和55年(1980)の座敷乱木遺跡の発見以来、前期岩宿文化の存在は、議論の余地のないものとなつたが、今のところその上限年代とされる2~30万年このかた、打・削器あるいは大型両面加工石器を典型とする、いわゆる硯器あるいは大型石核石器主体の文化は見られないであり、終始小型剥片石器が主体を占めている。

こうした新しい認識に基づいて、観点の転換を求めており、日本のみならず隣接地域の当該期の文化も再考してみる必要がある。これが本研究報告の後半部分、共同研究“東北アジアの始原文化と丹生石器群—いわゆる硯器をめぐって”の研究である。

以上が、発掘後30年の今、ここでなしうること、なすべきことの最低限の要件だと考えている。これによって、丹生石器群の帰属があらためて第三者的な検討の対象となり、いさかかなりとも岩宿時代研究に寄与するところとなれば幸せである。

(鈴木)

注

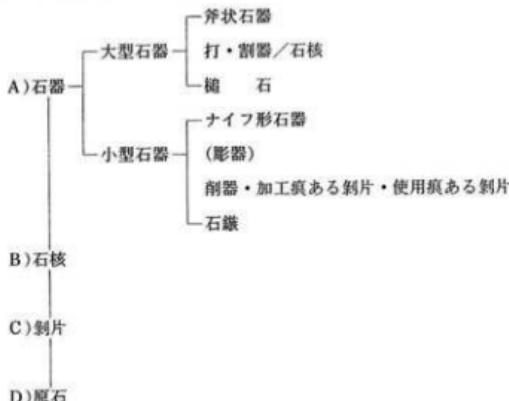
- 1) 富木隆・中村俊一「旧石器前期の文化——付、丹生台地の文化」(『大分市の文化財』第3集所収、大分、昭和37年)。
- 2) 佐藤達夫・小林達雄・坂口豊「大分県丹生出土の前期旧石器(予報)」(『考古学雑誌』第47巻第4号所収、昭和37年)。
- 3) 金岡丈夫・山内清男・佐藤達夫「大分県丹生遺跡の旧石器」(『日本考古学協会第28回総会研究発表要旨』所収、東京、昭和37年)。
- 4) 角田文衛「大分県丹生台地発見の石器類」(同前)。
- 5) a)角田文衛「大分県丹生遺跡—予察報一」(『古代文化』第8巻第4号所収、京都、昭和37年)；b)大西郁夫「大分県丹生台地に於ける旧石器の出土層について」(同前)；c)『丹生1・2次概報』(昭和39年)；d)『丹生3次概報』(昭和40年)；e)『丹生4次概報』(昭和41年)；f)『丹生 総括篇』(昭和43年)。
- 6) a)芹沢長介「1966年の考古学会の動向(1)旧石器時代」(『考古学ジャーナル』第7号所収、東京、昭和42年)；b)角田文衛・三上貞二「いわゆる“丹生批判”的問題点」(『考古学ジャーナル』第11号所収、東京、昭和42年)；c)杉原莊介「SUGIHARA'S HYPOTHESISを破ってほしい」(『考古学ジャーナル』第8号所収、東京、昭和42年)；d)斎藤忠「日本考古学現下の課題」(『歴史教育』第11巻第3号所収、東京、昭和38年)；e)渡辺直經他「日本旧石器研究の課題」(『シンポジウム日本旧石器時代の考古学』所収、東京、学生社、昭和52年)。
- 7) a)賀川光夫「西日本における硯器の問題」(『第4紀研究』第10巻第4号所収、東京、昭和46年)；b)角田文衛「賀川論文に対する論評」(同前)。
- 8) 加藤稔「日本旧石器文化存否論」(『学説論争日本の考古学』第2巻所収、東京、昭和63年)。
- 9) 岡村道雄「日本の前期旧石器存否論争について」(『考古学論叢』Ⅱ所収、仙台、平成元年)。
- 10) 註7)に同じ。

第3節 “礫器”という用語について

丹生遺跡群や前期岩宿(旧石器)時代の石器群を取り扱う場合、しばしばこの“礫器”という言葉につき当たる。ヨーロッパの概説書中とりわけ人類最古の石器の説明に散見される pebble-tool からの翻訳借用であろう。ごく一般的なイメージは、河原石を用いたチョッパーのような大形の利器ということで通用する便利な言葉である。一般的語義といふ点からすれば、礫素材の石器全般を指しうるから、槌石(ハンマー・ストーン)も敲石も含みうるはずであるが、慣用的にはこれを含まないのが通例である。また、剝片石器・石核石器というような相対区分における石核石器という言葉は、礫器の意味も含んでいる。それでは、礫器の中核を成すものと暗黙のうちに諒解されているチョッパー・チョッピングツールの内に、分割礫や大型厚手剝片を素材とするものを含まないかというと、それは言い切れない。また一方で、近年、チョッパーか石核かという議論も盛んである。³⁾

このように、これが考古学上の用語として適当でないことは角田文衛氏による指摘のあることでもあり、また、具体的な石器群の記述にあって整理の必要性が痛感された。したがってまず、本書で用いる基本的な用語を検討しておきたい。

丹生遺跡 1-B 地点の石器群を例にとって考えてみると、これまで一般的に礫器と呼びならわされたものの中には、打器(チョッパー、斜刃割器)、割器(チョッピングツール、山形刃割器)、斧状石器が含まれる一方、打・割器類とされたものの中に相当量の石核を含むことも明らかになってきた。礫器すなわち、打・割器というかたちでは、石器群の記載そのものをなしえない。このため第1部発掘報告篇では、礫器の用語は用いないことにする。この辺を、1-B 地点の石器群に対して実際に行った分類を考慮しながら、以下のように整理し直してみた。



石器群を大型・小型石器の2群に対比的に分つことを基本とする。heavy duty tool と light duty tool⁴⁾ の援用であって、大型重厚石器・小型軽量石器とでも呼べば、一層語感的には実態に近いも

のがあろうか。大型石器の原則的性格には、大きくて重いことが重要である。同様に小型石器は小さくて軽いものが相当する。しかし、大型の剥片石器が、小型の疎核利用の石器より大きくて重いことはしばしばある。このように石器の素材が剥片であるか否かは、この区分にとって必ずしも重要なではない。また大型・小型の区分基準をどこに置くかに問題はあるが、両者それぞれが含む器種はよいまとまりを示していると見ることができる。しかし、一般論としては大型・小型の両範疇に同じ器種名を含むこともありうる。削器などは現実にこうしたことが起きやすいのではないかろうか。

区分はあくまで技術・形態型式学的な性格によって設けられる、考古学的な器種レベルの区分である。素材の問題ではなく、2次加工を経て、道具製作過程の終着地点でのあり方を問題とする。

念の為に申し添えておくと、1-B地点の大型石器のうち、打・削器／石核とあるのは、両者の区分の厳密な基準を見出しえない暫定的な処理である。打・削器と石核の区分法が成立するまでの暫定的処置として、この両者の石器を含み込む併称法として用いておく。打・削器であるのか石核であるのか、その判別法次第では丹生石器群に対する評価が全く別物となってしまうからである。

なお、チョッパー・チョッピングトゥールは、片刃・両刃チョッパーという呼び方もあるが、両者がしばしば不即不離の関係にあることと、日本語の用語を選択するという意味で、チョッパーを打器、チョッピングトゥールを削器、チョッパー・チョッピングトゥールと併列表記する場合は、打・削器と表現するものとしておく。

なお、第2部共同研究篇では、上記の用語上の問題も含め、一切の統一を行っていないことをお断りしておく。自由な議論をしていただくためである。

(鈴木)

註

- 1) a) OAKLEY, K.P., *Man The Tool-Maker* (London, 1949); b) *Frameworks for Dating Fossil Man* (London, 1964).
- 2) 鈴木忠司「石器の起源」(『季刊考古学』第35号所収、東京、平成3年)。
- 3) 角田文衛「賀川論文に対する論評」(『第4紀研究』第10巻第4号所収、東京、昭和46年)、225頁。
「いかに器面に原礫の表皮を遺しているとは言え、石器の名称は、用途、得むを得なければ形態によるべきものと考える。礫、もしくは半裁の礫を原料に用い、多分に原礫面を遺したと言った技法上の特色は、いかにも重視さるべきであるにせよ、それは用途に基づく命名法の優位に立つものとは思わない。石器は、用途に基づいて、細かく分類する時は形態をも考慮して命名されると言う Terminologie は尊重さるべきであり、疎器についてのみ例外を認める必要も理由も存しないと考えている。まして『疎器文化』の名称に至っては、考慮のほかである。」
- 4) LEAKY, M.D., *Olduvai Gorge*, Vol. 3(Cambridge, 1971).

II 章 丹生遺跡群の石器群

第1節 丹生遺跡群の概観と検討対象

1. 遺跡群の位置

丹生遺跡群は大分市東方約8kmに所在する。丹生台地上に主として分布する遺跡群を指す。丹生台地は大野川下流の東岸にひろがる台地で、西を大野川沿いの急崖に、南東を丹生川の沖積平野に、北を別府湾沿いの海岸平野によって囲まれた、西辺約5km、北辺約4kmの長さを有する直角三角形状に拡がる丘陵性の台地である(第1図、図版Ⅲ上段)。

丹生台地は、かつて地籍上、その北部が北海部郡大在村に、西縁が鶴崎市種具に、そして主要部が北海部郡坂ノ市町大字丹生と丹川に、また丹川台地は西縁部のみが鶴崎市種具に、その他は全て坂ノ市町大字丹川にそれぞれ所属していたが、昭和38年3月に市町村合併が行われ、現在はことごとく大分市に編入されている。

丹生台地上には岩宿時代の遺跡の他、古墳や弥生時代の遺跡など多数の重要な遺跡が知られている。本来ならばこれら全てを丹生遺跡群と呼ぶべきであるが、ここでは、いわゆる丹生論争に係わって、(財)古代学協会によって調査された遺跡地点を指すこととする。調査は、台地全体にわたって実施されたものではなく、踏査の結果、表採資料が多く得られた台地の南半を主とした対象地としている。ここには、北端の第5地区から南端の第13地区まで合計14の遺跡地区設定がなされている。このうち、第5地区は採集品による地区設定がなされただけで、発掘調査に至っていないので、実質的には、南北3kmの間に第13地区48地点がここで言う丹生遺跡群を構成していることになる。

また台地の東北端、王ノ瀬から、関連資料の採集が報ぜられているが、とりあえず、これはこの丹生遺跡群の中に含めないでおく。

第2表 丹生台地の第4系の対比表
柱状断面図は標準層序を模式化したもの

丹生台地		関東地方		ヨーロッパ
層序	地形面	層序	地形面	本期・間永期
古井層				
丹川砂砾層		吉川ローム	立川砂砾層	アレンドード
延命寺砂砾層				モー
一木駒灰岩		武藏野ローム		モントリル
同尾層		武藏野一木駒灰岩	下木駒一木駒灰岩	リス
小原台砂砾層		多摩ローム	多摩	リス
丹生泥層		地獄堂層		ミンデル
本村砂砾層		東金層		モントリル
高城五層		若森層		ミンデル
牧砂砾層		佐賀層		モントリル
浅尾層		三浦層群		モントリル

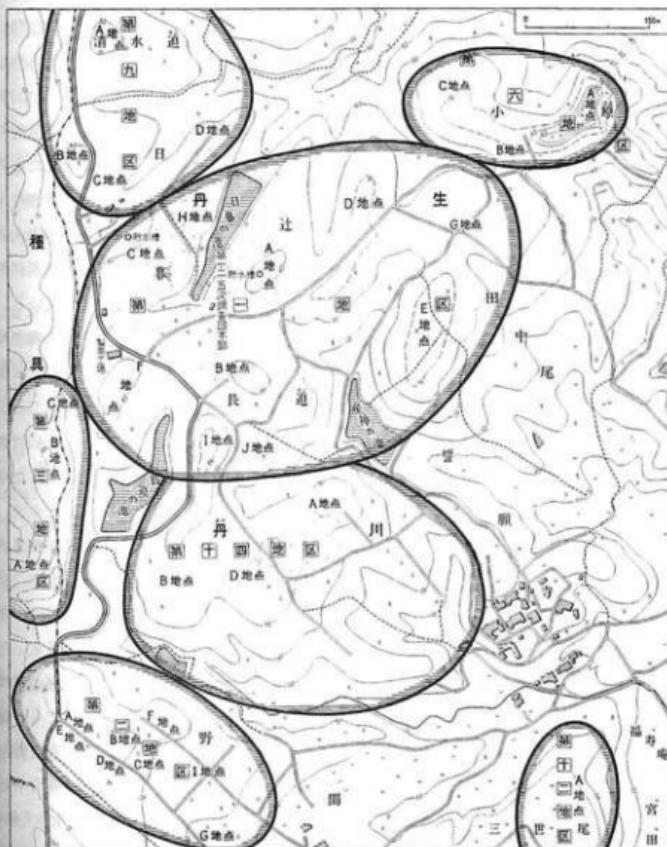


第1図 丹生遺跡群位置図(2.5万分の1 赤崎図幅)
1~14は地区名

2. 報告対象の限定

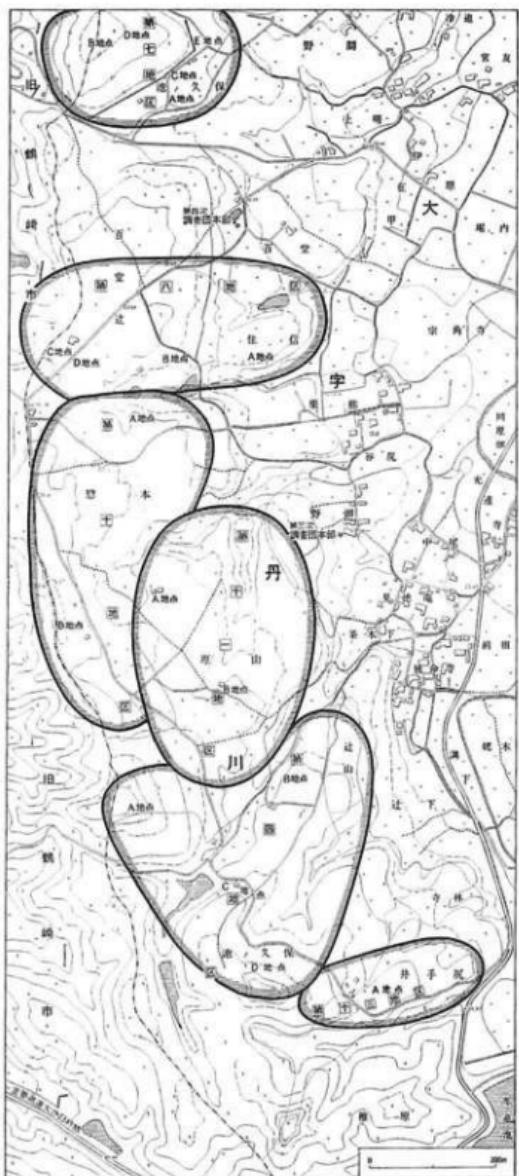
なお、丹生台地は地質学的にもきわめて重要な地域であり、考古学的調査と併行して綿密な地質学的調査が実施されている。ここでは丹生台地の第4系の対比表(第2表)だけを掲げておくが、詳しくは『総括篇』を参照されたい。

さて、丹生遺跡群では48ヶ所の地点で、規模の大小は別にして、発掘が行われた訳であるが、本書では特定の地点に限って再報告をする。丹生遺跡群は問題の前期岩宿(旧石器)時代と想定される段階から平安時代にまたがる遺物が検出されている。しかし、調査の主旨自体が、岩宿時代に主眼が置かれていたわけであるから、ここでもこの主旨を踏まえて、縄文時代以降の遺物を基本的に対



第2図 丹生遺跡群内地区・地点位置図 1)

第1・2・3・6・9・12・14地区、原図は調査時のものを使用。



第3図 丹生遺跡群内地区・地点位置図 2

第4・7・8・10・11・13地区

象外とした。結局、再報告対象資料は土器は別にして、全地点から出土した合計約870点の石器である。その判別方法と判断基準は以下のとおりである。

これをまず、石材・石器の形態等に基づいて、岩宿時代に属すると考えられる資料群と、それ以降の時代に属すると考えられるものとに区別した。この作業は、橋昌信別府大学教授の手を直接わざわざしたものであるが、大分県下とりわけ丹生台地の位置する大野川流域の石材の時代別利用状況が基準となっている。一言で表現すれば、岩宿時代の石器群は主として流紋岩を選択している点である。

これによって、岩宿時代の石器が出土する地点をまず選び出し、その後、この中でも資料群が数量的にまとまっているもの、少數でも資料の性格がはっきりしているものに限定した。この一方で、上記の基準に合致しないものでも、従来の議論の経過から重要な地点と判断される場合や石斧に限ってはこれを取り挙げた。中でも、多数のいわゆる縛器を出土し、丹生論争に係

わって丹生遺跡群中もっとも重要な資料群を構成する1-B地点は、石材の種類・帰属の時代にかわらず全資料を取り扱うこととした。

なお、念のために記しておくと、土器はほとんどが弥生土器であり、古くても縄文後期を譲らないという観察所見を得ている。石器の中には、鋸形鎌が少なからず含まれており、押型文土器の存在も予測されたが、保管資料中にこれを確認することはできなかった。土壤の性質による遺存状態の悪さに起因するものであろうか。結局、土器および縄文時代以降に所属すると考えられる石器(1-B地点出土例を除いて)は、既報告分を参照していただくこととし、ここでは資料の再提示、再検討はしないものとする。

このような手続きの後に、本書で取り挙げることにした資料の報告単位は、以下のとおりである。
調査年次・調査班の帰属は、第1表を参照されたい。

第1地区A地点(以下、1-Aと表記)、1-B北区、1-B東南区、1-B西区、1-D、2-E、2-F、2-H、2-I、3-B、4-A、4-B、4-D、7-A、7-D、8-A、8-B、9-B、9-C、10-A、11-A、12-A、13-A、14-A、14-Cの計25ヶ所である(第2・3図)。

なお、資料の性格上もっとも議論の集中する1-B地点各地区から記述を始め、このために可能な限り紙幅をさくこととする。

(鈴木)

註

- 1) a)賀川光夫「西日本の石器の問題」(『第4紀研究』第10巻第4号所収、東京、昭和46年); b)橋昌信編『大分県旧石器時代遺跡分布図』(別冊、昭和61年)。
- 2) 首藤次男・大西郁夫・日高稔『大分県丹生台地の地質とくに旧石器時代遺跡と関連して』(『丹生綜括篇』所収、昭和43年)。
- 3) 本書では原則として角田文衛・佐原真両氏および筆者の主張に従って岩宿時代という呼称を用いる。この場合、従来の前(中)期旧石器時代を前期岩宿時代、後期旧石器・先土器時代を後期岩宿時代とする; a)角田文衛「無土器文化の名称について」(『古代文化』第3巻第1号所収、京都、昭和34年); b)佐原真『大系日本の歴史 1 日本人の誕生』(東京、昭和62年); c)鈴木忠司「先土器・旧石器そして岩宿時代」(『古代学研究所研究紀要』第1編所収、京都、平成2年)。

第2節 第1地区B地点の細分

1. 発掘の経過

1-B地点は試掘調査(昭和37年6月5日~8日)において藤原班、第1次調査(昭和37年10月5日~31日)において酒詰班、第4次調査(昭和40年10月13日~11月2日)において三上班、第5次調査(昭和41年9月27日~10月12日)において小野班および試掘班によって、計4回調査された。

2. 位置・地区・トレンチ

第1地区は大字丹生字日暮・辻・長迫に渡る地域に相当する。ほぼ70mの等高線によって縁どられる丘陵である。その中でB地点は、日暮・長迫・産神の三つの池に囲まれた標高約80mの丘を中心として広がり、地籍上は字長迫に属する。おおよそ東に向かって緩傾斜をなすが、産神の池に面

する側は崖となっている。この地点の大部分はブルドーザーによって削平され、多くの石器が地表に露呈していたという。

試掘調査では丘陵頂部の平坦部とその東斜面において試掘が行われたが詳細は不明である。

第1次調査では、未開墾だった南東斜面の箇所を中心にAトレンチ(南北16.8m, 東西14.7m, 2.1m × 2.1m グリッド)およびその南方8mにDトレンチが設けられた。また地層観察用にB・C両トレンチが丘陵東縁に設けられた。調査面積は124m²である。なお、Bトレンチの位置した場所は開墾時の土砂捨て場であった事が後に判明し、同トレンチは放棄されている(第2・4図)。

第4次調査では、丘陵西南斜面にある桃畠が発掘された。ブルドーザーではなく耕転機で開墾され堆積の遺存条件に恵まれていると予想されたためである。桃の木の間をぬってA・C・Eの3本のトレンチが設定され(各々3m × 9m, トレンチ間隔は3m), 各トレンチは3区に分けられた。ただ、Aトレンチの第3区は桃の木との関係で不規則な形を強いられた。調査面積は約80m²である。

第5次調査では、まず小野班によって第1次調査時のトレンチの西隣りにある雑木林の中にトレンチ2本(2m × 10m, S・Tトレンチ)が、また試掘班によって頂部北側にある杉苗に沿って東西に長くトレンチ(2m × 12m, A・Bトレンチ)が設定された。しかし地層の擾乱が著しいため、両班のトレンチを接続する形で丘陵頂部を南北に切るトレンチを設けたところ(E・Fトレンチに相当)、擾乱の程度は変わらないが出土する遺物が急増した。そこで丘陵頂部の北半分をほぼ全面的に発掘することが決定された(A～D・G～Yトレンチ)。結局計27本のトレンチが設定され、調査面積は合計約700m²に達したのである。

3. B地点の細分

以上の調査経過に係わる記述のように、1-B地点は、試掘も含め4度の調査が実施されている。その範囲は南北約100m、東西約50mの広がりを有する。そして、第1次調査と第5次調査の調査地は交錯している。このような事情を考慮すれば、発掘成果の記述に際して1-B地点を一括して扱うか、あるいは調査年次ごとにこれを行うのは効率的でない。トレンチは、標高80mの丘の頂部付近とこの南斜面(5次)、東南斜面(1次)、西南斜面(4次)に設けられている。これらのトレンチでの遺物の出土状況や遺物の性格に加えて、地形単位とその広さを考慮すれば、1-B地点を仮に以下の北区(図版Ⅲ下段)・東南区・西区の三つのそれぞれ独立した別個の遺跡単位として扱うのがより現実的であると考えられる。したがって、以下の記述は、この北区・東南区・西区ごとに行なっていきたい。

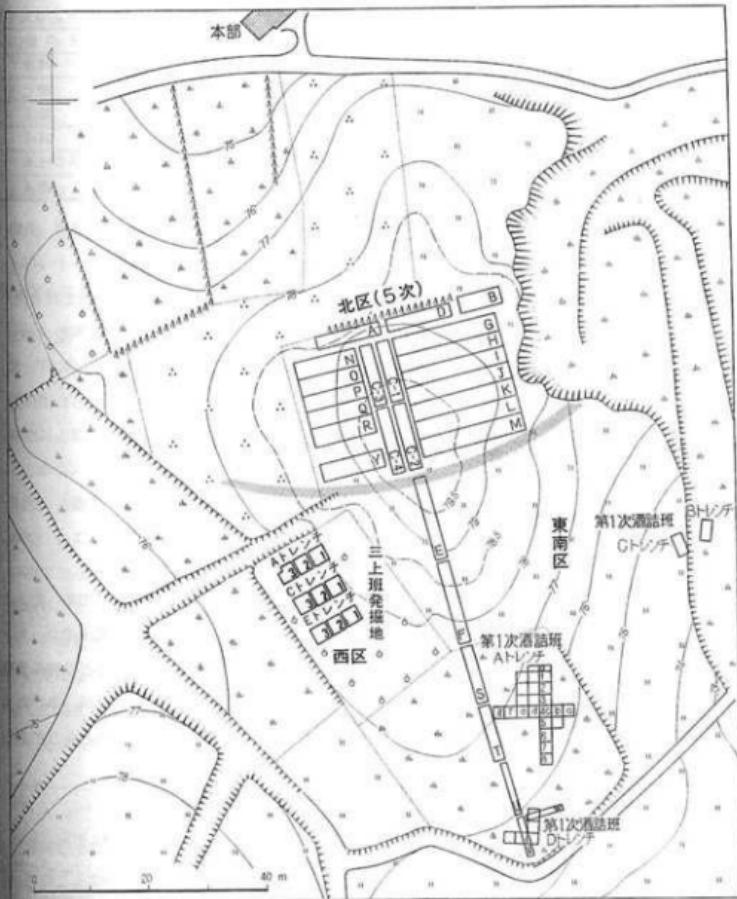
北区 第5次調査の際のA～RおよびYトレンチ。

西区 第4次調査の際のトレンチ一括。

東南区 第1次調査の際のトレンチ一括および第5次調査の際のE・F・S・T・U・Vトレンチ。

原報告では一つの地点として扱ったものを三つに細分して記述する合理性に係わって、三つの地区の出土遺物の特徴の比較をここに補足しておこう。

1-B地点全体は、合計360点の遺物が出土している。三つの地区でもれなく出土する打器・大



第4図 1-B地点(北区、東南区、西区)地形・トレンチ配置図

型石器類の突出した出土総数は、やはり1-B地点の最大の特徴であろう。また、出土地不明ではあるがハンマーが採取されている事や、数量的には僅かであるがナイフ形石器や石鏃が出土している事も留意すべき点である。

各区毎の器種組成を見るなら、西区は碎片類が占める割合が他に較べ非常に高い点、東南区は多量のRF・UF類を出土している点、そして北区は打器・大型石器類や母岩・石核類が非常に大量に集中する点で、各地区が決して総括できる内容を共有していない事が理解できる。更に各々の石材構成においてそれらの性質の違いが一層顕著になる(第3表)。各地区毎の黒耀石及びチャート類

の構成比率を比較すると、東南区では黒耀石が実に70%以上を占め、チャート類はほとんど見られないのに対し、西区ではチャート類が約60%、黒耀石が約30%を占め、非チャート・非黒耀石のものは全体の1割程度しかない。それに対し北区では3/4が非チャート・非黒耀石類が占めている。

地形単位を基にした1-B地点の3区分は、器種組成・石材構成比を併せて考察してみても妥当なものであると言えるだろう。

(竹内)

註

- 1) 『丹生1・2次概報』(昭和39年)。
- 2) 『丹生4次概報』(昭和41年)。
- 3) 『丹生綜括篇』(昭和43年)。

第3節 第1地区B地点北区

1. 土層

1-B地点北区は多數の石器が集中的に発見されたにもかかわらず堆積条件は劣悪であった。これは原報告の表現を借りれば、「最初予測したように殆ど完全に搅乱・破壊され、腐植土やローム・粘土が混合して存在し、その中に旧石器類が点々と混っている有様であって、層序などは實に支離滅裂で、單に石器を掘り出すだけに終始するのかと諦めていた。」¹⁾のような状況であったが、幸いにもGトレントでは搅乱の免れた部分が僅かに遺存していたとされている。層序は以下のとおりである(第5図)。

第1層 開墾による丹生泥層擾乱層

第2層 多孔質灰黃褐色粘土層

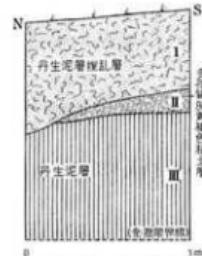
第3層 黄褐色粘土層(丹生泥層)

上記3層のうち、第2層以下は開墾による被害を殆んど受けていなかったとされているが、ここからは3点の石器(No.2・34・66)が出土している。したがって、これらは原位置を留めていたことになる。

そして、この第2層は東南区第5次調査S・Tトレント第2層に相当し、その成因については、「從来新しいロームの二次堆積物とされていたが、第14地区A地点でこれが表土状に堆積せず、水平に堆積して浸蝕をうけていることが判明したので、前記の如くこの辺りが陸化して丹生面が形成され、あまり浸蝕をうけぬうちに志村砂礫層や丹生泥層を供給源とし、多量のロームを混じて二次堆積

第3表 第1地区B地点各区黒耀石・チャート占有比率表

地区名	年次	黒耀石(%)	チャート(%)	その他(%)
北区	V	5.9	20.9	73.2
	I	77.5	2.5	20
	V	63.3	0	36.7
東南区	小計	73.9	1.7	24.4
	N	29.0	59.4	11.6
西区	総計	32.2	19.4	48.4



第5図 1-B地点北区 Gトレント東壁土層断面図

したものと考えられるに至った。因みに陸化しない場所ではこの時期に小原台砂礫層が堆積したのである。²⁾と原報告者は記している。原報告者が考える丹生文化の帰属年代に係る重要な記載である。

2. 遺物の出土状況

1-B地点北区からはナイフ形石器1点、二次調整剝片3点、打器・大型石器類55点、石鎌1点、石斧片1点、使用痕と思われる小剝離を有する剝片6点から成るトゥール類計67点の他に、剝片類48点、破片類3点、母岩・石核類15点の合計134点の石器が出土している。

幸い1-B地点北区出土のはとんどの石器はその出土位置を平面分布図に落とす事が可能である(第6図上段)。原位置を留めていたとされる石器3点を除いては再堆積後の出土位置しか分からぬから参考程度にしかならないが、いくつかの石器集中から成っているように見受けられる(第75図～79図)。石器群の分析から得られた結論からすれば、これらは帰属時期を異にする複数の石器群の集合として理解されるから、石器群ごとに分布状況を把握しなければならないし、この石器群単位ごとに分布論的観点からも資料を検討しうるようにも見受けられる。

しかし、1-B地点全体が全面的なブルドーザーの破壊を蒙っていたと記されていること、また北区の発掘所見(発掘日誌)でもこの点が確認されているし、石器の多くに激しい傷跡を留めているので、ここに示した分布状況は、あくまで最終的な遺物採集位置の記録が示されているのにすぎないのであって、擾乱がブルドーザーによっていることがはっきりしている以上、標高80mの丘の頂部から出土したという点以外は、人為的にかなりの出土位置と状況の変更を蒙っていると解釈しておくのが賢明であろう。

蛇足になるが、念のため、石器の垂直分布を示しておきたい。5群の石器は全て、出土レベル上全くの混在状態を示している(第6図下段)。

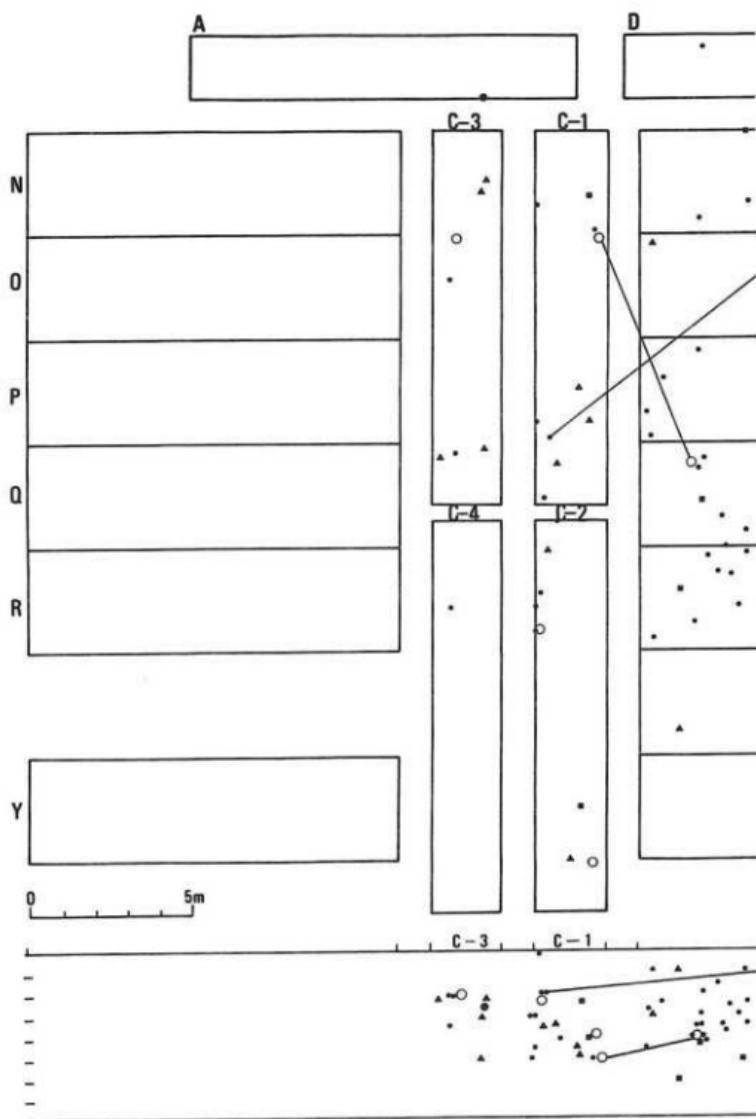
したがって、これらは基本的に現位置論的検討の対象としないものと理解しておきたい。

3. 石器群の構成と分類

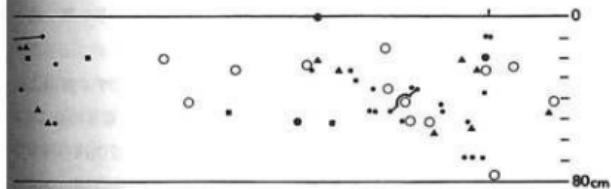
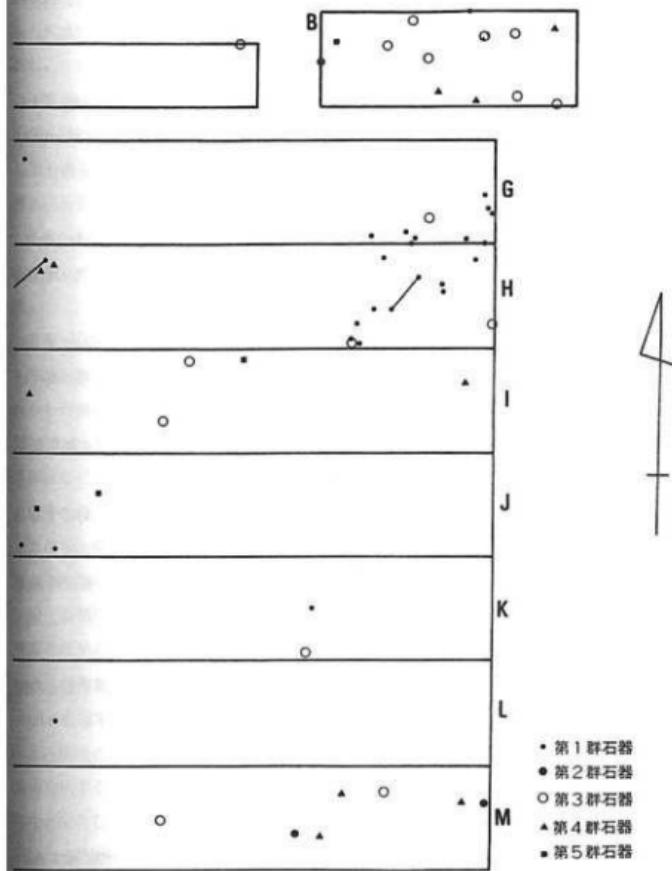
1). 石 質

北区出土の134点の石器は、先の出土状況の説明からも知られるように、出土位置・出土層などからは、その帰属する時代を判別する手懸かりは得られない。仮にブルドーザーによる削平・擾乱を受けていなかったとしても、丹生台地全体の堆積環境の劣悪さからみて、もともと同一層に混在した資料群であったであろう。そこに含まれる石器は、ナイフ形石器・石鎌など明らかに帰属時期が明瞭な石器が本来的に共存関係にありえないことからみても、机上操作によって共存関係の高い一群ごとに区分することが必然的に求められたであろう。

北区出土石器群中に各種各様の石器が入り混じっていることは、資料群の初見の段階から明らかな印象であった。もう少し詳しく述べれば、ここにはいわゆる石核・打割器・斧状石器・櫛石(ハシマー・ストーン)・ナイフ形石器・石鎌・チャートおよび黒耀石製剝片石器などが含まれており、資料群が多様であると同時に、資料の型式・形態学的特徴が、石質との間に強い関連性を有しているのではないかということが一目で予測された。そこで、まず石質別にその構成内容をあらまし検



第6図 1—B地点北区石器平面・垂直分布図



討し、その後、技術的・型式学的検討を行って、北区の石器群の構成の実態の把握の最初の前操作業にしたい。

石質は、以下の5群としてまず捉えられる。

I群：粗粒の石材グループで、A)流紋岩 B)凝灰岩に2分される。A)は灰黄色で風化が進んでいる。B)は黄色・灰黄色・暗灰色で粗粒、風化が激しく爪で傷がつくほどである。A)の中には黒色で、粗粒、ほとんど風化をしていないものが少數含まれる。流紋岩と凝灰岩の比率は7:3である。

丹生1-B地点を特徴づけるいわゆる斧状石器群およびこの製作過程に対応する剥片である。

II群：石質はA)良質、黄色・褐色の流紋岩、B)粗粒で黒い流紋の入る灰白色流紋岩、C)風化の激しい流紋岩でI群と共通するもの、D)粗粒砂岩からなる。

丹生1-B地点のもう一方の特徴的な一群で、石核・打削器(チョッパー・チョッピングトゥール)から成る。I群が主として風化の激しい石材から構成されるのに対して、こちらの風化は軽微である。

III群：大部分は良質で灰黄色に若干風化した流紋岩からなる。一部に、粗粒の流紋岩や凝灰岩を含む。

ナイフ形石器・翼状剥片石核・盤状剥片？・幅広縱長指向の剥片類およびこれと対応する石核。

IV群：チャート製の一群。剥片と石核を主とするが、剥片には規格性があり、一部に微細な加工痕を留めるものがある。

V群：堺島産黒耀石・ガラス質安山岩の一群。石礫を含む。

以上、石材を5群に分けてみると、細部は別にして、基本的に各群はそれが含む石器形態との間に強い関連性のあることがはっきり覗えた。したがって、石材の5群を基礎にして以下のように石器群を5群に分け特徴を述べる。

2). 石器の分類

第1群石器：斧状石器関連(第7～51図、図版V～VI)

ここにはA)斧状石器、B)斧状石器未成品あるいは斧状石器素材および素材製作の際に生じた、大型厚手の裂片、C)この加工時に生じた可能性のある剥片の3者からなる。

A) 斧状石器群は、I～VI類(第8図)および分類保留群、燧石(IV類：ハンマー・ストーン)から成る。

1類(No.1～10)

主に薄手の長楕円礫を使用し、その一端を片側から薄く打削加工する。両端に加工する例(No.10)もある。石質は1例(No.4)を除いて、風化の激しい流紋岩・凝灰岩使用。裏面側に、器体に沿って、垂直方向に薄く削がれた使用痕(ダメージ)と思われる特徴的な剝離痕のある例もある(No.4・9)。

これらは2次加工の点においても特徴的である。加工は礫先端部に集中するが範囲は面的である。打削は打・削器におけるように粗く打ち欠くと言うよりは、平坦で奥に深く伸び、そぎ取るように

なされており、その結果、先端にシャープな刃部が形成されている。器体の長軸に平行に剥ぎ取られた剝離痕で、その末端が強いステップ状態を示す例(No.3・6)は、使用による剝離の痕跡であるかもしれない。

II類(No.11~20)

厚手椎円錐(Ⅰ類ほど長手のものは少ない)を使用し、先端から一側縁にかけて、大きく打ち欠いて加工する。先端が尖らぬものと、先の鋭く尖るピック状のもの(No.16・17・19)を区分することもある。石質は1例(No.11)を除いて、風化の激しい流紋岩使用。

2次加工は側縁部が裏面の自然面に対して鈍角であり、先端部は鋭角でかつ面的である。ほとんどが甲高で分厚いとは言え、このような2次加工の特徴によって、先端部は鋭い刃部を形成している。

III類(No.21~45・47)

斧状石器群中もっとも多く構成資料(26点)を有し、資料群中の中心的位置を占める。素材の先端から両側縁にかけて2次加工が施されているものを一括した。したがって、素材を円錐・分割錐(厚手剝片)・大型剝片(典型的剝片)に区分し、先端の尖り具合、横断面の形状(甲高かどうか)、平面形状などによって細分は可能である。しかし、細別区分の場合類型間の連続性が高く、必要以上の細分を招きかねないのであえてこれを行っていない。

ただし、資料群の構成の理解と説明には、大まかなグループングの中で行うのが好都合であるので、このために特徴的な数グループを抽出しながら記載を進めよう。

a) 長椎円錐(Ⅰ類に比較してやや厚手のものが多い)を用い、左右両側縁に2次加工を加える。背面のほとんどと正面の中央部・上半部に錐面を残す。先端の平面形は尖り気味のものと、弧状のものがある(No.21~26)。

b) 粗削した錐(分割錐)あるいは厚手の大型剝片を利用し、先端から両側縁にかけて加工を加える。断面は三角形ないし台形で中央に稜をもち甲高な印象が強い。刃部の平面形は尖らずゆるい弧状を呈する(No.27~32)。しかし、中には、側縁部の加工が微弱なもの、一側縁だけに限られるものなどを含む。

c) 一見面的な加工が施されているようにも見受けられる一群である。しかし、1例(No.29)を除いて、中央部に素材の分割面を留める。b類と共通点が多い。相異点は両端が鋭く尖る例も含め、先端が尖銳なところに特徴がある(No.33~36)。

d) 锐の厚さを半減するように2分割(半截)した剝片を主として用い、先端から側縁にかけて2次加工を施す。先端が尖り気味のものが多いが、c類のような尖銳なものは少ない。剝片を主として用いるために、大きさに比較して扁平である(No.37~45)。ただし、No.44は扁平な板状錐を使用していると判断される。素材の剝片は、錐を半截したもの(No.38~40)、分割錐とともに呼ぶべき大型の粗割り剝片を用いたもの(No.37・41~43)、典型的な剝片素材と言るべきもの(No.45)がある。

なお、No.47は、先端を欠き正確な分類はできないが、錐の2側縁に2次加工がみとめられるという点で本類に含めておく。

なお、素材に関してNo33・36・41・43・45には、裏面側にも疎の分割面を留め、大きな疎(幼児の頭大)をいくつかに分割するように粗割りし、剥片を取って素材としたことが知られることを補足しておきたい。

以上のように、細分が可能であると同時に連続する属性も多い。したがって、上記の他の重要な諸属性はⅢ類を一括して述べる。

2次加工は側縁部が裏面側に対し鈍角で、甲高な分厚い例の場合でも先端は鋭角に加工されている。ただし、No39・45は先端付近や側縁にこの例から外れる点がある。いずれにしろ、加工時の意識が刃部に相当する先端一点に集中しているように見受けられる。

刃部付近に研磨痕を有する例が2例(No33・35)あり、刃部背面側に石斧刃部の使用痕に共通する剝離痕を有する例が4点(No22・29・30・32)ある。研磨痕を留める例2点はいずれもその部分はわずかに残るのみで、研磨して使用した後の剥落がそのままに放置されたか、刃部の再生を行った状態を示すのかのいずれかであろう。No33の例は研磨痕を留める反対の先端から大きくステップする剝離が入っている。これが使用痕あるいは刃部再生の為の加工であるならば、両端に刃部を有する例ということになろう。刃部付近にこのような特徴を有する他の例(No28・30・32)は、刃部研磨・石斧刃部特有の剥落痕と強く結びついており、これらの剥離痕が加工痕ではなく、使用時の剥落によるものであり、同時に先端の尖鋒な例が本来目的的に意識されたものではなく、使用と再生という使用過程の中で生じた結果的な姿であるということを示唆しているのかもしれない。

Ⅲ類に含まれる資料群がいくつかにグループ分けされる一方で、上記のような使用過程の問題と深く関わっている可能性を考慮して、本類の細分を避けたわけである。石質は、No28・30・33・35・36・45・47を除いて風化の激しい流紋岩・凝灰岩に属する。

IV類(No46・48~50)

楕円疎の厚さを半減させるように半裁するか、これに類似した剥片を使用し、周辺部全体に2次加工を施した扁平な一群で、平面形は小判形を呈する。周辺部に対して加えられた打削は、裏面に対してさほど鈍角ではない。先端部に対する加工はこれより鋭角であるが、両者の差は他の類型ほど顕著ではない。

No46の例は、刃部とした部分とは反対の先端裏面に、あるいは使用の結果生じたかもしれない剝離痕を留め、さらに表面側にも階段状を呈する長軸方向の剝離痕がある。したがって、上端側が本来の刃部であるか、または両端が刃部として機能していたと考えるべきかもしれない。

V類(No51~53)

大型の疎あるいは大型厚手の剥片を利用し、全体に平坦な2次加工が片面の大部分を面的に覆う一群である。ただし、加工が面的であるとは言っても完全ではなく、いずれも中央部分か上半部に素材の剝離面を留めている。構成数が少ないにもかかわらず全体形状の変異の幅が大きい。

VI類(No54・55・58)

円疎の側縁部を利用し、分割面をほぼ面的に平坦な剝離が覆う。裏面側が極端な放物線状に突出する点で、少数とは言え目立った印象を与える一群である。

VI類(No56・57・59)

やや厚手、幅広の角ばった円錐か類似の大型鶲片を利用。片面のはば全面に水平方向の平坦な剝離加工が及ぶ例と明らかな周辺加工の例とがある。全体に角ばった小判形あるいは隅丸の長方形といった平面形を有す。したがって、刃部は尖らず、突状でもなく、平刃となる。礫を利用した2例の加工面は、大小の水平方向の剝離が全面を覆うが、周辺部沿いの細かな剝離痕は、あるいは礫を粗削り加工した際の素材剝離面であるかもしれない。もしそうであれば、3例とも周辺加工と見做すべきであろう。

刃部に目を向けてみると、刃部裏面側に石斧刃部に特徴的なそぎ取られたような剥落が認められる例が2例(No57・59)ある。このうち、No57の例は刃部先端が欠損している。刃部に対する加工は、いずれの場合も周辺部に対する加工と相違し、鋭角な刃部断面を作り出す意図を十分に窺うことができる。

石質は全て、風化の激しい流紋岩・凝灰岩である。

VII類(No60~63)

円錐を使用し、加工が両面に及ぶものを一括した。この点を除けば、必ずしも一つの分類群を構成しているとは言い難いかもしれない。そのうえ、両面に加工が及ぶとは言え刃部裏面側には共通して礫面が残され、いわゆる典型的な両面加工と称するには躊躇されるが、このことは同時に、刃部の裏面側に意識的に自然面を残す意図を窺わせる。

No60の例は上端で折れている。鶲片の打点は側縁部にあり加工途次の剝離作業の失敗の結果と見做しうる反面、表面側刃部は極端な階段状剝離を呈しており、これは加工というよりも使用時の剝離による結果であるとも考えられる。そうであるとすれば、上端の欠損は加工途次の未完成段階に生じたものではないと判断されることになる。

No61はかねがね話題になっていた刃部磨製の1例である。とりわけ大型で断面は台形を呈する。この例は両面に加工が及ぶとは言え、裏面側のそれは2次加工というより、素材形状を整えるための粗削り風である。表面側は側面の加工と、側面から水平方向に加えられた打削からなっている。したがって、側縁部から表裏両面方向に打撃を加えて両面を面的に加工しようとする、いわゆる両面加工とはその趣を相当に異にする。

松沢亜生氏の御教示によれば、本来裏面側側面から打撃を加えて厚さを減じながら表面側に2次加工を施そうとした作業に失敗した結果、側面側から再度水平方向の打撃を加えざるを得なかった、いわば加工の失敗例ではないかと言う。

No62の例は風化が激しく、各剝離面を精確に読み取りにくいが、本類中一番両面加工品に近いものである。刃部裏面側に残る礫面を意図的なものと判断し、完成品として本類に含めた。

またNo63は刃部に横方向から加わった打撃により剝離した刃部破片が、さらに打点側で欠損している例である。小破片であるとは言え、自然面を留めないこと、刃部両面に研磨が施されていることから、とりあえず本類に含めておく。両面加工品が異例である上に、刃部両面研磨の可能性を示唆するのは、本例が唯一である。

分類保留群(No64~77)

ここには、欠損のため、あるいは未完成のため、形態が特異なため、風化が激しく自然面と加工面との識別がむずかしいためなどの理由で分類を保留したものを一括して含める。これらについては順不同で、気付いた点を補記しておく。

No65・66はV類に共通性がある。またNo66は、一種の石核と見るべきかもしない。No67・68はII類に近いと見るべきかもしない。欠損と風化のためその本来の姿を知ることができない。No69~71は風化が激しく本来の加工のあり方が判別できない。No69は大型の剝片であるにすぎないかもしない。No72は打削の際の失敗による欠損剝片であることが明瞭な例で、V類の加工途次に生じたものである可能性が高い。No73は、V類の欠損品とも考えられる。No74・75は風化が激しく加工状態を精確に読み取ることができないが、IV類中の小型例に類似しているとも言える。

II類植石(ハンマー・ストーン)(No78~81)

本来、斧状石器とは全く異質の性格を有するものであるが、これとの識別に問題を残すものがあること、ならびに混在する大型石器のグルーピングの過程との関係で、斧状石器の延長上で取り扱うこととする。

円柱状あるいは厚手の楕円礫を利用する。敲打痕と特徴的な裂痕によって明らかに植石と認められる流紋岩例(No78)の他に3点をここに含めた。礫形態の他に刃部の剝離痕が主軸に平行で、先がステップするか浅く長く器体をそぐようなあり方を示すことによって、この3点も斧状石器、打・割器／石核とは別に一括りにした。このうちNo79は、I類の両端に打削の加えられた例と同様に扱うかもしないが、礫形態が円柱状である点と剝離痕のあり方から、これとは区別した。No80は平らな上端から垂直方向に継長の剝片が取られた一種の石核と見ることもできるかもしないが、小型石器中の剝片類に同質の石材例がないこと、礫の形状、下端の剝離痕の性状から本類に含めた。No81の例は、I類中のNo.9と相通じる特徴を具えていると見ることもできる。しかし下端から加えられた加工剝離痕と見よりも、植石に共通の作業による副次的な剥落と見る立場から本類に含めた。これらの石質は、風化の激しい流紋岩・凝灰岩である。

B) 斧状石器未成品あるいは斧状石器素材剝片(No82~96・98)

斧状石器未成品?

円礫を分割したような分厚い例(No87)と明らかな剝片(No88)があり、两者とも斧状石器素材としての条件は十分に備えている。いずれも風化および欠損の為、加工意図と加工痕がはっきりせず、斧状石器群との類型的関連を推測することができない。あるいは単なる素材剝片であるかもしない。石質はともに流紋岩である。

斧状石器素材剝片

No82~86・89・91・92~94は、大きさ・厚さの点で十分に石斧状石器類の素材たりうると考えられる。このうちNo85は、むしろ素材剝片の石核と見做しうるかもしない。この他は素材としては大きさの点で問題があり、素材剝片の剥取に関連して生じたものと考えておきたい。

石質は風化の激しい(No94・96・98を除く)流紋岩・凝灰岩である。

C) 斧状石器調整加工剥片？(No.97・99～101)

斧状石器素材剥片のうち一番小型の例を一括した。斧状石器は基本的に円盤を部分・片面加工したものであり、余程加工度が進まないかぎり、打面か背面側に自然面がかなりの割合で残る筈である。このような典型例でないまでも、斧状石器の調整加工時に生じた剥片は特徴的であるはずであり、その可能性が高いのは4例中、せいぜい背面に自然面を留めるNo.101ぐらいである。

1-B地点北区では、多量の斧状石器が使用されている。また素材剥片や種石また加工時の欠損例の存在から見て、この地で最終的な調整加工が行われたと考えるに十分な状況証拠がある。しかしながらこれを裏付ける調整加工剥片はほとんど見当たらないと言ってよい。ここに挙げた例も確実な例とは言い切れない。この点は本地点の性格を考える上で見逃しえない重要な点である。チャート製石器群中には、微細な剥片も多く検出されているので、発掘の精度に原因があるとは考え難い。主たる最終仕上げの場が、本地点とは遠く離れた別の場所にあるのか、あるいは発掘区域外にあるのだろうか。

本地点出土資料の大部分がことごとくブルドーザーによる削平を受けて原位置を失っているために、これ以上の推論を許さないことが惜しまれる。

石質は風化の進んだ流紋岩である。

第2群石器：打・割器/石核類(第52～59図、図版Ⅳ上段右)

円盤を素材としてその一部に連続的に粗い打削を加えた一群で、いわゆる疊器という言葉のもつイメージにぴったり当てはまる一群を一括した。打・割器および石核が含まれるであろう。4類型に区分して記述する。

I類(No.102)

大型盤の一端で両面からやや大型幅広の剥片を取るもの。図示した位置関係に置けば、左から右方向に大きな打削によって打面を設け、正面と内側面から剥片を取る石核と見ることができる。この解釈を択りたい。中粒の流紋岩を用いる。風化はほとんど受けていない。

II類(No.103～109)

厚味のある中・大型円盤使用。いずれも、疊面から一方向にやや大型幅広の剥片を連続的に取る。作業面端は直線状に延びるものを主体とする。打面に相当する自然面と作業面とのなす角度(打面角)は直角に近い。石材は良質流紋岩の例(No.103・104・109)、粗粒だが灰白色で黒い流紋が入り、あまり風化せずシャープなもの(No.105～108)とがある。No.107の剥片は、ここから取られたものと推定される。

取られた剥片の性質・打面角などの点で、全体に打器というよりは自然面打面の石核という趣がつよい。特に石材と剥片剥離作業ならびにこれによって剥離された剥片の特徴からみて、石核という印象が強い。

III類(No.110～113)

大型の疊の一面から、連続的な幅広の剥片を取ったもの。打面角はII類より鋭角である。石質はNo.110・111が砂岩、No.113が粗粒の流紋岩でいずれも風化はあまり進まずシャープな遺存状況を示

す。No112は風化の進んだ流紋岩質の例である。打面角がより鋭角であって、よりシャープなエッジを有すること、打割の加えられた縁辺の平面形が山形を呈する点で、Ⅱ類と相違すると同時にⅣ類の打器により近い特徴を示すと言える。

IV類(No114~116)

小型の円錐の一端に片側から少數回打割を加えたものと、礫の側面両側から打割を加えたものがある。打面と剝離面との成す角度はシャープである。石質は斑文のある暗紫色流紋岩(No114)、灰白色に黒い流紋の入る流紋岩の例(No115)および流紋岩(No116)で、いずれも風化は進まずシャープである。典型的なチョッパーおよびチョッピングトゥール(横型)と言ってよいであろう。

以上のうち、Ⅱ・Ⅲ類は區別に感覚的判断以上のものを求めるとならしいものがある。Ⅳ類はオルドワン型のチョッパーを念頭に置いた場合、真正のチョッパー、チョッピングトゥールと呼ぶものに近い。Ⅲ類の刃部平面形が山状・斜刃で、打点側の自然面と剝離面との成す角度がやや鋭角であるのも、Ⅳ類と共通する点とも言える。ただし、両者の間には礫の大きさの点で決定的な差がある。

打・削器／石核として一括りにしたものの中には、上記のように石核と打・削器を含むと解釈したが、この間の区別は明瞭ではない。その反面、第1群石器(斧状石器)と石材を比較すると、材質名は別にしてその質感が明らかに異なり、第1群石器とは別の範疇を成すという印象が強い。風化した流紋岩の一例(No112)を除けば、風化による器面の鈍化はほとんど見受けられず遺存状態はシャープである。また明らかに第3群石器と質感の点で共通する例も多く(No102~105・109)、石材の点でも石核と理解する方に傾く。

Ⅲ類には小型石器群中の剝片(第3・4・5群石器)に類例を見出しがたく、さらに第1群石器中においても同様であり、石核か打器かの判断に苦しむ。Ⅳ類と対比すると大きさの点で大きな違いがあり、Ⅲ類も含めて石核とみておきたい。しかし、Ⅳ類とても第1群石器との石質上の違いを考えると石核と見ることもできる。

いずれにしろ、礫核石器の区分は定義の問題に帰着する。ここでは、Ⅰ~Ⅲ類を石核、Ⅳ類を打・削器と見ておくが、このように見た場合、丹生遺跡群中の主要資料を構成する1-B地点北区出土資料中には、いわゆる打・削器は、ほとんど含まれていないと判断せざるをえないことになる。

第3群石器：流紋岩製(ナイフ形)石器関連(第60~69・73図)

まず資料構成の概略を述べる。ここに一括された一群は、第1・2群石器とは性格を異にし、石質も基本的に、黄色~灰色を呈する緻密質流紋岩から成る。ナイフ形石器・削器・各種石核を含み、剝片も表皮剝片を多く留めるとはいえ、技術的にも石質の点でも第1・2群とは無関係としてよい。

A)ナイフ形器(No117)

石刀状縱長剝片を用い、打面を残し右側縁を斜めに整形加工した小型の例品である。

B)削 器(No136)

幅広・縱長の大型表皮剝片を用い、主として腹面側2側縁に2次加工を施した、先の尖る削器である。

C)剝 片(No118~134・137~148)

石質に良質流紋岩と、少量だが粗粒で風化が激しく第1群石器の石材と共に通するものとの2群ある。しかし、後者も斧状石器の制作過程で調査的に生じたものではなく、それ自体の削取を意図した目的的な剝片であると判断され、本群に含めた。

剝片は概略3グループとして捉えることが可能であろう。

- イ) 中央に棱を有し、石刃状ないし逆三角形の平面形を呈する傾して縦長の剝片である(No118～126)。頭部調整の念入りな例も目立つ。
 - ロ) 背面側に縫面を多く留め、剝離打面から打ち剥がされた横長ないし幅広の厚い縦長剝片である(No127～134)。
 - ハ) 粗粒で風化の激しい石材を用いる一群で、横長ないし幅広の縦長剝片である(No145～148)。背面側の剝離痕の特徴は一方から連続的に剝離作業がなされるというよりも、求心的な方向での剝離作業によるものが主体を占める。No135の接合例なども類似かもしれない。
- この他に、大型厚手の表皮剝片がある(No139・140・142)。後述する翼状剝片石核(No152表探)が本来の共存関係にあるとするならば、このうちNo142の例などは石核用素材の整状剝片とみることもできる。

D) 石核(No149～153・193)

石核は多様である。イ)表裏両面で立体的に剝離作業が行われる例(No149)。No153は本例と同様の資料とも考えられるが、風化が激しく判然としない。あるいは自然縫かもしだい。ロ)周縁部から求心的に剝離作業がなされる円盤状石核(No150)。ハ)打面を90°に転移しながら、剝片剝離がなされた方柱状の石核(No151)。ニ)翼状剝片石核(No152)。以上の四者が区別される。

石核イ)・ロ)は剝片ハ)やNo135の接合例に、石核ハ)は剝片イ)とロ)の一部に対応しよう。なお、石核ニ)に対応する剝片はない。

ナイフ形石器の素材剝片を石刃の範疇で捉えれば、石核中に対応する石核を欠くことになる。先端を欠くのではっきりしないが剝片イ)中の2点(No118・119)の評価もむずかしい。石刃とみるとも不可能ではないが、同類中の他の資料同様に単なる縦長剝片であり、しいて挙げれば対応する石核はハ)類とみておくべきかもしれない。このあたりは、ナイフ形石器の時間的位置の問題とも係わろう。

なお、翼状剝片石核に対応するナイフ形石器を欠くが、第3群石器が基本的に共存関係にあるとみれば、ナイフ形石器に対照的な二つのグループがあることになり、本群石器の位置付けともからんで興味深い。なお地点不明ながら第1地区採集とされる典型的翼状剝片石核がある(No193)。

第4群石器：チャート製石器関連(第70・71図)

残核には、1例(No175)を除いて剝離作業に明瞭な規則性と企画性を窺えないが、剝片ともども共通した特徴を有する一群である。2次加工と考えられる微細な剝離痕を留める例もある。メノーの1例も本群に含めた(No174)。

A) 加工痕または使用痕のある石器(No158・164・167・172・173)

幅広く明瞭な打面を留め、台形ないし逆三角形を呈する小型剝片の先端部に、連続する微細な剝

離痕を留める例(No158・167)と梢円形の割片の一部に不規則な2次加工と見しき剝離痕を有する例がある(No172・173)。前者は加工痕の位置と加工痕の性状に規則性を窺うことができる。

B) 剥片(No154~157・159~163・165・166・168~171・174)

2次加工痕・使用痕を具える例も含めて記述する。

剥片には明らかな縦長の例(No154~156・160)もあるが、全体に寸づまりの縦長から若干横長に傾く例を主体とする。幅が広く厚い打面を留め、台形ないし三角形の平面形を呈する小型の剥片という点に特徴がある。

C) 石核(No175~181)

石核として取り扱う資料中には、明瞭に剝離過程を推測される例は1点(No175)しかない。これは亀甲状ないし多辺形の正面観を呈する石核の、上辺付近の一端に最終打面が設けられている。剥片剝離作業時における打撃は垂直方向というよりも、石核先端付近で交叉するか求心的な傾向を窺わせる例である。No177は表裏両面で他方向の打撃が繰り返された結果生じたものようであり、No180もこの類例と見做しうるかもしれない。その他の諸例は現存状況からは残核とも単なる裂片とも判断のつかねるような例である。

しかし、ここで示される石核の特徴は、剥片の特徴とよく一致している。すなわち剥片の中に水平の幅広い平坦な打面を有する例と、山形を呈する複剝離打面の稜線上の一点に加筆したと考えられる例(No174)の2者は、それぞれNo175・177の石核に対応すると考えることができる。第4群石器全体は、接合例こそないが同一個体別資料を含む一連の作業工程の中で生じたと理解されるものである。

第5群石器：安山岩・黒耀石製石器関連(第72図)

船島産の黒耀石およびガラス質安山岩を主体とする。石簾・石核・ビエス・エスキーユからなる。

石簾(No182)は二等辺三角形の平基無茎石簾。石核(No183・191)は表裏両面で剝離がなされ楔状の薄い残核となっている。No184はビエス・エスキーユと理解される。その他はいわゆる不定形剥片である。

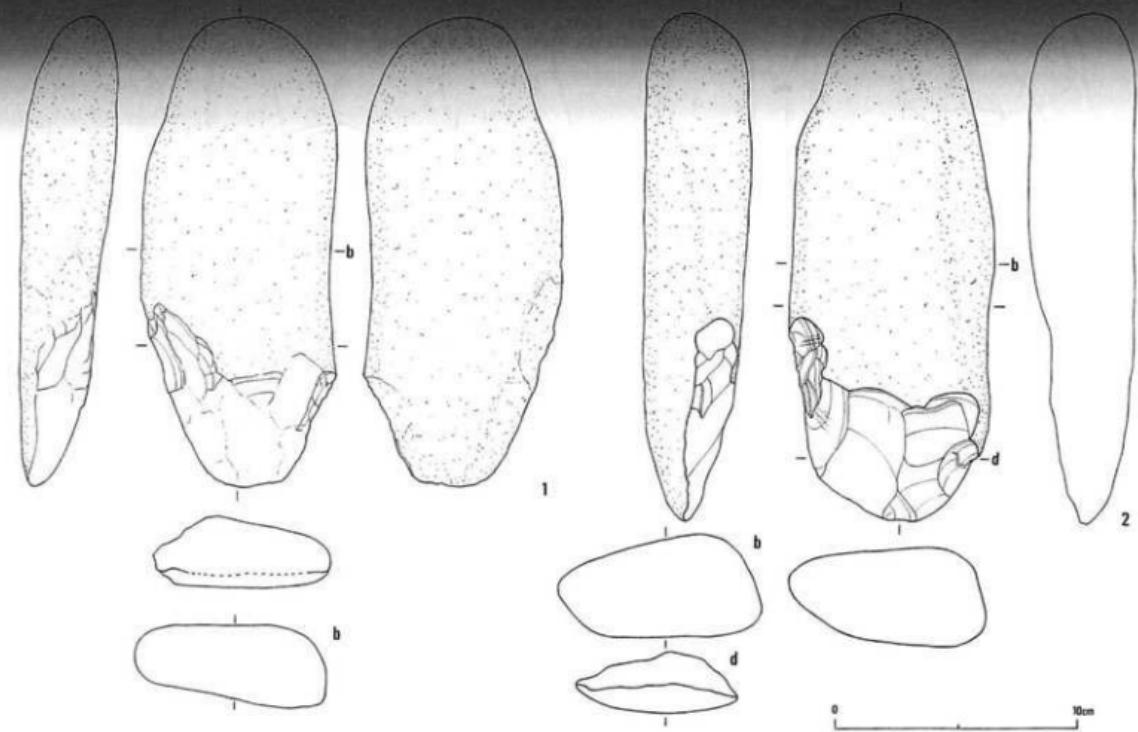
4. 斧状石器の類型間関係

槌石を別にして斧状石器を八つの類型に仮に区分してみた。しかし、この8類型間には形態差に反して強い共通性があり、素材形態に応じて2次加工技術を用い分けてはいるが、全体的な統一性を有する一連の同一石器群として理解できる可能性が十分にある。以下の諸点についてこれを検討しておこう。

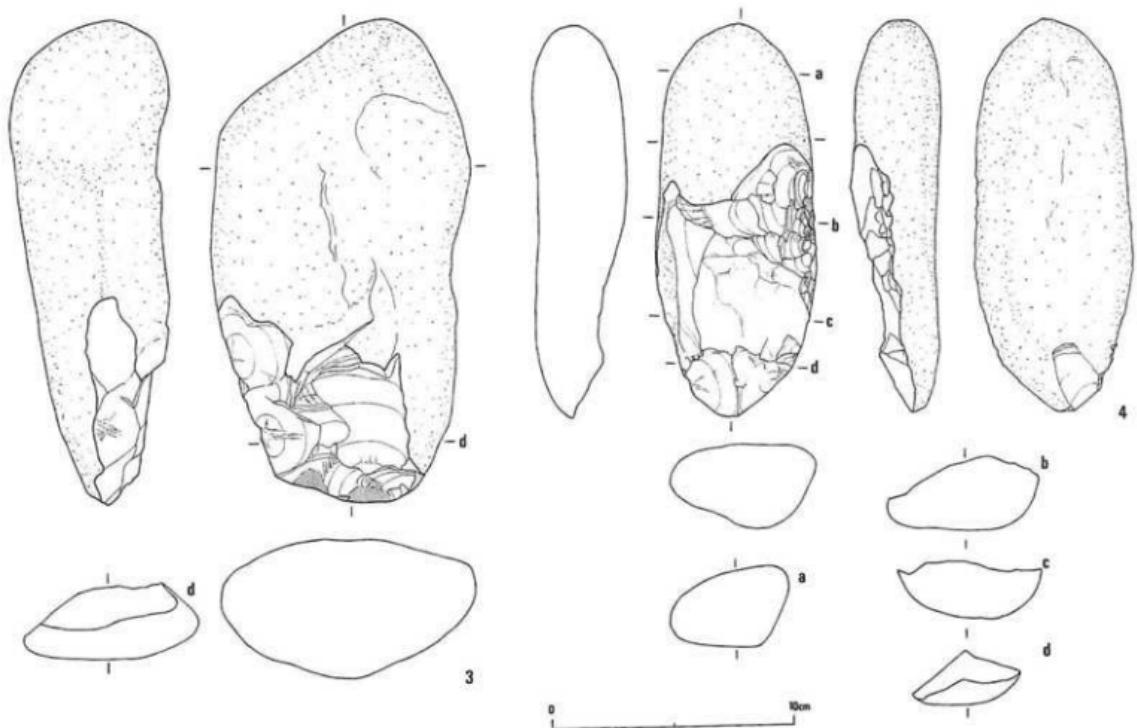
なお、類型間比較の前に分類について若干問題のある点について補足しておく。

1) 類型間の異同(第74図)

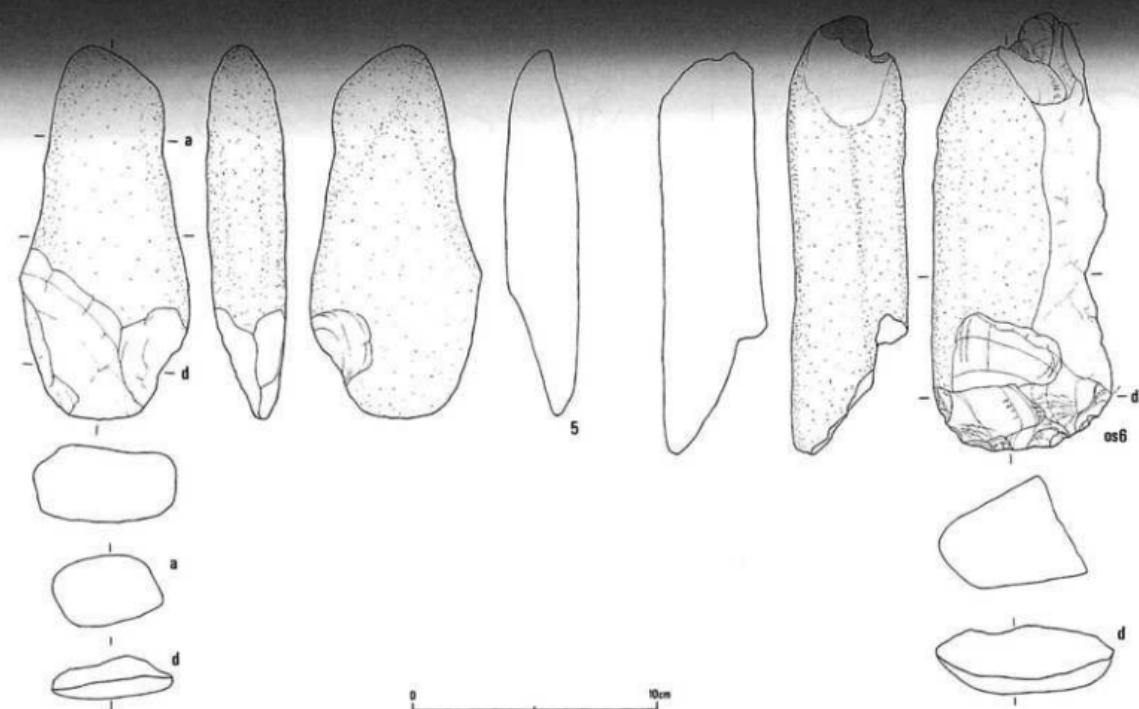
- A) I類中には、加工が表面過半に及ぶ例がある(No4・7)。この点は、片面全面加工のV類と共通移行する要素かもしれない。
- B) II類の1例(No44)は、素材形態と加工状態からは、I類とすべきかもしれない。
- C) II類(No29)・V類(No52)の各1例は下底が極端な凸状を呈し、穂側面部を下底(裏)面におい



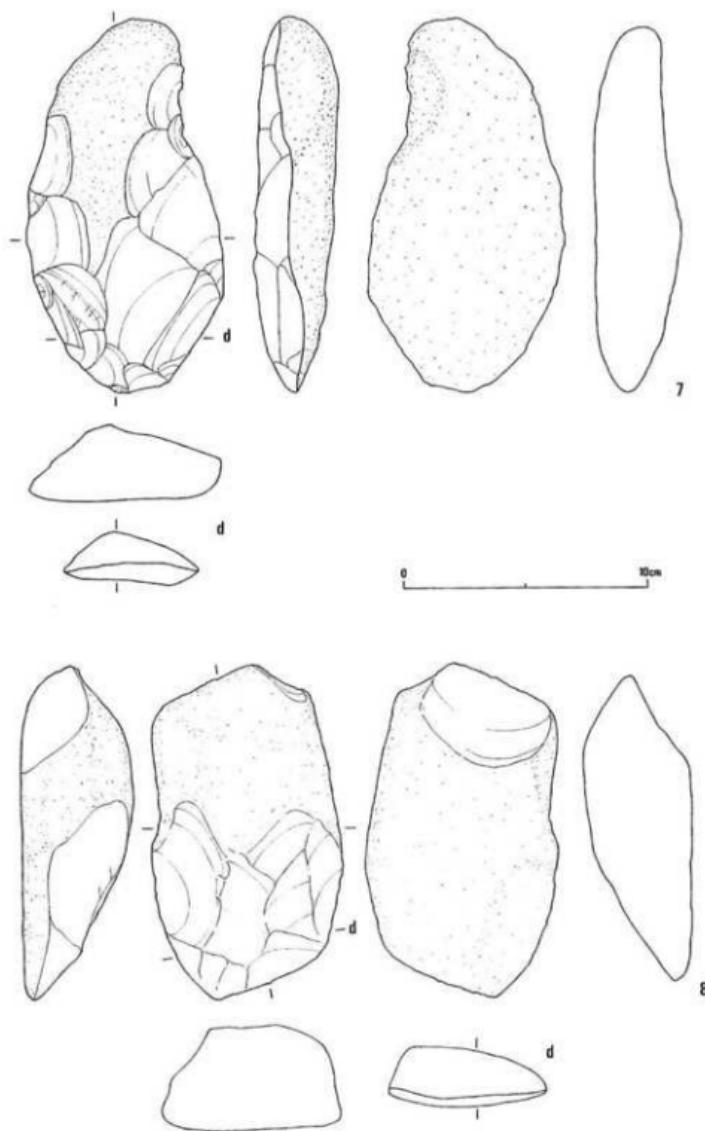
第7図 1-B地点北区石器実測図 1)
第1群：斧状石器 1類



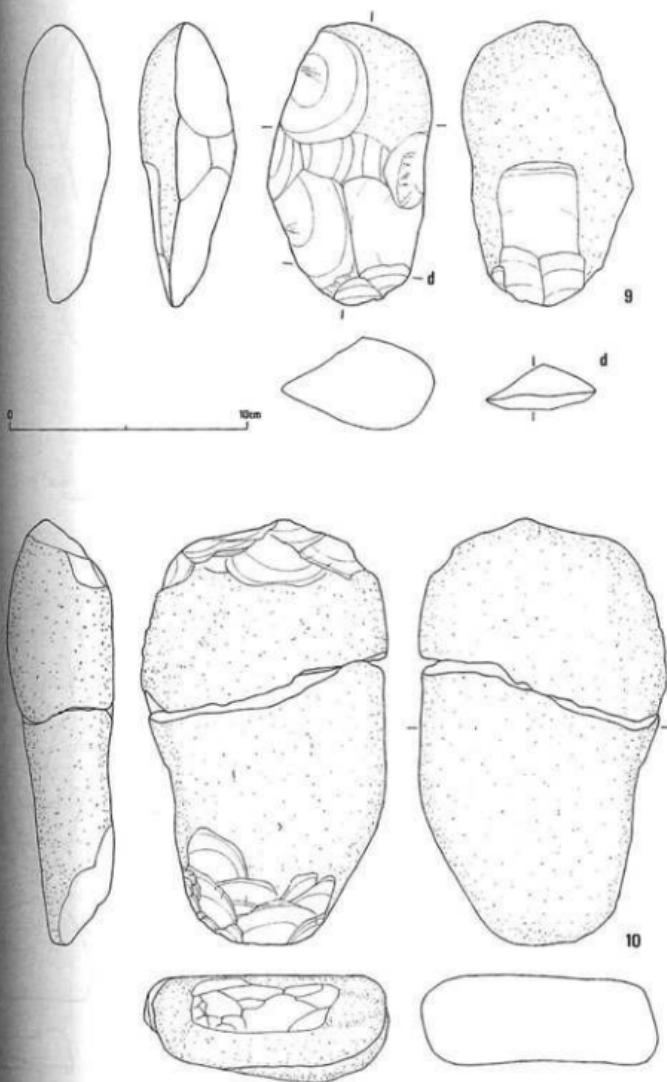
第8圖 1-B地点北区石器实测图 2)
第1群：斧状石器 I類



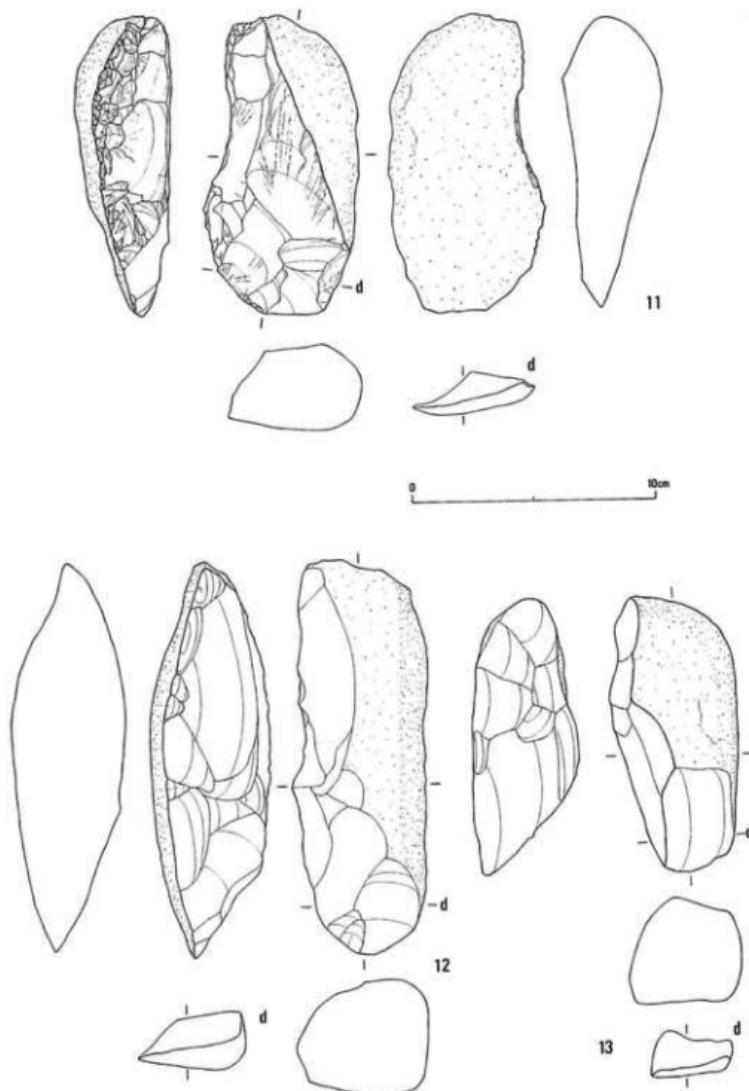
第9図 1-B地点北区石器実測図 3)
第1群：斧状石器 1類



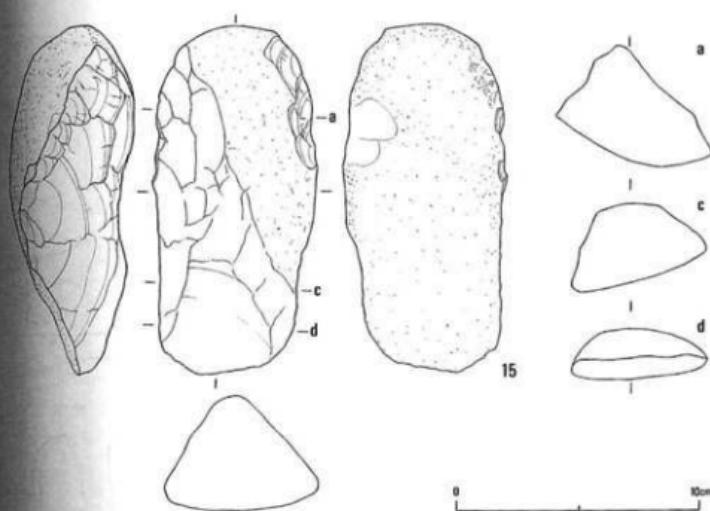
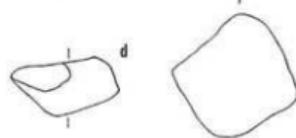
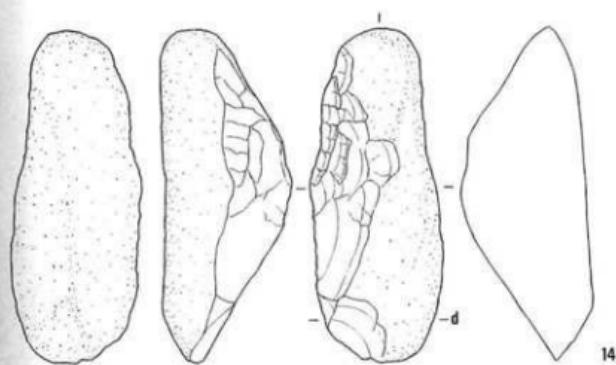
第10圖 1-B地点北区石器实测图 4)
第1群：斧状石器 1類



第11図 1-B地点北区石器実測図 5)
第1群：斧状石器 1類

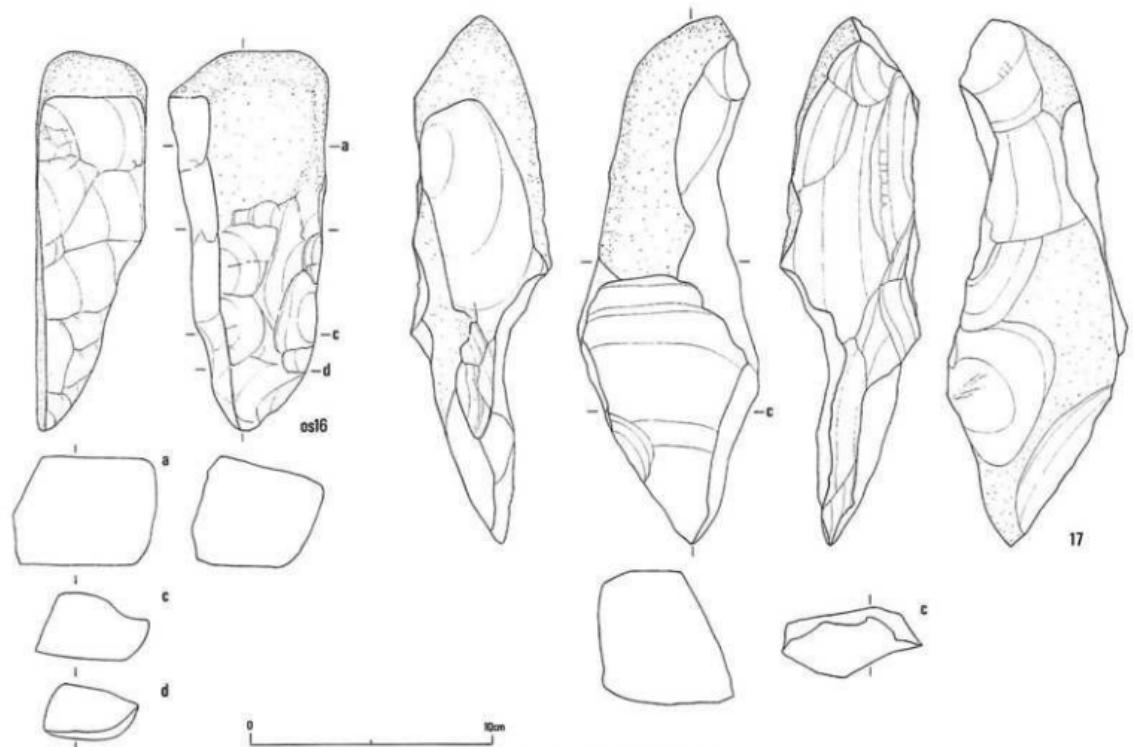


第12図 1-B地点北区石器実測図 6)
第1群：斧状石器 Ⅱ類

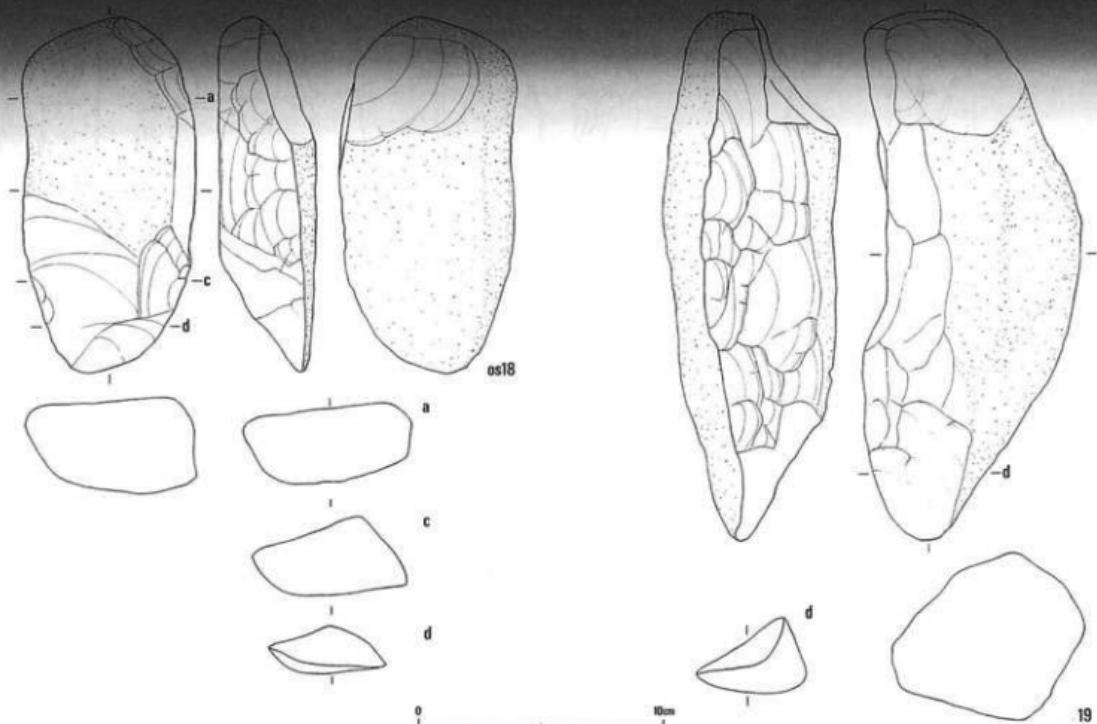


第13図 1-B地点北区石器実測図 7)
第1群：斧状石器 Ⅱ類

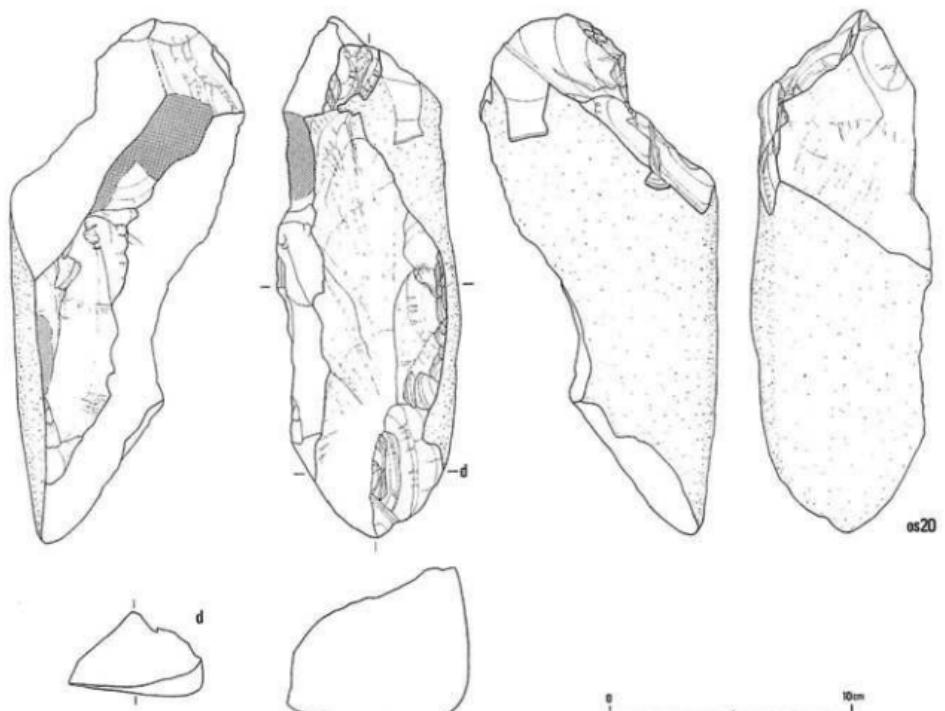
0 10cm



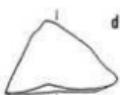
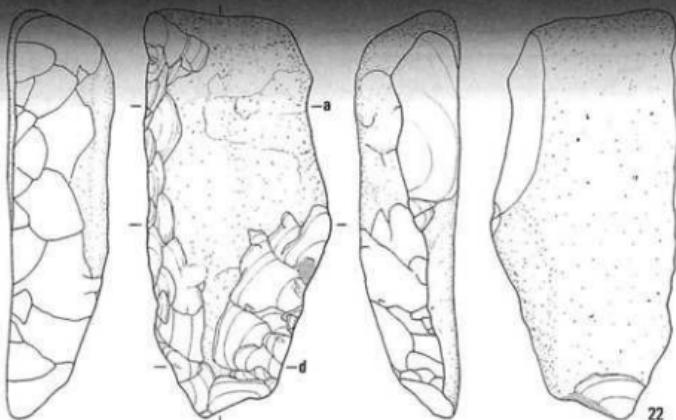
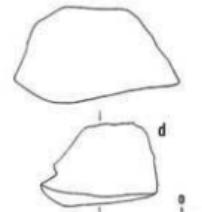
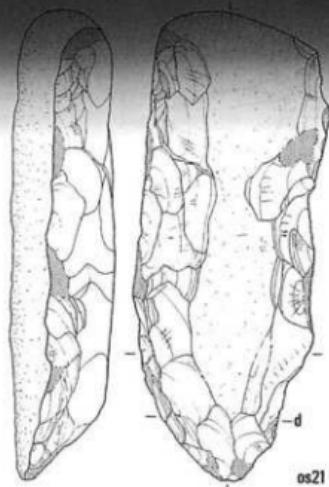
第14図 1-B地点北区石器実測図 8)
第1群：斧状石器 1類



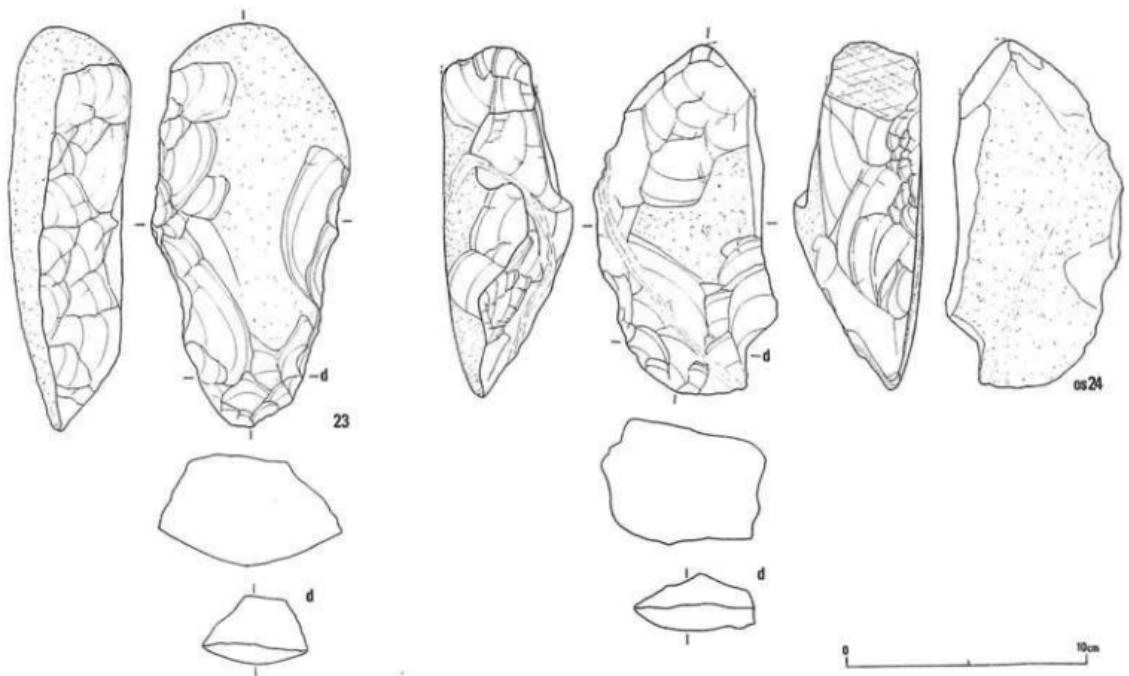
第15図 1-B地点北区石器実測図 9)
第1群：斧状石器 Ⅱ類



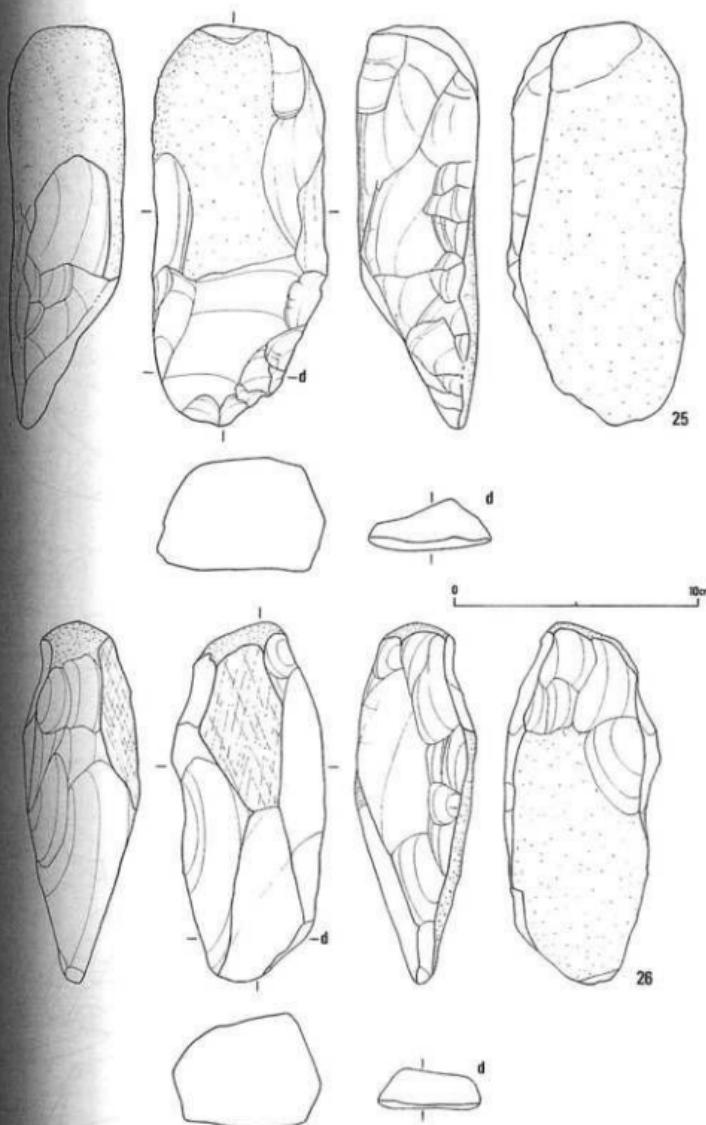
第16図 1-B地点北区石器実測図 10)
第1群：斧状石器 Ⅲ類



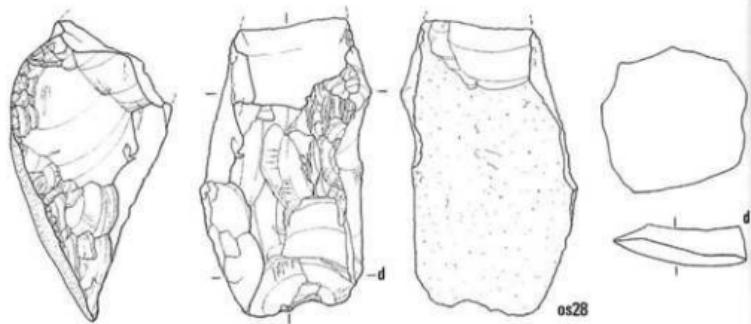
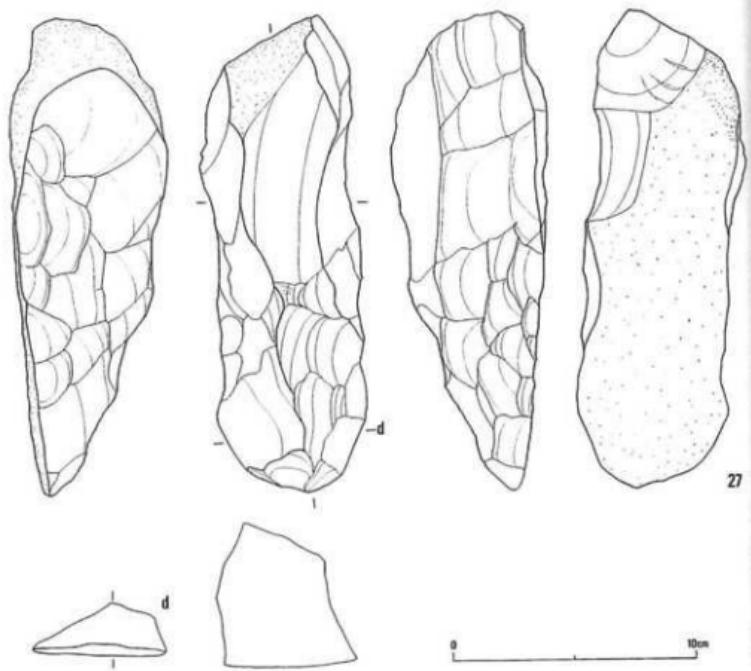
第17図 1-B地点北区石器実測図 11)
第1群：斧状石器 Ⅲ類



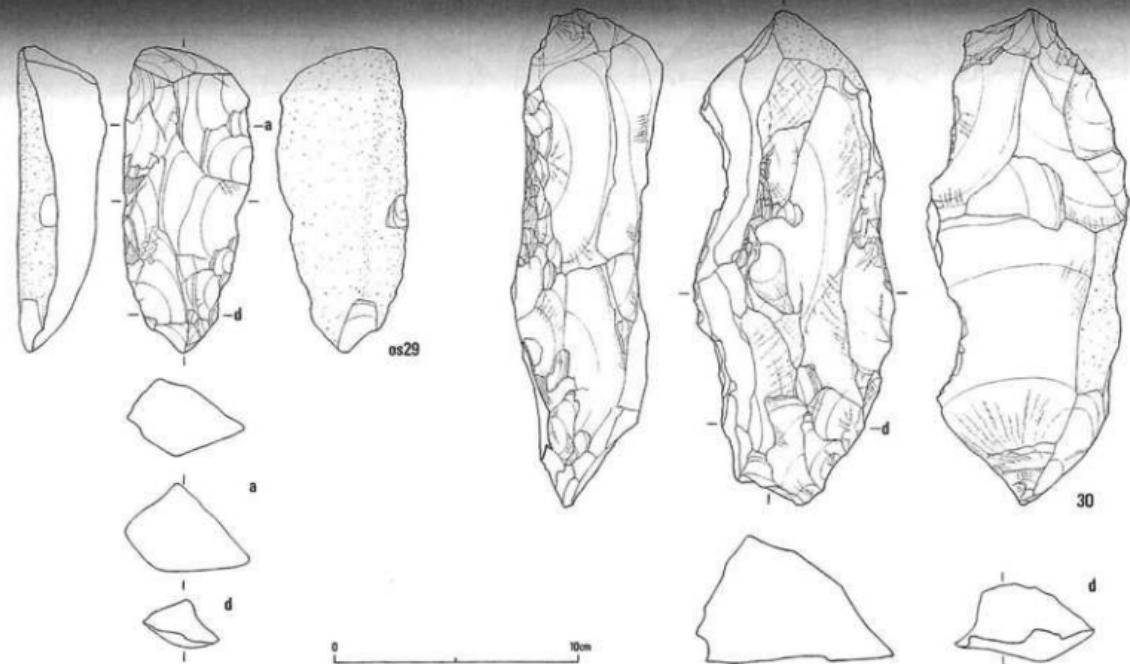
第18圖 1-B 地點北區石器實測圖 12)
第1群：斧狀石器 Ⅲ類



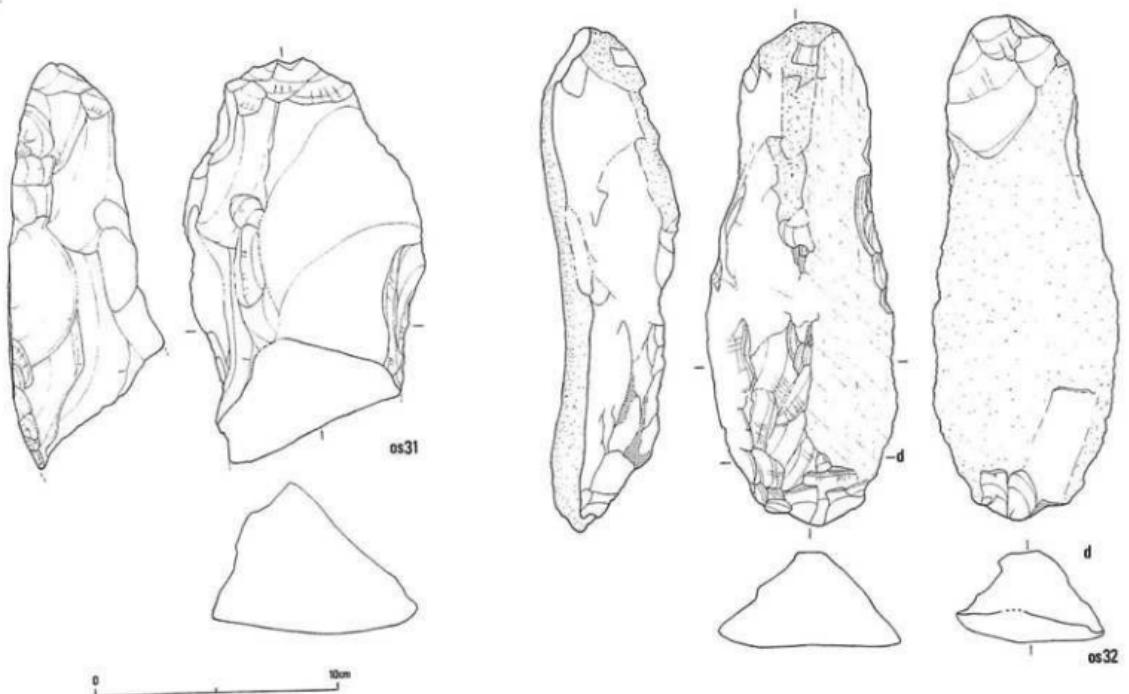
第19図 1-B地点北区石器実測図 13)
第1群：斧状石器 Ⅱ類



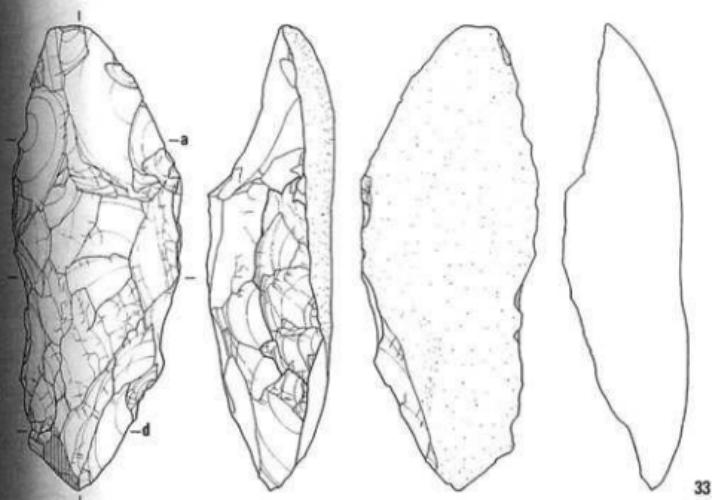
第20圖 1—B地点北区石器实测图 14)
第1群：斧状石器 ■類



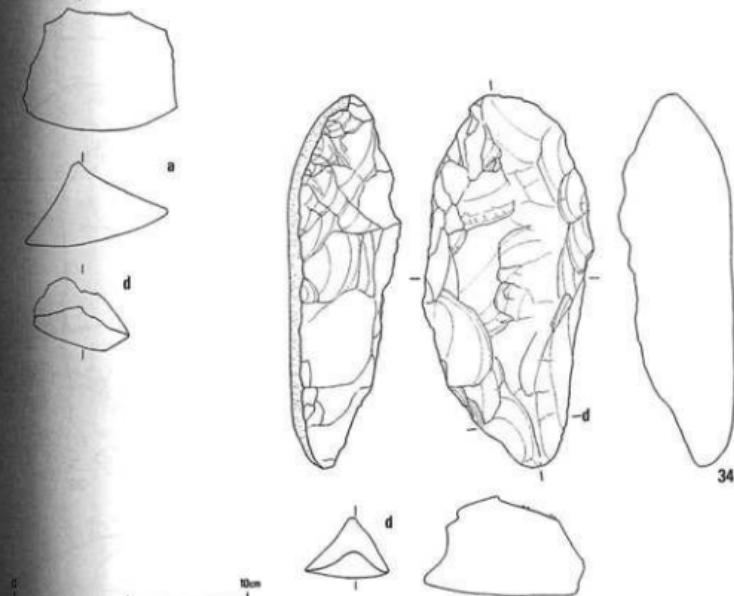
第21図 1-B地点北区石器実測図 15)
第1群：斧状石器 3類



第22図 1-B地点北区石器実測図 16)
第1群：斧状石器 ■類



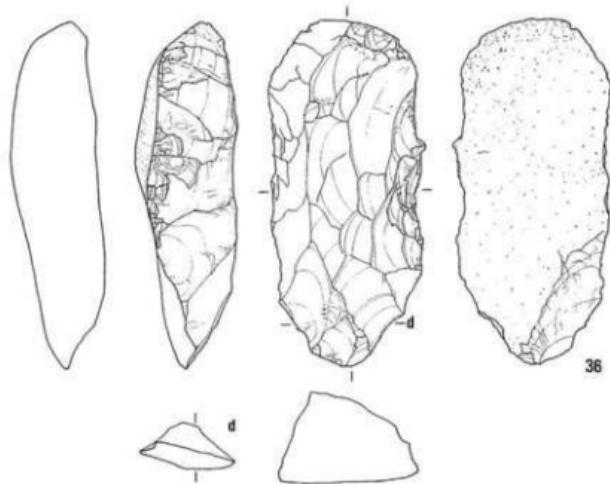
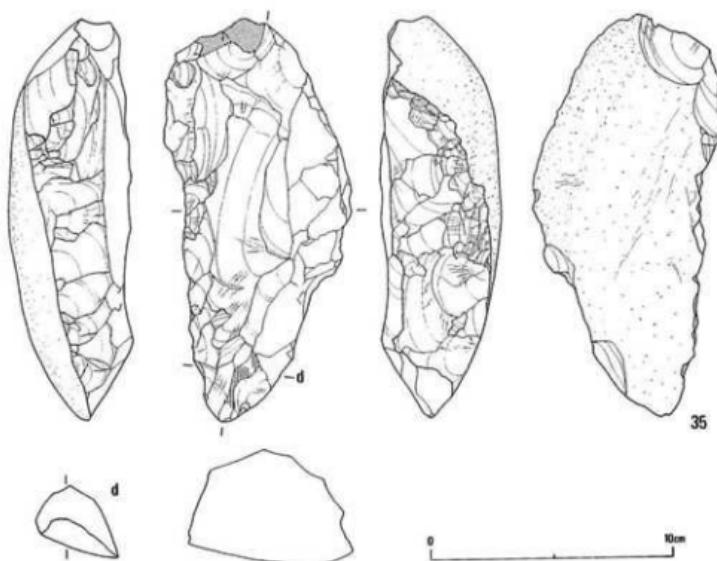
33



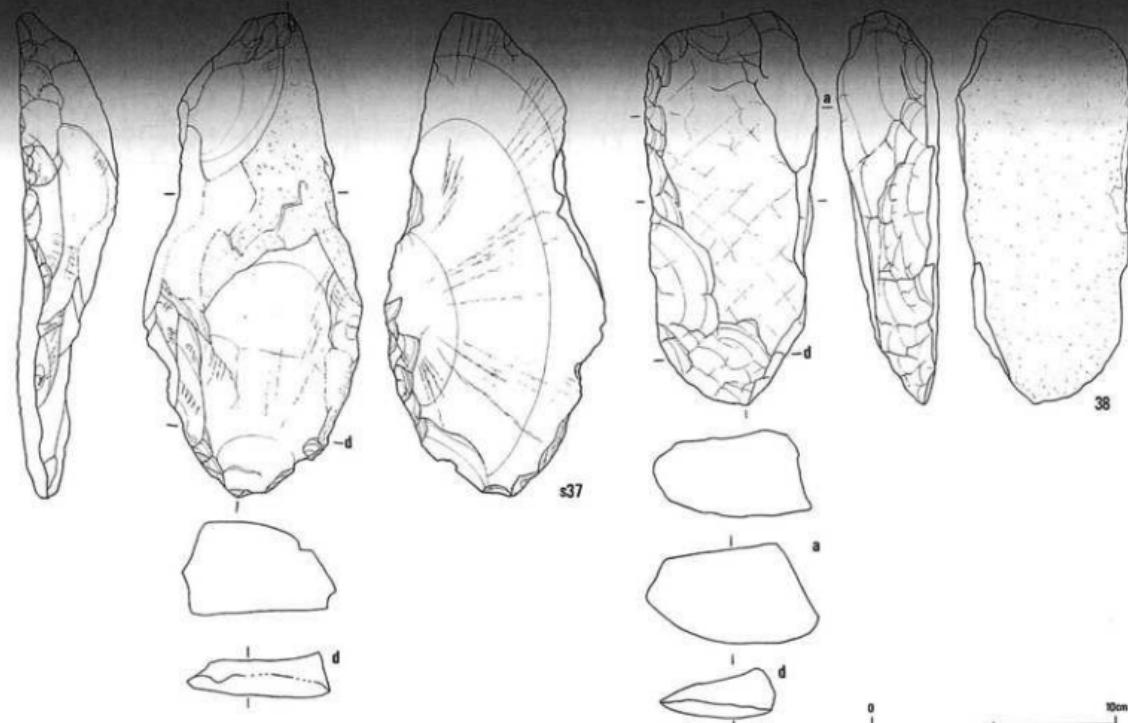
34

10cm

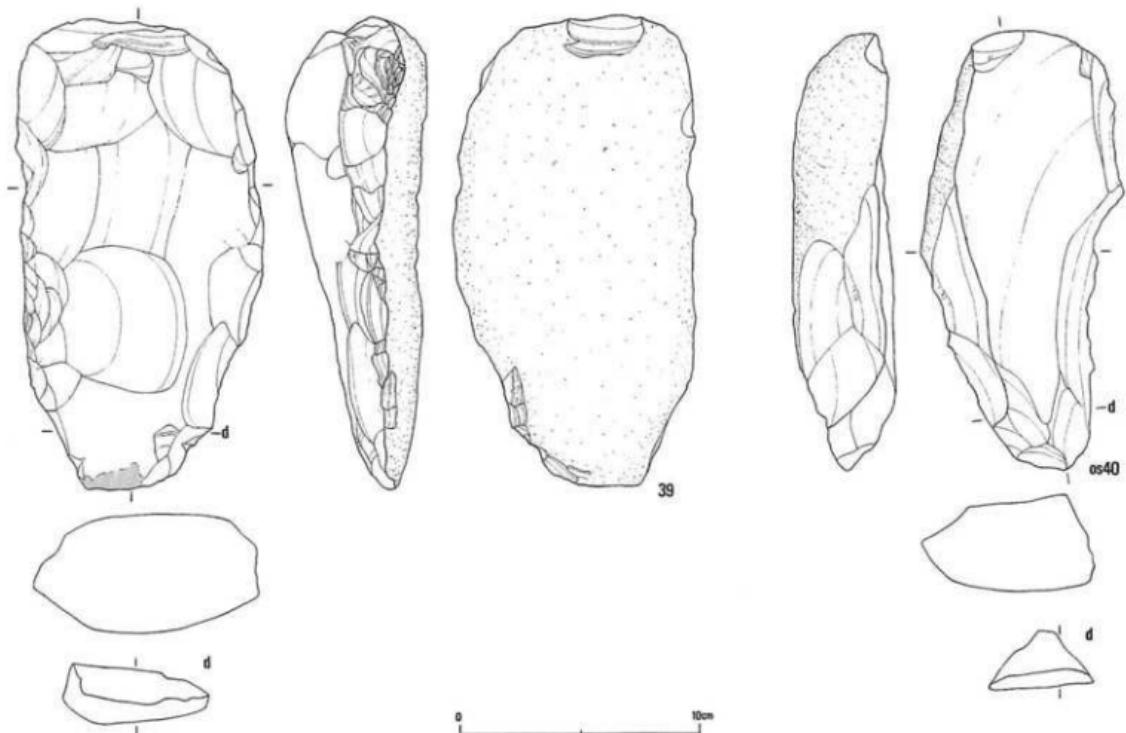
第23図 1-B地点北区石器実測図(17)
第1群：斧状石器 ■類



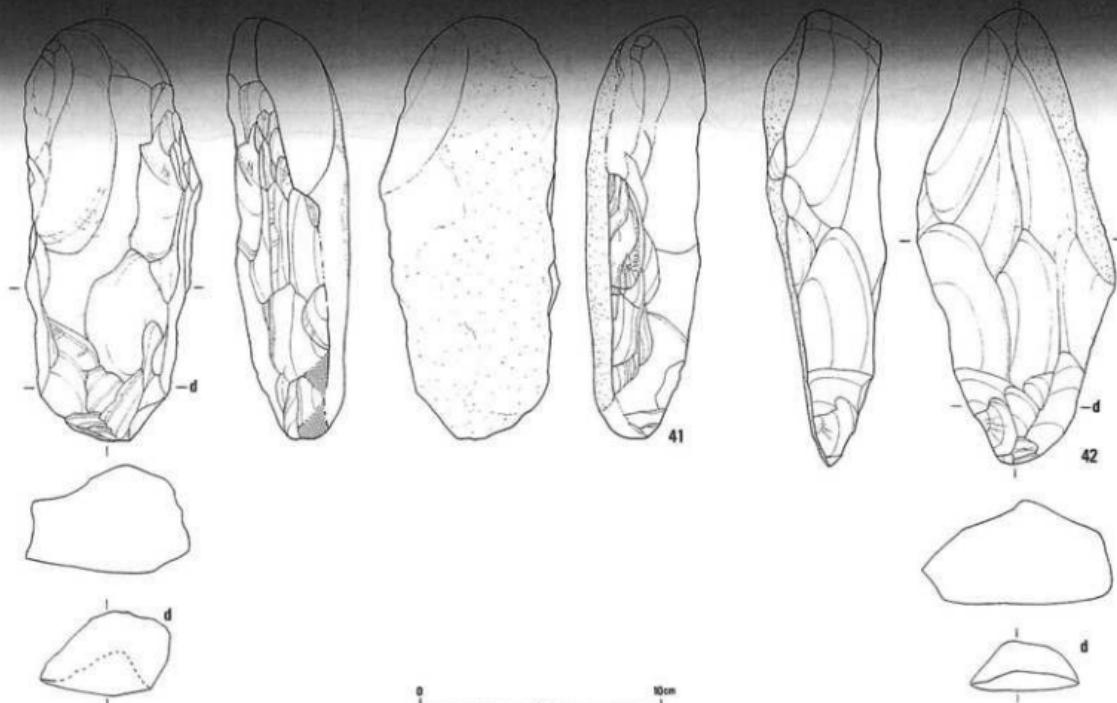
第24図 1-B地点北区石器実測図 18)
第1群：斧状石器 Ⅲ類



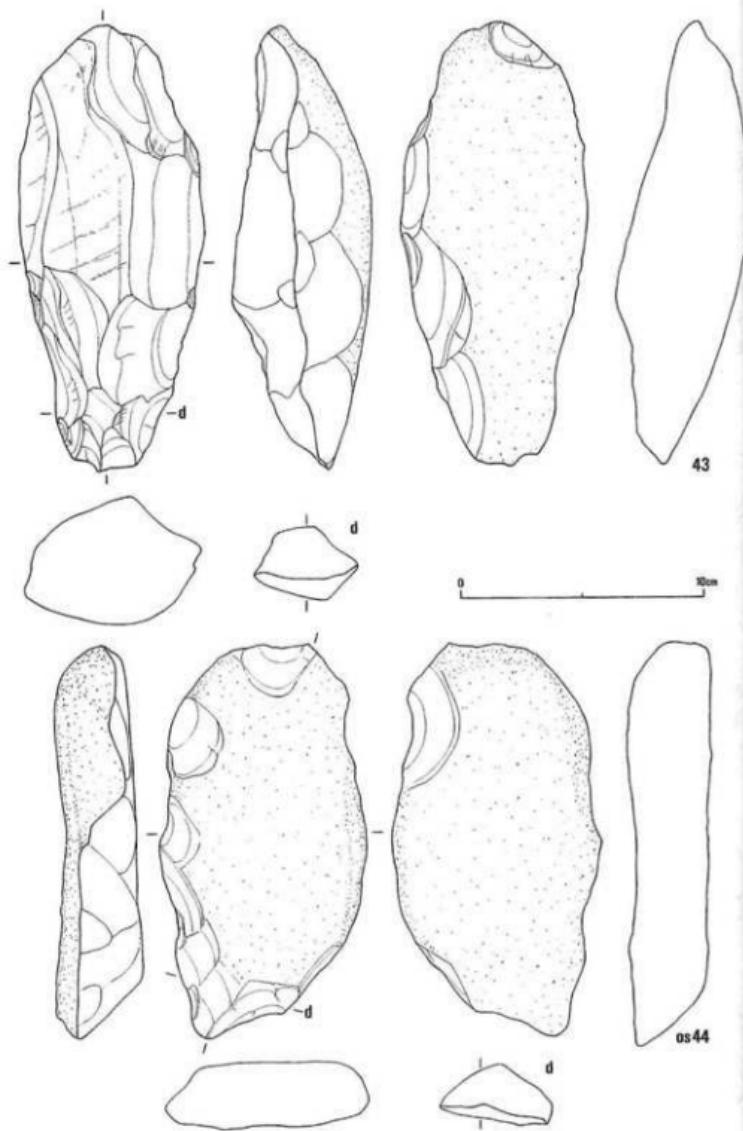
第25図 1 - B 地点北区石器実測図 19)
第1群：斧状石器 ■類



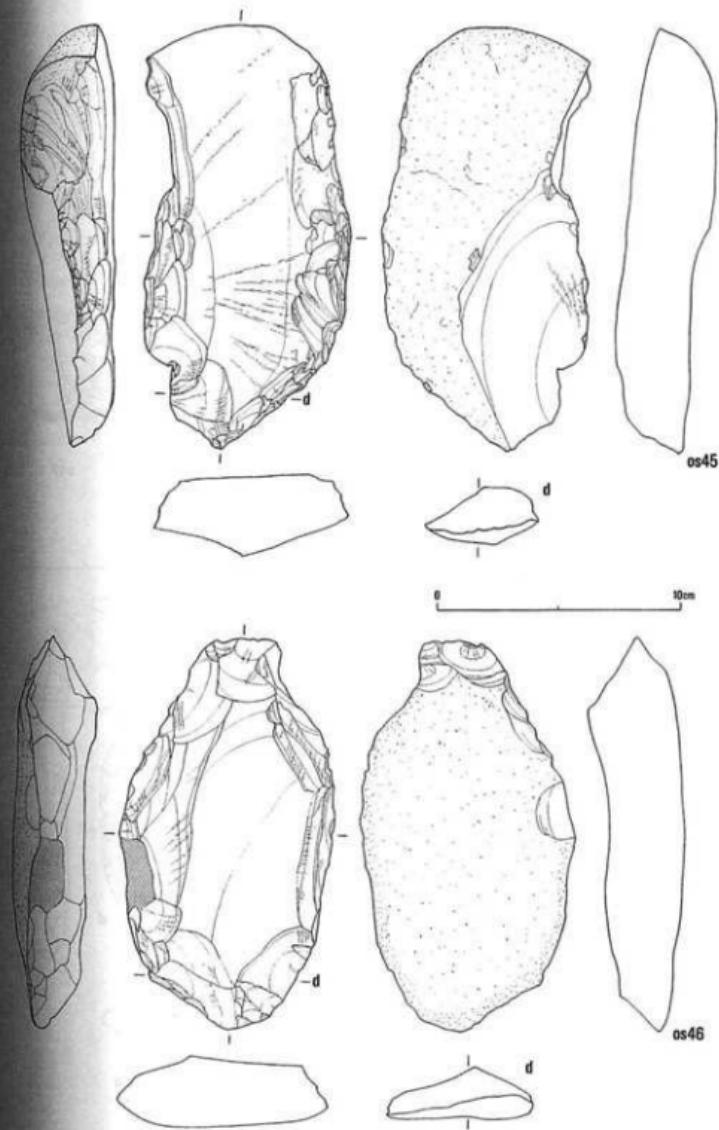
第26图 1-B地点北区石器实测图 20)
第1群：斧状石器 15件



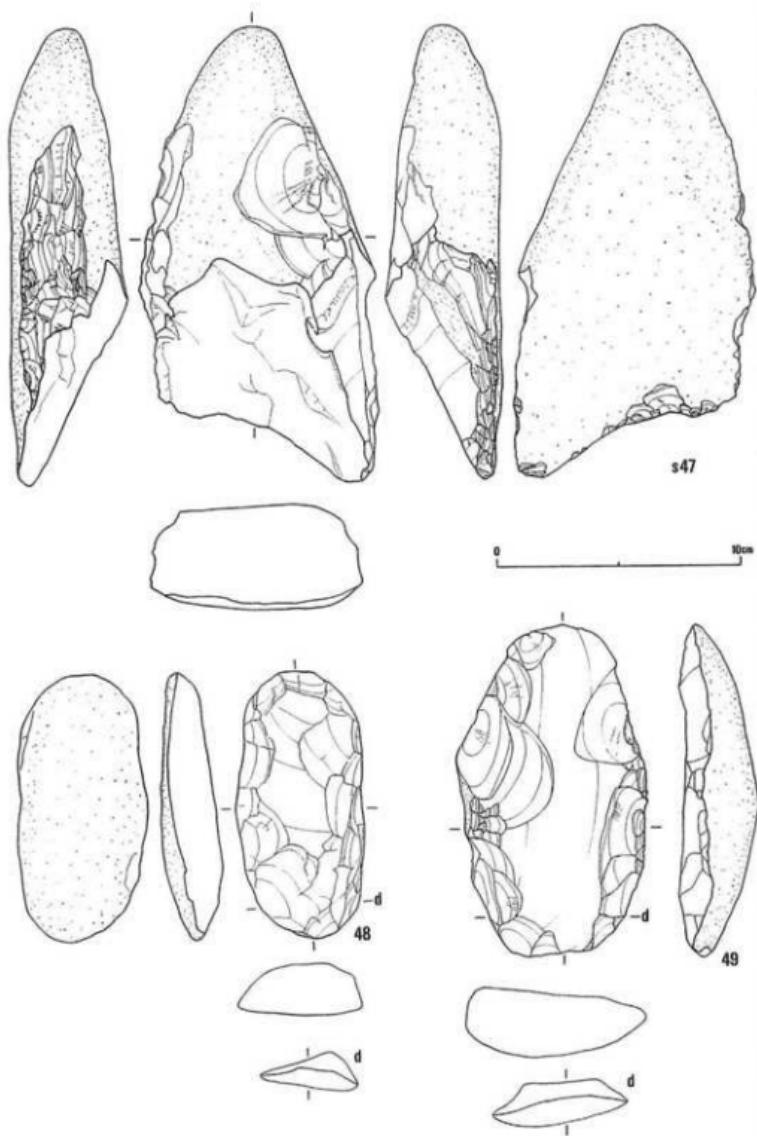
第27図 1-B 地点北区石器実測図 21)
第1群：斧状石器 Ⅱ類



第28図 1-B地点北区石器実測図 22)
第1群：斧状石器 ■頭

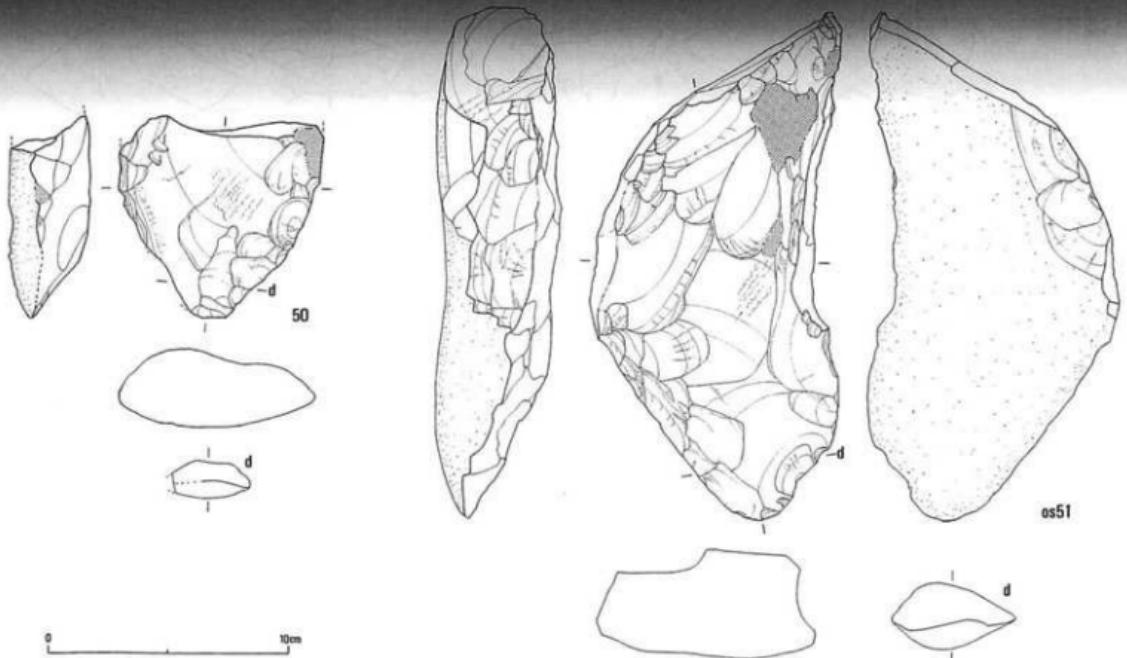


第29図 1-B地点北区石器実測図 23
第1群：斧状石器 Ⅲ類・Ⅳ類(No46)

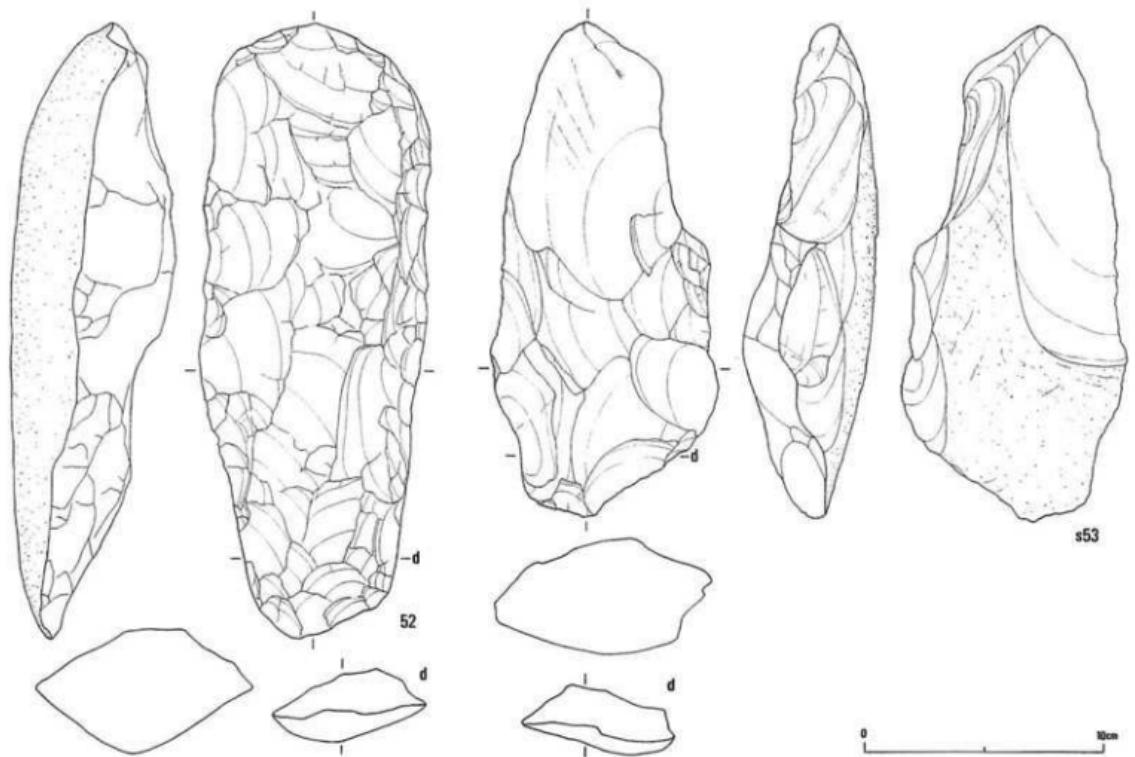


第30図 1-B地点北区石器実測図 24)

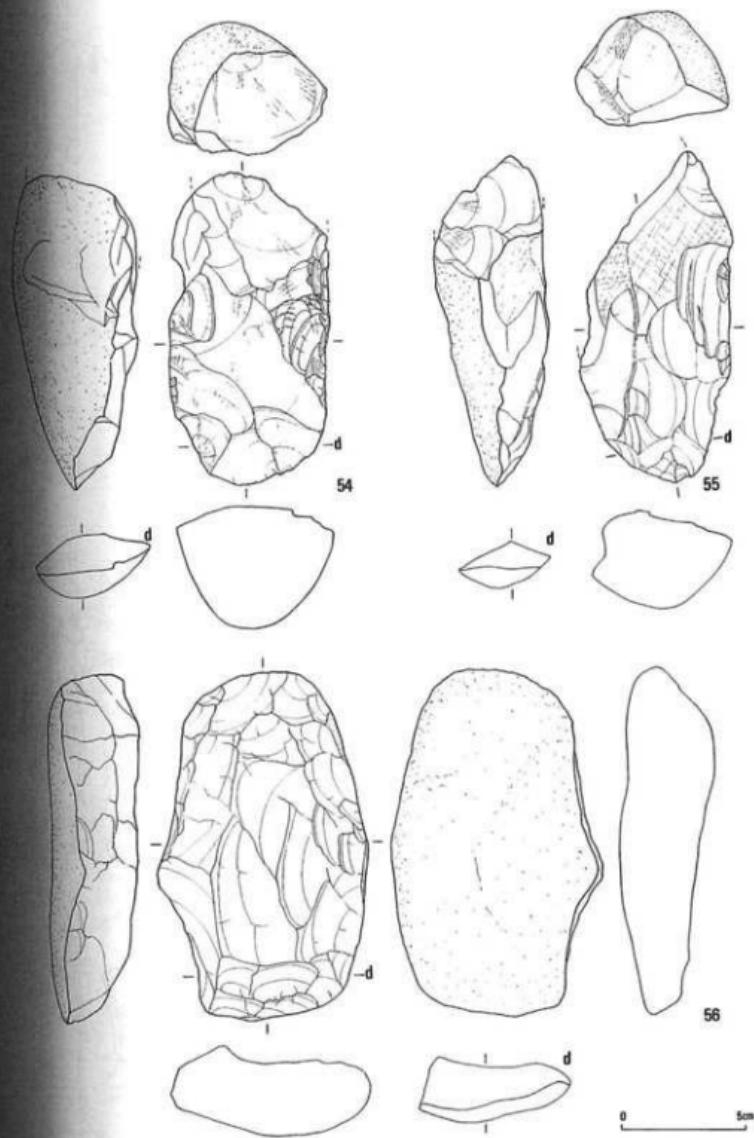
第1群：斧状石器 Ⅲ類(No47)・Ⅳ類



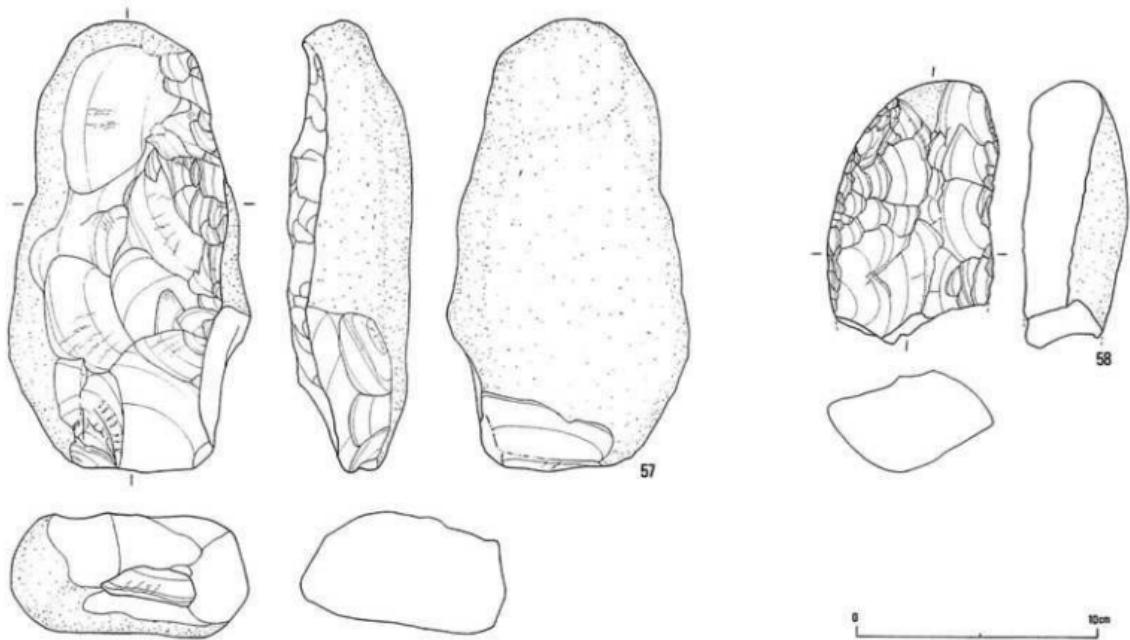
第31図 1-B 地点北区石器実測図 25
第1群：斧状石器 N類(No50)・V類



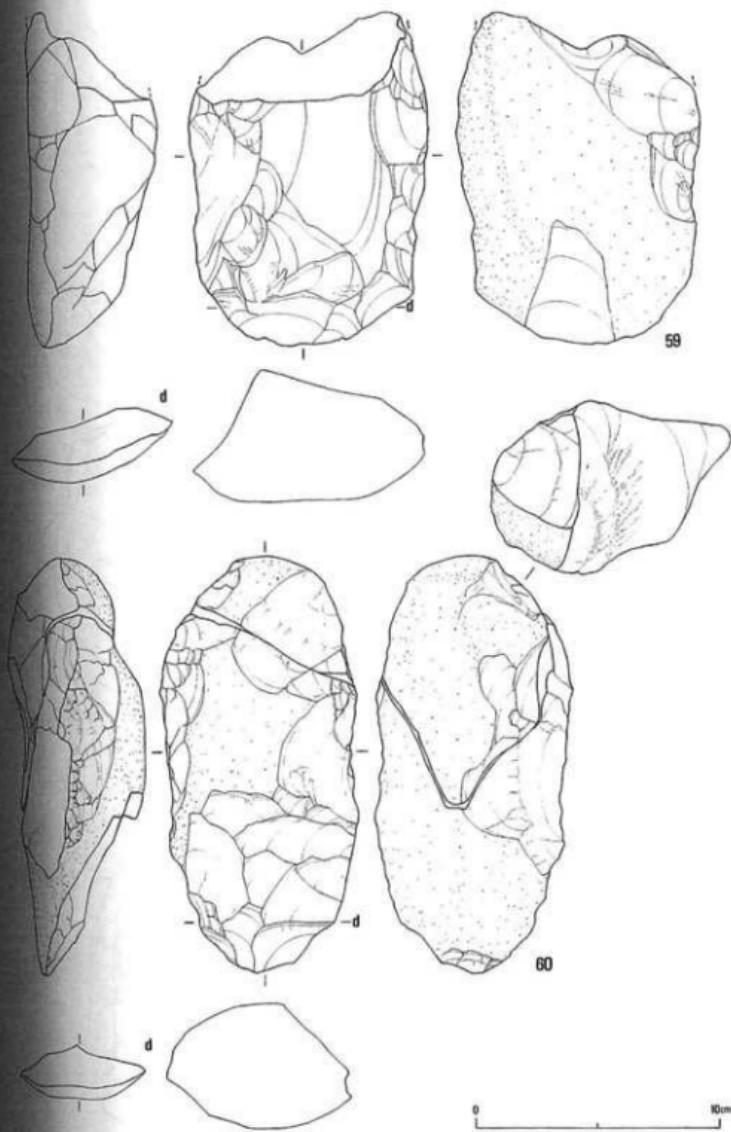
第32圖 1-B地点北区石器实测图 26)
第1群：斧状石器 V類



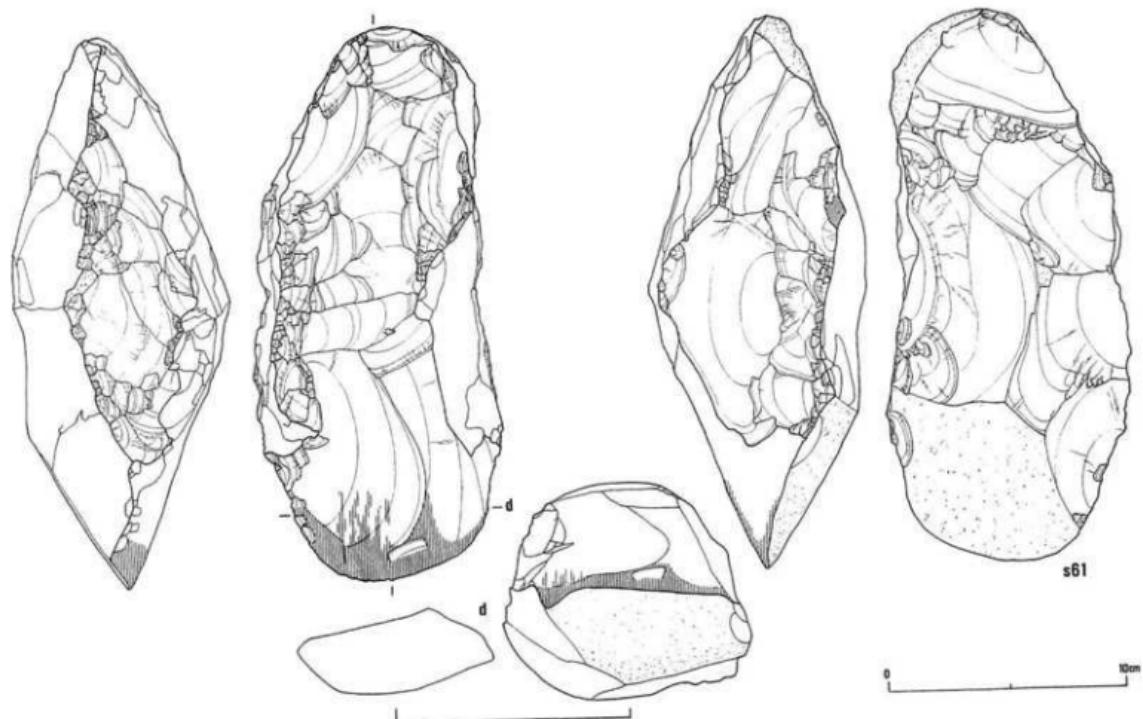
第33図 1-B地点北区石器実測図 27)
第1群：斧状石器 VI類(No54・55)・VII類



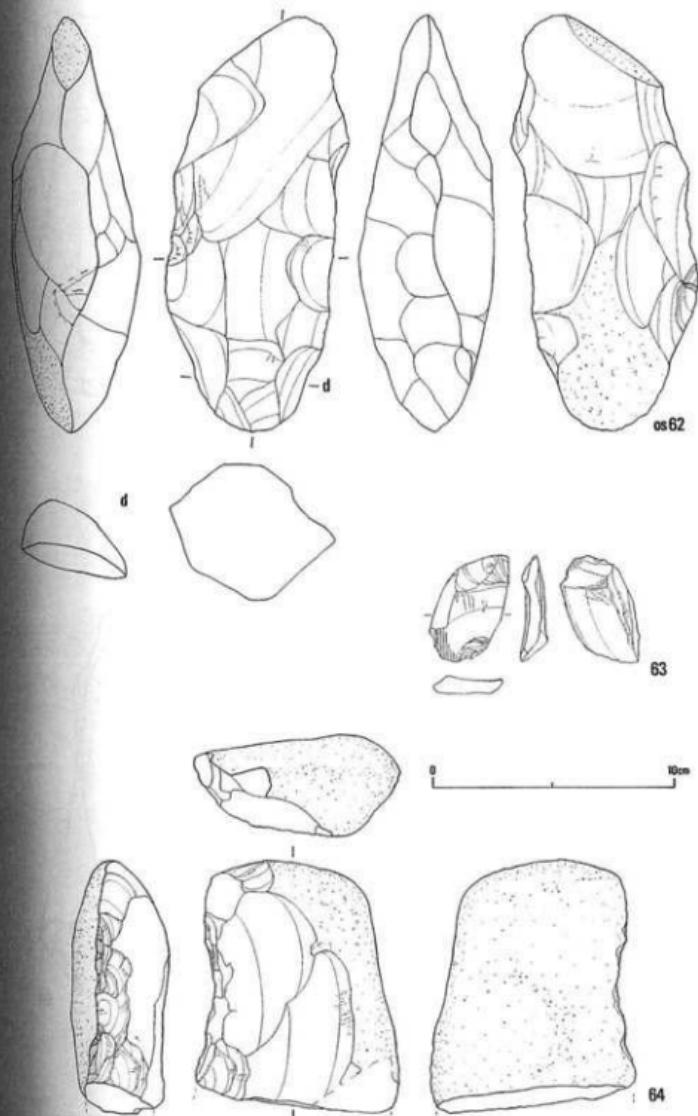
第34圖 1—B地點北區石器實測圖 28)
第1群：斧狀石器 M類(Na58)・W類



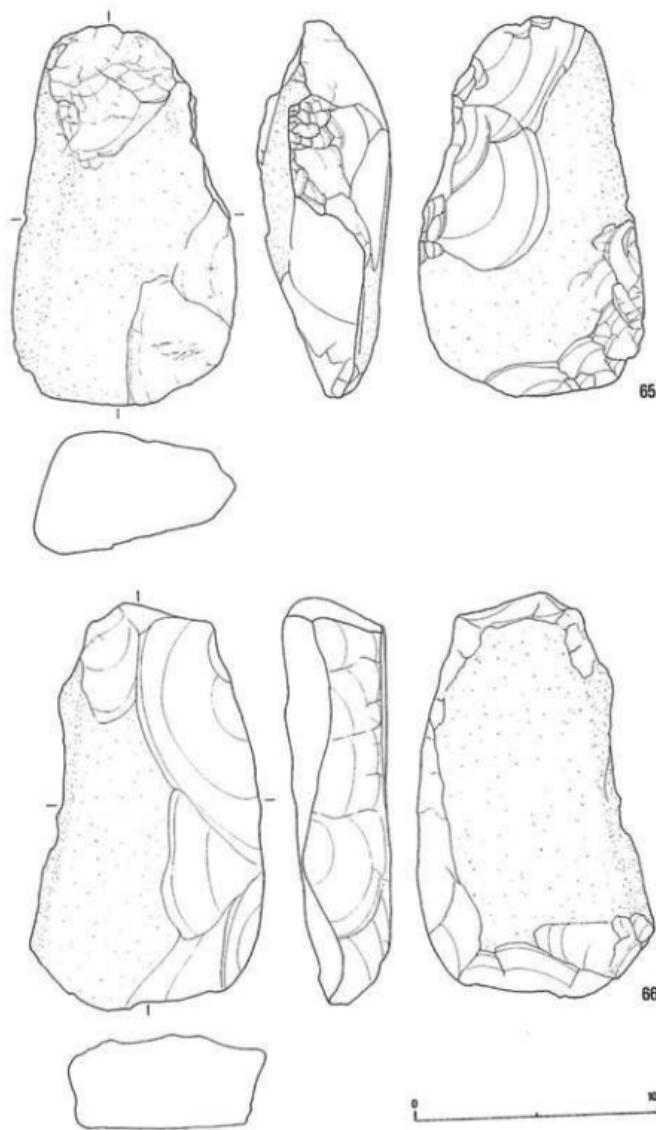
第35図 1-B地点北区石器実測図 29
第1群：斧状石器 銛類(No59)・錐類



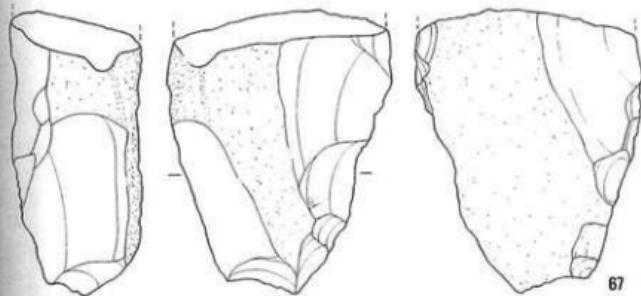
第36圖 1-B地點北区石器実測図 30)
第1群：斧状石器 鏽類



第37図 1—B 地点北区石器実測図 31)
第1群：斧状石器 VI類・分類保留群(No64)



第38圖 1—B地点北区石器实测图 32
第1群：斧状石器 分類保留群



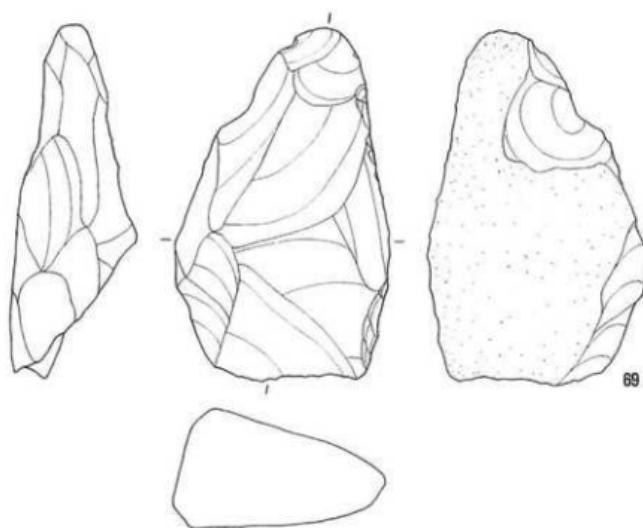
67



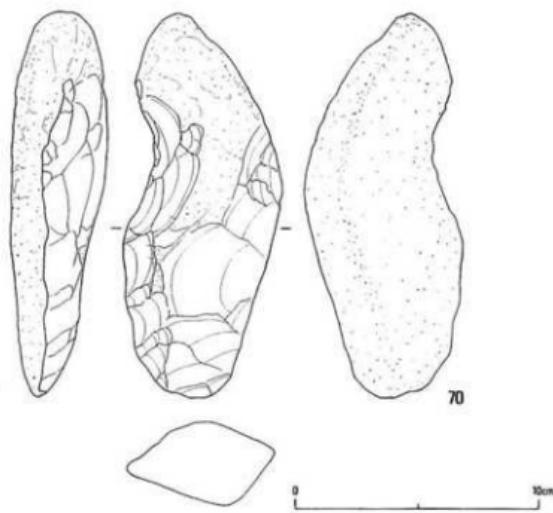
68

第39図 1-B地点北区石器実測図 33)
第1群：斧状石器 分類保留群

0 10cm



69

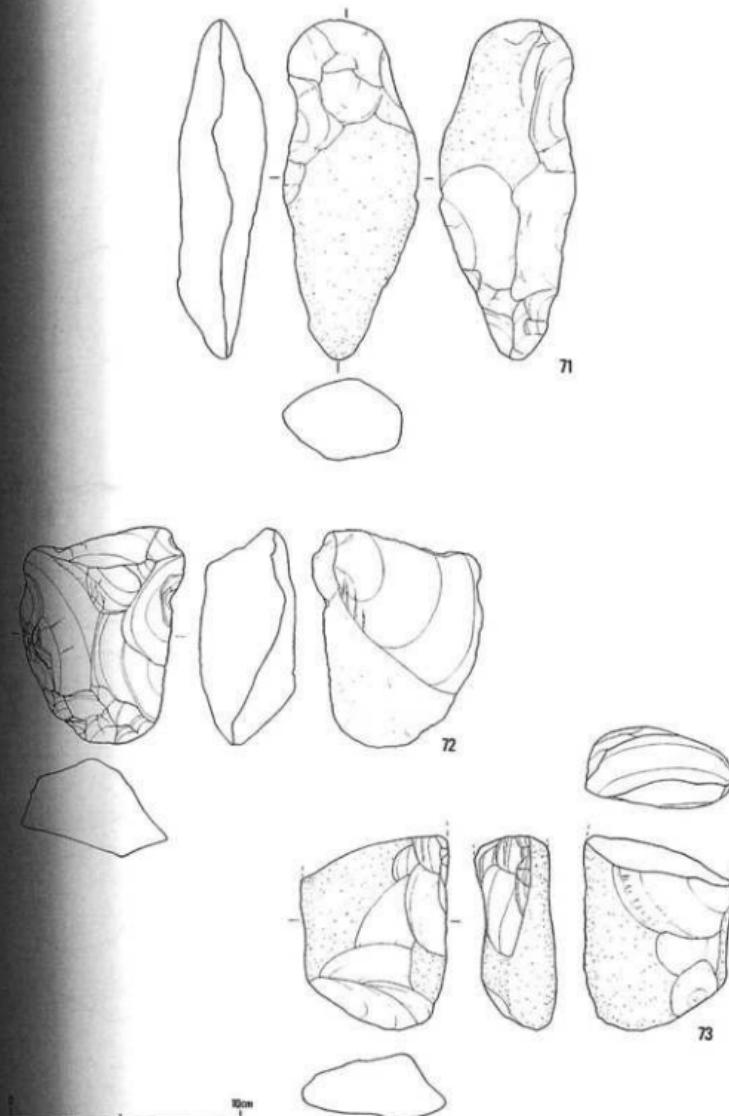


70

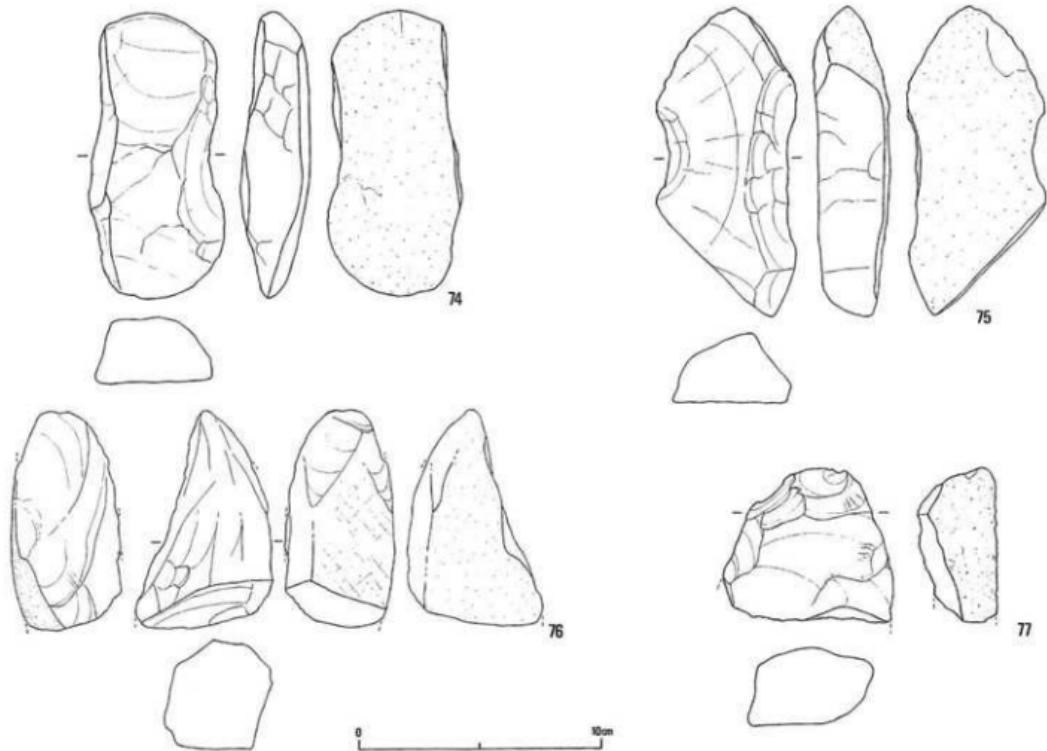
0 10cm

第40圖 1-B地点北区石器实测图 34)

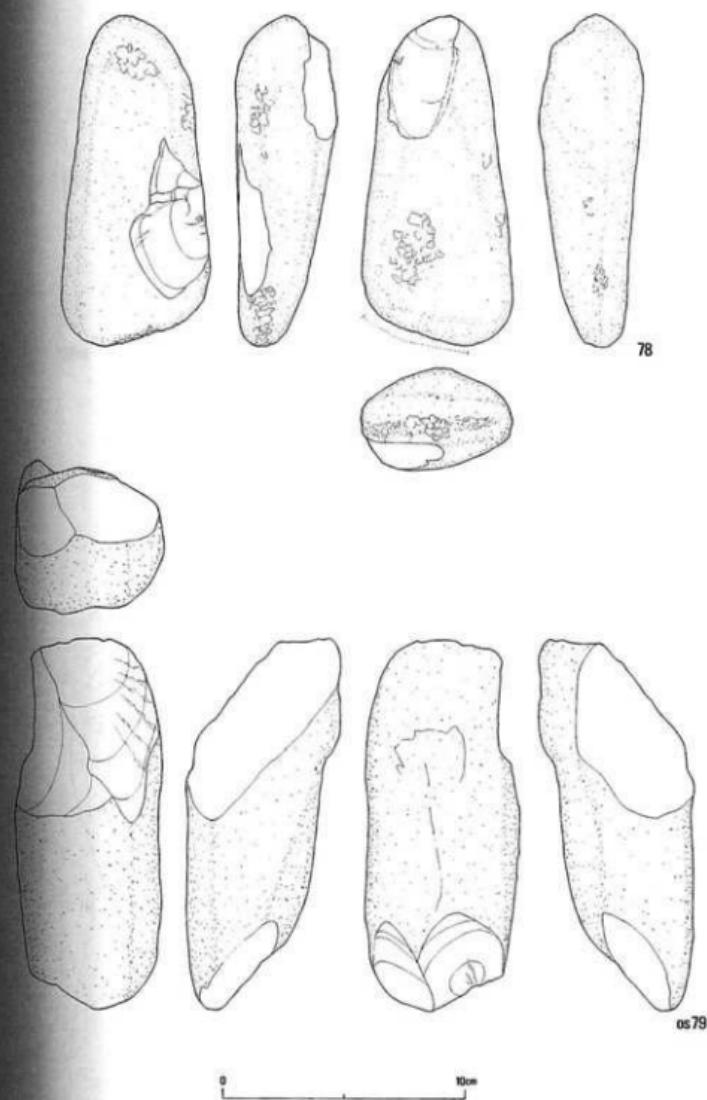
第1群：斧状石器 分類保留群



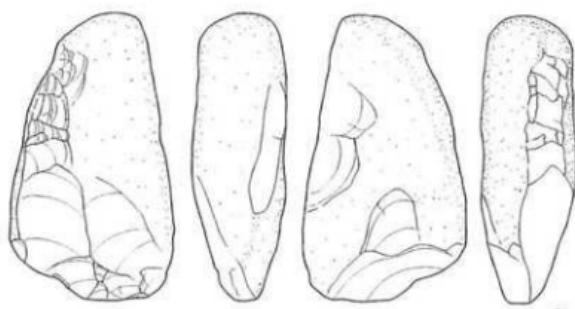
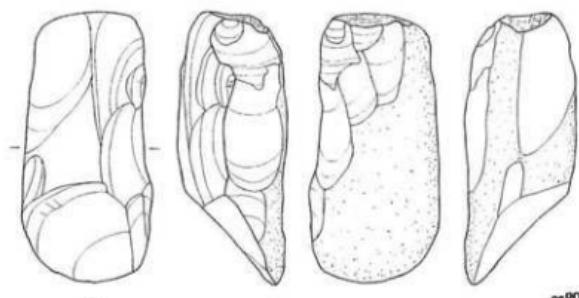
第41図 1-B地点北区石器実測図 35)
第1群：斧状石器 分類保留群



第42图 1-B地点北区石器实测图 36)
第1群：斧状石器 分类保留群

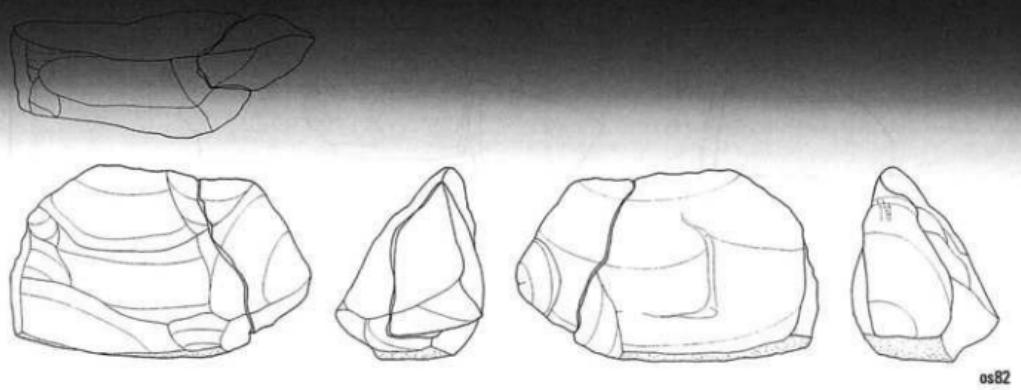


第43図 1-B地点北区石器実測図 37)
第1群：斧状石器 順石(ハンマーストーン)

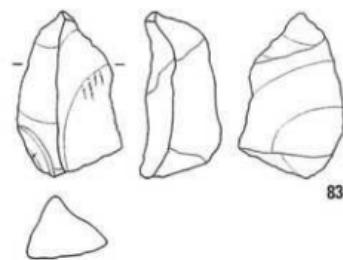


0 10cm

第44図 1-B地点北区石器実測図 38)
第1群：刮石(ハンマーストーン)



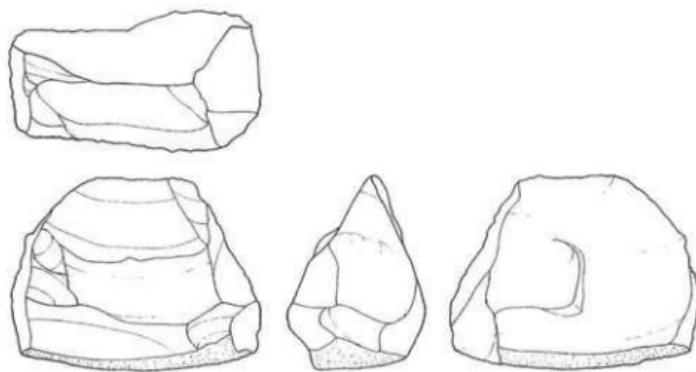
os82



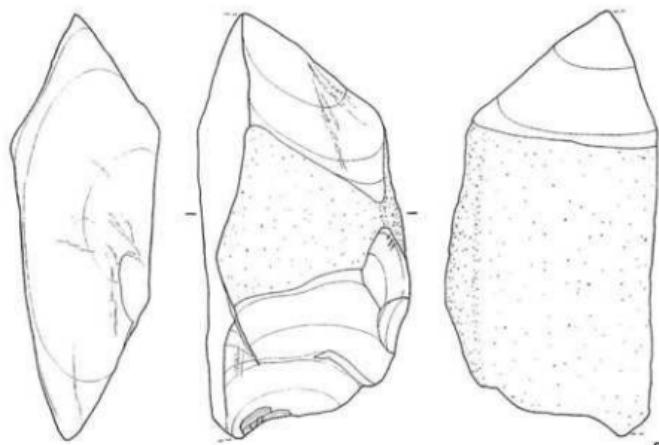
83

0 10cm

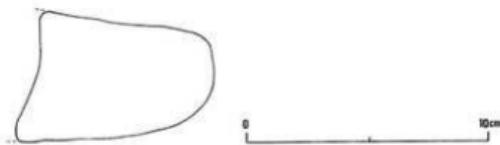
第45図 1-B地点北区石器実測図 39
第1群：斧状石器 未成品・素材剝片



0584



85

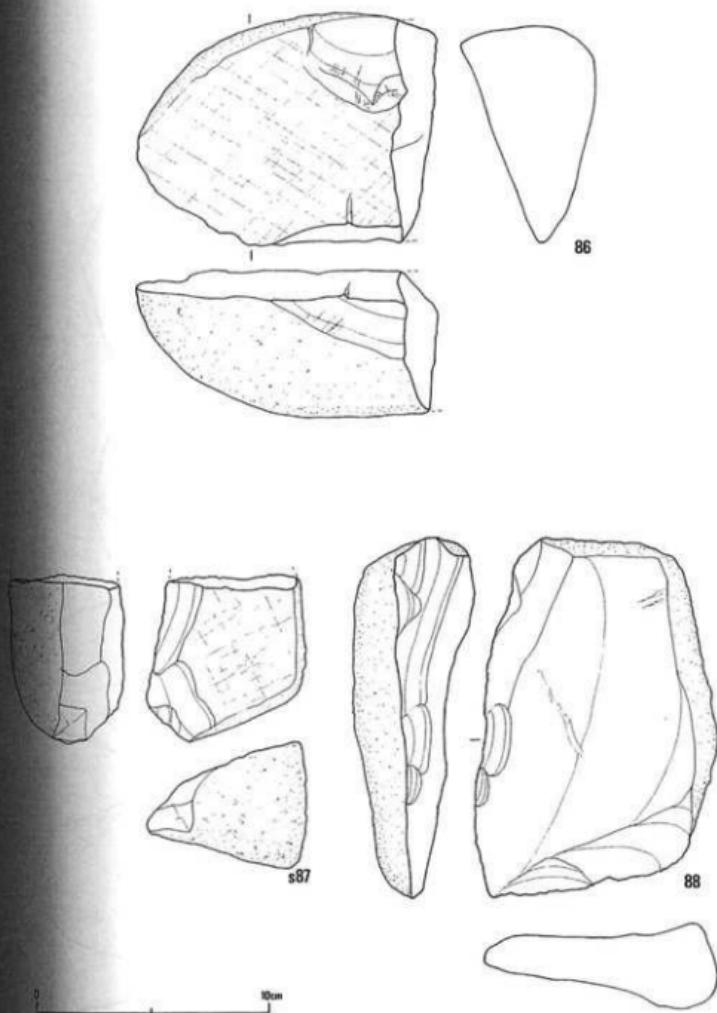


0

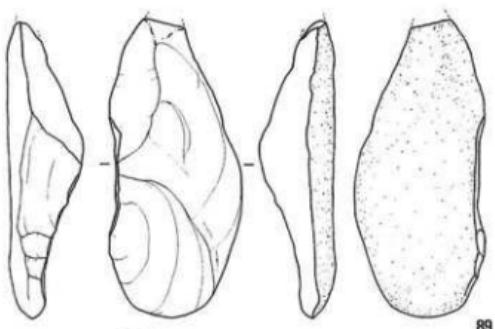
10cm

第46图 1-B地点北区石器实测图 40)

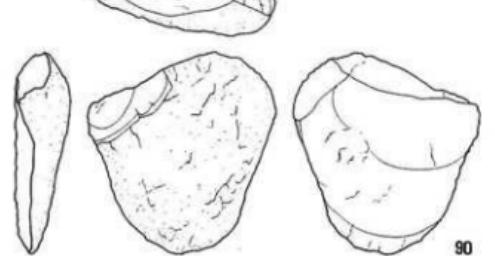
第1群：斧状石器 未成品・素材剥片



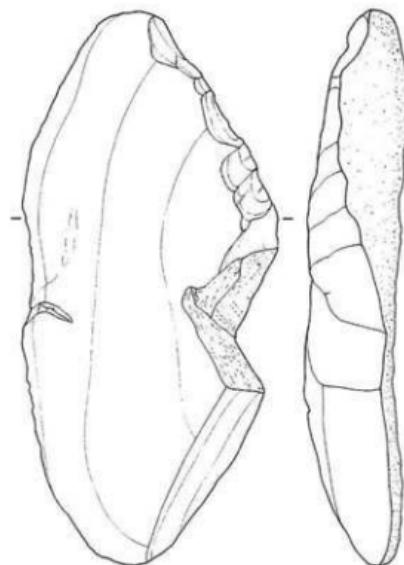
第47図 1-B地点北区石器実測図 41)
第1群：斧状石器 未成品・素材剥片



88



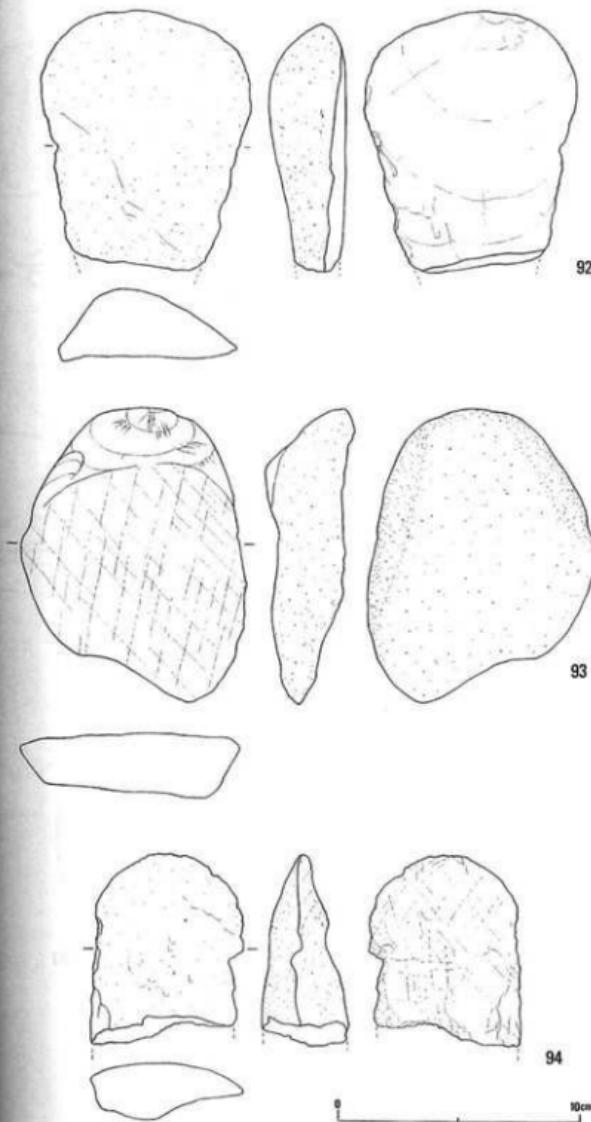
90



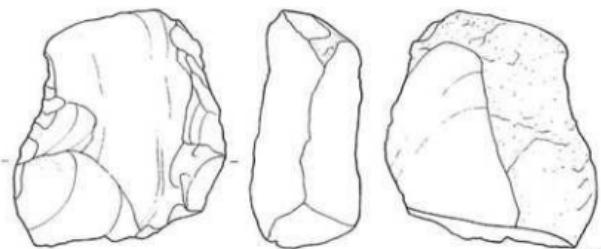
91



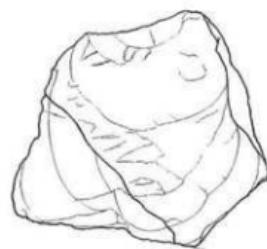
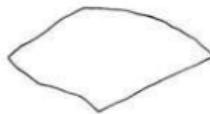
第48圖 1-B地點北區石器實測圖 42)
第1群：斧狀石器 未成品・素材剝片



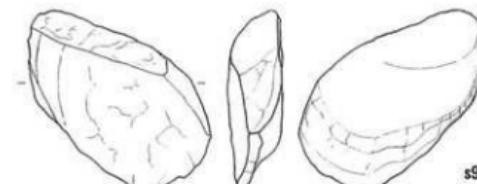
第49図 1-B地点北区石器実測図 43)
第1群：斧状石器 未成品・未精剥片



95



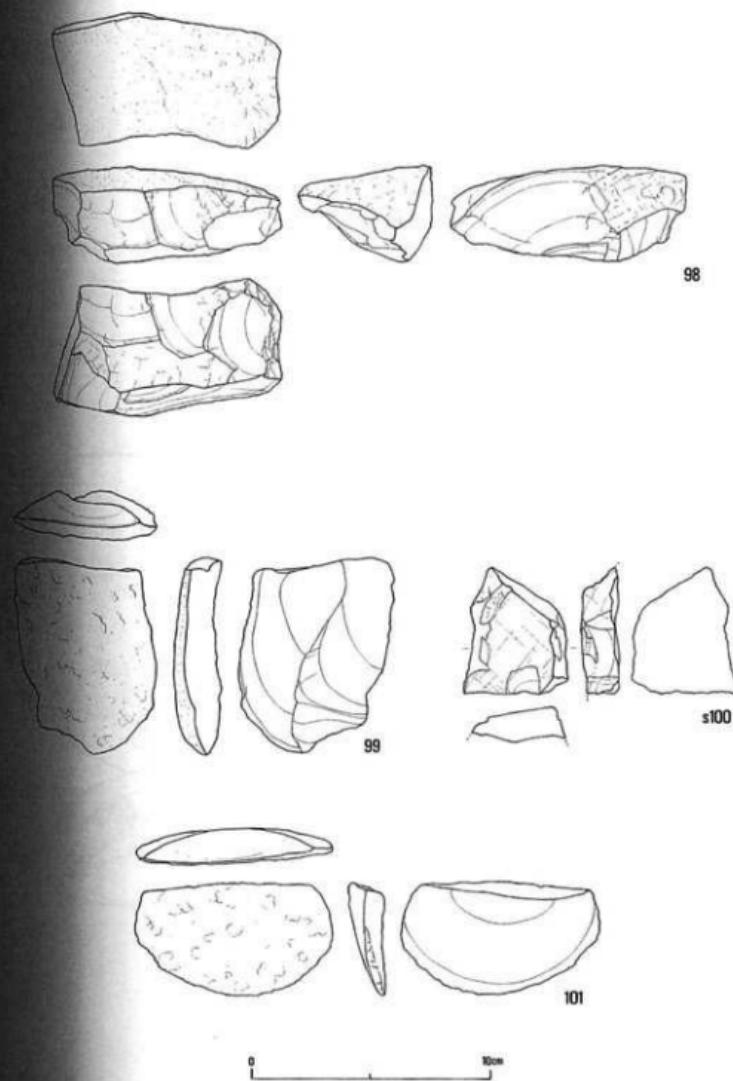
96



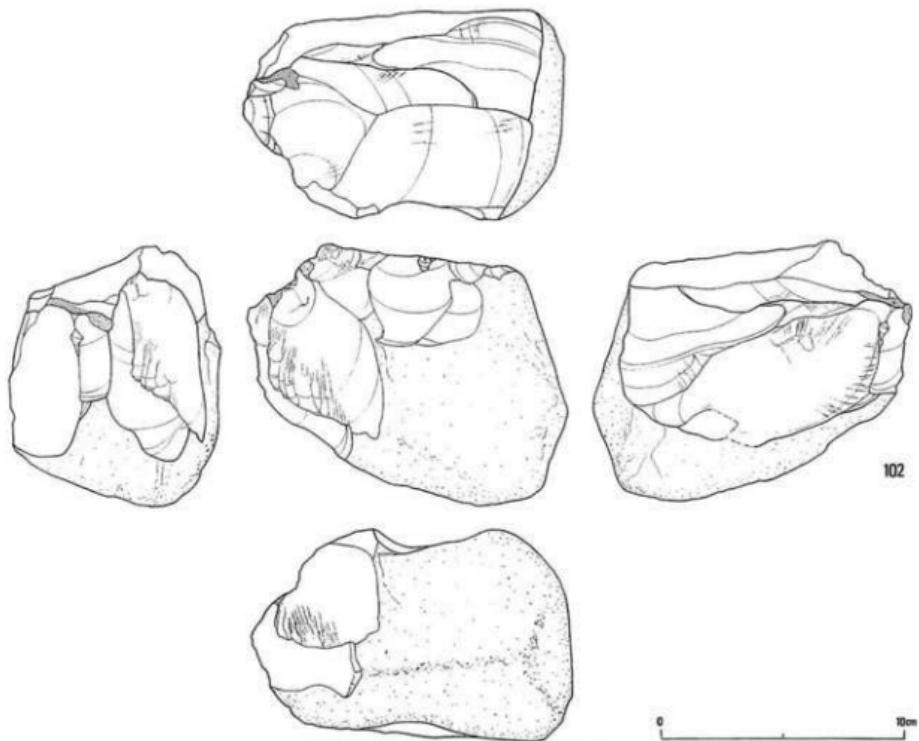
97



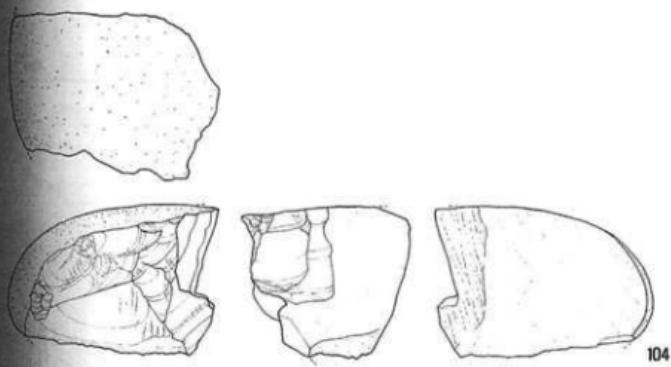
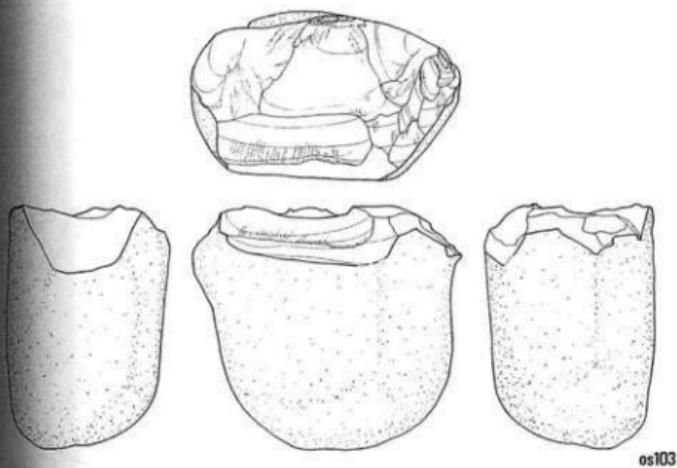
第50圖 1—B 地點北區石器實測圖 44)
第1群：斧狀石器 未成品・素材剝片・調整加工剝片？(No.97)



第51図 1-B地点北区石器実測図 45)
第1群：斧状石器 未成品・素材削片(No98)・調整加工削片?

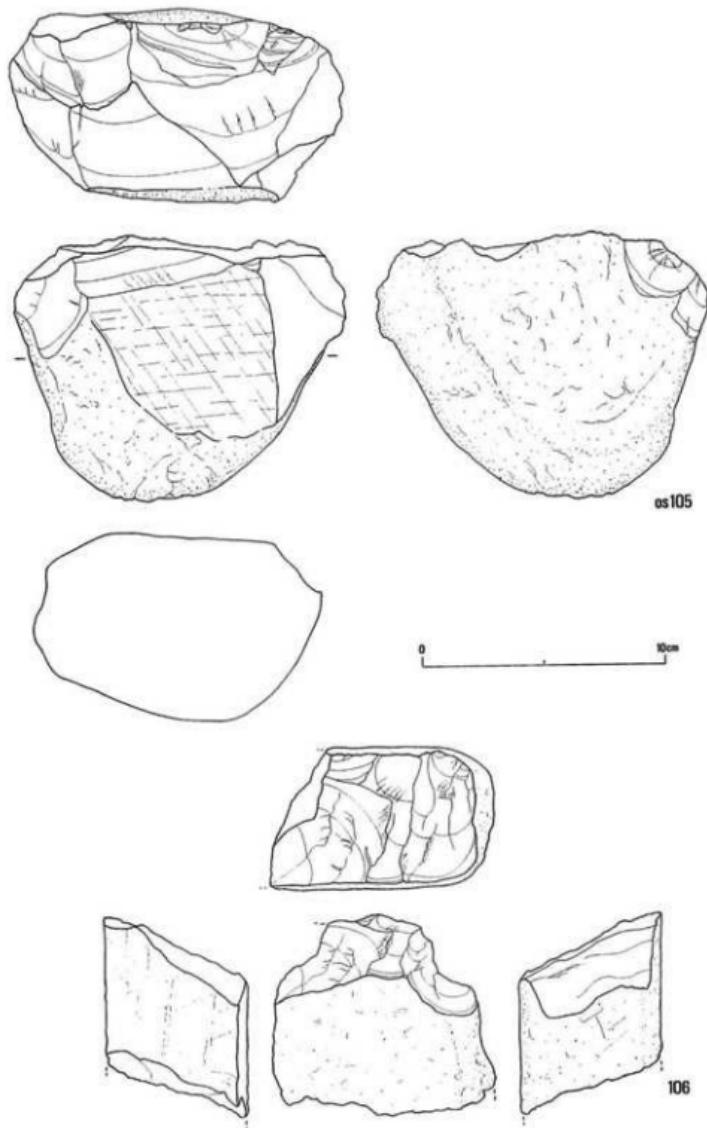


第52図 1-B地点北区石器実測図 46)
第2群：打・削器/石核 1類

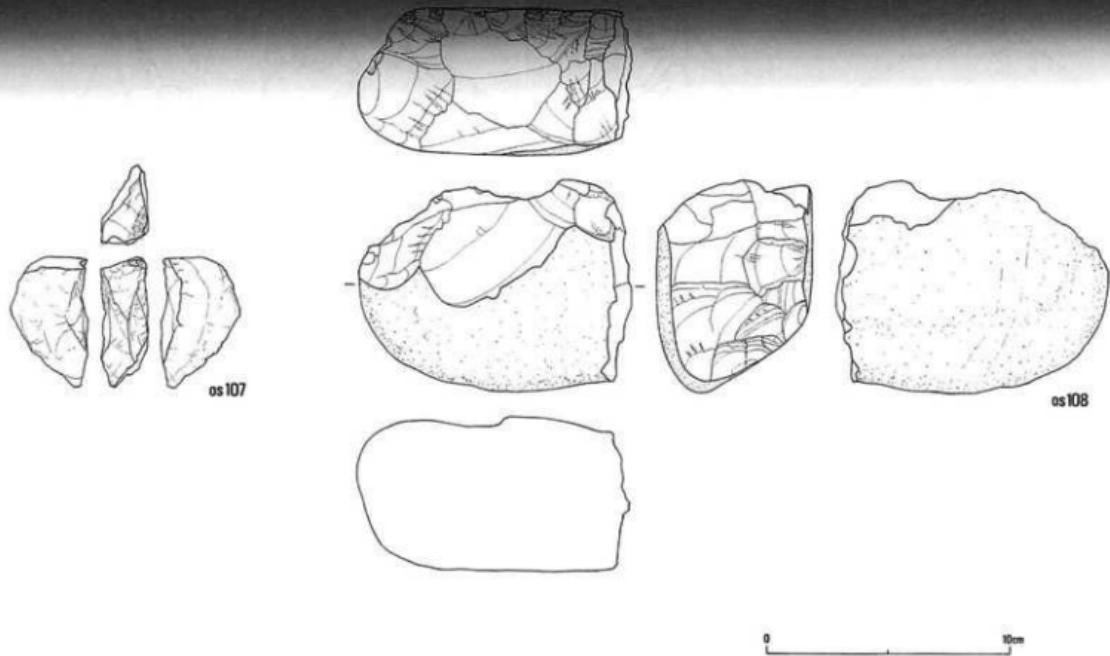


0 5cm

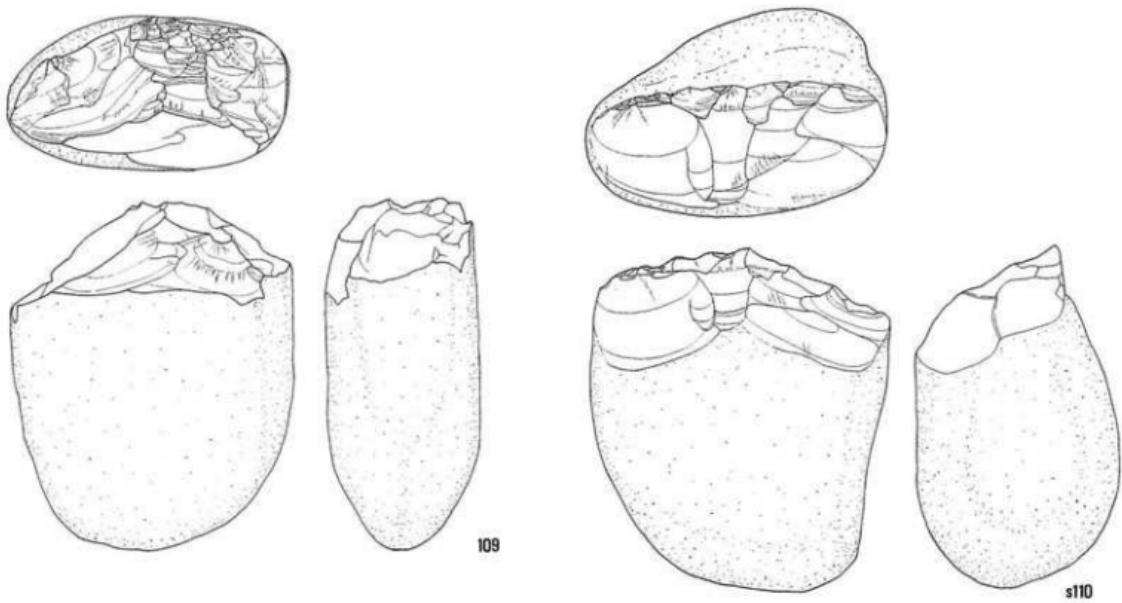
第53図 1-B地点北区石器実測図 47)
第2群：打・削器/石核 Ⅱ類



第54図 1-B地点北区石器実測図 48
第2群：打・削器/石核 Ⅱ類

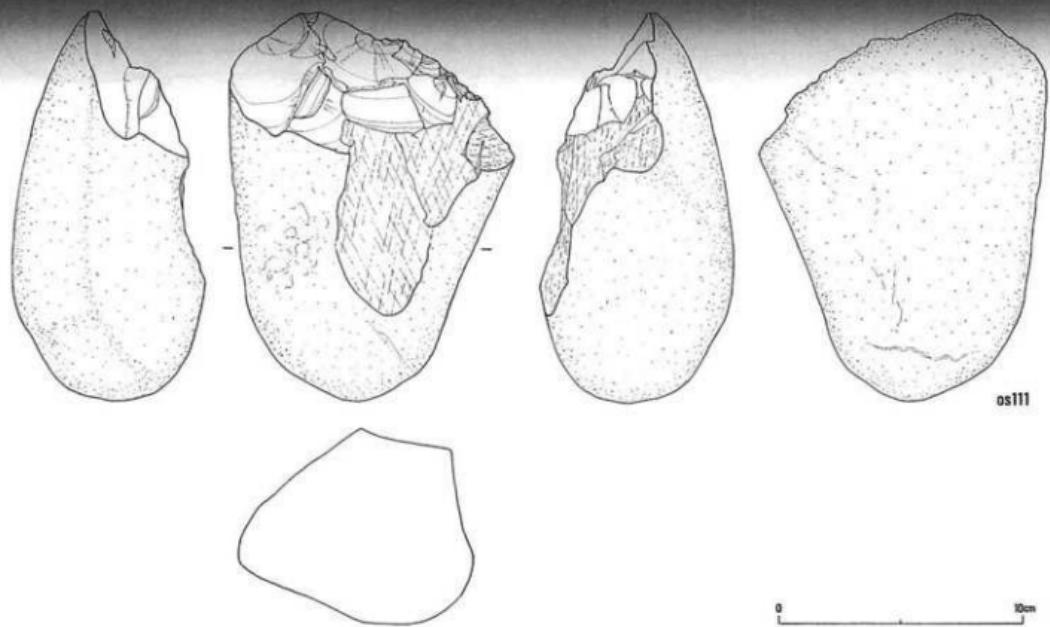


第55図 1-B 地点北区石器実測図 49)
第2群：打・削器/石核 Ⅱ類

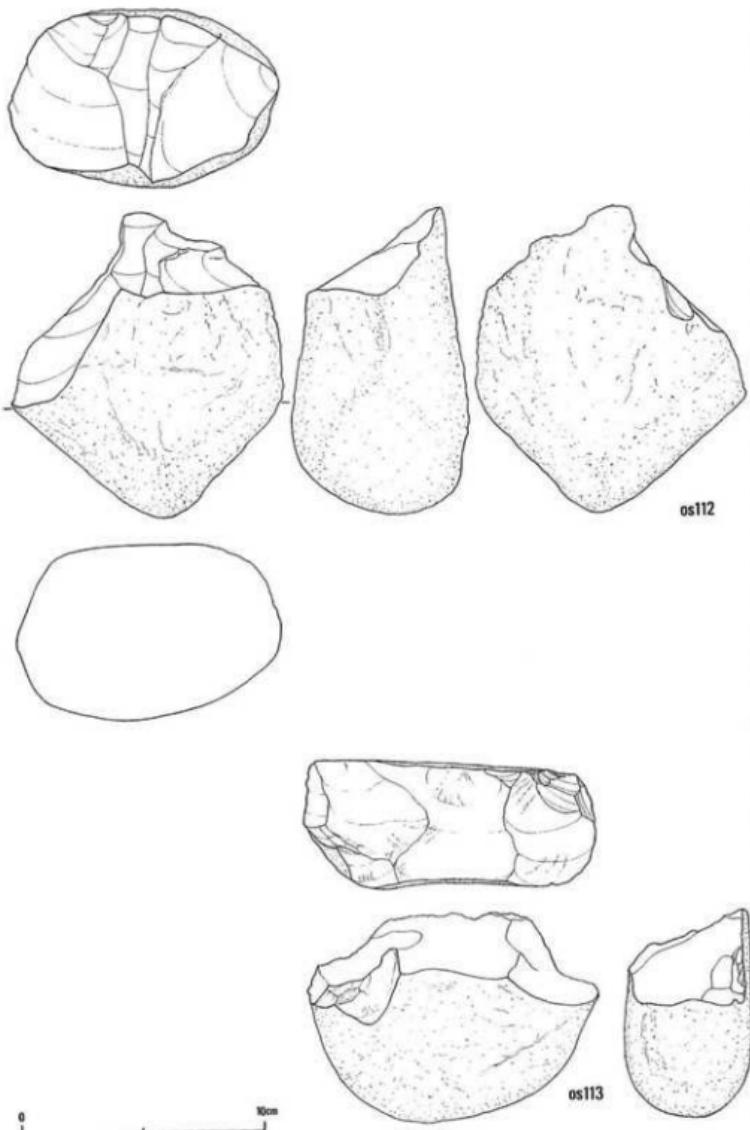


第56図 1-B地点北区石器実測図 50)
第2群：打・削器/石核 II類・II類(No.110)

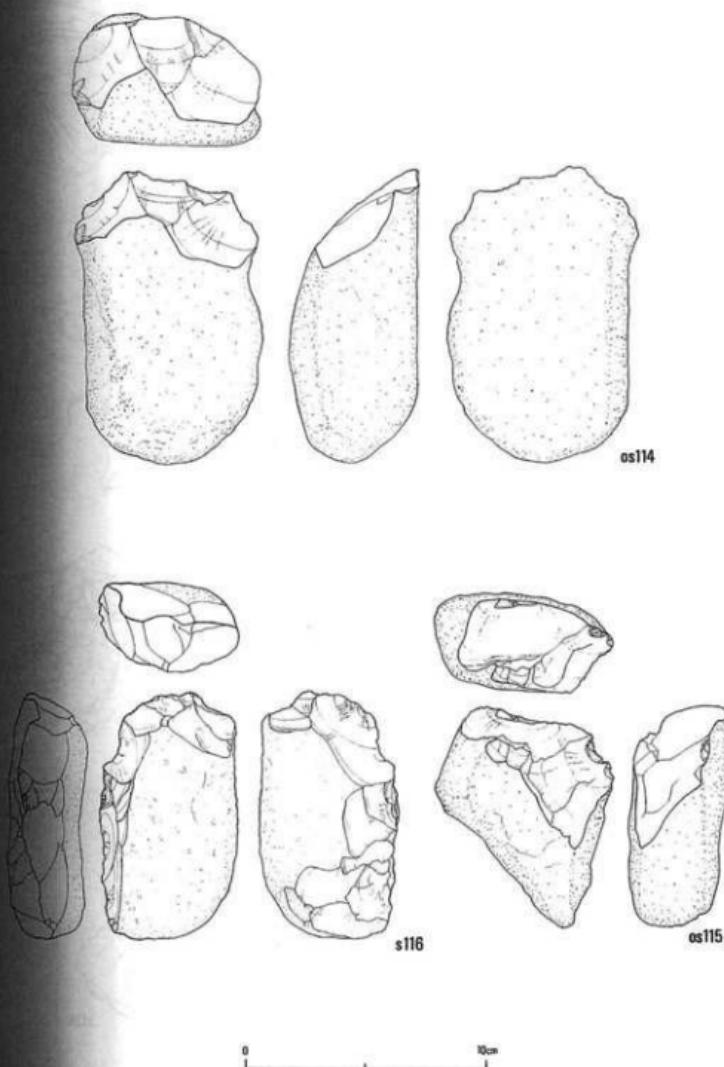
0 10cm



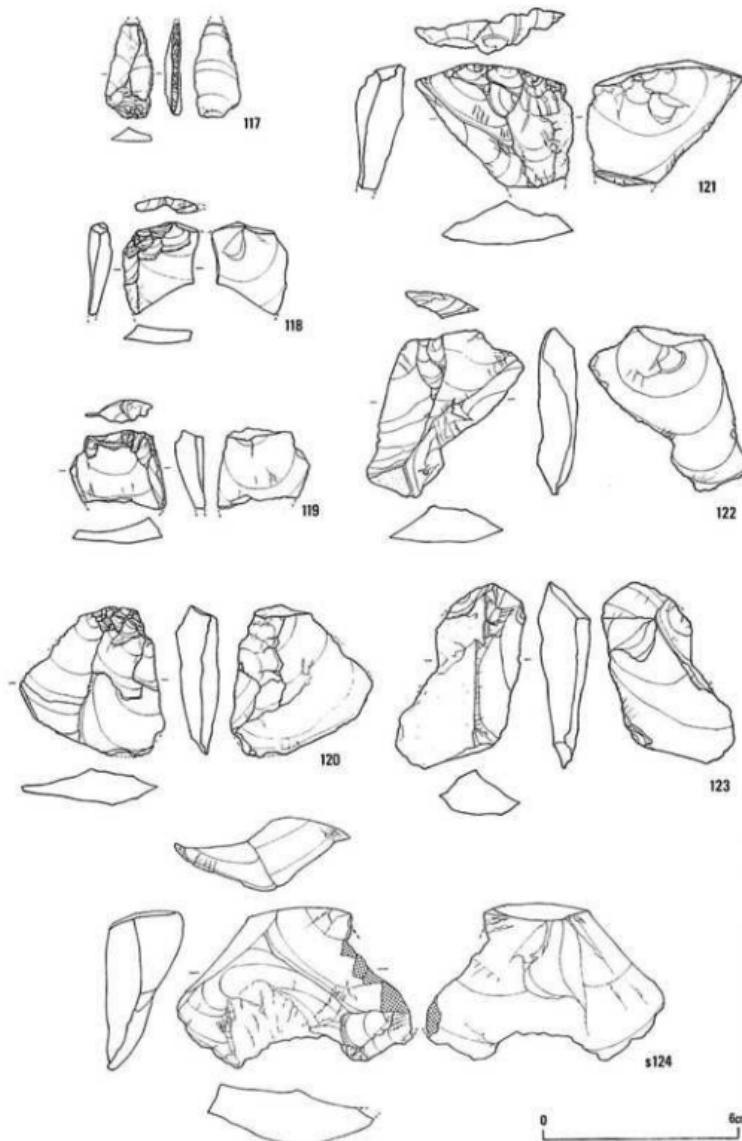
第57図 1-B地点北区石器実測図 51)
第2群：打・割器/石核 11個



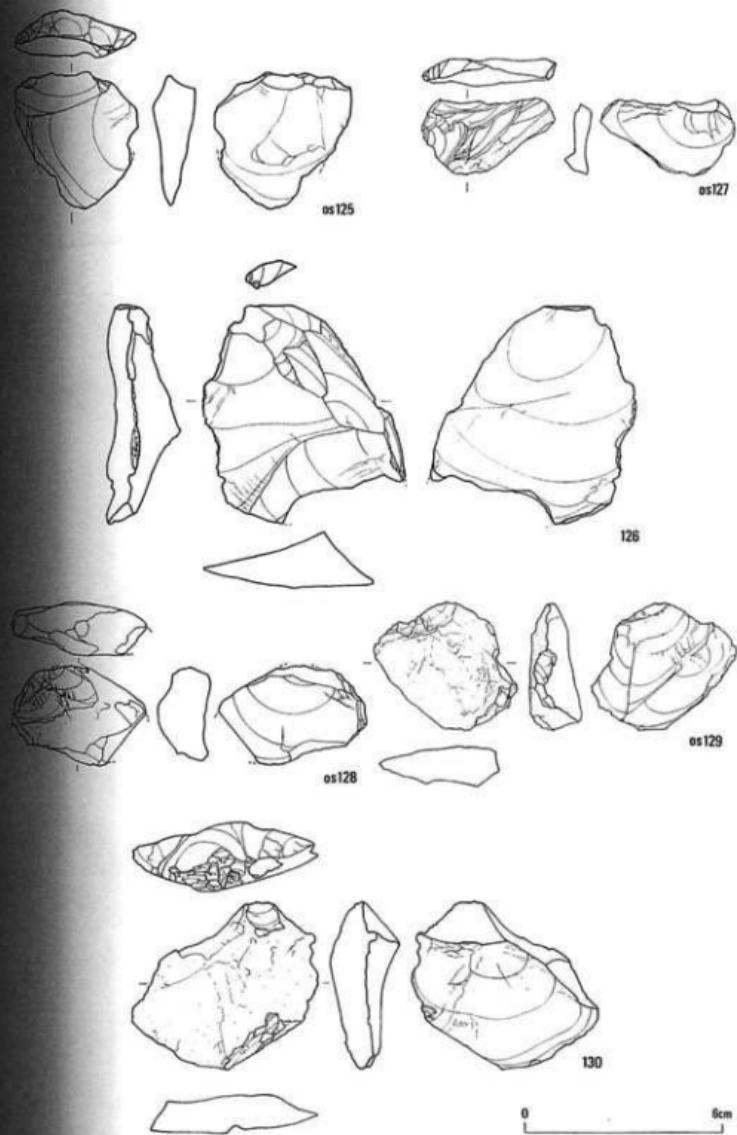
第58圖 1-B地点北区石器实测图 52)
第2群：打・割器/石核 直類



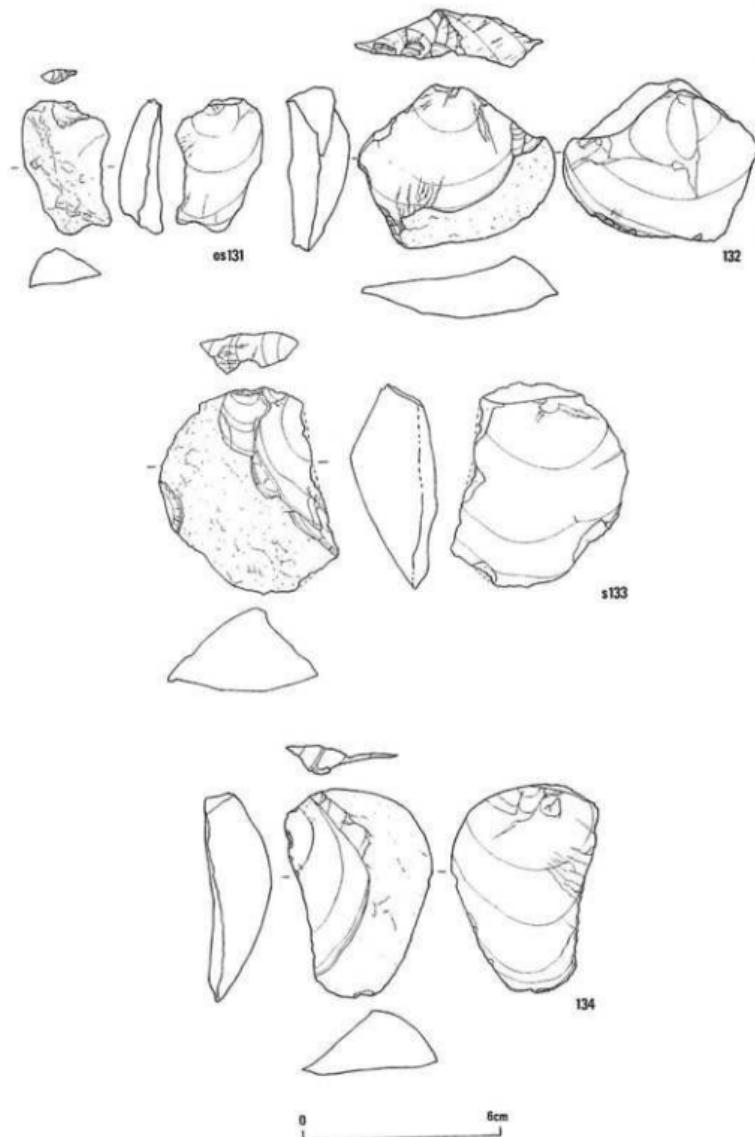
第59図 1-B地点北区石器実測図 53
第2群：打・削器/石核 N類



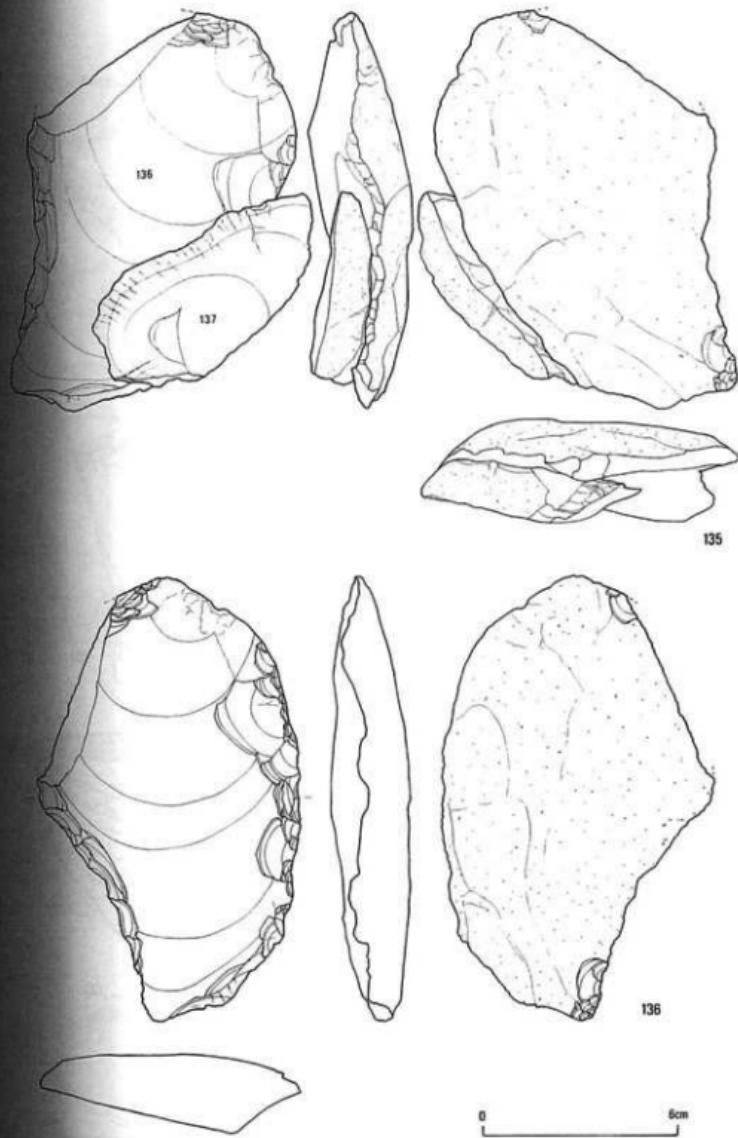
第60図 1-B地点北区石器実測図 54)
第3群：ナイフ形石器(No.117)・剝片



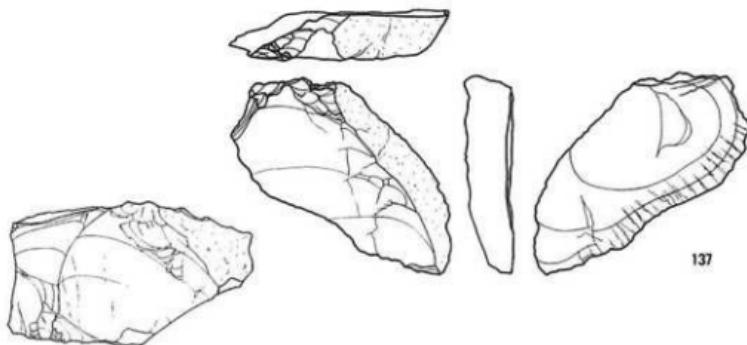
第61図 1-B地点北区石器実測図 55)
第3群：剥片



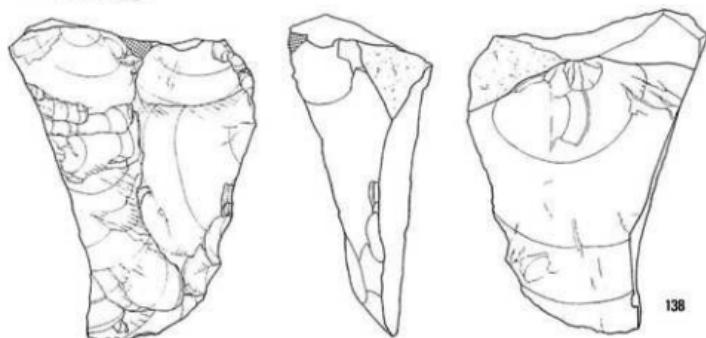
第62図 1-B地点北区石器実測図 56)
第3群：剝片



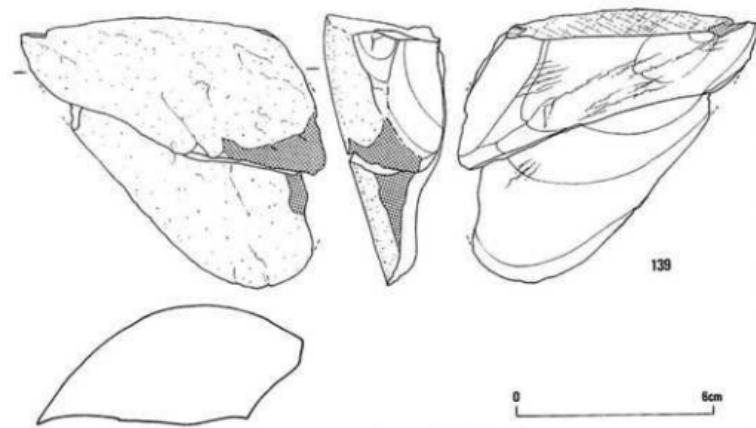
第63図 1-B地点北区石器実測図 57)
第3群：削器



137



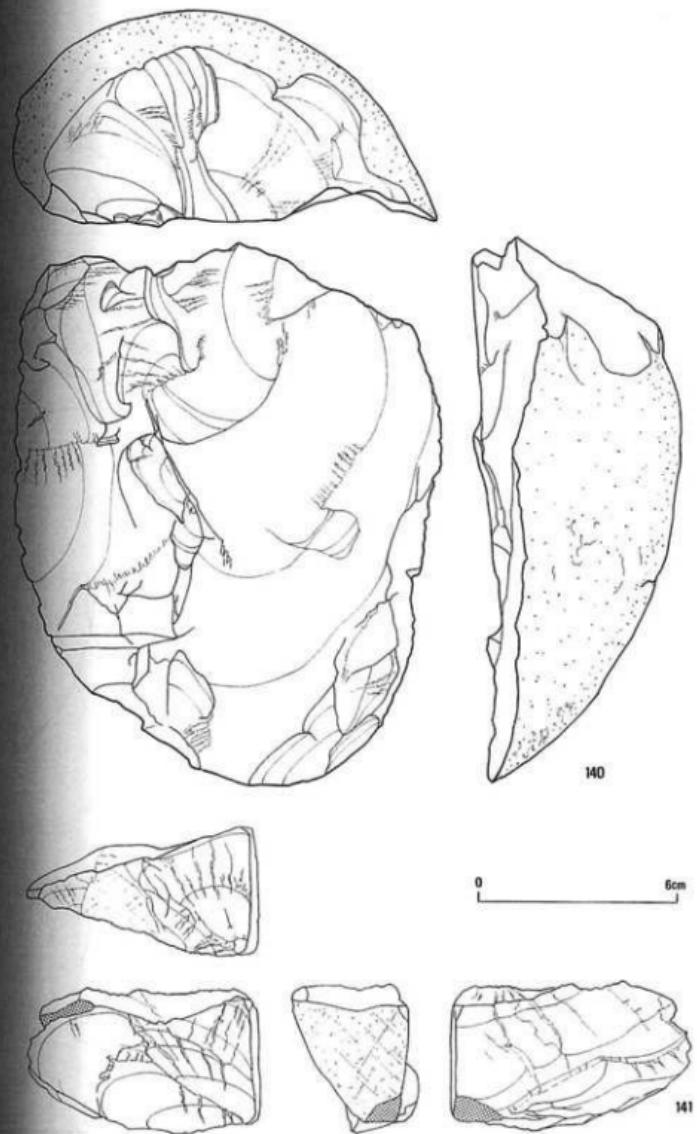
138



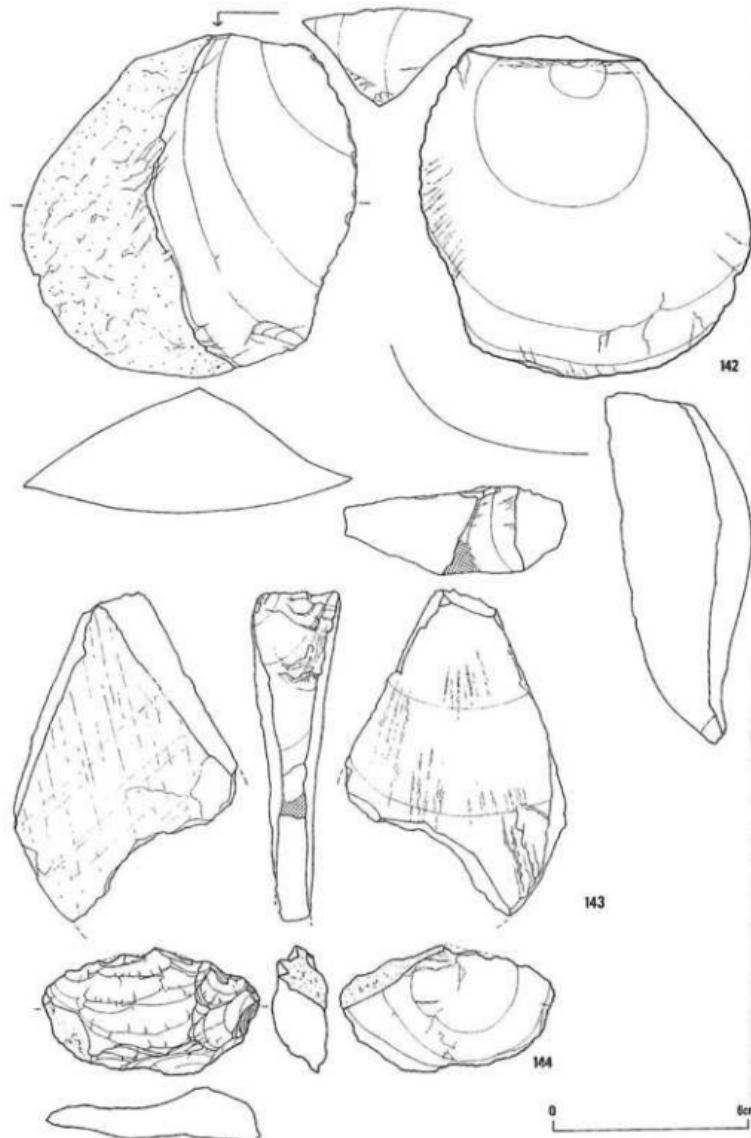
139

0 6cm

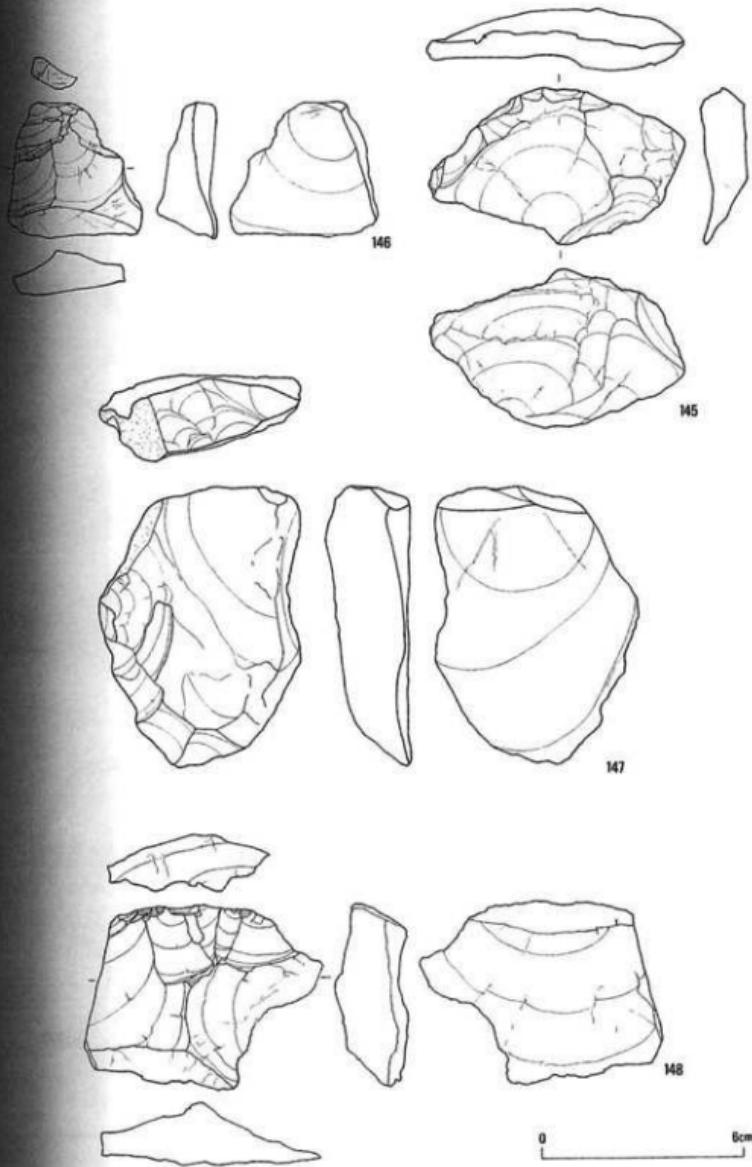
第64图 1-B地点北区石器实测图 58)
第3群：剥片



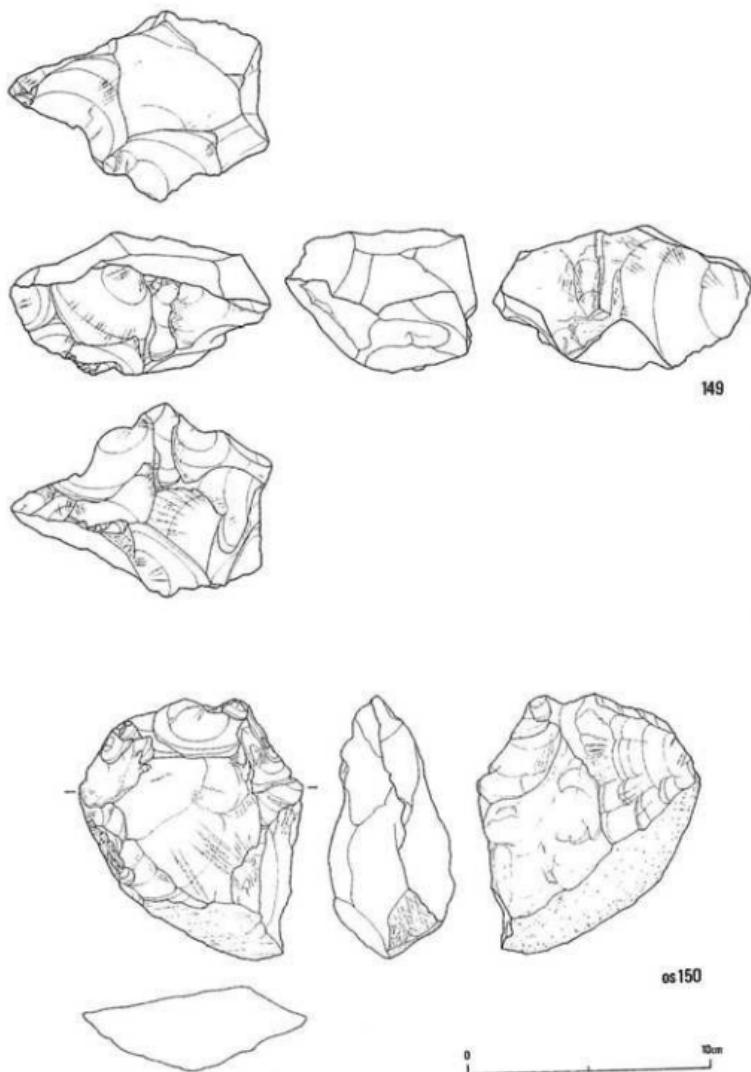
第65図 1-B地点北区石器実測図 59)
第3群：剥片



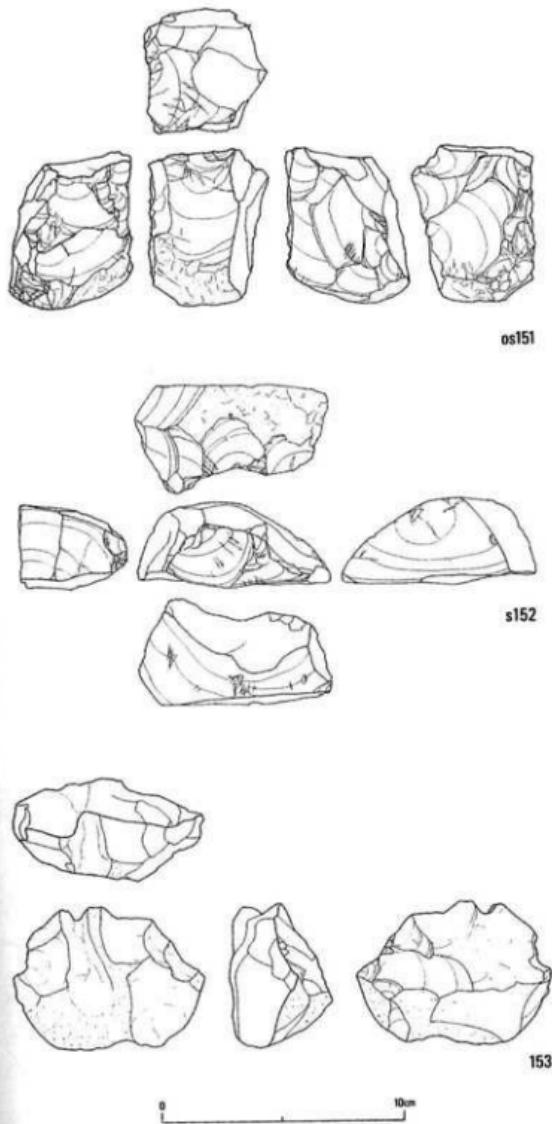
第66図 1-B地点北区石器実測図 60)
第3群：剥片



第67図 1-B地点北区石器実測図 61)
第3群：剝片



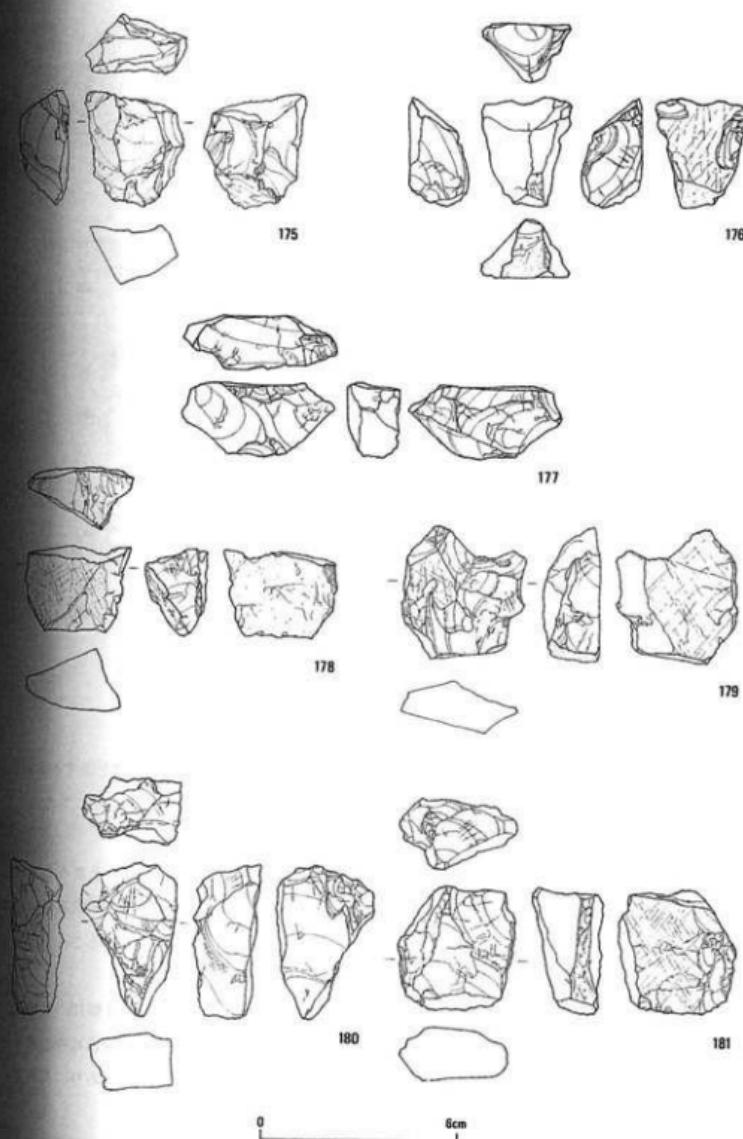
第68圖 1-B 地點北區石器實測圖 62)
第3群：石核



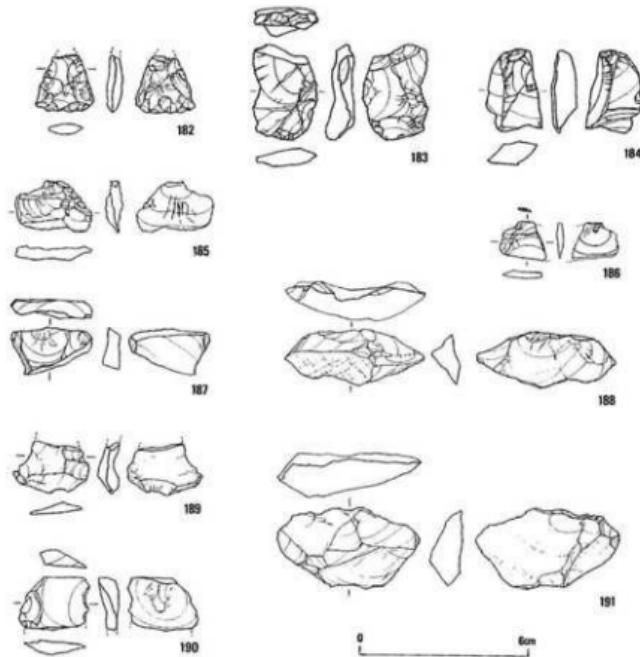
第69図 1-B地点北区石器実測図 63)
第3群：石核



第70図 1-B地点北区石器実測図 64)
第4群：UF・RF・剣片



第71図 1-B 地点北区石器実測図 65)
第4群：石核

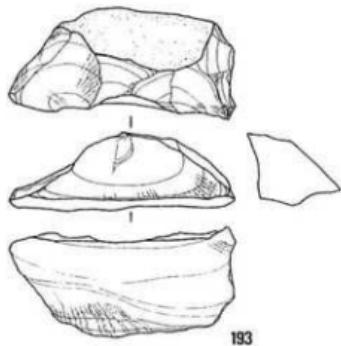
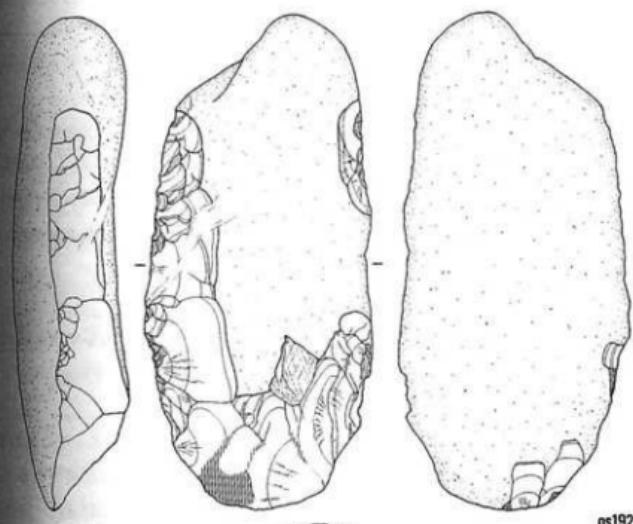


第72図 1-B 地点北区石器実測図 66)
第5群：石核・ビエス エスキュー・石核・剣片

ている点でVI類と共通する。あるいはVI類が極端に変則的とも思える器体の形状を呈することは、これらが本来III・V類の未成品あるいは失敗品であることを示すものかもしれない。ちなみにVI類は全て欠損している。

- D) 一般に一つの類型を構成する点数が少なければ、同一類型内の変異は小さいと見ることができる。しかし、V・VI類はこれに反し、バラツキが大きい。この点は、これらが斧状石器中の異例の存在であるか、またはそれぞれが本来別の類型の中に含み込まれるべきであることを示唆するかもしれない。この点は次に述べるIII類の捉え方とも関連する。
- E) 斧状石器を8類型に区分した。各類型ごとの構成点数の内訳は、I類10、II類10、III類26、IV類4、V類3、VI類5、VII類3、VIII類4点となる。VII類が65点中26点(40%)を占め中心的な存在である。しかし、III類は多様性が高くa)～d)に細分して捉えることも可能であり、それぞれの構成点数を示すと、a)6、b)6、c)4、d)10点となる。

このような点数構成に注目すれば、大別8類はIII類の4細分レベルで区分し、11類型とみることもできるという点で、分類基準に不統一があるとみることができるかもしれない。しかし逆に、



0 10cm

第73図 出土地点不明石器実測図
斧状石器・翼状剥片石核(No193)

このことは類型間の連続性の反映と見ることもできる。たとえば、II類資料のもう一方の側縁に加工を加えればIII類に移行するように、素材形態として碌・分割碌・剥片が併用され、加工部位が端部・1側縁・2側縁・周縁・片面全面加工・両面加工と漸移する事実は、こうした考え方を支持するかのようである。

III類の構成資料が一番多く、その結果変異に富むことも、見かけ上の形態差を有しつつ、遺存状態に加工・使用段階のさまざまの差を含みながら、III類を構成していることも、斧状石器の本来的なあり方の反映とみることができることを示唆するものであるかもしれない。すなわち、III類に代表される形態の石器を製作し、使用することが、斧状石器製作の中心的意図であったと考えておくべきではないだろうか。

2) 石質から見た類型間比較

いずれの類型も風化の激しい流紋岩か凝灰岩を主に用い、他の風化の少ない堅緻な石材は少ない点で共通する。

3) 素材の形態から見た類型間比較

I類が楕円碌をそのまま用い、IV類が扁平な剥片を用いる両極にあるとするとその他の類型は、碌・分割碌・典型的な剥片の3者が共存使用されている。加工部位が連続的に説明できることと同時に、素材利用の状態と類型との上記対応関係を考慮すると斧状石器全体の関連性・全体的統一性が浮かび上がってくる。

4) 研磨痕および刃部背面の使用痕から見た類型間比較(第74図)

刃部研磨痕および刃部背面に生ずる石斧特有の使用痕はそれぞれ、I(地点不明資料No192)・III・V(1-D地点資料)・VI類、I・III・IV(?)・VI類に認められる。これに加えて、刃部における長軸方向に沿い剝離痕が強い階段状を示す例も、使用に係るものと考えれば、II・V・VIを除いた5類型に完成後の使用を認めることができよう。このことは逆に、研磨痕も使用痕のいずれも見られないII類をIII類の延長(加工途次)で考え、V・VI類を未完成品か他類型の中に含め類型そのものを解消して考えるべきことを示唆するかもしれない。しかしV類に関しては、後述するように、同様の石器が出土する1-D地点でV類に含まれるべき1例(No210)が、明らかな刃部研磨を伴っていることも想起しておかなければならない。

上記の諸要素を類型間の機能的な共通の属性とみると、若干の例外を除いて類型間の連続性をここにおいても認めることができる。

以上によって、形態・素材・加工方法に各類型それぞれに独立性を認めうるもの、機能的には相互に強い連続性を読み取ることができ、八つの類型を同一範疇に属する諸形態というかたちで理解ができると思う。そして、刃部研磨例が端的に示すように、この一群は、刃部(局部)磨製石斧と同じ機能的性格を有するものであろうことも示唆している。この点は別にしても、ここに斧状石器として一括した一群は、素材の形態や2次加工、石器の全体形態に差はあるものの、少なくともとりわけ刃部の作出意図・方法に貫した強い同質性を窺うことができるという点で、同一器種に属する石器の表現形態の多様性と把握することができたと思う。

	I	II	III	IV	
研磨痕 地点不明資料	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>		
使用痕 (裏面)	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/> ?	
V	VI	VII	VIII		
研磨痕 1-D地点資料	<input type="radio"/>				<input type="radio"/>
使用痕 (裏面)		<input type="radio"/>			

第74図 I—B 地点北区斧状石器分類区分図
図中の数字は挿図No.

5. 石器の分布

当地点はブルドーザーによる削平がなされており、出土遺物は基本的に原位置を失っている。したがって、その分布状況、石器ブロックのあり方から、遺跡構造の一端を探ることは困難であるというものが基本的な認識である。しかしながら、当地点の発掘が丹生遺跡群の一連の調査の中でも最後の本格的調査であり、その分だけ調査に対する姿勢も周到さが増しており、発掘面積も大きい。その結果として、丹生遺跡群中で出土遺物の位置記録が詳しく残された唯一の例となっている。

ブルドーザーの削平を受け遺物は原位置を失しているとはい、あるいは旧状を幾つかでも分布状態に反映している可能性も念頭におきながら、第1～5群それぞれに出土状態を図示し、簡単な説明を加えておきたい。

第1群石器(第75図)

斧状石器はトレント中央の空白部を挟んで、東側にまとまりのよい1群、西側により広い一つの分布のまとまりがある。西側の一群が南半と北半とに2分されると見てもよいのかもしれない。東・西の分布集中間の空白部は幅約10m程あり、原位置論的分布論の対象としてではなく、概略的な位置に意味があるとするならば、東・西2つの分布のまとまりは、遺跡の成り立ちを考えるうえで、多少なりとも示唆を与えるものかもしれない。このような立場で分布状況を見てみると、内容にはさして大きな差はないように見受けられる。ただ多少気掛かりなのは東側に分布する斧状石器製作過程で生じる素材剝片が、西側にあまり見当たらないことである。製作行為の場が一方に限られていたものであろうか。

第2群石器(第76図)

打・割器／核核類は、出土位置を確認できるものが少ない。一見すると出土位置は特定の集中域を形成せず、調査区の外縁部に散在する。なおかつ、第1群石器との関係では、これと分布位置が重複しない。

第3群石器(第77図)

ナイフ形石器関連資料は、中央に空白部を有し、外周全域に分布するように見受けられる。しかしながら、西・南側は数量的に限られており、調査区の東北端に集中域を持つと見ることができる。第1・2・5群と対比して、その分布中心域は明らかなズレを生じている。

第4群石器(第78図)

チャート製石器群は、中央から東側にかけて広い空白地帯が認められる。東北隅・東南隅・西側北半の3ヶ所に主たる分布域を有すると認めることができる。全体的な分布傾向は、第3群とおむね重なると見ることができよう。

第5群石器(第79図)

安山岩・黒耀石製石器類は、石器数が少ないため、目立った集中域を形成しないようにも見受けられる。しかしながら、絶対量に比して中央付近に多くの資料が位置する点は、第1～4群の分布傾向と著しい相違点であると見ることもできよう。

以上五つの石器群は、概してそれぞれ固有の分布傾向を示すと解することができるが、出土状況

の原位置性に対する評価が困難で、本来、遺跡の成り立ちや石器群間相互の同時性の検証に供しいうるデータについて詳しい検討をなしえないことを遺憾とする。

6. 1-B 地点北区の性格

1-B 地点北区の石器群は、刃部の局部研磨技術を有した多量の斧状石器の存在によって第 1 に特徴づけられるが、斧状石器群の遺跡における遺存状態からみた、当区の性格を検討しておきたい。例古代学協会所蔵の 1-B 地点北区出土斧状石器類は、採集・発掘品双方合せて確実な例だけで 80 点にのぼる(分類保留群を含む)。別の採集例を合わせれば 100 点近くになろう。問題の石器の器種区分や所属時期の如何にかかわらず、特異な石器群構成・出土状況と言わなければならない。この特異な性格の実体を探るために、これまでに気のついた点を挙げておきたい。

1) 製作の痕跡

多量の斧状石器が作られたとすると、その素材が円錐を主とするという点からみて、容易に加工過程に生じた剝片を指摘できるはずであるが、素材製作過程は別にして、最終(2 次調整)加工剝片はこれをほとんど認めえない点で、最終整形加工がこの場において行われたことの否定的な材料である。

一方、斧状石器の加工時に生じた欠損を窺わせる資料もある。No.60・72 の 2 例が好例である。前者は裏面側への剥離が、後者は表面側への加工のための打削が、結果的に器体自身の損壊を招いたものである。これらの資料は、逆に最終整形加工の痕跡とも受け取ることができる。この他の欠損例の原因については定かではないが、整形加工時の失敗と判断できない以上、使用中の欠損と見ても支障はないであろう。

この他、多くの素材剝片および植石の存在は製作行為を積極的に支持する。ただし、用いられた選の大きさからみて、素材獲得の段階ではなく、2 次加工段階の製作行為か、あるいは斧状石器以外の石器製作に関与するかもしれない。

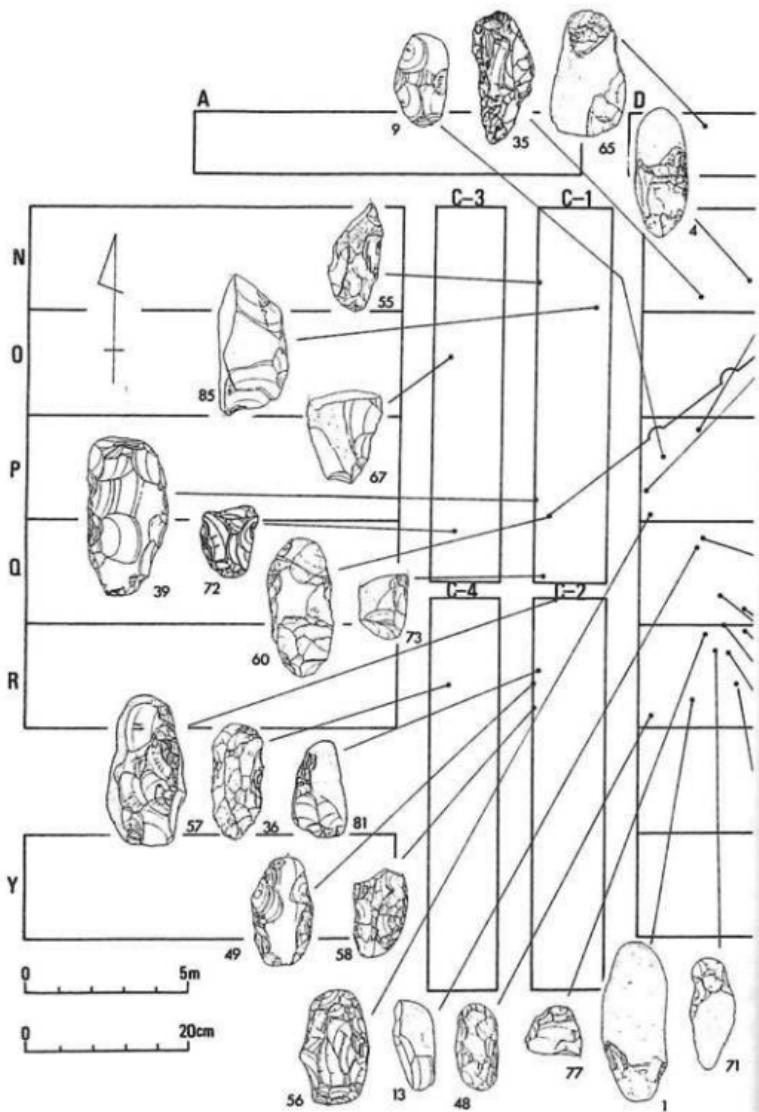
2) 使用の痕跡

Ⅲ・V・M 類の石斧には、いまのところ明確な使用痕・研磨痕を認めていない。しかし、V 類に属する 1-D 地点出土例(No.210)には、明瞭な研磨痕を認めうるし、出土地区地点とも不明の資料とは異く、I 類の例品(No.193)に明確な研磨痕を認めることができる。しかも、研磨痕を有する例のうち多くが、研磨部分にその後の剥落部分を留めており、研磨後における使用ないしは再加工(刃部再生)のあったことを窺わせる。

以上によって本地点が、多量の斧状石器を伴っているという意味で特殊性を有しながらも、デボットを窺わせるような遺存状態をいまのところ認めがたいという意味で、特殊な遺跡ではなく、一般的な生活址であると見るべきであることを示唆しているのではないかと思う。

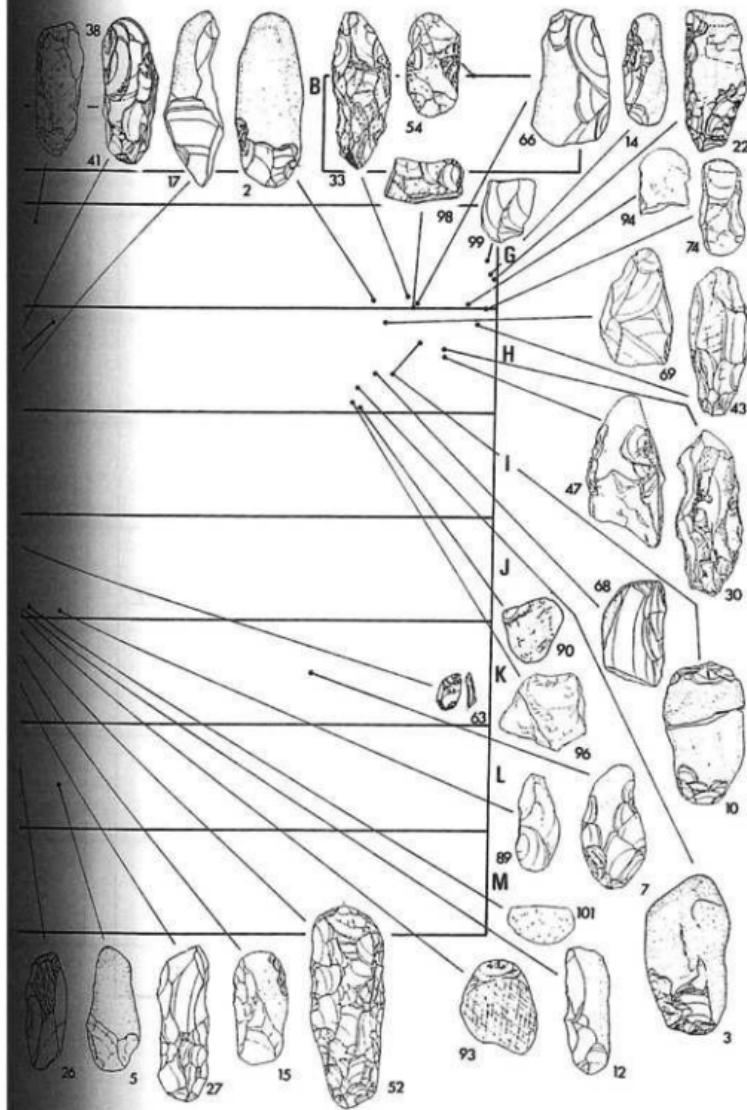
7. 斧状石器の特徴とその位置付け

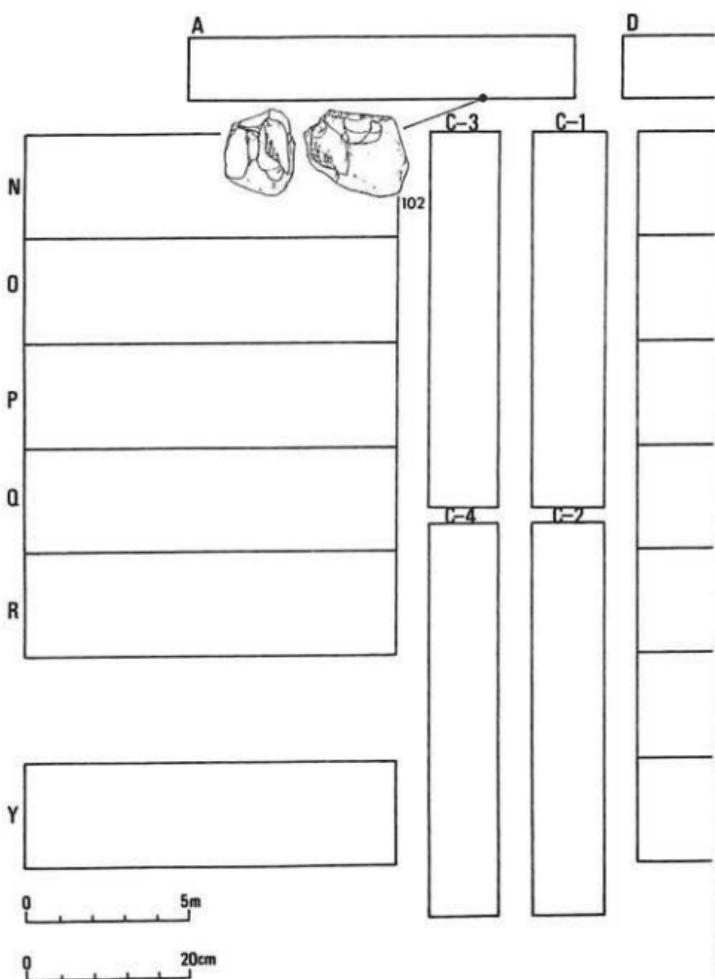
最後に、他の石器群との比較の手掛かりとなるような要素を指摘し、所属時期の判断の前提作業としておきたい。なお、斧状石器群の製作技法の考察はⅢ章第 2 節を参照されたい。



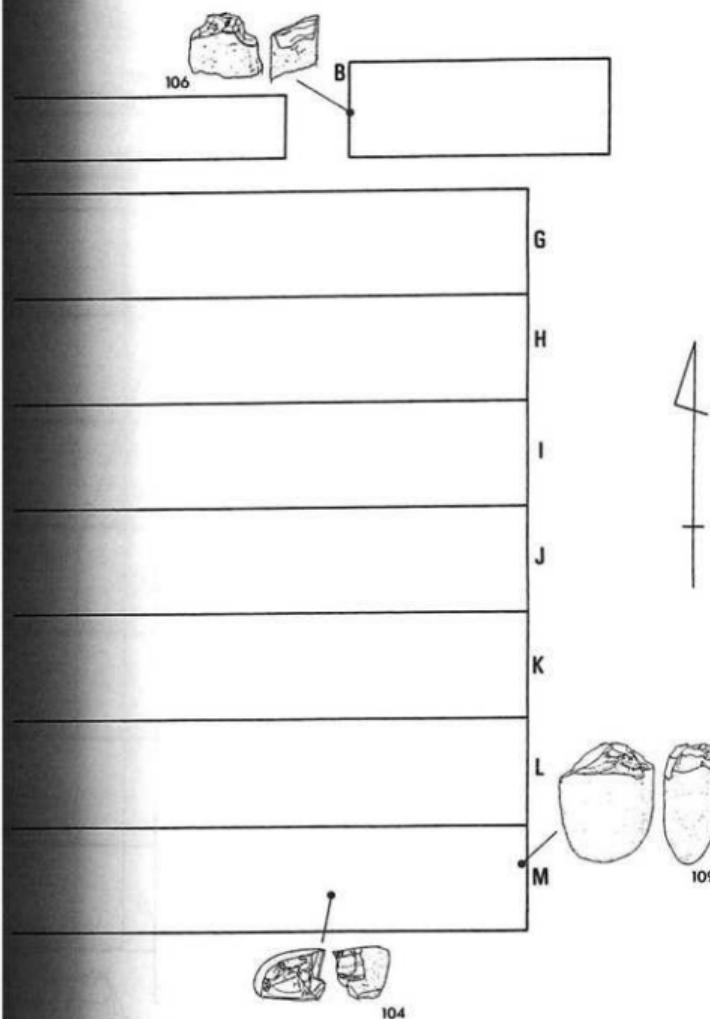
第75図 1-B地点北区第1群石器平面分布図

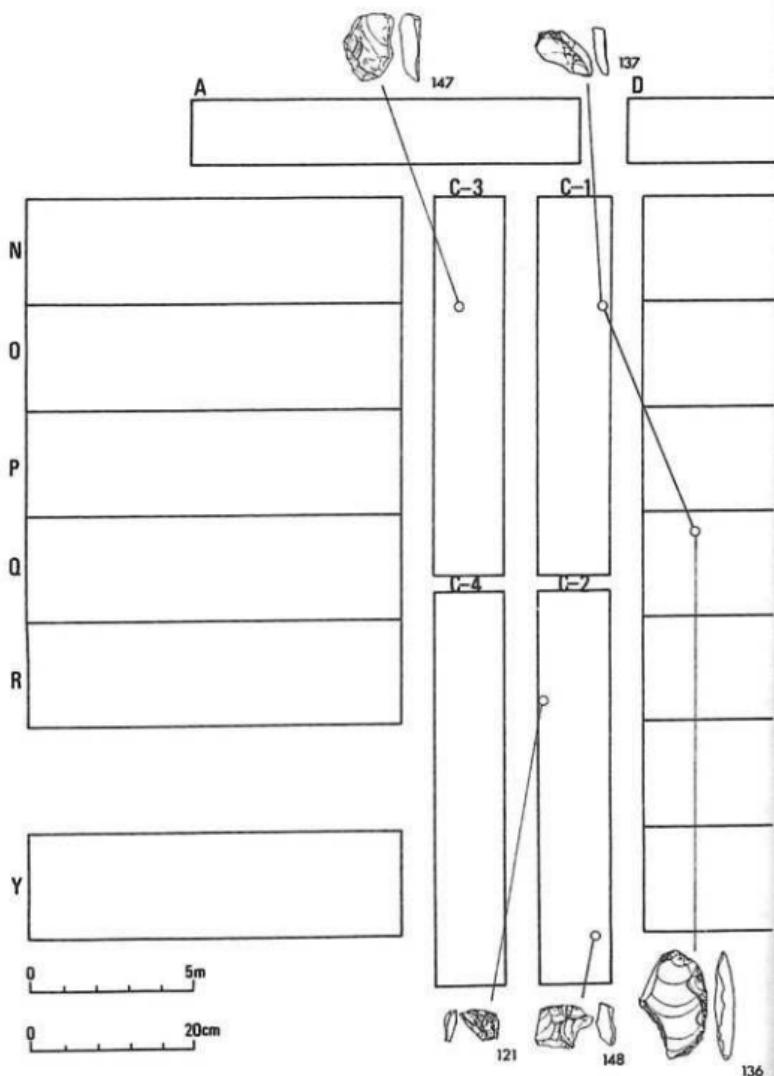
図中の数字は挿図Na(以下第79図まで同様)。



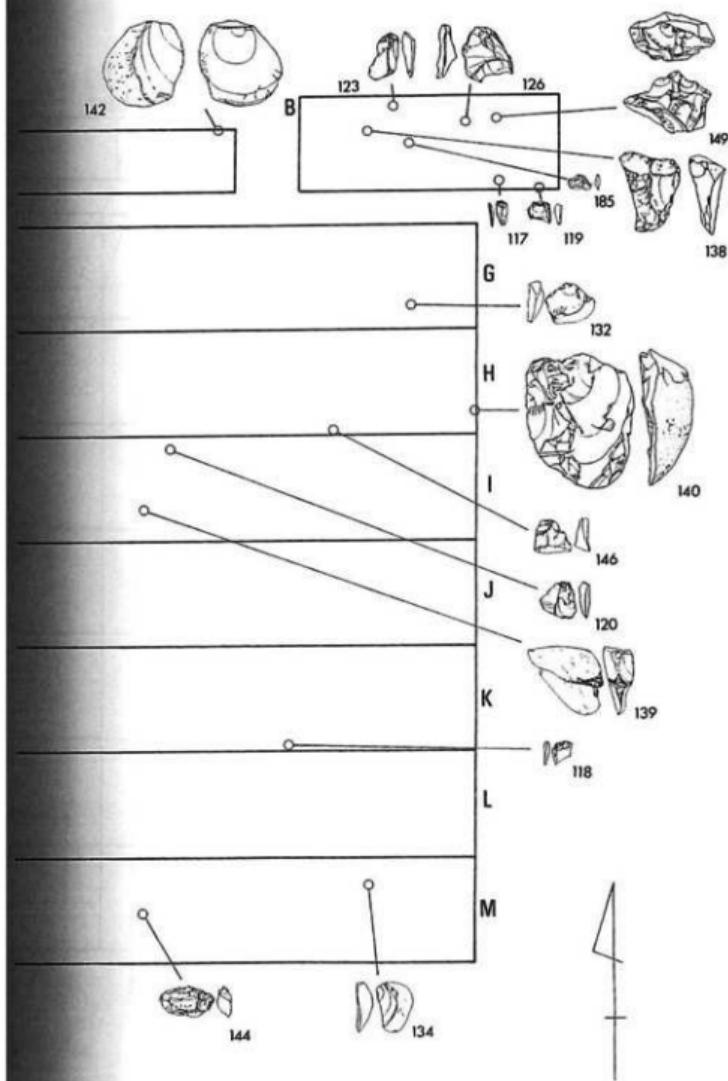


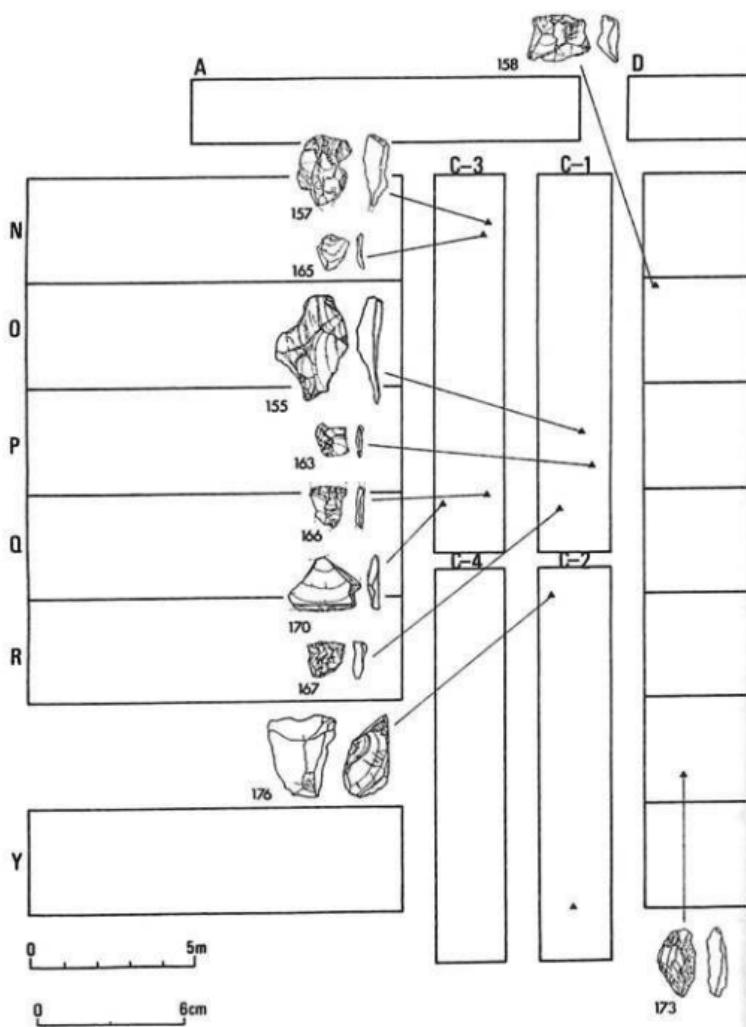
第76図 1-B地点北区第2群石器平面分布図



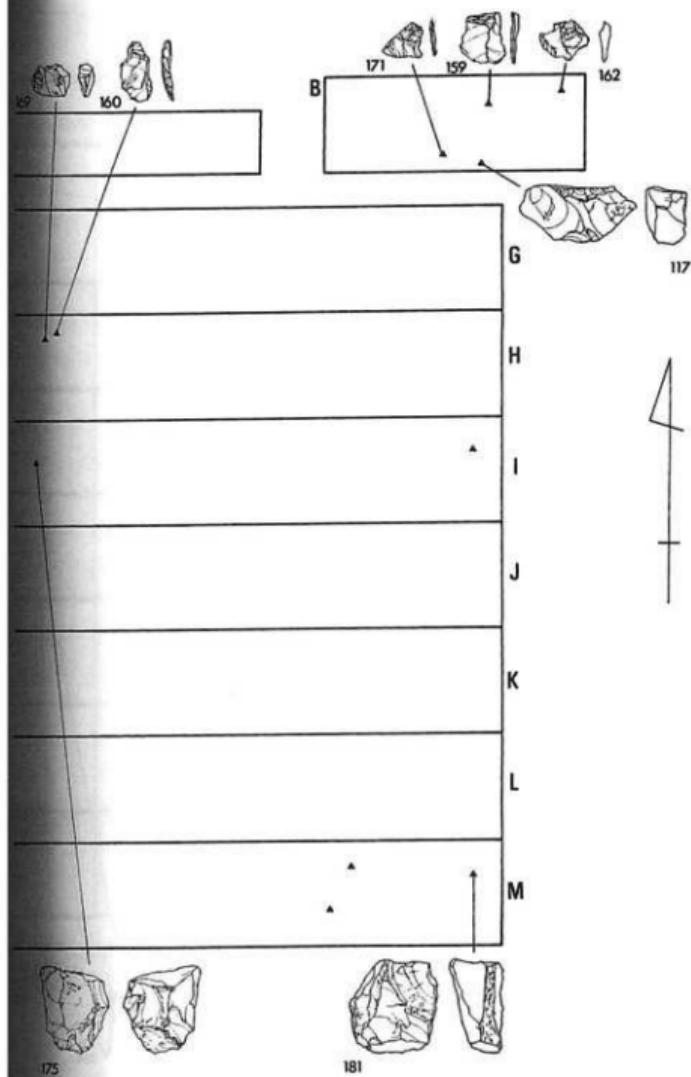


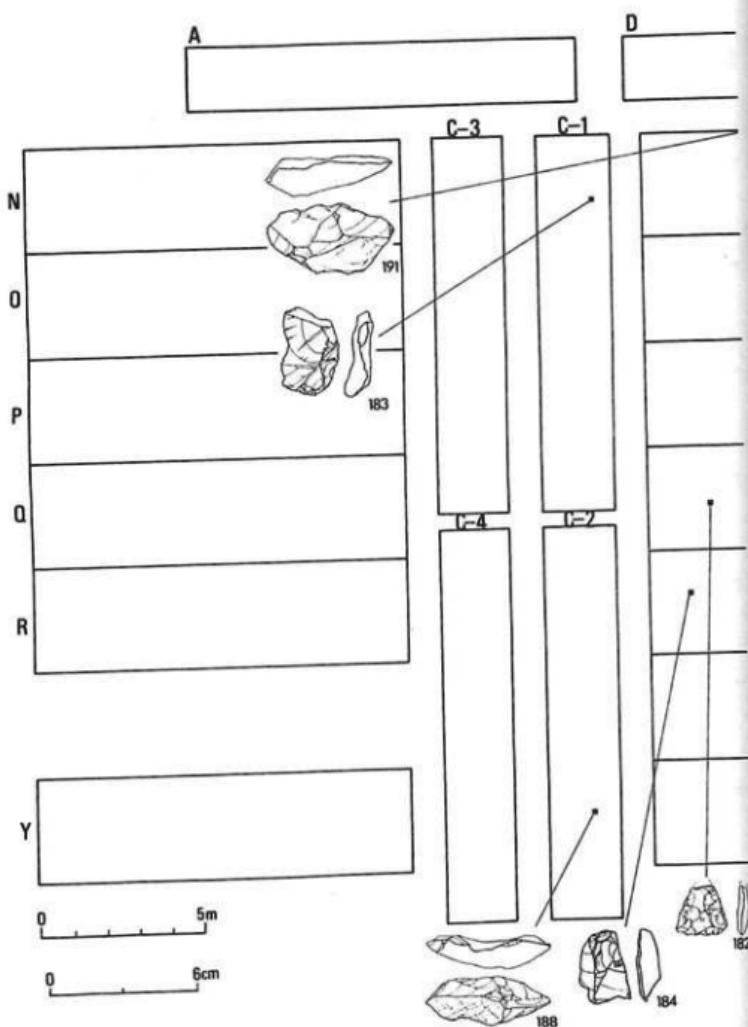
第77図 1-B地点北区第3群石器平面分布図



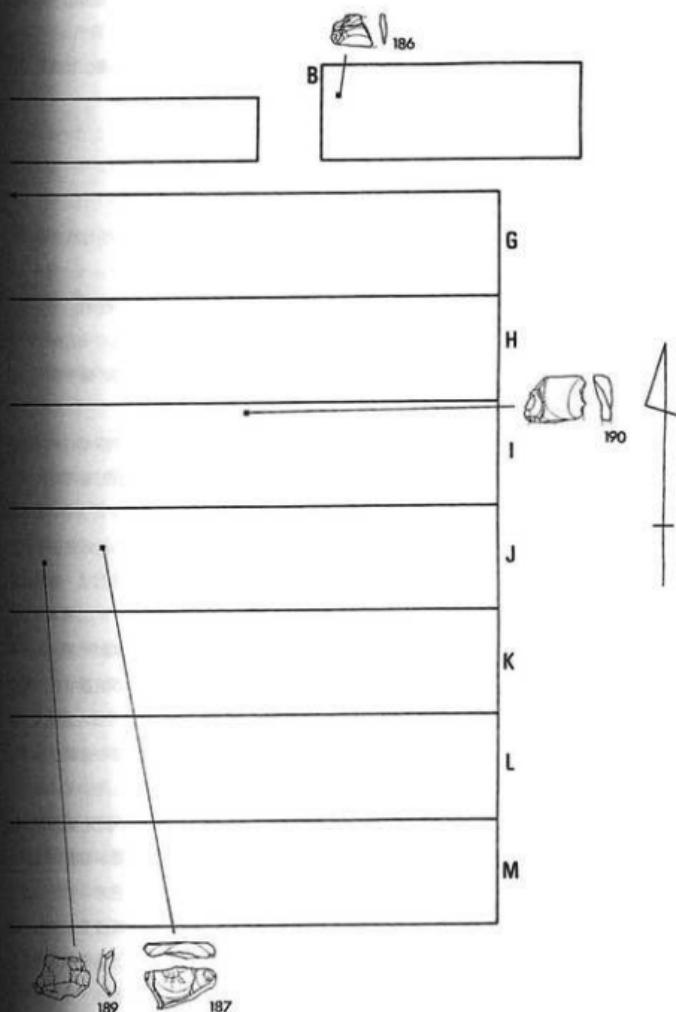


第78図 1-B地点北区第4群石器平面分布図





第79圖 1-B 地點北區第5群石器平面分布圖



1. 斧状石器中明らかに刃部磨製品があり、打製主体で刃部研磨技術を有する斧状石器群であると理解できる。
 2. 斧状石器は基本的に片面・部分加工で、かなりの部分に礫表を留める。刃部裏面には共通にして意図的に礫面を残す。
 3. 素材は大まかにみると次の3種となる。
 - 1) 扁平・縱長の円礫利用：礫の形をほとんどあるいはあまり変えない。
 - 2) 大型の分割礫利用：礫の旧形を相当に変え、加工度が高い。
 - 3) 大型剝片利用：周辺部加工の例が多い。この中に礫を半截(厚さを半減させ、刃部裏面側に自然面を残したままにしておく)した剝片を利用するものがある。
 4. 1-B地点北区の斧状石器の大きさは、草創期と岩宿時代の中間値にある(第80図)³⁾。
 5. I類は薄い長楕円形礫を利用し、先端部に加工を施す。あたかも細長いチョッパーと呼びたいような一群である。強いて類似した形態の例を挙げれば、夏島や大丸遺跡の小型の礫斧類であろうか。
 6. IV・V類のとりわけIV類の扁平でオーヴァルな例は、立川ローム下部のワラジ形の石斧に類似すると言えよう。形の外に、扁平な円礫を半截した剝片を用いる点は、多くの後期岩宿時代例に共通する性格と言える。
 7. III類中には尖刃例が多いと同時に甲高なものが多い。このような尖刃例はどの例に類似し、どう評価すべきか難しいが、甲高な点は草創期的な特徴というべきであろうか。ただし、後期岩宿時代に属する千葉県草刈六之台のような例もある。
 8. VI類などの裏面が極端な凸状を呈する例は、茨城県額田大宮の礫の用い方に類似する。額田大宮例は細石刃石器群と共伴と見れば細石刃文化期、分離できるとすれば層位との関連で草創期の所産とすべきであろう。
 9. 九州出土の明確な神子柴型石斧として、大分県市之久保・同松山、福岡県門田の諸例が挙げられる。いずれも細石核と関連するが、これらは典型的な神子柴型と言ってよく、丹生との関連を想起させない。また、隆線文土器や石鐵と共伴し草創期の石斧の出土例の多い鹿児島県下の例(加栗山・東黒土田など)は、いずれも研磨技術の応用が徹底していることや刃部が明瞭に凹レンズ状に湾曲した丸ミノであることに特徴があり、丹生とは似ても似つかぬものと言ってよい。
 10. 九州におけるA T下位の石斧として、熊本県曲野、大分県百枝B地点、佐賀県技去木中山・同甚蔵山などが知られる。片面に自然面を残すなどの素材利用に類似性は強いが、扁平なものが主体である点などの形態上の特徴は、丹生との間に違和感を生じさせる要素である。
 11. これらを公平にみると草創期的な要素と岩宿時代的要素との両様あって、どちらとも決したたなければ、後期岩宿時代前葉(立川ロームIX・X層)に属する可能性大としたい。
- 以上、Ⅲ章で詳述する点は除いて、観察視点の主要部分と帰属時期に関する要点だけを述べた。結論を一言で言えば、形態に齊一性があり、加工技術が洗練され、加工度の高い草創期局部磨製石斧群との関連は想定し難いのであり、形態上の特徴に完全な整合性を認めるのに躊躇させるものは

あるにせよ、裏面に自然面を留める例が多いこと、加工度と定型性が低いことなどは、後期岩宿時代前葉の石斧群との間に相当の共通要素を見出しうるという点で、丹生遺跡の斧状石斧を後期岩宿時代前葉の所産と考えるのが妥当ということになろう。

8. 石器群の共伴関係

先に述べたように、石器群は以下の5群から成る。

第1群：斧状石器関連

第2群：打・割器／石核関連

第3群：流紋岩製ナイフ形石器関連

第4群：チャート製石器関連

第5群：黒耀石・安山岩製石器関連

これらがどのような共伴関係にあるのか。全てが同時共存か。反対に5群がそれぞれ別個の石器群を構成するのか。あるいはその他の組み合わせがありうるのかという点について検討しておきたい。

ただ、この共伴関係の想定および石器群の評価については、共同研究篇においてそれぞれの論者が独自の考えを開陳されている。ここでは筆者の考え方で筆を進めるが、読者は共同研究篇における各種の考え方も併せて参考のうえ、ここで所論を批判的に受け止められたい。

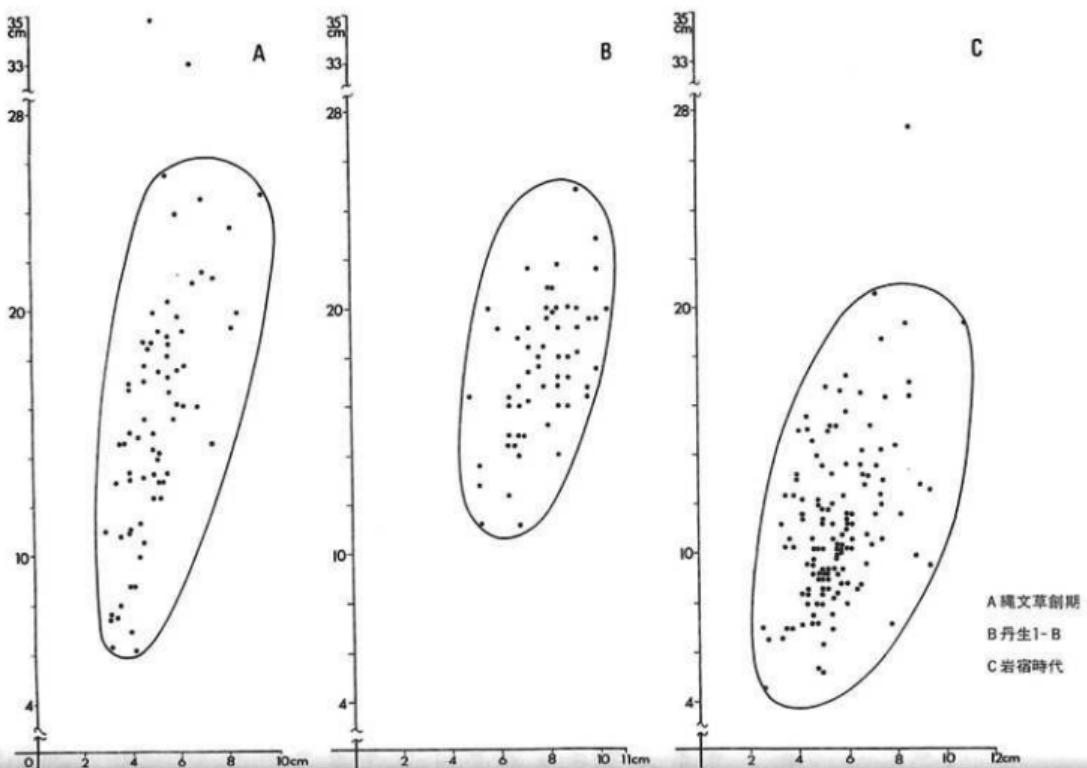
前条書で記す。

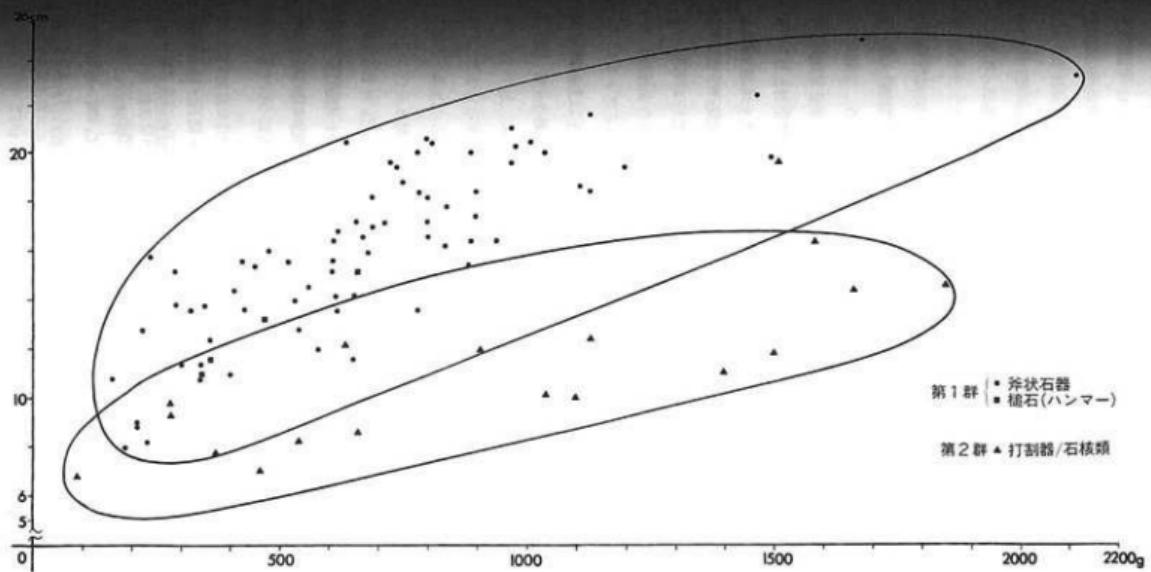
1. 第1～5群までの共伴関係は考え難い。
2. 第3群(ナイフ形石器関連)は独立して考えられ、他の石器群との共伴関係の想定は難しい。
3. 第5群(黒耀石・安山岩製石器群)は石鎚を含み、石材等の点で一括性を考えるので、石鎚を指すとする櫛文時代(早期?)と考えて大過ないであろう。
4. 大分県大野川流域では、櫛文早期段階でチャートの使用率が格段に高くなるという。⁴ 大分県下の研究者は第3群(チャート製石器群)に対して一致して早期説を主張された。筆者もひとまずこの考え方へ従っておきたい。

ただし、斧状石器の所属時期を立川ローム下部相当の可能性ありとする筆者の立場からは、これが同期の石器群でありうることの可能性をいくばくかでも保留しておきたい。石器群中に、剣片の先端に非常に微細ではあるが、連続的なマイクロフレイキングないしリタッチを有するものに、いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器に通ずる要素を認め、岡山県早風A地点や下里本邑のナイフ形石器例などとの関連性を捨て切れないのではないかという立場である。

大分県下あるいは九州全体を含めて見ても、A T下位特に暗色帶付近の石器群について十分な資料的蓄積を欠いている実情は、対比資料を欠くということ同時に、今後に類似の石材を用いた剣片削離法・石器構成からなる石器群の検出がありうることを示唆するものではないだろうか。

5. 第2群(打・割器／石核)は、器種区分の問題はとりあえずおいて、打・割器と対比した場合、平底台例などでは先端が尖りチョッピングトゥール状を呈する形態が目立っていることなどから、早期の可能性よりも後期岩宿時代の前半期の可能性を択りたい。





6. 第1群(斧状石器)は、Ⅲ章で詳述するように、1)立川ローム下部、2)縄文草創期、3)縄文早期、4)その他の可能性のうち、立川ローム下部相当期所産の可能性を第1に選択したい。早期説を採らなかったのは別に記した比較検討結果に加えて、この点の判断を重点課題の一つとする共同研究者・橋昌信氏の判断も尊重させていただいた。

7. 以上から、1-B地点北区の石器群の共伴関係を、A)第1・2群、B)第3群、C)第4・5群の三者と考えたい。したがって1-B地点北区の石器群は、A)後期岩宿時代前半期、B)後期岩宿時代後半期、C)縄文早期の3時期の所産と考えたい。

共伴関係については、ここで若干の補足をしておきたい。A)第1・2群から成る後期岩宿時代前半期石器群は、そもそも丹生問題の出発点から、両者を一体としていわゆる“礫器”として捉えていたという学史的背景も尊重していること。第1群斧状石器の帰属時期について、立川ロームⅨ・X層相当の可能性を第1に選択したことにもなって、同期の関東地方には、局(刃)部磨製石斧にここでいう打・割器／石核が顕著に伴うとされていることの2側面からの判断を主としている。

しかし、逆に第2群を縄文時代早期に属する可能性を何番目かに想定しうるとしたら第1群も、さらに第4群、第5群も早期に一括しうる可能性が高まるとみなければならないだろう。この場合は、第3群／第1・2・4・5群という2グループの共伴関係石器群を想定することになる。

しかし、この考えを選択しなかったことは先に述べたとおりである。

9. 小 結

1-B地点北区は多種多様な石器群から構成され、その共伴関係・帰属時期などはあらゆる可能性を考えうるものであった。しかし、種々の可能性のうち、従来の議論の経過も踏まえて、次の3時期の石器群が混在したものと判断した。

A) 第1群斧状石器、第2群打・割器／石核：後期岩宿時代前葉

B) 第3群良質流紋岩(ナイフ形)石器群：後期岩宿時代後葉

C) 第4群チャート製石器、第5群黒耀石・安山岩石器群：縄文早期

これらが、出土層・出土位置・正確な組成を正しく把握できるものであるならば、それぞれ時期別に石器群の構成と性格を詳しく記述してまとめておくべきであるが、それが叶わぬ以上、本書の成立の背景すなわち丹生論争の現在的帰着点を示すという観点からは、従来の議論の経過と密接なつながりを有するA)斧状石器・打・割器／石核を中心にして、その実態と性格についてまとめし、ひとまずここでの記述を終えることにしよう。

A)ここに同時存在・共伴関係を想定した資料は、斧状石器・同素材・剣片・槌石・打・割器／石核の計115点である。斧状石器は、打削調整技術・形態上の特徴から八つの類型に示される変異を含みながらも、これは素材の形態とそれに応じた2次加工の差に基づくものであって、形態変化の大きさに比較して刃部形成にかかる加工意図の齊一性が高いことから推して、同一器種の製作を目的として作られた単一の石器器種であると判断された。また、研磨・使用痕の分析からは、これが機能的には刃部磨製の石斧であるとの認識に至った。

そして、ここでは、この斧状石器に関連した素材剣片等が明瞭に識別され、製作から使用までの

一連の行為がここでなされていたことが判明した。それらは同時に、打・削器から剝片剝離用の石核までを含む大型石器を伴う。打・削器と石核との区分原理を明確にはしえなかつたが、少なくとも主体は剝片剝離用の石核であり、打・削器と認定し得るものはごく少數であると考えられた。このような判断により、1-B地点北区の石器群はむち丹生遺跡群を代表する石器群は、打・削器(いわゆる禮器)主体の石器群ではないことがここに明らかになった。

したがって、本地区的石器群は、A)斧状石器を主体にし、この制作過程および使用の痕跡を明確に示すとともに、剝片剝離用の石核を多く含み(ここから剝がされた剝片およびそれから作られた道具類ははっきりしない)、そこに少量の打・削器を有した後期岩宿時代前葉に属するものである可能性があります第1に考えられる生活圏であると理解することができる。

この他に、B)ナイフ形石器を含む良質流紋岩製の一群がある。ナイフ形石器は小型薄手の石刃状長剝片を素材とするものである。その他の石核・剝片は、ナイフの素材をこのように理解すると、これと技術的に必ずしも関連性が高い資料群であるとは言い切れない。むしろナイフ形石器とは異質の石核・剝片類で主として構成されている。一方表抜資料中に翼状剝片石核を含み、発掘品の中にその石核素材たりうる盤状剝片(?)を含む点からみて、ここに九州型ナイフ形石器と瀬戸内系の石器群の2者を読みとることもできる。これを本来の共存とみるか、別個の石器群と見るかについては議論のあるところであろう。とりあえず、ここではその事実のみを指摘しておきたい。

①第4・第5群のチャート・黒耀石・安山岩石器群の存在は、当地の石材の利用傾向やその内に石核を含むことから、それが当時の石器組成を十分に満たしていない、痕跡は断片的なものであるにせよ、明らかに縄文時代(早期)の生活の跡を見て取ることができる。そして、チャート製の石器群については、A群との共存関係の可能性もなしとしないこと、黒耀石・安山岩石器群は、第2群とそもそもかすると第1群との共存関係も完全に否定しえないことから、石器群全体の共存関係の評価の鍵になる位置を占めているとも見ることができる。

なお、丹生遺跡の問題の焦点は1-B地点北区の斧状石器群にあるが、同様の資料は1-B地点東南区、1-A、1-D地点、出土地点不明資料中にもある。事情は打・削器類についても同じであり、製作技法・器種認定・帰属時期などの検討は、これら全資料を対象としてなされる必要があり、本書の構成上、Ⅲ章“丹生遺跡群と岩宿文化”で再論詳述することとする。

(鈴木・竹内)

註

1)『丹生綜括篇』(昭和43年)、71頁。

2) 同上。

3) 作表にあたっては、次の文献を利用した。a)岡本東三「長者久保文化について」(『奈良国立文化財研究所学報』第35編所収、奈良、昭和54年); b)北陸旧石器文化研究会『旧石器時代の石斧』(富山、平成元年); c)長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧-形態変化論を視点として」(『先史考古学研究』第3号所収、東京、平成2年)。

参考までに1-B地点出土の第1群:斧状石器の石質・重量を示しておく(押田No石質・重量の順)。第2群石器については第28表(織笠論文)参照。

No.1: 褐: 725g, No.2: 褐: 970g, No.3: 褐: 1500g, No.4: 流: 480g, No.5: 流: 425g, No.6: 流: 785g, No.7: 流: 290g, No.8: 流: 620g, No.9: 流: 300g, No.10: 褐: 900g, No.11: 流: 360g, No.12: 流: 610g, No.13:

流: 340g, No.14: 流: 430g, No.15: 流: 530g, No.16: 流: 610g, No.17: 流: 800g, No.18: 流: 610g, No.19: 流: 1470g, No.20: 流: 1350g, No.21: 縫: 890g, No.22: 流: 715g, No.23: 流: 800g, No.24: 流: 650g, No.25: 流: 835g, No.26: 流: 560g, No.27: 流: 970g, No.28: 流: 580g, No.29: 縫: 220g, No.30: 流: 1010g, No.31: 流: 940g, No.32: 縫: 810g, No.33: 流: 750g, No.34: 縫: 450g, No.35: 流: 670g, No.36: 流: 410g, No.37: 縫: 640g, No.38: 流: 620g, No.39: 縫: 1200g, No.40: 流: 800g, No.41: 縫: 690g, No.42: 流: 740g, No.43: 流: 840g, No.44: 流: 680g, No.45: 流: 650g, No.46: 縫: 520g, No.47: 流: 900g, No.48: 流: 160g, No.49: 縫: 320g, No.50: 縫: 230g, No.51: 縫: 1130g, No.52: 流: 1680g, No.53: 流: 980g, No.54: 流: 540g, No.55: 縫: 350g, No.56: 流: 615g, No.57: 縫: 1130g, No.58: 流: 340g, No.59: 縫: 780g, No.60: 縫: 800g, No.61: 流: 2120g, No.62: 流: 690g, No.64: 縫: 400g, No.65: 流: 885g, No.66: 流: 890g, No.67: 流: 650g, No.68: 流: 590g, No.69: 流: 580g, No.70: 流: 240g, No.71: 流: 290g, No.72: 縫: 210g, No.73: 縫: 185g, No.74: 流: 230g, No.75: 流: 270g, No.76: 縫: 210g, No.77: 流: 170g, No.78: 流: 410g, No.79: 縫: 660g, No.80: 流: 340g, No.81: 縫: 360g, No.192: 流: 1040g, No.194: 流: 450g, No.195: 流: 1110g, No.196: 流: 1000g, No.202: 流: 1940g, No.203: 流: 1370g, No.210: 流: 780g

4) 共同研究篇論文参照。

第4節 第1地区B地点東南区

1. 土層

東南区の土層は第5次調査S・Tトレンチ、第1次調査のAトレンチにおける記載がある。地点は近接しているうえに、相似した状況にあるので、Aトレンチによってそれを示し、S・Tトレンチとの対比関係を示しておく。

Aトレンチの土層は以下のとおりである(第81・82図)。

第1層 砂と細かい粘土と有機物の混ざる鼠色ないし黒褐色表土層(厚さ約10~20cm)。

第2層 黒褐色の細かい粘土を含む土層で、乾燥し易く、乾燥すれば灰色に変色し、脆弱になる(厚さ約10~20cm)。

第3層 水を含むと黝んで見え、砂混りの更に粘土の多い淡褐色層。第2層より乾燥速度は遅い(厚さ約10~25cm)。

第4層 青灰色、赤褐色ないし黄褐色の綿状粘土層(厚さ約240cm)、非常に堅硬かつ緻密である。深掘部では、この粘土層の上面から1m位で、厚さ4.5cmの褐鉄鉱沈殿層がある。

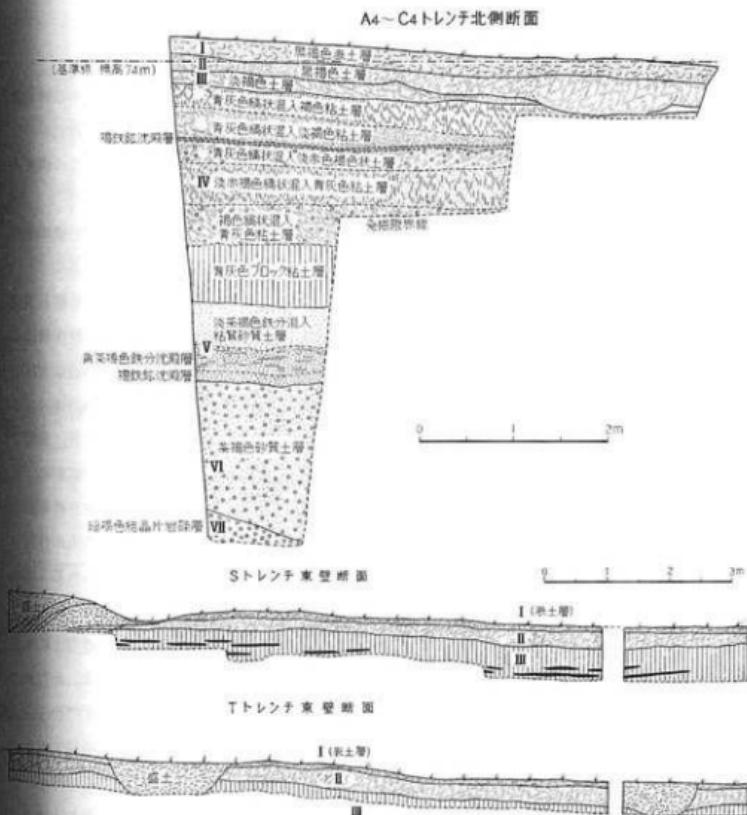
第5層 茶褐色粘質砂質土層(厚さ約80~90cm)。

第6層 砂層(厚さ約140cm)。

第7層 暗褐色結晶片岩疊層(クサリ疊層)という層序を示している。

このうち第4層以下が、地質学上尋常な地層であって、大在層に相当し、第4層以下の諸層は丹生泥層、第7層は志村砂疊層にそれぞれ該当する。それにひきかえ第1~3層は、いわば疑層であって、2次堆積、3次堆積による表土の性格を有する地層である。第3層は、Aトレンチにだけ現れた層で、Cトレンチでは人工的な削平を受け、Dトレンチでは自然に流失していた。

S・Tトレンチにおける土層は以下のとおりである。

第31図 1-B地点東南区A₄~C₄トレンチ北壁土層断面図(上), S・Tトレンチ東壁土層断面図(下)

第1層 表土, 10~15cm(Aトレンチ第1層相当)。

第2層 灰黄褐色の砂混じり粘土層, 15~35cm(Aトレンチ第2・3層相当)。

第3層 丹生泥層(Aトレンチ鰐状粘土層相当)。

以上のように, S・Tトレンチは, Aトレンチとほぼ同一の層序を示す。このうち第2層は陸成層で, 海成の丹生泥層が陸化して浸蝕をうけ, その浸蝕面に堆積した薄い層であるとされる。

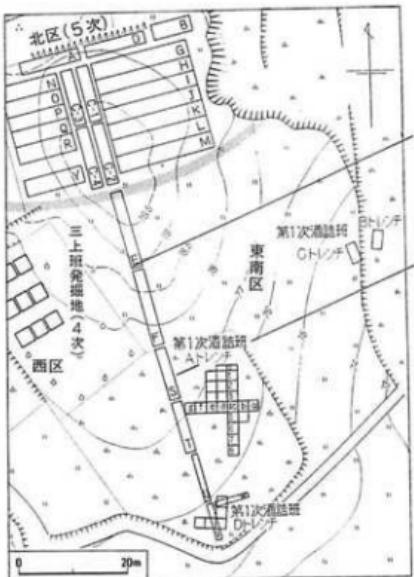
第32図 1-B地点東南区
Aトレンチ深掘状況

2. 遺物・遺構の出土状況

1) 遺 物

遺物を包含していたのは、Aトレンチの第2層・第3層で、DトレンチではAトレンチの第2層に当る第2次堆積層であった。Aトレンチでは、第3層に突っ込んだ形で遺物が発見されたが、これはこの粘土層上面が生活面になることを想定する好材料となろう。遺物は、全般的にこの調査区の東北寄りに多く、西南寄りに進むに従って漸減する。

S・Tトレンチでは、石器類は陶磁器片とともに地表面や表土・搅乱土層から出土した(第83図)。



第83図 1-B 地点東南区斧状石器出土位置図



出土トレンチ不明

2) 遺 構

Aトレンチ Id区より配石遺構が検出されている。検出層は3層上面であるが、構造は大は20cm前後から小は5cm前後に亘る大小30個以上の礫片を、長径1m、短径75cmほどの範囲に、西端が幅広く東端が尖る卵型状に配し、中に明らかに火の作用を受けていると認められる3個の半割礫のはかは、炭・灰の如きものが皆無で、附近の土にも焼けた痕跡を認め得ず、ただ周辺に数点の土器の小片の出土を見たのみであった。時代・性格とも不明と報告されているが、当然のことながら石器や土器との関連を考えておく必要はある。

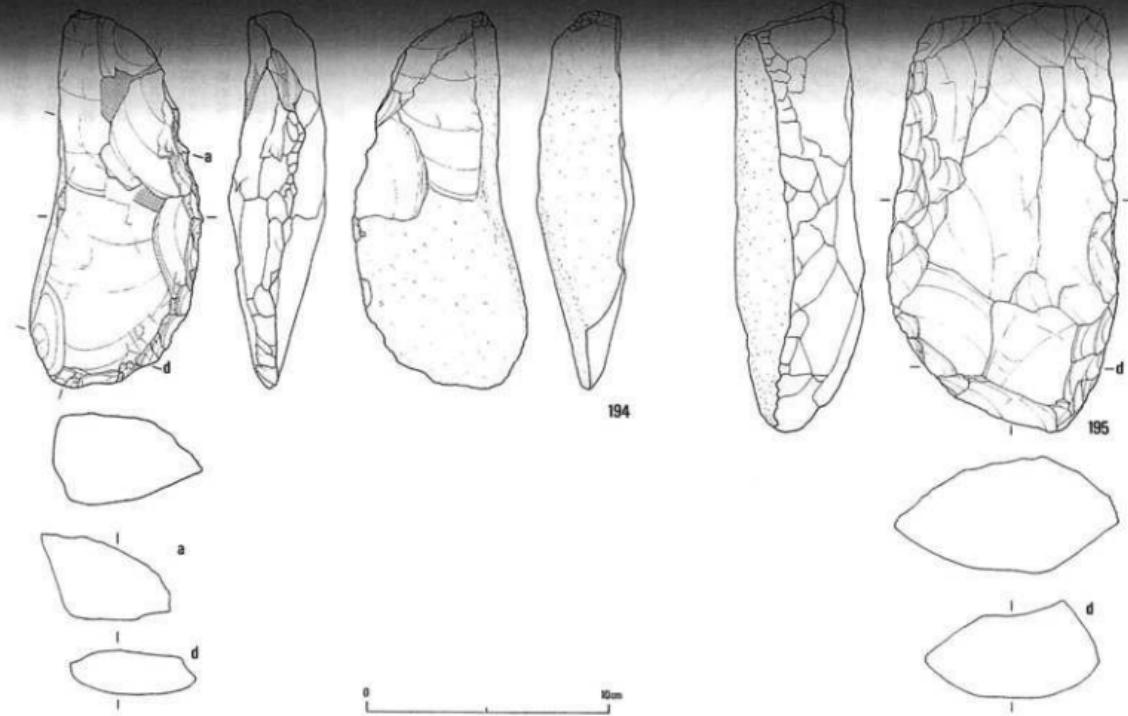
3. 石 器

第1・5次調査分合わせて119点の石器と若干の土器が出土している。第3表に示したように、このうち85点が脛島産黒耀石製で、全体の73.9%を占める。主体は小型の剥片石器および剝片であるが、この他に石核2点、礫器が6点ある。小型の定型的な石器は無茎石鏨5点が特徴的で、その他は加工痕ある剝片・使用痕ある剝片である。

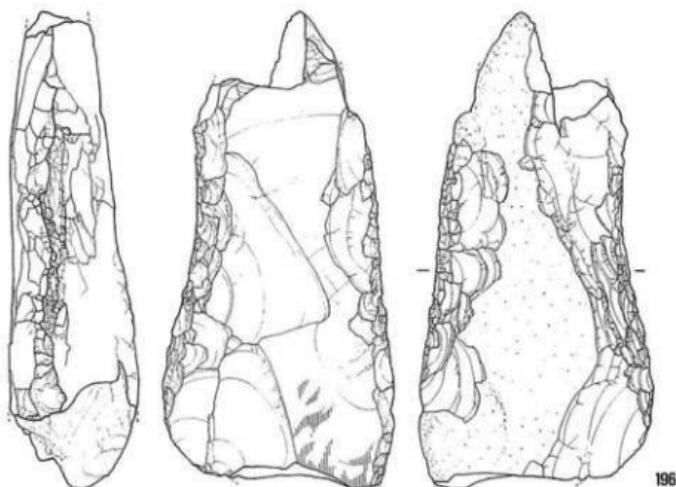
本報告の発刊の主旨に従って、斧状石器および石核について簡単な記載をしておく。

A) 斧状石器(第84・85図、図版Ⅵ)

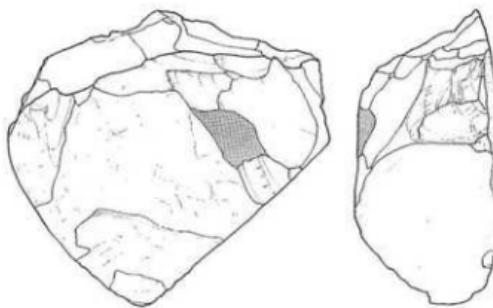
No.194 中型の円礫を半裁するか、これよりも大きな礫から打ち削がした剝片を素材とする。下端部裏面側に素材の原形を断ち切ったような剝離面が認められ、さらに自然面の上方に素材剝離面と同段階に生じた同じ性格の大きな剝離面が認められること、表面側下方にも2次加工の前に素



第84図 1-B地点東南区石器実測図 1)



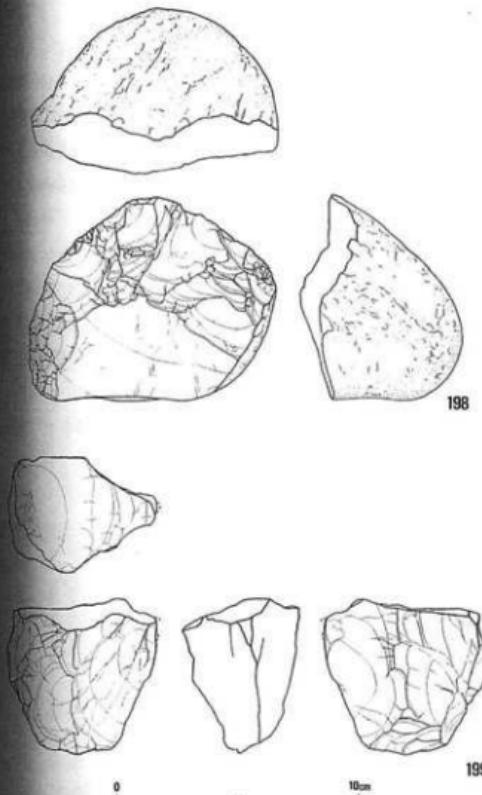
196



197



第85圖 1-B 地点東南区石器実測図 2)



第86図 1-B地点東南区石器実測図 3)

No196 大型円礫から打ち取られた剝片を素材とする。自然面側上・下端に素材剝片に対する2次加工前の粗調整の剝離痕を留め、表面側には素材剝片の主剝離面が広く残っている。2次加工は表面に施されるが縁辺部に限られる。表面側(主剝離面)の下方には、かすかであるが広く磨痕が認められこれが刃部に連なった部位であったことを推測させる。したがって、本例は刃部磨製であり、現状は刃部の主要部を欠失したものであろう。北区斧状石器第V類に相当。

印打・割器/石核(第85・86図)

No197 大型円礫の分割素材を利用する。表面側・右側はともに節理面から成るが、後の欠損品ではなく、分割面であろう。礫面側から連続的に打撃が加えられ、作業面の縁辺は弧状を呈する。幅広で絶長の剝片が相当量取られている。打面に相当する礫面と作業面のなす角度は、幾分鋭角であり、打器状の刃部から形成されていると言えなくもないが、大型の礫片に加えられた剝離作業

材の厚さを均等にするためと考えられる大きな剝離面が認められること等を重視すれば、剝片素材の可能性が高い。北区疊器第IV類に相当。2次加工は自然面側ではなく素材の剝離面側の右側縁にのみ縁辺に沿うように浅い剝離が施されている。

No198 大型円礫を半裁するかあるいは大型円礫から得られた剝片を利用する。2次加工は全縁辺から加えられ、ほぼ片面全面加工となっているが、中央に素材の剝出の際の旧い剝離面を留める。一端を欠失するが、現存状の下端部が側縁の加工よりも角度が鋭角で、体部中心部に深く伸びているので刃部形成の可能性を考えることも可能である。断面は凸レンズ状を呈する。北区斧状石器第V類に相当。

量の多さからみて、石核と解すべきではなかろうか。

No198 チャートの円錐を層理面に沿って半割し、この分割面の一端から剥片がとられている。細かく何度も打撃が加えられていること等から、打削器類とみるよりも石核を見るべきであろうか。

No199 全面剥離面に覆われた角柱状の塊状石器である。上端(打面側)を欠いているので、正確な判断はできないが、上方から幅広縦長の中型剥片を取った石核の可能性とシャープな横断面を形成する側に刃部作出が意図された一種の打削器と見る解説も可能であろう。円錐素材の例としては、他に分割礫(未加工)1点がある。

4. 小 結

当地区からは1-B北区出土例と類似の大型石器が3点出土している。E・Sトレンチで各1点と出土トレンチ不明が1点である。Eトレンチは北区に接していることを考慮すれば、当地全体がブルドーザーによる削平を受けているとは言え、東南区の一部にも、北区に特徴的な大型石器の分布域が、本来延びてきていた可能性を考えておかなければならないかもしれない。

(鈴木・竹内)

註

- 1) a)『丹生1・2次概報』(昭和39年); b)『丹生綜括篇』(昭和43年)。
- 2) 『丹生綜括篇』(昭和43年), 第9・10図。
- 3) 註2), 第8図。

第5節 第1地区B地点西区

1. 土層および遺物の出土状態

西区の土層は以下のとおりである(第87図)。

第1層 黒色の表土層, 10~15cm(第1次調査Aトレンチ第1層相当)。

第2層 茶褐色粘土層, 4~14cm(第1次調査Aトレンチ第2・3層相当)。

第3層 砂を含む黄褐色粘土層(第1次調査Aトレンチ第3層相当)。



第87図 1-B地点西区Aトレンチ北壁土層断面図

遺物の出土層は、第1・2層に限られていた。ここは手作業によって開墾された桃畑であったので、良好な堆積条件が得られるのではないかと期待されたが、遺物の出土層は結局、2・3次堆積による表土の性格を有するものであると判断された。

2. 石 器

A) 打・削器／石核(第88図)

西区からは69点の石器が出土した。このうち約60%をチャート、約30%を黒耀石がしめている

(第3表)。細片が多く打・割器/石核類2点の他は加工痕ある剝片・使用痕ある剝片を少量含むにすぎない。第4次の概報にある石鎌は確認できていない。打・割器/石核類器2点について簡単な記載をしておく。

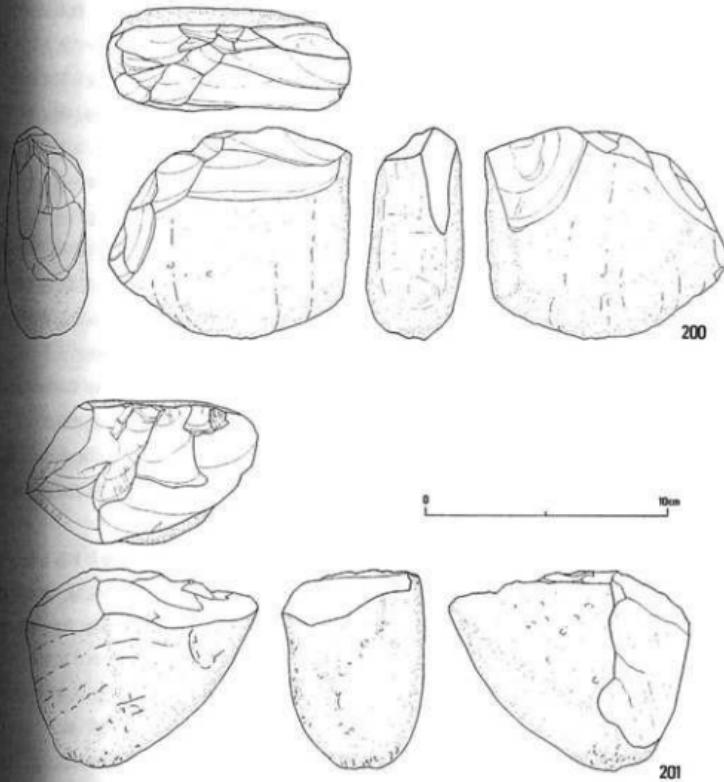
16200 扁平な円礫の一端を主として片側から打削した、いわゆる打削器である。流紋岩製で風化が激しい。打削面の右半分は剝離角が大きく、したがって鋭いエッジを形成する反面、左半分は剝離角がほぼ直角であり、剝離痕の末端がステップしていることもある。エッジは鋭くない。この点は石核を想起させる。

16201 分厚い円礫の礫表から数度にわたって打削が加えられたことを示している。一見して打器状だが、剝離角は全てほぼ直角に近く、石核を思わせる。

(鉛木)

註

1)『丹生4次概報』(昭和41年)。

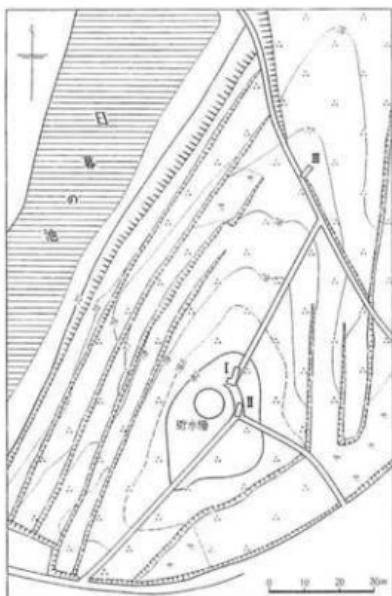


第88図 1-B地点西区石器実測図

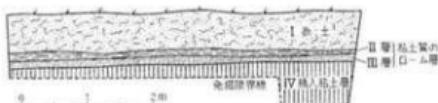
第6節 第1地区A地点

1. 発掘の経過

1-A地点は、昭和37年2月中村俊一・富木隆氏によって、最初に問題の石器が発見され、丹生遺跡発掘調査の契機となつた地点である。¹⁾そこで第5次調査(昭和41年9月27日～10月12日)において、試掘班が調査を実施することとなつた。²⁾



第89図 1-A地点地形・トレーナー配置図



第90図 1-A地点第1トレーナー東壁土層断面図

第4層 青灰色粘土層。褐鉄鉱の鉢が入っている。丹生泥層に相当する。70cm以上。

4. 遺物の出土状況

1-A地点は、先に記述したように、丹生遺跡発掘の契機となる記念すべき地点である。しかし、丘陵の頂部一面がブルドーザーにより破壊されているため、発掘の成果を求めるることは、最初から

2. 位置・地形・トレーナー

第1地区は、大字丹生字日暮、辻、長迫に属する。A地点は字辻に属し、南北に伸びた「日暮の池」の東に接する細長い丘陵上に位置する(第89図)。トレーナーは、標高80mで丘陵の最高所にあたる場所に設けられた。ここには大型の円筒形貯水槽が設置されており、その北側を第1トレーナー、東側を第2トレーナー、丘陵の北端部を第3トレーナーとした。第1トレーナーは、L字形トレーナーである。トレーナーの詳細については不明である。

3. 土層

1-A地点の土層は各トレーナーを通じて、基本的に共通で4層に分けられる。第1トレーナー東壁で代表しておく(第90図)。

第1層 褐色の表土層。ブルドーザーによる擾乱層である。約50cm。

第2層 砂混りで粘土が多い褐色ローム層。上部に移行するにつれて褐色度が高まる。約90cm。

第3層 第一次堆積にかかる褐色の粘土質ローム層。腐植を含むロームの薄い鉢を挟む。約20cm。

認めなかった。第5次調査にあたり、地層を確認する目的により、トレンチを設け調査を行った。遺物は、第1層より若干の弥生式土器片が発見された。石器はまったく出土せず、したがって1-A地点の石器8点はすべて表採品である。

5. 石 器

1-A地点では、8点の石器が確認された。その内訳は、斧状石器2点、RF2点、UF1点、石核1点、剝片2点である。

A) 斧状石器(第91図、国版Ⅷ上段左)

No202 直方体の分厚い礫を素材にし、その両面に加工を施したものである。重量が1.95kgあり、相当重い石器である。刃部表面は、器幅ほとんどを占める大きなえぐりの深い左方向からの剥離により成る。これは、使用により生じたとも考えられる。右側面は、裏面左側縁全体に施されている浅い貝殻状の剥離を覆うように、表面より裏面方向への細かく立ちあがる加工がなされている。表面上半分には、左右から浅い貝殻状の剥離が加えられ、一見すると、握り状を呈す。裏面側は、右から浅くスライスするような比較的小さな貝殻状の剥離と、左側面全体に施されている浅い貝殻状の剥離によって形成されている。1-Bの斧状石器の分類に従えば、Ⅶ類となる。

No203 直方体の分厚い礫を素材にし、片面にのみ加工されたものである。重量が1.42kgある。加工部位は、下端から右側面に渡る。剥離方向はすべて裏面から表面に向けて行われ、かなり立ちあがりぎみに施されている。剥離痕には、統一感があり、ほぼ同じ大きさの幅広剝片が生じたと考えられる。上部は節理により欠損している。1-Bの斧状石器の分類に従えば、Ⅱ類に属す。

B) RF(第92図)

No204 背面はほぼ全周から求心的に剥離が入り、中心部が山状を呈すやや厚みのある剝片である。円盤状石核より取られたと考えられる。打面は節理面を使用している。背面左側縁下部に細部調整が見られる。

No205 幅広で厚い打面を留め、打留が非常に突出した剝片である。打面は、数回の打面調整により形成されている。下端部は欠損している。背面右側に細部調整が認められる。右側縁は、全体に使用痕が見られ、また左側縁にも断続的に見られる。

C) UF(第92図)

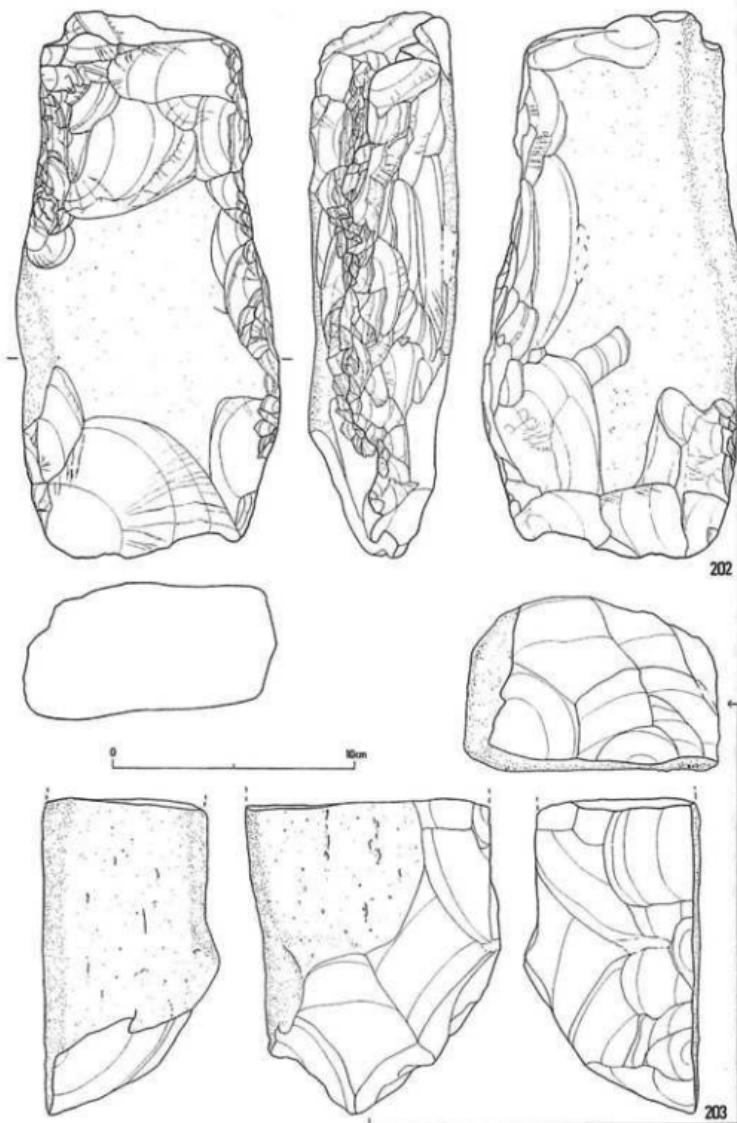
No206 やや小型で薄い石刃である。上端及び下端は欠損しているため打面は見られない。背面加工はすべて長軸方向に平行する。背面右側の剥離面は石核の素材剥離面と考えられるボジ面が残っている。使用痕は両側縁に断続的に見られる。

D) 剥 片(第92図)

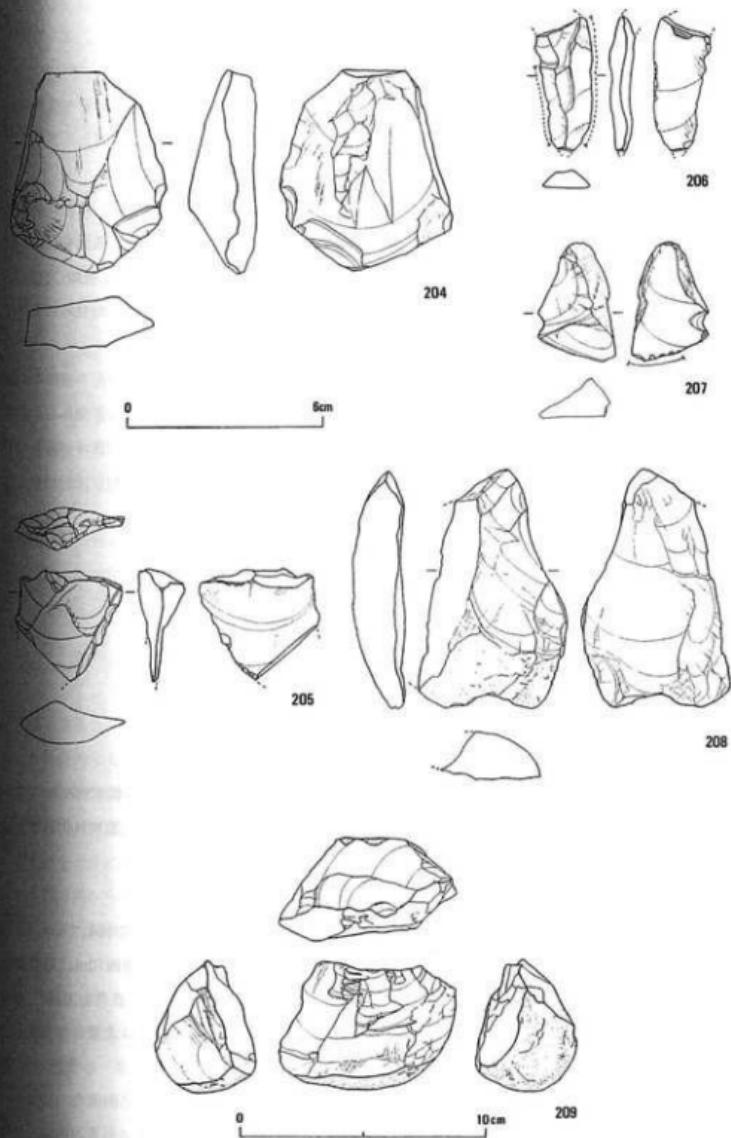
2点確認されているが、共に剝片剥離作業過程の特定な特徴を示すものではなく、いわゆる不定形剝片である(No207・208)。

E) 石 核(第92図)

円錐を素材にしたもので、細粒の流紋岩が使用されている。正面は上面を打面にして、貝殻状の剥片が数枚とられている。背面側は正面での剥離作業の打面になる面と、旧剝片剥離作業面から成



第91圖 1—A 地點石器實測圖 1)



第92図 1-A 地点石器実測図 2)

る。打面と作業面を交互におきかえながら剥片剝離がなされたことが分かる(No209)。

以上の資料群から、当地点において確認されることを見て行く。大型の石器2点は、I-B地点から大量に出土した斧状石器と類似し、また距離的にも近いところから、同種の石器と考えられる。それぞれの特徴は、No202がI-B地点での分類のⅦ類に属し、側面が表面裏面に対して直角に近い角度で細かく丁寧な加工がなされている。No203はI-B地点での分類のⅡ類に属し、刃部から片面側全体に加工が施されている。

剥片・石核より2~3種類の剥片剝離技法が予測される。剥片No207・208からは、背面に示された剝離痕の特徴から、円盤状石核の剝離技法が考えられる。石核からは、先立つ作業面を打面に転用して剝離作業を行い、打器状の残核を残す技法を読みとるが可能である。これら2種類の技法は、作業工程は異なるが得られる目的剥片は類似しており、逆三角形状の剥片である。時期的にも技法上も近い関係であると思われる。

石刃が表採されている事から、当然石刃技法の存在が示唆される。この剥片は背面右側にボジ面を残している。この車から、分割標を素材としその分割面を石核側面に置き、木口面側から連続的に剝離作業を加える技法が考えられる。当地点において確認された石刃は、石核の素材剝離面側で剝がされたと理解できる。同種の技法を岩戸6^上に見ることができるため、この剥片は岩戸6^上の時期のものと考えられる。

(田舎谷)

註

- 1)『丹生1・2次概報』(昭和39年)。
- 2)『丹生総括篇』(昭和43年)。
- 3) 清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄『岩戸遺跡』(大分、昭和61年)。

第7節 第1地区D地点

1. 発掘の経過

I-D地点は、昭和37年10月の富木班による第1次調査¹⁾、昭和41年9~10月の鎌木班による第5次調査の2度に亘って調査された。²⁾同地点は丘陵の先端(北半)部の開墾の際に石器や貝化石が発見された。このために、未開墾部に調査の手が加えられた。

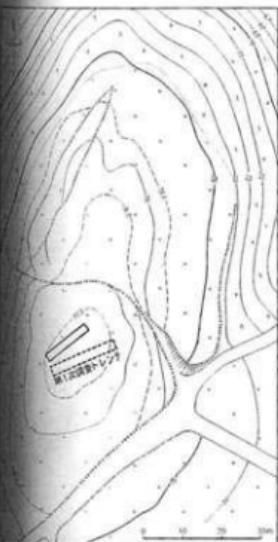
2. 位置・地形・トレンチ

I-D地点は深い谷を隔てたA地点の東に並ぶ舌状の丘陵で、地籍上は字辻に属している(第93図)。発掘地は丘陵頂部標高88mの地点に相当する。第1次調査では、ここに東西10m、幅2mの第1トレンチを設け、東より2mごとに1~5区とした。逐次拡張し、第8トレンチまで設定した。第5次調査では、この北西側にこれとはば平行して14×2mのトレンチを設け、北東より2mごとにA・B・C…区に区分し調査を実施した。

3. 土層

土層は第5次調査(第2トレンチ)を基準に述べる(第94図)。

第1層 黒褐色表土層。耕作土で柔らかい。約30cm。



第34図 1-D地点地形・トレンチ配置図



第34図 1-D地点トレンチ北壁土層断面図

4. 遺物・遺構の出土状況

第1層上半部では弥生時代前～中期の土器片が多数出土した。また同層からは弥生時代中期の居住地が検出された(第3・7・8トレンチ)。石器が主として発見されたのは、第4・5トレンチ第2層中においてであった。また第5トレンチの西寄りでは小円錐20個ほどと大型扁平錐2個からなる配石が同層から検出された。ただし、この性格や年代は明らかにすることができなかった。

第5次調査では第2層最下部から弥生時代前期の土器とは著しく相違する土器小破片2点が出土した。縄文式土器の疑いももたれるが、押型文土器に伴存する無紋土器とは考えられないとされている。この他に剝片数点の出土があった。

5. 石 器

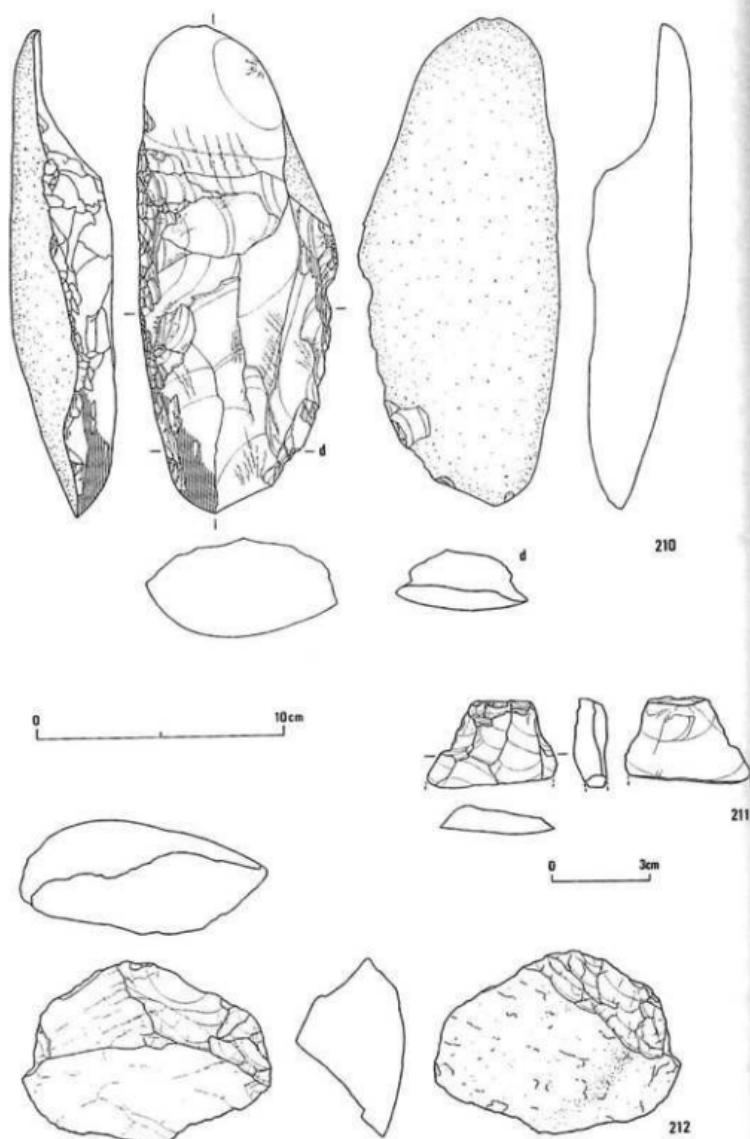
発掘・採集合わせて十数点の資料から構成されると推測されるが詳細ははっきりしない。このうちから特徴的なものを記載しておく(第95図)。

No.210 長柄円錐を用いた斧状石器。円錐の片面のほぼ全面を打削加工している。側面側から特に念入りに、刃部は器体に平行する長い打削を加え、鋸角の刃部を作り出している。刃部には打削の痕跡を十分に留めつつも、しっかりした研磨が加えられている。研磨痕の残る部分の右側は刃部先端方向からの打削によって剥ぎ取られている。使用時の欠損か刃部再生によるものか判断しかねるが、興味深い。自然面からなる裏面側には使用によるダメージを示すとみられる剝離面を認めることができる。流紋岩製。重さ780g。1-B地点北区斧状石器V類相当。

No.211 幅広の打面を留めた、綾長剝片であろう。頭部調整が顕著である。流紋岩製。
剝片はこの他にも若干の資料が報じられている。

No.212 円錐の一端両面に剝離痕を留める一例で、おそらく割器か石核であろう。下半を欠損するうえに、表面側左半分が節理面となっている為に旧状を十分に推測しえないが、自然面側と表面側の両面に数度加削を行なったもので、いわゆる割器状を呈する。流紋岩製。

I-D地点の石器群の実態は十分に把握しきれないが、斧状石器・割器?を含む点で、1-B地



第95圖 1—D地点石器実測図

該区の石器群に共通性があり、丹生石器群を考える際に見逃しえない地点であろう。

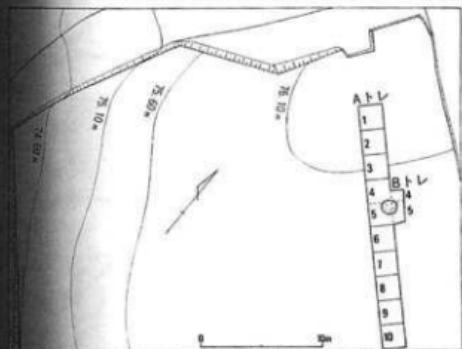
(鈴木)

- 1) 『丹生1・2次概報』(昭和39年)。
- 2) 『丹生縄括編』(昭和43年)。
- 3) 1), 第12図。
- 4) 2), 第72図。

第8節 第2地区E地点

1. 発掘の経過

2-E地点は、昭和37年10月、第1次調査の際、堅田・安井班によって発掘された。¹⁾



第96図 2-E地点地形・トレンチ配置図

2. 位置・地形・トレンチ
2-E地点は字野間に所属する。道路を隔てたA地点とともに標高86mの丘陵中央部に位置する。トレンチは東南20m、幅2.1mで、北から2mごとにA1～A10区としたAトレンチと、層位確認のための小規模なBトレンチが設けられた(第96図)。

3. 土 層

当地点の土層は以下のとおりである(第97図)。

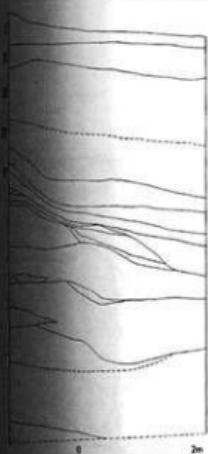
- 第1層 腐植表土層。約15cm。
- 第2層 暗茶褐色砂質土層。
- 第3・4層 淡黄色風化粘土層。丹生泥層再堆積層。
- 第5層 酸化鉄沈殿層。小礫をレンズ状に含む。

4. 遺構・遺物の出土状態

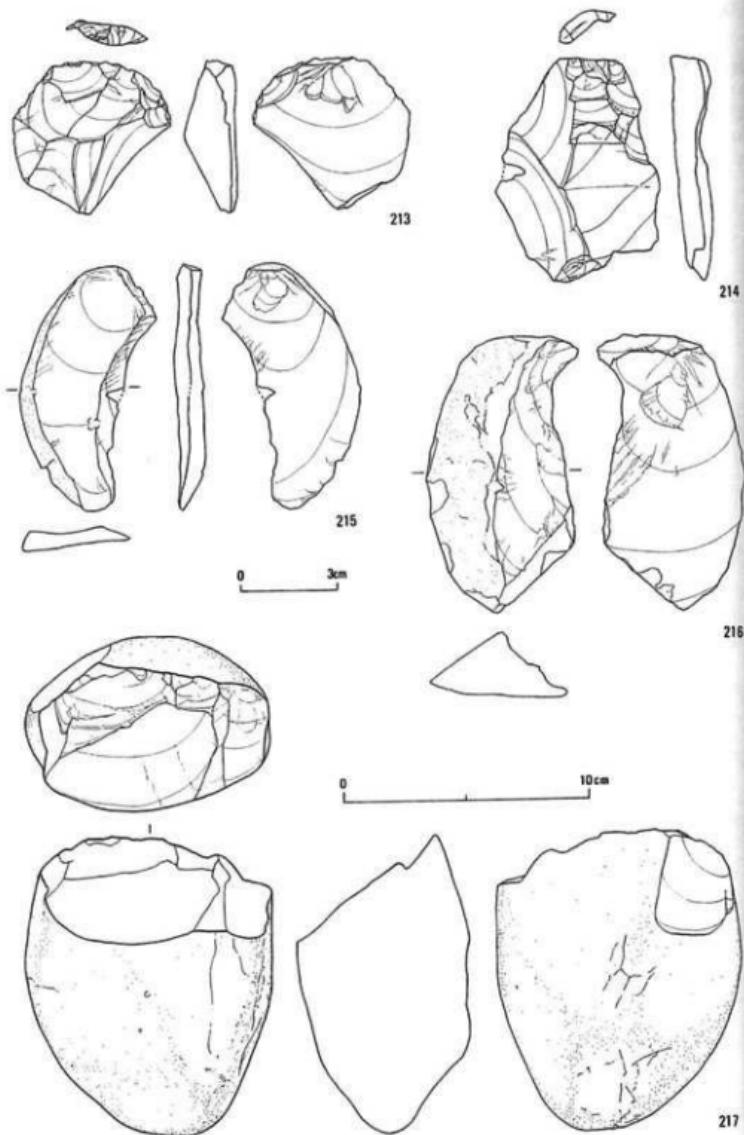
第1層中には土師器片らしい土器片を若干含み、第2層中には黒耀石・ホルソフェルスの剝片を包含する。Bトレンチの同層中からは、夜臼式と目される土器片に姫島産黒耀石製石器・剝片が出土した。またA4・5区第2層では、その上面から掘り込まれた楕円形のピットが検出された($1.3 \times 1.1 \times 0.6m$)²⁾。ピット中からは石器および剝片散点が出土した。

5. 石 器

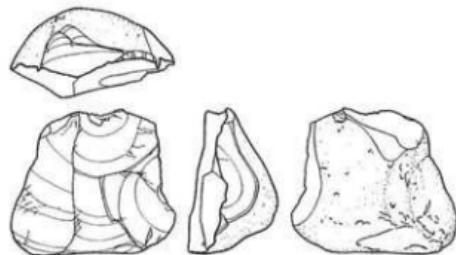
石器は表採品を含めて約60点である。ほとんどが姫島産黒耀石



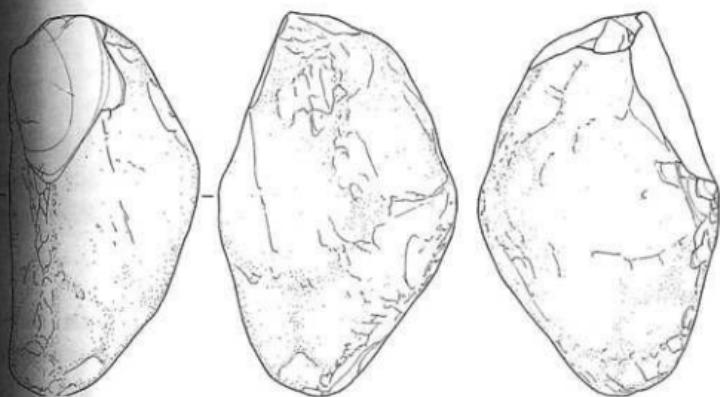
第97図 2-E地点
トレンチ北壁土層断面図



第98図 2-E地点石器実測図 1)



218



219



0 10cm

第99図 2-E 地点石器実測図 2)

片で他に石鏃2点、磨石3点、磨製石斧片1点など縄文時代以降の所産と考えられるもので占められる。この他の主たる石器を以下に記載しておく。

A) 剥 片(第98図)

4点のうち2点は幅広縦長ないしは逆三角形状の剥片で、顯著な打面と求心的な方向での剥片剝離作業を示す2次剝離面に特徴がある(No213・214)。No214はピット中出土で、流紋岩製。他の2点は、大きな打面を有する縦長剥片で1側縁に自然面を留める(No215・216)。

B) 石 核(第98・99図)

上端右側縁に打面を有し、他方向から剥片を剝離した扁平円盤状を呈する石核がまず目をひく(No218)。求心的方向の2次剝離面を有する剥片2点と対応するものであろう。他の2例は厚手大型の一端両面に打削の加えられた例であるが、この内1例は両面の位置関係はそれが割器であったというよりも、石核と見るべきことを示唆している(No219)。残りの1例は裏面側に1面の剝離痕を有するものの主とした剝離は正面側であり、いわゆる打器状を呈するとはいへ、剝離面の性状と剝離角等からは、打・割器というよりも石核を想起させる(No217)。

(鈴木)

註

- 1) 『丹生1・2次概報』(昭和39年)。
- 2) 註1), 第20図。

第9節 第2地区F地点

1. 発掘の経過

2-F地点は昭和38年10月8日～21日に行われた第2次調査で小江班が調査している。¹⁾ 第2地区からは中村・富木両氏によって石器が発見されているが、同地点は、ブルドーザーの被害を免れていたために、調査地点として選ばれた。

2. 位置・地点・トレンチ

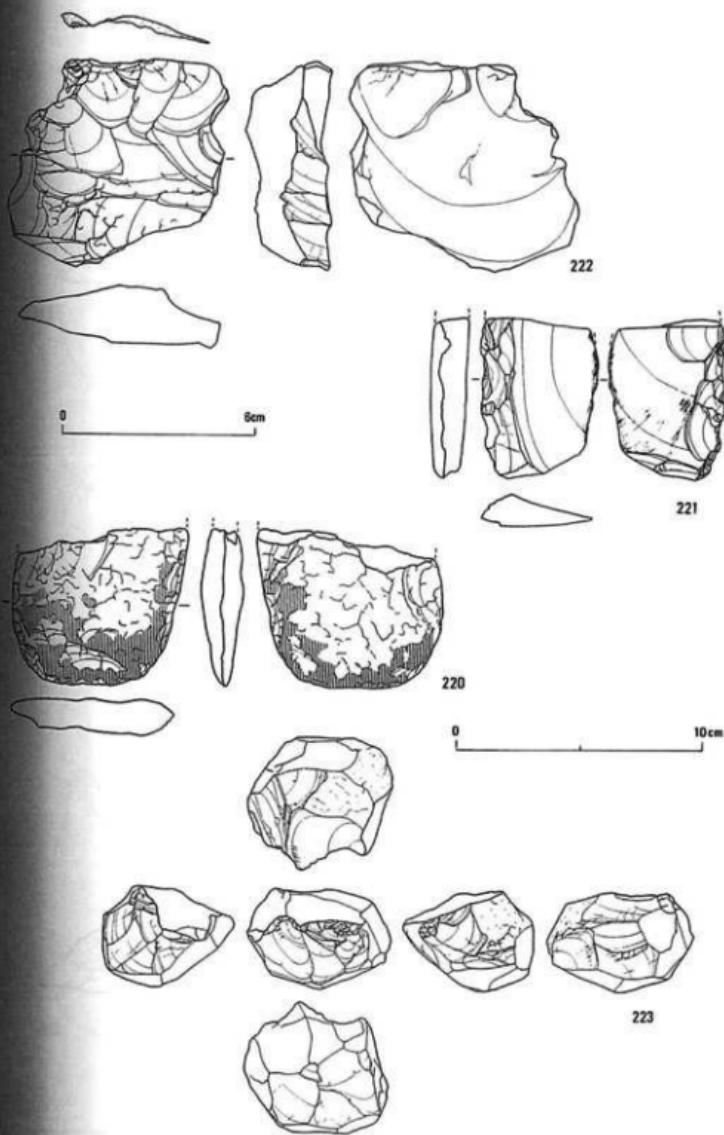
第2地区は大在村方面から台地の西辺を通って南に通ずる主要道路が台地の南縁に達した部分の東側にある地域で、大字丹川字野間に属する。F地点の発掘は、F地点の真中を通って東南の字野間に沿うて通ずる未開墾の農道が対象とされ、そこに長さ20m幅2mのトレンチを掘ることによつて実施された。このトレンチは5×2mの小区に分けられ、それは西から東へかけてa・b・c・dと名づけられた。

ついでこのトレンチの層位を更に確かめるため、a区に接してこれを西に延長して、O区(5×2m)、ついでP区(長さ、北側5m、南側4m)を、また東へ拡張し、d区に接してe区(5×2m)、f区(8×2m)、g区(8×2m)を設定し、トレンチの全長は51mとなった。レベル、位置等の記録が残されていなかったため、分布図は作成できなかった。

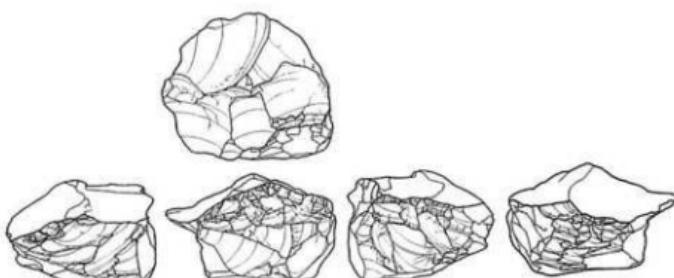
3. 土 層

2-F地点の土層は第1～5層に区分される。

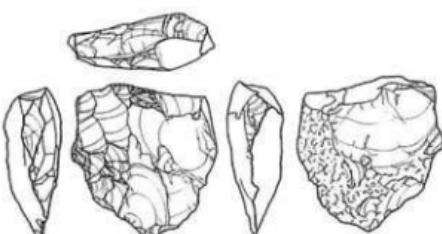
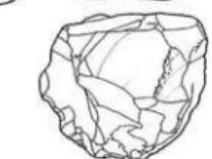
第1層 15～50cmの腐植土からなる表土層。



第100図 2-F地点石器実測図 1)



224



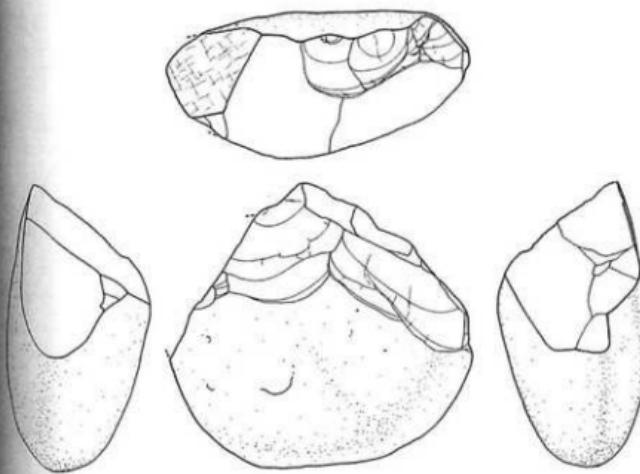
225



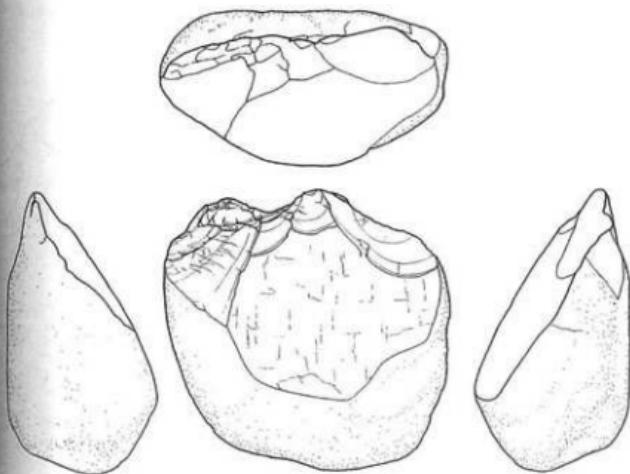
226



第101図 2 - F地点石器実測図 2)



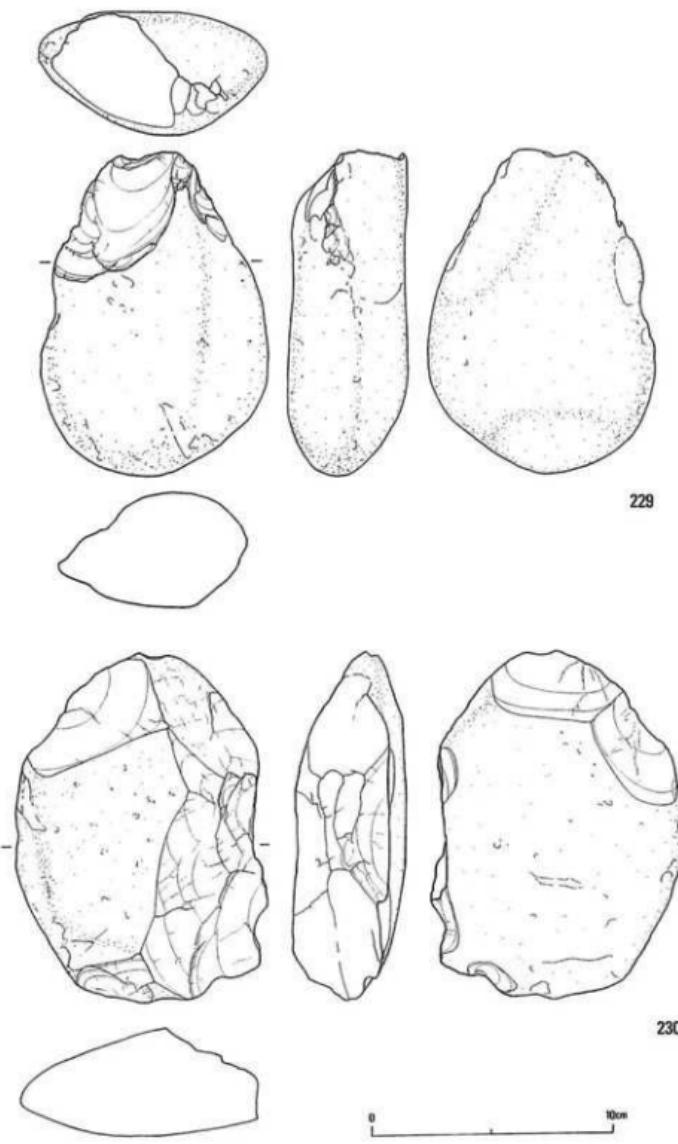
227



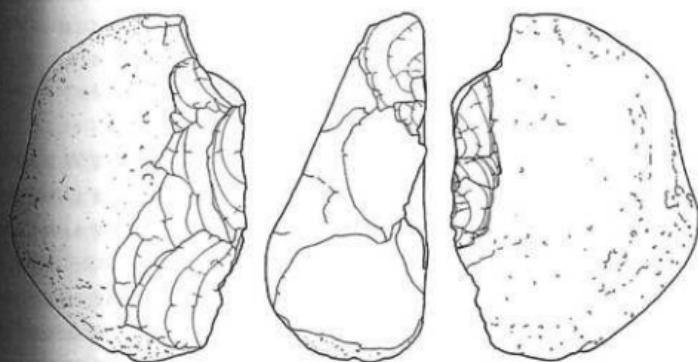
228

0 10cm

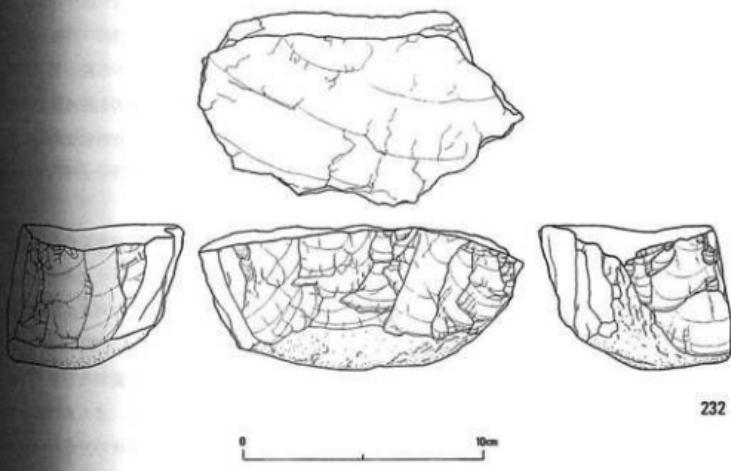
第102図 2-F地点石器実測図 3)



第103図 2-F地点石器実測図 4)



231



第104図 2-F 地点石器実測図 5)

第2層 第1層の下に局所的にレンズ状をなして存する黄褐色のローム層。

第3層 第1層、尤によつては第2層の下に存する褐色の粘土層で細礫を含んでゐる。下部は石英の中礫を混えている。a区では厚さ90cmだが普通は20~30cm。東へ行くに従つて厚さが減じてゐる。

第4層 結晶片岩を主体とする腐蝕の甚だしい亜角礫層。

4. 遺物の出土状況

2-F地点からは、17点の石器が出土している。遺物が出土したのは、第1層直下から第3層までで、第4層からは全く検出されなかつた。遺物は既ね第3層から発見され、種類によって層位を異なる事実は認められなかつた。もっとも頂面に近いo・a・b区では第3層の厚さが深く大型石器のような比較的重量のあるものが多かつた。

また、第3層では打器・局部磨製石斧・弥生式土器が混在状態で発見されていることから、丹生泥層の形成、陸化後相当長期にわたつてこの地点は表面に露呈し、その間に上部にあった土壤が流出、削平され生活面に残された遺物が2次堆積層中に包含される結果となつたと思われる。

5. 石器

2-F地点から出土した17点の石器の内訳は、R F 1、磨製石斧 1、打・割器／石核類 6、石核4、剝片等 5点となる。

A)磨製石斧(第100図)

幅広で扁平な形を呈し、上部は欠損している(No220)。両面に研磨が施されており、剝離面の凹凸をとどめながら、軽い研磨が広く行われてゐる。蛇紋岩製。本例については長崎潤一氏の言及がある。

B) R F(第100図)

挺長の剝片を素材としている(No221)。打面は残っていない。一方の側縁両面から粗い加工が施されている。また腹面右下方に連続した2~3mmの調整がみられる。腹面右側縁の剝離は上方から下方へ順番に行われてゐる様である。あるいは、削器とすべきかもしれない。また背面側の加工を打面として腹面側で鱗状の小型の剝片をとった石核とみることも可能であろうか。

C) 打・割器／石核類(第102~104図)

打・割器／石核類はA:打器(No227・228・229)B:割器(No230・231)C:石核の可能性のあるもの(No232)と大きく3群に分けられる。

まずA群であるが、No227は扁平な円礫を素材として、一端に凸形で礫面側との角度が比較的鋭い刃部を作出している。No228も円礫を素材としており刃部は弧状である。刃部の角度はNo227の例よりも一層鋭い。No229は長楕円形の礫を素材とし、一枚の大きな剝離によって鋭利な刃部を作出している。B群のNo230は扁平な円礫の片面においては周囲3/4程に刃部が作られ、また裏面にも3枚の剝離がみられる。No231は扁平な円礫を素材とし、側縁両面にゆるやかな弧状の刃部が作出されている。两者とも裏面側の加工は簡単である。刃部は、No232の例と比較すると顯著なように、比較的鋭角であり、この点を重視して割器としておきたい。

C群のNo232は円形の縫を半割し、その分割面を打面として周囲に剝離が行われている。打面と作業面の角度がA・B群と比較して鈍角で直角に近く、作出された剝片の形状も縦長でそろったものが多いため石核の可能性が強い。

D) 剥片(第100図)

幅広く打面を残す厚さ2cm程の大きな剝片である(No222)。背面には全周から多数の剝離がなされていることから、円盤状石核の作業面全面をはぎとったような剝片と思われる。

E) 石核(第100・101図)

石核類は大きくA(No223・224・225)、B(No226)2群に分けられる。

A群

No224は円盤状の体形を有する。先に大きな剝離が周辺から求心的に数枚とられており、その面を打面として全周、下方向に横長鱗状の細かい剝片が取られている。No223は円盤状の体形を有し、No224と同様先に数枚の打面となる剝離が行われ、その面を打面として剝片がとられているが、剝片の形状は不定形である。No225は背面に自然面を残した上下両端に打面を留めるハート形の石核である。素材剝片のボジ面を利用して周辺から求心的に剝離が行われている。

B群

No226は背面に自然面を残す分厚い横長の剝片を素材としている。剝片の打面とは反対の末端のへりで、自然面を打面として剝片のボジ面を剝片剝離作業面として、右方向から順に鱗状の剝片がとられている。

6.まとめ

これらを剝片剝離技法という観点でみると二つのグループに分けられる。1つは円盤状の体形を有し、複数の剝離面で作られた面を打面として剝離作業が行われるもの(No223・224)。No222の剝片はこのタイプの石核からとられた剝片と思われる。これらとは少し異なるがNo225も打面を作りし、剝離を行っているといえる。もう1例は横長剝片を利用し、自然面を打面として一定方向の鱗状の剝離が行われるものである(No226)。

他に円縫を分割し、その分割面を利用して剝離を行うものがある(No232)。

(宮内)

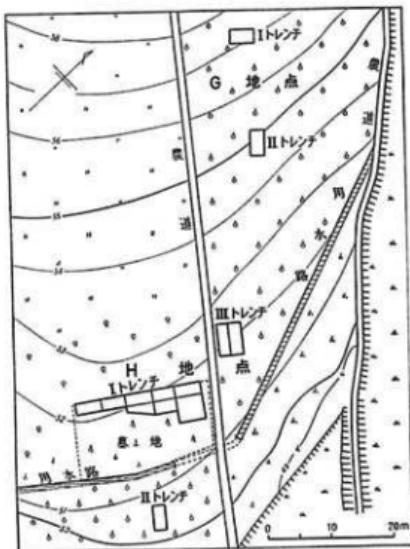
注

- 1)『丹生4次概報』(昭和41年)。
- 2)長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」(『先史考古学研究』第3号所収、東京、平成2年)。

第10節 第2地区H地点

1. 発掘の経過

2-H地点は、昭和37年頃より石器の散布が知られており、昭和40年10月13日～11月2日に行われた第4次発掘調査で早川班によってG地点とともに調査されることになった。¹⁾



第105図 2-H地点地形・トレンチ配置図

2. 位置・地形・トレンチ

第2地区は大字丹川字野間に属する東南向きの一丘陵である。両側が開拓谷によって、断ち切られ、末端部は野間部落をなす面に突き出ている。

そのうちH地点は丘陵の先端に近い緩やかな平坦斜面にあり、標高52mから48mの当時墓地と果樹園であったところである(第105図)。トレンチはI, IIトレンチがあり最初果樹園と墓地のある雑木林とにそれぞれ1個ずつ $4 \times 2\text{ m}$ の試掘トレンチを設定している。

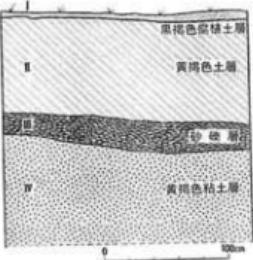
当時の日誌によると、Iトレンチは試掘トレンチから西方に $2 \times 4\text{ m}$ で拡張し、東からa・bとしている。更にc・d・e・f・g・h・iの7区($4 \times 2\text{ m}$)を設定している。次に農道を距てて東側の雑木林に $5 \times 2\text{ m}$ トレンチj・k区を設定となっているが、それ以上のこととは不明である。

3. 土層

H地点の地層は4層に区分される(第106図)。

- 第1層 黒褐色腐植土層($4 \sim 6\text{ cm}$)。数点の陶片、土師器片、黒曜石の小石片などを含む。
- 第2層 黄褐色土層($70 \sim 90\text{ cm}$)。上部30cmの間に38点の貝殻、粘板岩製の縦長削片を標識とする石器群を含む。
- 第3層 褐鉄鉱まじりの風化砂礫層($20 \sim 30\text{ cm}$)。
- 第4層 黄褐色粘土層(90 cm 以上)。

4. 遺物の出土状況

第106図 2-H地点第1トレンチ
東北壁土層断面図

2-H地点からは43点の石器が出土していて、31点が岩宿時代のものと認められる(第4表)。のうち剥片1点がIIトレンチから出土した外は、全てIトレンチ出土である。

上述したように試掘トレンチを設定して掘ったところ、雑木林の方の茶褐色土層上部から3点の粘板岩製削片を発見したので、該地点の雑木林全城を発掘するに至った。第3層、第4層からは石器が発見出来なかった。

平面的な分布については出土遺物の厳密な位置がわからないので割愛する。

5. 石器

2-H地点より出土した31点の石器の内訳はU F 14点、石核2点、剥片類14点、チップ1点であ

り石材は流紋岩が主で黒耀石が2点、砂岩・チャートが各1点含まれる。

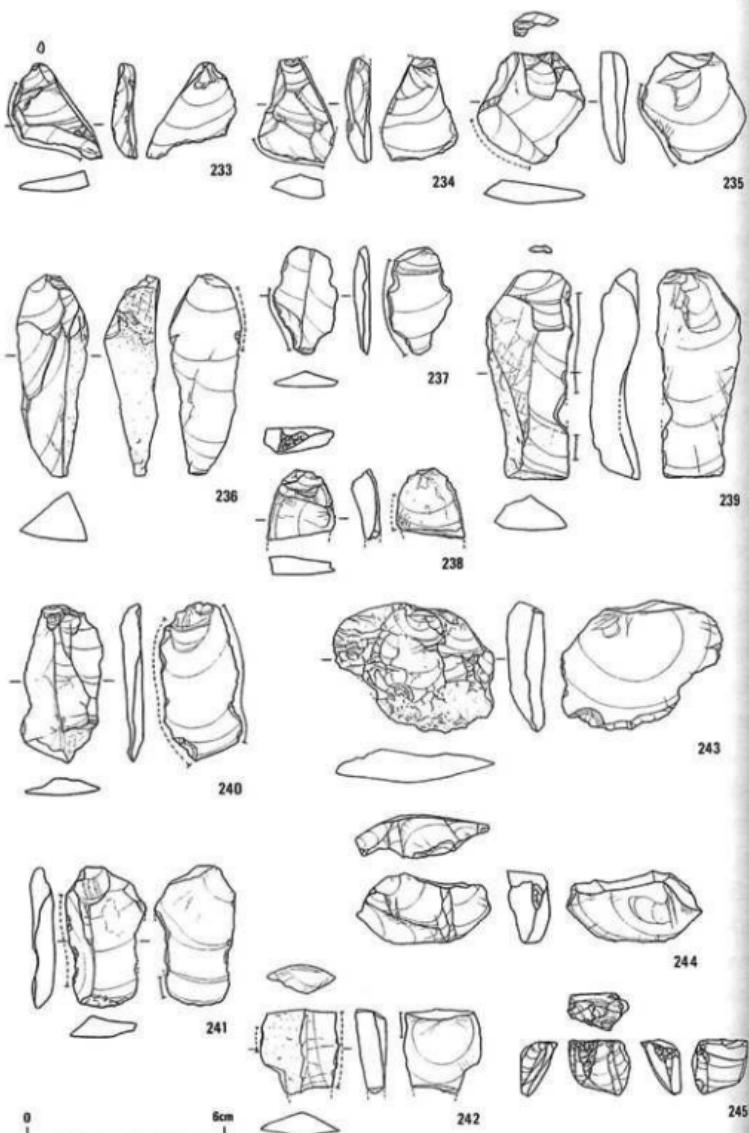
A) UF類(第107図)

計14点。No.233は打面の小さい縦長剝片で薄く平らな三角形を呈している。背面の左側縁に連続した大きな使用痕がみられる。No.234は三角形状の縦長剝片である。背面の右側面は折れていて、下端に連続した大きな使用痕がみられる。No.235は半月状の大きな打面をもつ、すんぐりした菱形の縦長剝片である。背面下端に小さい不連続な使用痕、腹面左側縁に大きめの連続した使用痕がみられる。No.236は打面の小さい厚手の縦長剝片である。一部自然面を残し、断面は三角形を呈している。腹面右側縁上半部にごく小さな不連続な使用痕がみられる。No.237は石刃状の薄い縦長剝片である。背面左側縁下半部

と、腹面左側縁とに大きな連続した使用痕がみられる。No.238はやや小さめの打面をもつ厚めの縦長剝片である。下部は欠損し、背面は多方向からの剥離で成っている。腹面左側縁に小さな使用痕がみられる。No.239は打面の小さい石刃状の厚い縦長剝片である。背面右側縁に大きな連続した使用痕がみられるが、下半部の一部欠損によりとぎれている。No.240は打面が残存していない石刃状の薄い縦長剝片である。腹面の左側縁には大きな不連続な使用痕、右側縁には小さな連続した使用痕がみられる。No.241は打面の小さい石刃状の薄い縦長剝片である。背面左側縁には小さめの不連続な使用痕、腹面の左側縁下端部に小さな使用痕がみられる。No.242は大きな三角形状の打面をもつ縦長剝片である。下部は欠損している。背面右側縁に小さめの不連続な使用痕、左側縁中央に小さな不連続な使用痕、腹面左側縁上端部に大きな使用痕がみられる。

第4表 第2地区H地点出土石器一覧表

遺物番号	類別	出土層	発掘区	レベル(cm)	石材	押出Na
H-6	A UF	表土層	I-b	—	流	233
7	A UF	表土層	I-b	—	流	234
8	A UF	表土層	I-b	—	流	233
11	A UF	—	I-c	-20	流	236
13	B —	—	I-a	-5	流	—
15	A UF	—	I-a	-16	流	—
17	B —	—	I-g	-3	流	—
18	D —	—	I-g	-30	流	246
20	B —	—	I-f	—	流	—
21	D MC	—	I-g	-30	黒	245
22	B —	—	I-g	-18	流	—
23	C —	—	I-g	-18	流	—
26	A UF	—	I-a	-30	流	—
27	B —	—	I-f	—	流	—
28	A UF	—	I-h	-7	流	242
30	A UF	—	I-h	-30	流	—
31	B —	—	I-i	—	砂	—
32	B —	—	I-i	—	珪	—
33	B —	—	I-d	-15	流	—
35	A UF	—	I-i	-15	流	243
36	A UF	—	I-i	-15	流	237
37	B —	—	I-i	-15	流	—
38	B —	—	I-i (iとhの境)	-30	流	—
39	A UF	—	I-d	-20	黒	238
40	B —	—	I-j	-15	流	—
41	B —	—	I-j	-15	流	—
44	A UF	—	I-j	-10	流	240
47	A UF	—	I-k	—	流	239
48	B —	—	I-k	—	流	244
49	A UF	—	—	—	流	241
50	B —	表土層	2トレ	—	流	—



第107圖 2-H地点石器実測図 1)

B) 削片類(第107図)

計14点。幅が広く厚い打面を有し、逆三角形横長の削片が約半数で注意をひく。No.244は典型的で石核および剝片剝離技法を推測させる好資料である。その他は不定形表皮剝片や小片である(No.243)。

C) 石 核(第107・108図)

計2点。No.245は黒曜石の細石核であり、角錐状の体形を有する。打面は不整形な四角形で、打面形状のための剝離と打面細調整および頭部調整剝離がみられ、正面から背面方向に傾斜している。背面には大きな剝離面を残しており、正面・両側面に細石刃剝離痕がある。野岳型の石核である。

No.246は半錐状の体形の石核である。背面から基部にかけて自然面を残す。打面にも多くの剝離痕があることから、複剝離面打面とみて背面の一部を除いてすばりで貝殻状の縦長削片をとっているという見方と、打面側面が交互にかわって剝離しているという見方が可能である。多分後者であろう。

(山 口)

註

1)『丹生4次概報』(昭和41年)。



第108図 2-H地点石器実測図 2

第11節 第2地区 I 地点

1. 発掘の経過

2-I地点は、昭和37年頃より石器の散布が知られており、昭和40年10・11月の第4次調査際に、安井班によって発掘されることになった。¹⁾

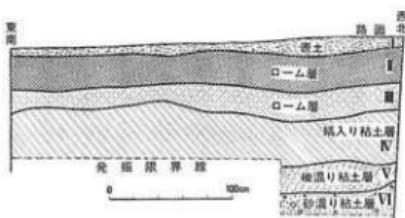
2. 位置・地形・トレンチ

2-I地点は、F地点より農道を東南に下がって、二つの農道が交叉する地点を中心とする。標高約62m。西から東にゆるやかに傾斜する平坦な台地上に位置し、周囲は果樹・桑・芋などの畑地をなしている。

トレンチは東西に通る農道上に1.2×10mの第1トレンチ、南北に通る農道上に2×6mの第2トレンチが設けられた。また、第1トレンチの延長上に、F地点との地質上の関連をさぐるために第3トレンチ(1.5×1.5m)を設けた(第109図)。



第109図 2-I地点地形・トレンチ配置図



第110図 2-I地点第1トレンチ西南壁土層断面図

3. 土層

遺物包含層に関しては、両トレンチとも土層は同じ堆積状況にあると考えられるので、第1トレンチの土層で第2トレンチも代表させることとする(第110図)。

第1層 表土。約10cm。

第2層 黄色ローム層。約30cm。本層は

第3層が一度流失した後堆積し

たもので、下部には沖積ロームが幾分残っている。

第3層 淡黄色ローム層。約20cm。第2・3層ともに土質はきれいである。

第4層 硫化鉄入り粘土層。約50cm。本層以下が大在層に相当。第4層上面～第3層下部に散布する礫は、第4層が地表面であった時期に流れてきたものである。

第5層 砂混じり粘土層。約20cm。

第6層 砂混じり粘土層。

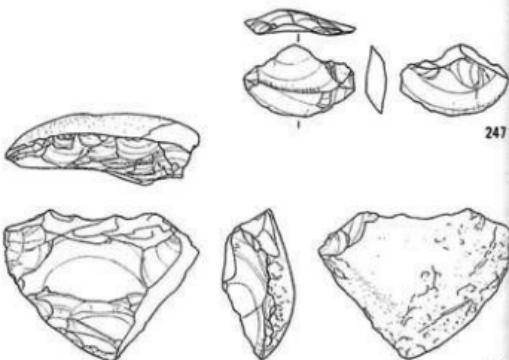
4. 遺物の出土状況

第1・2層からは石器や剝片が出土する。後述の翼状剝片は第2トレンチ第3層下部出土である。第4層以下に遺物の検出はない。なお、第3トレンチ第2層からは、剝片の外に土器の小片1点が検出された。縞文・弥生の区別は判然としないが、第1・2トレンチにおける石器にもこのような土器が伴っていたと考えられる。おそらく溶解してしまったものであろう。

5. 石器

2-I地点からは、石器2点の他表採品を含めて十数点の石器類が知られている(第111図)。この内、岩宿時代に帰属すると考えられる2点の紋状岩製石器について記載しておくる。

1点は翼状剝片の範疇で捉えうる例である(No.247)。大小4面の剝離面からなる山形の打面から打ち剥がされた小型の翼状剝片で、ボジ面からなる底面と、先行する剝離作業においても同様の剝片が取られていたことから瀬戸内技法が用いられていたことを示している。



第111図 2-I地点石器実測図

なお、これについては、既に綿貫俊一氏の論文³⁾に言及されている。

2例目は上端に粗く大きく急峻な剝離面が加えられ、鋸歯状を呈する石器である(No248)。下端の大まかな剝離面は新しい欠損によるものである。裏面側はほとんど自然面だが左上端に剝離面を留めている。削器とすべきであろうか。正面中央には下方からの打削によって生じた大きなネガティブな剝離面がある。右側縁や裏面の剝離面の性状を考慮すれば、これは本来石核であったもの転用を考えるべきかもしれない。

(鉛木)

注

1)『丹生4次報』(昭和41年)。

2)注1), 第17図。

3) 綿貫俊一「東九州における瀬戸内系人類遺物」(『旧石器考古学』25所収、京都、昭和57年)。

第12節 第3地区B地点

1. 発掘の経過

3-B地点は、昭和37年10月の第1次調査、昭和38年10月の第2次調査において、藤原班によって実施された。本地点は、丹生遺跡群中、丹生論争に係わる地点という意味で、最重要地点の一つである。⁴⁾

昭和37年3・6月および10月の地質調査の結果、問題の石器の多くが丹生泥層上部の疊層に含まれていた疑いが濃くなってきた。ところが第1・第2地区などの所謂「丹生面」(78~85m)では、この疊層は浸食流失しているため、この疊層が残存し、石器の一次包含の可能性が高いと考えられる「大在面」(90~100cm)に注目し、これに調査の手を加える必要が痛感された。この為に丹生台地でもっとも標高の高い第3地区の発掘が計画された。先に実施された3-A地点では疊層は極めて薄いことが判明したために、本地点の調査が期待を込めて実施されることとなった。

2. 位置・地形・トレンチ

3-B地点は、丹生台地西縁の小高い丘で、台地内の最高標高地点(約100m)、3-A地点の北、矢追の池の西に位置し、丘の西側は大野川に面する急崖に連なっている。地籍上は、旧鶴崎市種田字吾受に属している。

トレンチは、第1次調査で、標高99mの頂部にAトレンチ(5×5m)、南麓の稜線上にBトレンチ(Aトレンチより南へ40m、標高約92m)、Cトレンチ(Aトレンチより南へ30m、標高約94m)、Dトレンチ(Aトレンチより南へ20m、2×3m)が設けられた。第2次調査では、Cトレンチの北側に近接した稜線上にEトレンチが設定された(東西10×南北5m)。

3. 土 層

上記のように3-B地点では各所にA~Eまでのトレンチが設けられたが、この中で石器が出土したトレンチはCトレンチであるので、Cトレンチの土層を記しておく(第112図)。

第1層 表土。約10cm。

第2層 褐色礫層(漂礫層)。20~50cm。

第3層 茶褐色礫層。約1m。以下シルト層に統
く。

4. 遺物の出土状況

地表下20cm、第2層褐色礫層中からチャート製斜角式彫器と呼ばれた石器が発見された。第3層茶褐色礫層からは、Cトレントの北縁中央部付近、地表下60~80cm(第3層上面より15~35cm)の間の耕土中から削器が発見された。茶褐色礫層は元来模式地では5m以上の厚さを有しており、Cトレントではそれが4m近くも削り取られている事実から、この削器は茶褐色礫層(丹生泥層の上部礫層)の底部近くに含まれていたと認められた。丹生遺跡群中の数少ない原位置出土例であると同時に石器の帰属年代にとって重要な所見である。

5. 石器

斜角式彫器とされるものは、チャート製で薄い不定型剝片を素材としている(第113図No.249)。表面側下端には平坦で器面を削ぐような剝離痕が認められる。左右両面から裏面方向への加圧で折れています。いわゆる楔形石器の範疇で捉えられるであろう。出土層の第2層は大在層の上部礫層が洗い出され、再堆積した漂礫層とされているが、石器はシャープで転磨の痕跡は認められない。

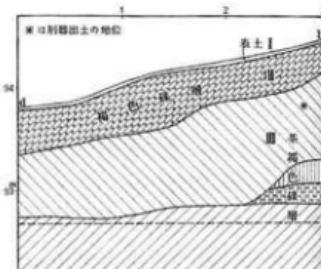
削器とされるものは、刃部加工に相当する剝離面の判断にかかっている。刃部相当部は、節理面から剥落面上にあり、縁辺からの加圧によって生じた貝殻状の剝離痕も若干認められる。しかし、これらは人為的な加工痕とは認め難く、したがって本例は自然礫と判断するのが妥当であろう。

上記のように、原位置出土とされる2例のうち1例は自然礫であり、漂礫層中出土とされる楔形石器は、大在層の再堆積期に包含されたとしても、その再堆積の時期の決定が行われないかぎり、この1点の石器からは年代を推し測ることは困難であると言わざるをえない。石器に全くローリングの痕跡を留めていない点も気懸りなところである。

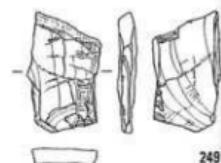
(鈴木)

註

- 1) 『丹生1・2次概報』(昭和39年)。
- 2) a)同上、第29図; b)『丹生総括篇』(昭和43年)、第21図。



第112図 3-B地点Cトレント土層断面図



第113図 3-B地点石器実測図

第13節 第4地区A地点

1. 発掘の経過

4-A地点は、昭和39年10月4日～10月22日まで行われた第3次発掘調査として藤原班が調査している。

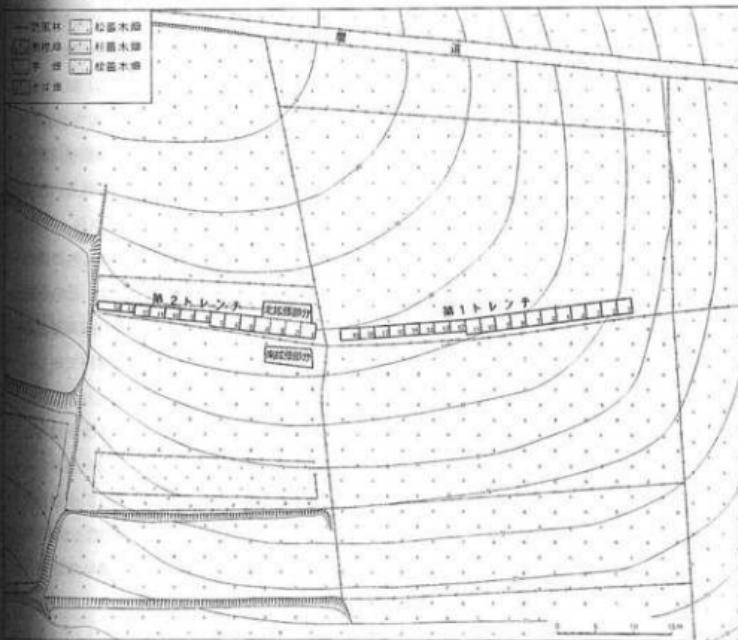
2. 位置・地形・トレンチの設定

第4区は丹川台地の南端部に設定された地区で大字丹川の字池久保辻山を含み、字原山西南部の83m高地をも包含している。その西部は丹川台地の最高処(標高83m)をなし、そこから東に向って三つの舌状段丘が伸びている。A地点は原山の83m高地の頂部とその南斜面(いずれも畑地)に当たっている。そしてそこには70m余に亘る農道が存する。この農道を中心とした幅3m余りの細長い地はまだブルドーザーによる擾乱を受けていないことを知ったので、ここに長さ67mに及ぶ東西方向のトレンチと拡張部2ヶ所を掘って調査を実施した(第114図)。

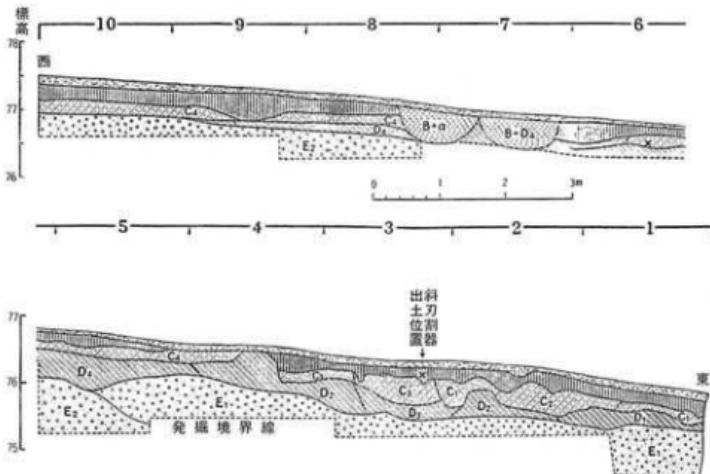
3. 土層

4-A地点の土層は大きく5層に区分される(第115図)。

第1層(A) 暗褐色の表土で砂と腐植土とからなる。



第114図 4-A地点地形・トレンチ配置図



第115図 4-A地点第1トレンチ北壁土層断面図

第2層(B) 砂を混えた褐色砂質土層。

第3層(C) 黏土質の薄い褐色粘土層で結晶片岩、石英等の砂を混える鶴崎層、その他の移動堆積した層。うちC₁は小礫の少ない部分、C₂は小礫の多い部分、C₃はC₁と似ているが褐鉄鉱を含み黒色を帯びている。C₄は砂のない粘土質層でC₁より固い。

第4層(D) 鶴崎層の風化して堆積した層。うちD₁は風化した黄褐色の砂層であるが一見粘土のように見える。D₂は黄褐色の堅緻な細砂層。D₃は黄褐色の軟らかい細疊層。D₄は黄褐色粘土層で、風化したシルトである。

第5層(E) 鶴崎層でうちE₁は風化した結晶片岩、石英の中形亜角礫からなる黄褐色の疊層。E₂は灰色のシルト層で黄褐色の汚斑あり図のようにA、B、C、D、Eの5層がかなり複雑に重なった形で存在していたことが知られた。地質班によればE層は鶴崎層やそれ以降の堆積諸層が移動・混淆したものと再堆積であるとみられている。

4. 遺物・遺構の出土状況

出土した石器の数は少なかった。打器(No252: 第115図中斜刃割器)は1-3区のB層下部から発見された。

さらに削器(No250)石核(No253)および剥片若干が第2トレンチ3区の擾乱層中から出土した。同区では、土師器を伴う堅穴(方形に近い隅丸様式)の北半部がC層にくい込んで営まれているのが発見された。発掘地を南に拡張してみたところ堅穴の南半部はブルドーザーによって既に破壊されていることが判明した。

5. 石器

4-A地点より出土した遺物37点のうち縄文時代のものとして扱ったもの6点等を除く25点が岩

當時代のものと認められる(第5表)。その内訳は打・削器／石核2点、削器1点、UF5点、剝片類2点、石核3点、その他12点である。その他とは礫器の素材になるような大きめの円礫の破片3点、石核の素材になりうるような石材である石核の塊状の破片と考えられるもの4点、剝片ではあるが性質が不確定なもの5点に分類できる。今回はその他についての記載はしないこととする。

A) 打・削器／石核(第116図)

計2点。No.251はやや小さめで厚めの礫片を素材とした削器である。背面左側は節理によって欠損している。刃部は表裏両面から交互に剝離されている。No.252は中型で厚手の円礫を素材として上部片面だけに斜めに深く刃を作りだしている。打器と考えておく。刃部は山形を呈す。器面には全体に亘って著しい風化が認められる。

B) 削 器(第116図)

No.250はだ円形で扁平な流紋岩製の礫を素材とし、節理に従って片面の一部を縱に削ぎ、そして出来た剝離面の一縁辺に刃部を作りだした礫器状の削器である。裏面には原礫面がそのまま取り残されている。

C) UF・剝片(第117図)

計7点。剝片は幅広く厚い打面を留める横長ないし幅広の剝片で、大きさは大小さまざまである。No.256を除いて使用痕をどこかに留めている。

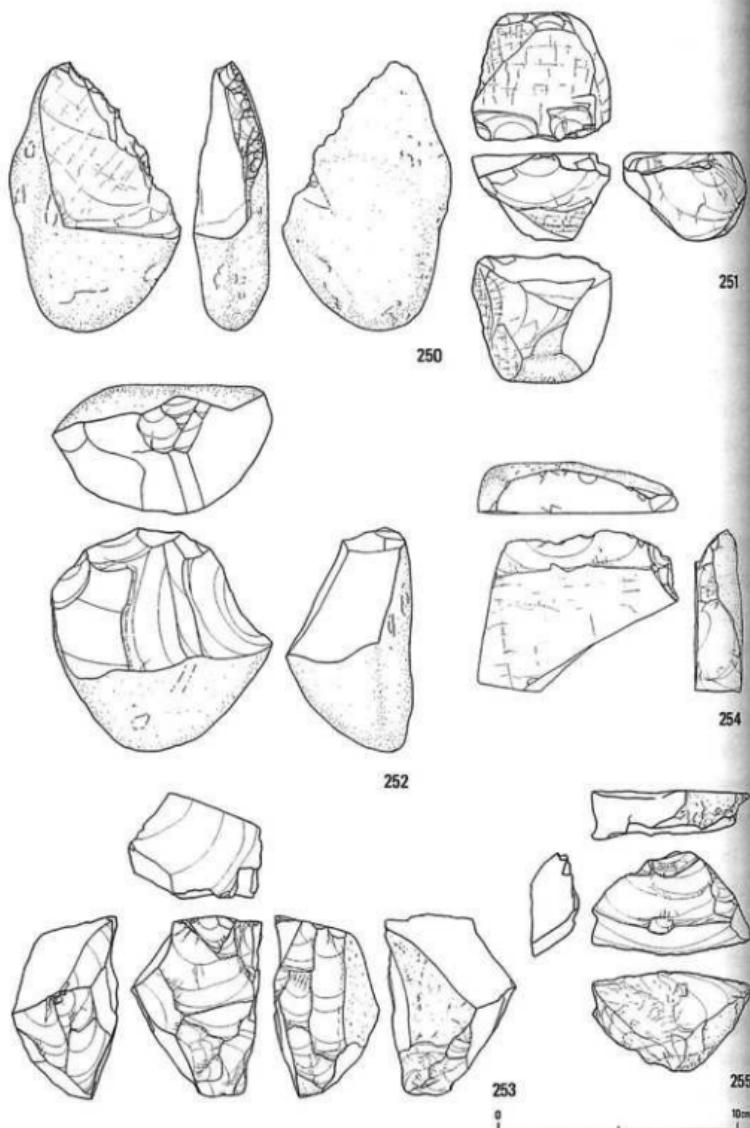
D) 石核類(第116図)

計3点。縦長剝片石核(No.253)と横長剝片を取る剝片素材の石核(No.254・255)に分類される。No.253は石刃状の縦長剝片を連続的に剝離した单剝離打面石核である。正面は細長い台形状を呈しており、下方が細くなっている。右側面に平らな自然面を残す。側面観は正三角形に近い形状を成しており、全体的には角錐に近い形をしている。正背両面で剝片剝離作業が行われている。打面は裏面方向にかなり傾いている。

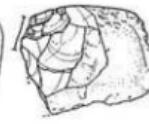
No.254は上面(打面)および左側面は自然面、下面是節理面で成っている石核である。背面側は左3/4ほどなために剝離されている。正面はネガティブバルブがはっきりと残っており、正面からみると上部は弧を描いている。

No.255は正面観が半円状を呈する剝片素材の石核である。右端は折れている。側面観は正面(作業面)と背面がほぼ平行で厚さがほぼ一定の板状を呈している。打面右側に自然面を残す。素材は

第5表 第4地区A地点出土石器一覧表						
遺物番号	類別	出土層	発掘区	レベル(cm)	石材	標図No.
NVA-1	A PB	B層下部	1-3	—	流	252
4	A UF	表土	1-13	-15	流	257
8	A UF	—	1	—	流	256
9	B	—	1	—	流	258
12	A UF	—	1	—	流	260
15	D	擾乱層	2-3	-50	流	253
16	A PB	—	2-3	—	流	250
23	D	—	2	—	流	254
26	D	表採	—	—	流	255
27	B	表採	—	—	流	259
29	A UF	表採	—	—	流	261
32	A PB	表採	—	—	流	251
34	A UF	—	—	—	流	262



第116図 4-A地点石器実測図 1)



256

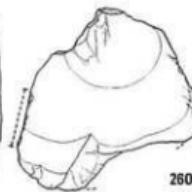
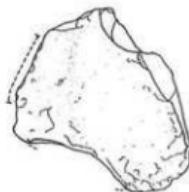
257



258



259



260

0 3cm



261



262

第117図 4-A地点石器実測図 2)

円錐で、それを板状にとって利用している。底面はボジ面である。正面からみると、上縁部は弧を描いている。

4-A地点では石刃を剝離する技法と横長剝片を剝離する技法との2種類の石核に分類できる。また、それらの石核に対応する剝片としては石刃状の縦長剝片と瀬戸内技法に共通する要素をもった横長剝片が挙げられる。しかし出土遺物中の縦長剝片はどれも不定形で石刃状のものはみられない。

先にも述べたように横長剝片の剝離技法は、瀬戸内技法と共に要素を多くもっている。円錐から扁平もしくはカマボコ状の厚い剝片をとり、それを利用して石核の素材とする。打面は自然のままか、一部にだけ剝離を加えているにすぎない。瀬戸内技法の範疇で捉えておきたい。ただし、このような石核に対応する剝片は検出されてない。

(山口)

註

- 『丹生3次概報』(昭和40年)。

第14節 第4地区B地点

1. 発掘の経過

4-B地点は、第3次発掘調査(昭和39年10月4日～22日)において坂詰班が調査した。¹⁾

2. 位置・地形・トレソ

第4地区は、丹川台地の南部に位置する地区で、最西部が台地の最高標高をなし、東へ向かって三つの舌状段丘が伸びている。B地点は、字池久保の北部と字辻山に所在し延命寺部落の西南方数100mほどに位置している。標高約50～70mで、緩やかに傾斜しつつ東北に張り出した丘陵上にある(第118図)。発掘地は、この丘陵の中ほどにある蜜柑畑で、標高は61mである。

発掘はA～Cの3本のトレソを設けて行われた。Aトレソは、東西方向に2×32mで東より2m毎に1～16区とした。さらに13区より南へAトレソに直交する2×8mのトレソを設け、北より13.～13.に区切った。その後、西へ2×4m拡張し、東より2m毎に14.、15.と地区割りを行った。形状はJ字状となる。Bトレソは2×4m、Cトレソは2×2mの試掘トレソである。

3. 土層

遺物が出土したAトレソの土層を見ておく。若干の差はあるが、土層は、全体に共通し4層に分けられる(第119図)。

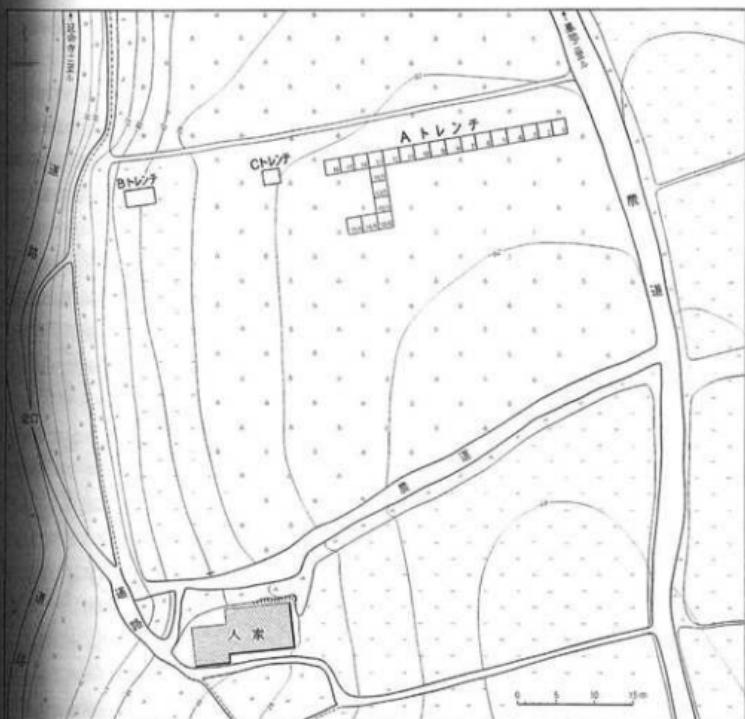
第1層 表土。10cm。

第2層 赤褐色土層。黄色味を帯び比較的の上部は軟らかい。約20cm。

第3層 黄褐色粘質土。渴鉄鉱の沈着あり。

第4層 黄色粘土層。

なお、部分的に深掘りを行い第4層以下を確認したが粘土層が続き、遺物はまったく発見できなかつた。



第118図 4-B地点地形・トレーンチ配置図

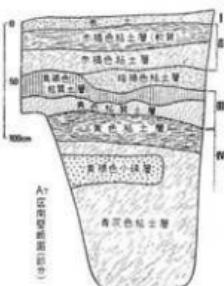
4. 遺物の出土状況

遺物は、Aトレーンチからに限定されており、包含層は第1～2層で丙層とも岩宿時代の石器、土器片などが混在し、層位の秩序は認められず、岩宿文化層はまったく確認できなかった。また第3～6層の岩宿時代文化層の有無を再確認するため、B・Cトレーンチを試掘したが目的は達せられなかった。

平面分布に関しては、出土地点はおさえられていないが、石核・ナイフ形石器がA9区で出土した。比較的近い位置で発見されている事から、A9～10付近に分布の中心地があったとも考えられる。

5. 石 器

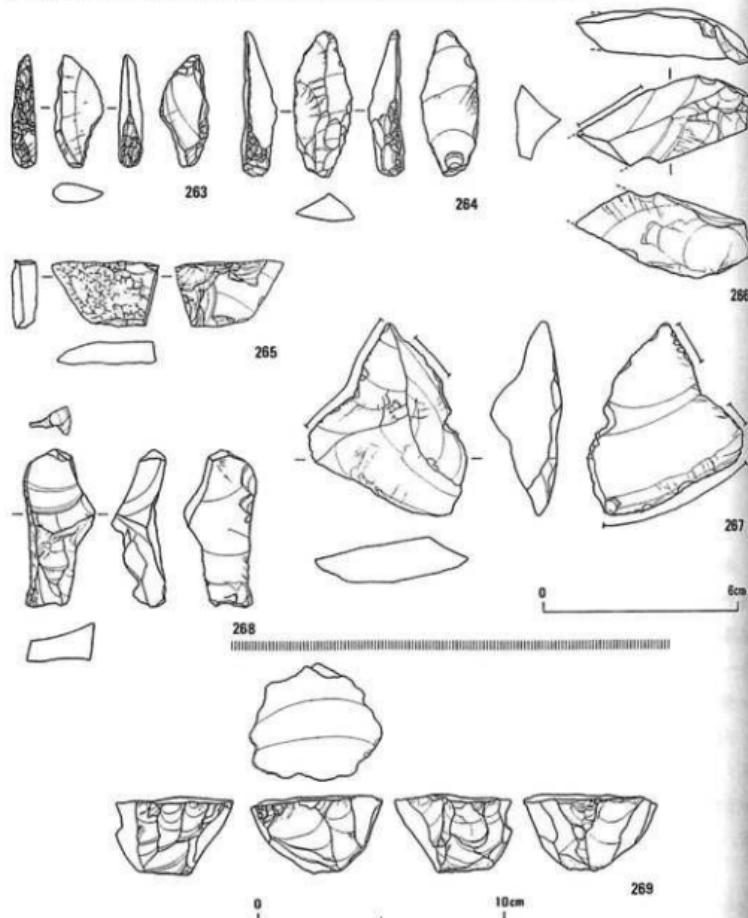
4-B地点からは、総数16点の石器が出土した。その内1点は姫島産の黒耀石製で、縄文時代のものと考えられるので、ここでは報告対象にしない。岩宿時代の遺物内訳は合計15点でナイフ形石

第119図 4-B地点
Aトレーンチ土層断面図

器2点、楔形石器1点、U F 3点、剝片8点、石核1点である。

A)ナイフ形石器(第120図)

N₂263は横剥ぎの剝片を素材にしている。先端部が尖銳で刃部が短く外済しており、切り出しあたを呈する二側縁加工のナイフ形石器である。刃済しは全体的に細かく丁寧で、左側縁では背面から腹面に対して約90°の角度で行われ、その後若干逆方向から調整加工されている。打面は完全に除去されている。右側縁は、基部付近のみ見られ、調整方向は背面、腹面から行われているが、やや背面方向からの調整割合が高い。刃部全体に連続的に使用痕が見られる。



第120図 4-B地点石器実測図

No264は、先が尖る石刃状剝片を素材にしている。剝片は厚手で三角形の打面、バルバスカーナーを留め残し、素材の形状をよく留めている。背面打面付近には長軸に平行する細長い剝離痕が見られるが、これは二次加工ではなく先行する剝離作業面と考えられる。刃溝加工は剝片両側縁の下半分に見られ、素材の形状に沿うように細かく施されている基部加工ナイフである。使用痕は、右側縁にわずかと左側縁上半分に連続的に見ることができる。

B) 扇形石器(第120図)

平面形は台形で、また縦断面形がほぼ長方形を呈する厚みが均一な剝片を利用している(No265)。背面側はほとんど自然面から成る。上端は、背面側が中央から右端にかけて稜を潰す程度の細かい階段状剝離が見られ、腹面側は中央よりやや右に細かい剝離が集中して見られる。下端は腹面側に、わずかに確認される。いずれにしても素材の形状を大きく変化させるには至っていない。また腹面側には、剝離の横幅1/3を占める左方向からの階段状の剝離が見られる。

C) UF類(第120図)

計3点出土しているが、すべて不定形剝片でその鋭い縁辺を使用したものである。No266は、横長の断面が厚く三角形の剝片で、上縁全体が薄いエッジ状を呈している。使用痕はその左半分に見られる。No267は、打面が残らず下端部がヒソジフラクチャーの剝片である。形状はほぼ等辺の三角形である。背面は三面から成り、その接点部分が最も厚く、縦断面はほぼ二等辺三角形である。使用痕は三辺ともに見られる。

D) 剥片類(第120図)

8点出土している。このうち打面再生剝片1点(No268)は縦に長い剝片で、背面は剝片の半分を占める上方からの打点が残る打面形成のための剝離が見られる。礫を板状に分割しその石核素材剝片の木口の部分で連続的に縦長剝片を製作して行く石核の打面再生時に生じたと考えられる。残る7点は横長の剝片や表皮剝片などを主とした不定形な剝片で、特別な作業過程を窺うことはできない。

E) 石核(第120図)

下端にわずかながら自然面を残している所から、円礫を分割し素材にしていると考えられる(No269)。打面は礫分割面をそのまま使用した非調整打面で、周間にわたり連続的に効率よく剝片剝離作業を行っている。最終的な形状はすづまりの円錐形を呈す。この石核から得られた剝片は小型のやや幅広の縦長剝片であったと考えられる。

以上の資料から4-B地点においては2種類の剝片剝離技法の存在が明らかである。1つは、打面再生剝片から予測される、礫を分割し板状の素材の木口を作業面にして剝離製作する技法である。他方は、円礫を分割し、分割面を打面にして周邊において剝離作業を行うものである。また、縦長剝片素材のナイフ形石器は、先述の前者の石核から作られた剝片を素材にしていると考えられる。

(田鶴谷)

注:

1)『丹生3次概報』(昭和40年)。

第15節 第4地区D地点

1. 発掘の経過

4-D地点は昭和39年12月、4-C地点内に属する道路脇の崖面において中村俊一氏が蝶形握槌を発見した事に端を発し、第4次発掘調査(昭和40年10月13日～11月2日)で、江坂班が担当し調査が行われた。¹⁾

2. 位置・地形・トレンチ

第4地区は、大字丹川、字池久保・辻山の地域に所在する。D地点は1で記述のとおり、蝶形握槌を発見した場所の付近を選び、設定した。調査地点は、舌状段丘の南側で、一段高い標高71mの位置にある。

調査は南北方向に $2 \times 9\text{ m}$ のトレンチを2本設け、西から第1、第2トレンチとした。地区割りは、それぞれ北より 2 m ごとにa～e区と区切った。なおe区は 1 m である。さらに、第1、第2トレンチに直交する $2 \times 9\text{ m}$ の第3トレンチを設け、西側より 2 m 毎にa～e区に区切った。ただし3b区は、第2トレンチと重複するため存在せず3e区は、 1 m である(第121図)。



第121図 4-D地点地形・トレンチ配置図

3. 土層

各トレンチとも層位はほぼ共通で4層に分けることができる(第122図)。

第1層 黒褐色の表土で、ブルドーザーによる擾乱層。厚さは $10\text{ cm} \sim 60\text{ cm}$ 。

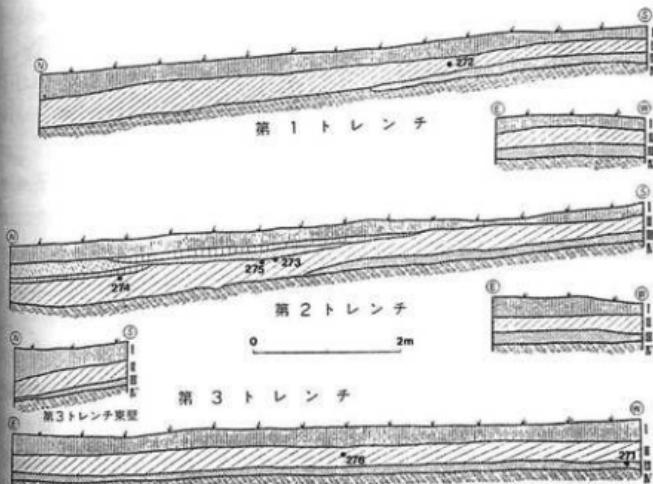
第2層 黄褐色ローム層で、相当堅く粘質性のある層で、石英の細礫を含む沖積ロームである。

第3層 赤味を帯びた褐色ローム層で、石英の細粒を僅かに含み、鉄分、岩石の腐蝕による黒色、赤色の斑点が見られる。なお本層は、トレンチ南側のみに見られ、第4層の上面が風化したものと考えられる。

第4層 卵黄色粘土層を主体にし、赤褐色粘土、灰白色粘土、青灰色粘土が混り、礫や石英片を含む堅緻な層。丹生泥層との見解もある。

4. 遺物の出土状況

石器は、大部分が第2層の沖積ローム層から出土しており、ここからは、磨滅著しい土器片も共に出土している。第3層からは、1点出土した。第4層は、発掘契機となった蝶形握槌の出土層で



第122図 4-D地点第1・2・3トレンチ土層断面図

あるが、調査において遺物は確認されなかった。なお本地点について、「などらかな斜面上に位置するため、第2層出土の石器は流動した可能性が大きく、かなりの攪乱が予想される。第3層が上述の通り風化面ならば、第3層出土の石器は、丹生泥層中と考えられ、年代を確定する際の一つの指針とも考慮できる。」と原報告者は記している。

平面的な分布については、出土位置を正確に把握しており、現状を見る限り、2-b区付近に集中の跡が見



第123図 4-D地点石器平面分布図。黒三角は雛形握持出土地。

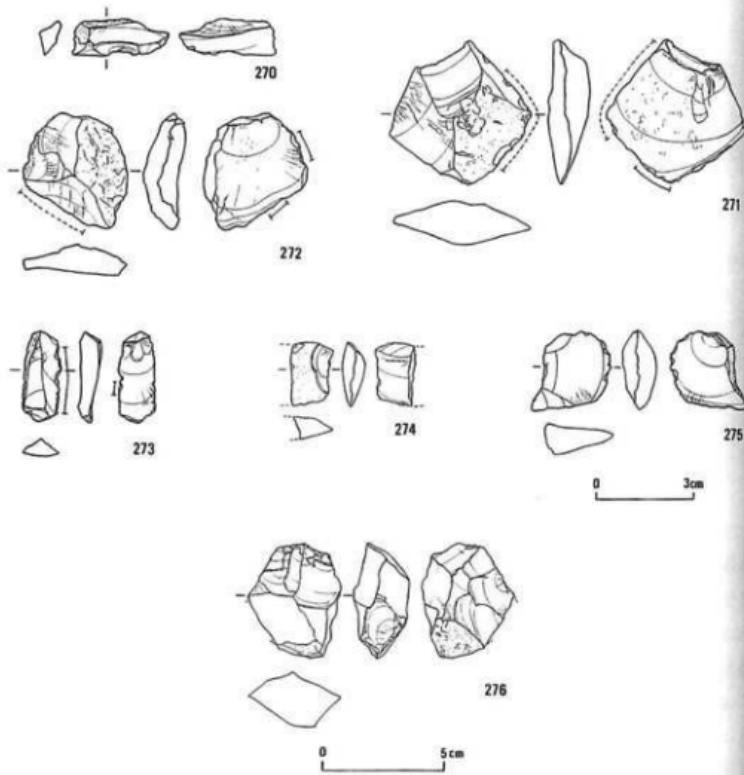
られるが、大部分の石器が、かなり後世の堆積中に含まれているため、詳細には触れない(第123図)。

5. 石 器

4-D地点からは、総数8点の石器が出土した。その内7点が岩宿時代の遺物と考えられる。その内訳は、RF1点、UF3点、剝片2点、石核1点である。

A) 加工痕ある剝片(第124図)

上部が欠損した不定形な小片である(No270)。下縁部中央に腹面から背面方向への二次加工状の



第124図 4-D地点石器実測図

剥離痕が見られるため、一応RFとして扱った。

B) 使用痕ある剝片(第124図)

3点出土している。長幅比がほぼ等しい貝殻状剝片2点と縦長剝片1点である。1例目は長幅比のほぼ等しい剝片で、打面が大きく厚手幅広の剝片である。背面は求心的な剥離から成り、右側下面には自然面が残っている。使用痕は、右側縁全体に見られる(No.271)。

2例目も1例目と同じ特徴を持ち、打面が大きく厚手幅広の剝片である。また背面も求心的な剥離と自然面から成る。使用痕は、左側縁と下縁に見られる(No.272)。残る1点は、小型の縦長剝片である(No.273)。左側は、節理により欠損している。やや厚めで三角形の打面を持つ。右側縁全体に連続的な使用痕が見られる。

C) 剥片類(第124図)

2点出土している。1例目は小型の表皮剝片(No.274)。2例目は広くて厚い打面を留めた幅広の

用である(No.275)。

D) 石核(第124図)

背面下部に残る自然面の性状から円錐を分割し、素材にしたと考えられる(No.276)。残核の平面は五角形で、横断面は菱形である。さらに詳しく観察すると、正面側は上方向からの幾枚かの剝離面と右下に素材分割面を留め、左下部には節理による新しい剝離が見られる。また背面は、帯状に古い剝離面が残っており、それを境にして左側で3枚と右側で2枚の剝離痕が見られる。これら剝離痕の正面側との前後関係は、左側が正面側より古く、右側が正面側より新しい。なお一層細かい所を見て行くと、背面上部にある剝離面には、正面側と接する場所に非常に細かい剝離痕が見られるが、これは正面側を剝離するための打面調整痕と考えられる。

次に剝離作業を見て行くと、まず背面左側において3枚の剝離を連続的に行い、その後これを打面にして円錐分割面、すなわち正面上方向から剝離作業を行う。次にまた正面を打面にして背面右側で2枚の剝離片を取るという作業手順が窺える。つまりこの石核は、作業面を打面に転用しながら30°に作業を繰り返す剝離技術であることがわかる。

一方剝離片(No.271・272・275)に注目すると、その主要なものはこの石核と同一の技法によって作られていると言える。

(田鶴谷)

註

1) a)『丹生4次概報』(昭和41年); b)『丹生綜括編』(昭和43年)。

第16節 第7地区A地点

1. 発掘の経過

7-A地点は第一次調査(昭和37年10月5日~31日)、第二次調査(昭和38年10月8日~31日)の二度にわたり、小林班が担当し発掘調査を行っている。当地点は、西側に隣接した道路で、當時ムスティニ文化風の尖頭器ではないかと考えられていた石器などが、中村俊一氏によって採集されていたこと、またこの地が畠地開墾のためのブルドーザーによる削平を免れていたことなどによって、調査地として選定された。

2. 位置・地形・トレンチ

第7地区は大字丹川、字池久保を中心とする地域に所在し、南東にのびる丘陵上にある。A地点はその中でも標高50m前後の緩斜面上に位置している。

第一次調査においては、まず北西より南東に8×2mのトレンチが設けられ、北西より2mごとに1~4区に区切られ調査された。さらに、このトレンチの両側に同様のトレンチが設けられ、南西側は5~8区、北東側は9~12区に区切られている。ただし5区のみは道にかかるため、一辺が1mとなっている。第二次調査においては9区~12区に平行して13~15区に区切られる7×2mのトレンチと13区に北接して東西に16~20区に区切られるトレンチが設けられ、調査が行われた。計5本のトレンチが設けられ、調査面積は約80m²になっている。

3. 土層

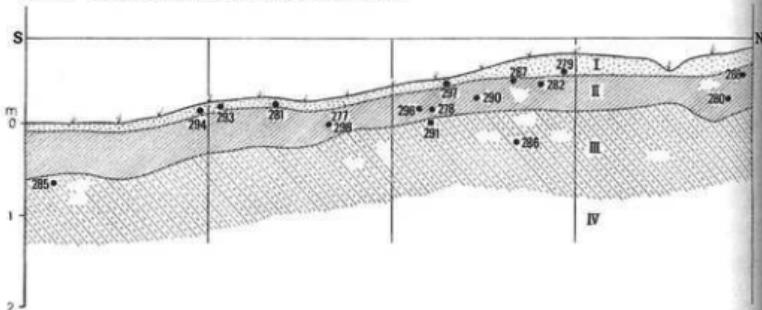
7-A地点の土層は基本的に以下の4層に分けられる(第125図)。

第1層 黒褐色表土。若干の円礫を含む。厚さ15cmほど。

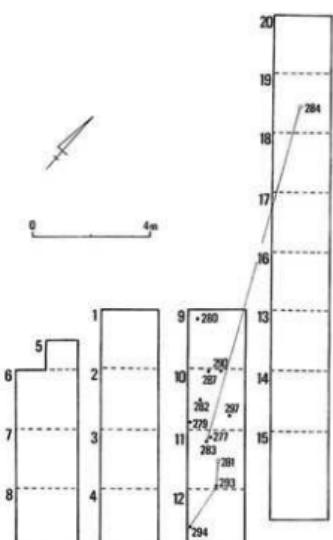
第2層 茶褐色土層。厚さ35~45cmほどで、南西に行くほど漸増。

第3層 黄褐色礫層。大型円礫を主体とし、野間砂礫層にあたる。なお19・20区では南東隅にのみ見られる。

第4層 砂礫層。大在層の志村砂礫層に相当する。



第125図 7-A地点1~4区西南壁土層断面図。図中の数字は挿図No。



第126図 7-A地点石器平面分布図
発掘区内の数字は挿図No。白丸は正確な出土位置不明。

4. 遺物の出土状況

石器類の出土は上述の第3層までに限られており、それも第3層上面より60cmほどの深度までに限られている。しかし層位的な検討は記録の事情などにより不可能である。平面的な分布については、平面図に出土位置を落とすことのできるものが検討の対象とする20点のうち半数の10点と限られるが、全てのものについてどのトレンチからの出土かは判明しているので、一応の状況は把握できる(第126図)。層位的な所見等を欠くため、分布の詳細な検討はできないが、可能な限り指摘を行っておこう。各区の出土点数を見ていいくと、10区から5点、11区から4点の出土が見られ、ここを中心として一つのブロックがあることが指摘できる。また19区に3点、6区に3点の出土があり、10・11区を中心とするものから数m離れた区にも小さなまとまりが認められることがわかる。接合、同一個体関係から見ていくと、全体を一つのブロックと考えることもできるが、19区、6区の一群を別のブロックとも

災れ得ることを指摘しておこう。

5. 石 器

7-A 地点からは総数40点の石器が出土しており、その内21点が岩宿時代のものと考えられる。その内訳は削器1点、UF5点、剝片類9点、石核6点である(第6表)。石器は流紋岩が主体で、一部が安山岩、チャートである。本項においては出土石器の概略について記し、次項においてそこに見られる剝片剝離技法について検討することにする。

A) 削 器(第127図)

No.277の1点のみである。大変厚みのある縦長剝片を使用しており、断面が三角形状を呈する。下端部は欠損している。背面右側縁全体にわたり粗く大きめの二次調整をしており、鋸歯状の刃部を作り出している。背面左側縁、その裏面にあたる腹面

か右側縁には、不連続ではあるが小さな剝離痕が認められ、使用痕と考えられる。

B) UF類(第127図)

5点出土しており、縦長、横長の剝片を利用したものの2種に大別できる。前者は4点(No.278~281)、後者が1点(No.282)である。

No.278 打面付近から末端まではほぼ同じ幅を持つ縦長の剝片を利用している。打面は平坦で、背面左側縁に連続しているが、やや不規則な小さめの使用痕が見られる。先行する剝離面の剝離方向はこの剝片の主剝離面と同様で、定型的な縦長剝片を得る技法の存在が窺われる。

No.279 小型のものである。小型の縦長剝片を利用しており、打面付近は欠失する。背面下端に大きめの使用痕が見られる。

No.280 やや幅広で短い。打面は2面の剝離痕からなっており、同じ面から先行する剝離も行われている。背面右側縁の上三分の二程と、腹面左側縁の下三分の一程に連続的でやや大きめの使用痕が観察できる。

No.281 打面から末広がりの形状の縦長の剝片を利用したもので、厚手のへら状を呈している。頭部調整らしき剝離も見ることができる。打面は平坦で、下端には自然面を残す。

導面の左側縁に連続的ではあるが、大小不揃いの使用痕が見られる。なお、これはNo.293と接合するもので、後に別個に検討する。

No.282 横長の剝片を利用しており、平面形はつぶれた三角形状である。剝片の中央は厚みを持

第6表 第7地区A地点出土石器一覧表

遺物番号	類 別	発掘区	レベル(cm)	石材	鉢圖No.
VIA-1	B ——	1	-27	珪	288
2	D ——	2	-32	流	296
4	B ——	4	-65	流	285
6	B ——	6	-90	流	286
7	A UF	6	-36	流	278
8	D ——	6	-49	流	291
10	A UF	9	-50	流	280
13	D ——	10	-10	流	297
14	A UF	10	-19	流	279
15	B ——	10	-20	流	287
16	B ——	10	-30	流	290
17	A UF	10	-30	流	282
21	A UF	11	-10	流	281
22	A Sc	11	-25	流	277
23	D 母岩	11	-25	流	298
24	D ——	11	-30	流	293
25	B ——	11	-6	流	283
29	D ——	12	-5	流	294
35	B ——	19	-45	砂	—
36	B ——	19	-70	砂	289
42	B ——	19	—	流	284

※21と24は接合(個体別資料No.1)。29はそれと同一母岩。

25と42は同一母岩(個体別資料No.2)。

ち、打面は平坦である。背面は單一方向ではなく、多方向の剥離からなっている。下縁部に不連続な、細かい使用痕が見られる。

C) 剥片類(第128図)

計9点出土している。ほとんどが不定形なものである(No.283~290)。

No.283~285 No.283・284は、同一個体と思われる所以一括して記述する。ともに長さ3~4cmをはかり、やや厚みを持つ小型の綫長の剥片で、凹凸の多い剥離面の状況も酷似する。側面は多数の剥離からなっている。No.285は、やや綫長を呈するもので、No.283・284よりもやや大きめである。打面付近を欠失している。色調が若干異なるが剥離面の性状は類似し、これらと一まとめにしておきたい。

No.286 流紋岩質のもので、打面部分が幅が大きく、そこからやや先細りに伸びる形状を呈する。打面は平坦で、先行する剥離面は水平方向にはいる。

No.287 やや綫長で中央部が厚みを持ち、横断面が山形を呈する。先行する剥離面は大半が上方からのもので、その剥離の中で形成された面を打面としても利用しており、立方体状の石核が想定でき、打面転位を頻繁に行なうことが考えられる。

No.288 唯一石材がチャート質である。節理に沿って弾けたような裂片状の剥片である。

No.289 全体的に厚みを持ち、ごろりとした剥片である。

No.290 綫長の、厚みを持つ表皮剥片。水平状に先行する剥離が見られるが、その他は縦面を残している。

D) 石核(第129・130図)

6点ある(No.291~298)。

No.291 青灰色を呈する緻密な流紋岩を利用したもので剥片素材の石核である。石核の表裏、上下の全ての側縁において作業が行われており、やや横長の、幅3cm前後の貝殻状の剥片を得ていたものと思われる。打面調整等の調整技術は見いだしがたく、ほとんどが作業のための剥離であると考えられる。

No.293 砕を分割したものを石核として利用している。正面から見て右側面にポジティヴな面、左側面にはネガティヴな剥離面を持つ。上端には平坦な打面が残され、作業面は先程の剥離面に挟まれた木口面を縦に切るように設定されており、定型的な綫長剥片を得ていた。

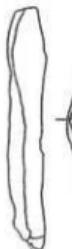
No.294 No.293と同一母岩と考えられるが、これも砕を分割したものを石核として利用しており、作業面から見て右側面には自然面を残している。打面は平坦で、No.293と同様に木口面に作業面が設定されている。2面の作業面が残るが、ある程度定型的な綫長の剥片が取られていた。

No.296 砕を半割し、その分割面を打面として作業を行っている。表皮を含む幅広の剥片を得ていたようである。現在の状態では2面の作業面が観察できるが、それほど多くの作業がされたとは思えない。

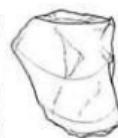
No.297 砕面を残したまま石核として利用する。砕の形状を大きく変えないような薄手の剥離が多く見られ、砕面を取り込んだ薄めの剥片が取られたと思われる。幾度か打面を転位し、同様の剥



277



278



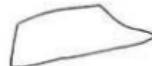
279



280



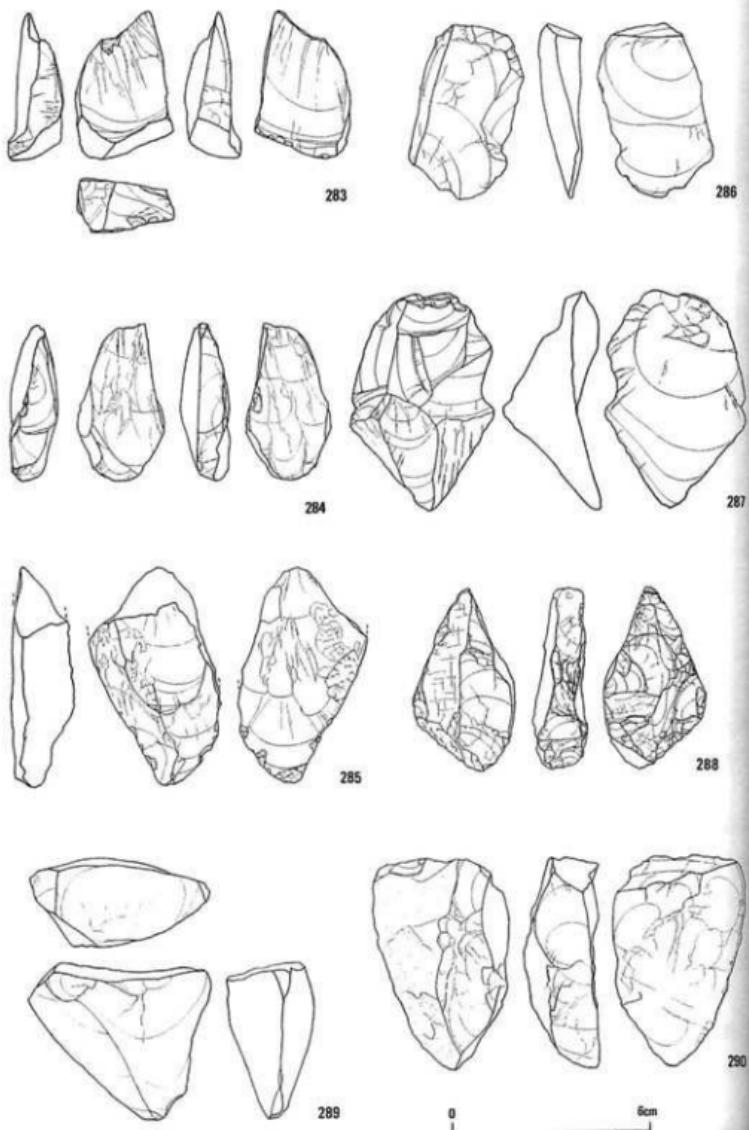
281



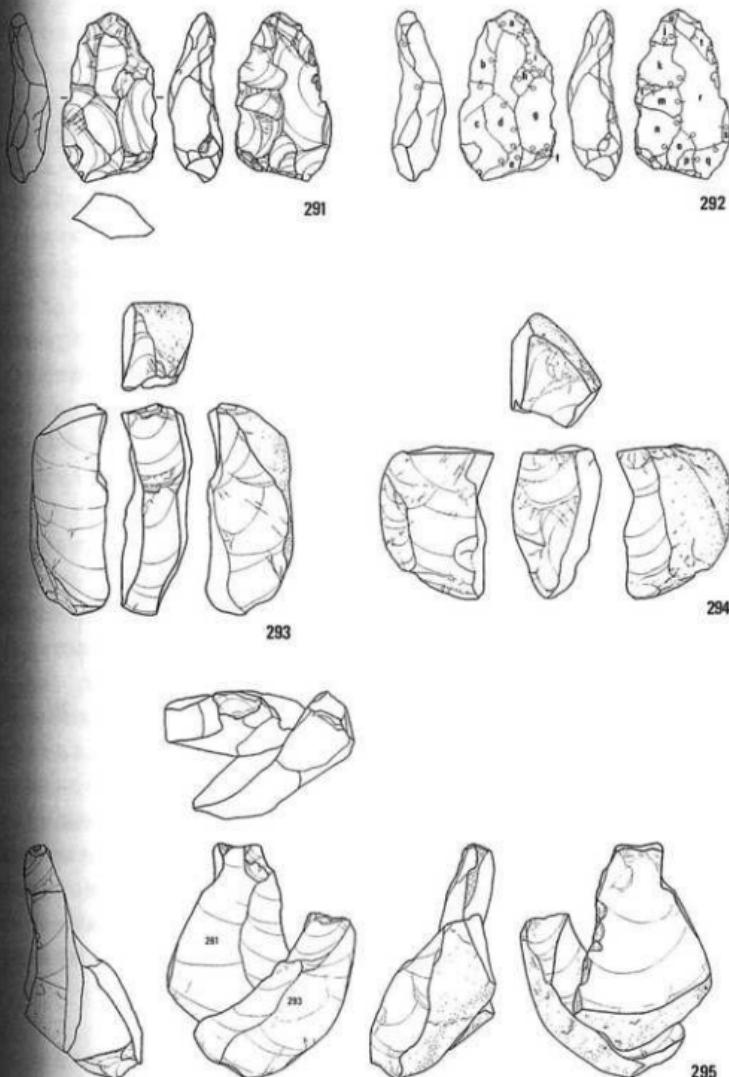
282

0 6cm

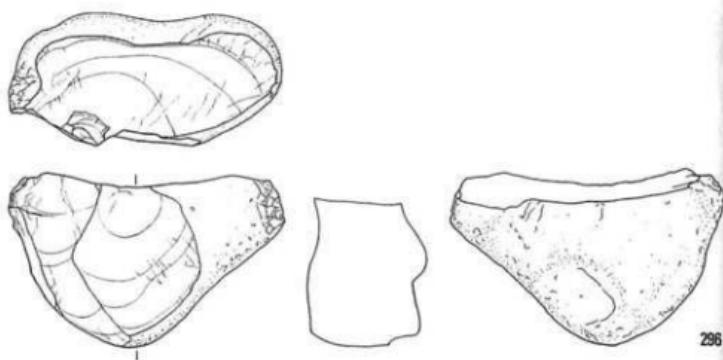
第127図 7-A 地点石器実測図 1)



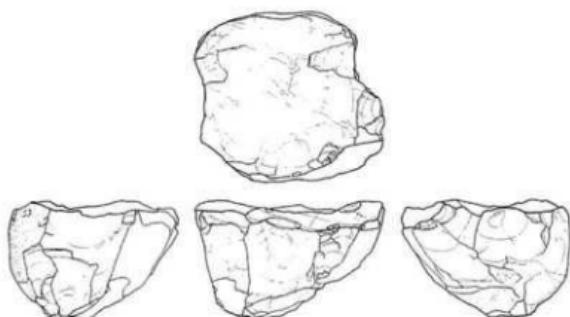
第128図 7-A地点石器実測図 2)



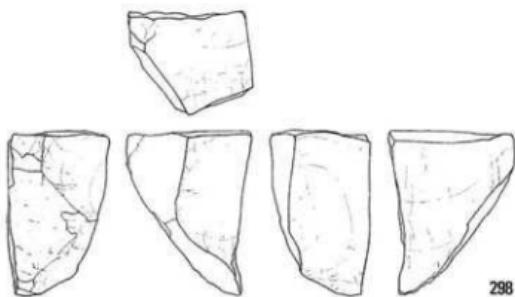
第129図 7-A地点石器実測図 3)



296



297



298

0 10cm

第130図 7-A地点石器実測図 4)

離を行ったようである。その後に礫を分割するかのごとく大きく剝離をしており、全体の形状を大きく変化させている。

No298 直方体状を呈する母岩状のものである。

6. 剥片剝離技法の検討

これまでの各個別の石器の記述からも7-A地点における剥片剝離技法についてはそのあらましが見えよう。本項では接合資料・石核・剥片の検討から7-A地点に見られる技法について考え、4種の技法を類型化した。以下それらについて実例に即して見ていく。

<技法 a 類>(No295)

No281+293, 294の一組から考えられるものである。礫を分割し、縦長の剥片を得て、それを石核とするもの。その得られた素材剥片の主に木口部分を作業面として利用し、定型的な縦長剥片を得るものである。なおこれらの技法から作出された目的剥片は見いだされていない。

まず接合資料であるNo281+293の側から検討しよう。接合関係図に見られるように2片の石器が接合し、No281の側が剥片、No293の側が石核である。まず2個体と考えることができる。しかしNo293の石核の正面からみて右側面にはポジティヴな面が残され、更にもう一個体あったことが推測され、礫を3分割したものと考えることができる。

次にそれぞれの石器の検討をする。No293の石核から見ていく。No293は3分割されたものの真ん中の部分である。作業面から見て右側面にはポジティヴな面、左側面にはネガティヴな面が見られ、裏面から下端にかけては礫面が残される。上端部には平坦な打面が設けられ、両側の剝離面に挟まれた木口面を作業面として利用している。下端の礫面のカーブ等から窺うと、この石核は現在見られる状態の2倍前後の大きさを持っていたと推測でき、前後方向にかなり作業が進行したと考えられる。<技法 a 類>としたものの中でも作業面の設定など典型的な例といえる。

No281の剥片の側を見よう。これは3分割されたもののうち、一方の端にあたるものから取られた剥片である。背面に先行する剝離面が2面見られ、この剥片に類似する礫面を一部持つような縦長の剥片が取られたようであり、a類の中にこのような剥片を得る技術が見られるとも捉えられる。しかし左側様に上方からの剝離が見られ、先行する剝離面との関係はわからないものの、先に見たNo293の石核のように木口面を利用した作業面と考えることもできる。その場合、先行する2枚の剝離面を、分割された礫を石核とするための調整の剝離と考えることもできる。一応ここでは2種間の可能性があることを指摘しておく。ここで、これまでの検討を模式的に示しておく。

①礫を三分割 →(No293の側)②剥片の上端に打面の設定→③木口面を利用して剝離作業
→(No.281の側)②打面の設定→③2回以上の剥片の調整剝離→④側縁での剝離(木口部分での目的剥片剝離)→⑤No281の剥片自体の剝離→⑥残核→(残り)

a類には上記の接合資料の他にNo294の石核も含まれる。No294の石核は正面から見て右側面に礫面を残し、左側面にはポジティヴな面が見られる。礫を二分割したものの一方のものであろう。上面には平坦な打面が見られ、やはり木口面を切り取るように作業面が設定される。現在の状態で作業による剝離面が2面見られるが、平行してではなく角度を持って剝離されており、左右に打点を

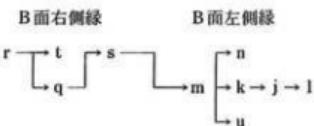
振るようにして作業したと思われる。No293での作業面の設定とやや異なるが、恐らく厚みの違いによるものであろう。

＜技法 b 類＞(No292)

No291の石核から考えられるものである。剥片を素材とし、石核の表裏、上下、全ての縁辺において作業を行ない、やや横長の貝殻状の剥片を作出するものである。本技法に関しても関連する剥片は確認していない。

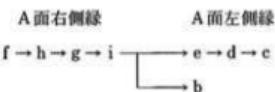
本例に関しては、各剝離面に記号を振り、切り合い関係を検討し、剝離の工程を考えた。なお、便宜上、左に図示した面をA、その裏をBとして話を進める。

まずB面での剝離の順序は以下の通りである。



B面のなかでも右の側縁から左の側縁へ剝離が進んだことが見て取れる。

次にA面での順序を見ることにする。



といったようになり、B面と同様に一方の側縁(この場合は右)からもう一方の側縁に剝離が進行している。A面とB面、すなわち表と裏の関係について見てみると、cの剝離面の打点部分をr・sの剝離が取り去っていることから、A面がB面に先行して剝離されたことがわかる。なお、o・pは素材面と考えられる。まとめてみると、A面の右側縁、左側縁と進む。そしてA面左側縁の裏側にあたるB面の右側縁に移り、左側縁で終了するものといえる。

次にこれらの剝離の性格について。これらの主な剝離は、大きさは割にまちまちであるが、縁辺によって剝離される剥片の大きさなどに顕著な差があるわけではなく、また剝離の順序がこれまでの検討で明らかなように、各側縁を順繰りに行っていくものであるからして、一つの縁辺を打面調整剝離、剝離作業の組み合わせと考えることはあまり妥当ではないだろう。剝離の順序の検討から、交互剝離という考えも退けられる。以上のことから概ねこれらの剝離を全て目的剥片の剝離のための作業と考えてよいであろう。その場合、得られる剥片はやや横長の幅2~3cm前後の剥片である。そして打面調整、作業面調整等の調整技術は見られない。また各側縁での剝離を一まとめの群として把握することができる。

最後に工程としてどのように考えられるかであるが、正面図中央部分に先行する平坦な剝離面が残っていることから、剥片を素材としたことが窺われる。まず得られた剥片を石核として利用できるように若干の調整の剝離を加え、先に述べたような作業に入ったのであろう。o・p等の剝離は石核とするための調整の剝離と考えることもできる。以上の検討結果を模式的に示しておく。

①素材剝片を得る→②石核とするための調整→③目的となる剝片剝離作業の開始(B面右側縁)→④剝片剝離作業(B面右側縁)→⑤⑥の裏にあたる側縁で剝片剝離作業(A面右側縁)→⑥剝片剝離作業(A面左側縁)→⑦終了か

〈技法c類〉

No296の石核から考えられるもの。疊を分割して形成された面を打面として、表皮を含む幅広の剝片を得るものである。No296では2面の作業面が残り、正面から見て左から剝離が進んでいる。ともに疊面を大きく取り込む薄手の幅広の剝片である。

〈技法d類〉

No297の剝片から考えられるものである。立方体状の石核を用意し、打面を頻繁に移動しながら作業を行っていくものである。

No297では背面はほとんどが上方からの剝離からなっており、その剝離のなかで形成された、肥厚する中央部にある面を打面としての剝離も見られる。以上のことから打面を転位することが窺え、その剝離面のなす角度から立方体状の石核を想定することができる。この剝片の場合、恐らく立方体状の石核の角の部分を取り込むようにして剝離されたものと考えられる。

以上のように技法としてa～dの4種の類型を考えた。そこで4つの類型以外の技術についても、技法として成立させることはできないが、7-A地点の性格を考える上で重要なものとして若干の指摘をしておこう。まず第1は剝片と石核の関係であり、No297の石核とNo290の剝片があげられる。No297は疊面を除去するように剝離を行い、最後に大きく石核を分割してしまうが、No290も疊面を背面に大きく取り込んだ表皮剝片で、両者を関係づけて考えることができよう。また、No278・280の剝片については定型的な縱長剝片であり、一般的な石刃技法を想定することができる。

7. 小 結

以上、個別の石器や技法などに関して検討を加えたが、ここでは他の技法や石器群との関連や編年的位置付けに関して考えることにしたい。まず、技法として考えることのできるものの中でもa・b類に関して比較、検討をしていきたい。

〈技法a類〉に関しては、ひとまず定型的な縱長の剝片を得る石刃技法として捉えることができる。東九州の石刃技法に関しては柳田俊雄氏が類型化、編年を行っている。¹⁰ 7-A地点の技法a類は疊を分割し、石核として利用するものであるが、それと関連を持つと考えられるのが氏の言う3bの技法の様相である。これは岩戸遺跡第3次調査において第6層上部から出土した石器群に見られる技法をもとにしたもので、剝片素材の石核で、その側面を利用して縱長の剝片を作出するものである。a類ではNo293・294の石核が作業面の設定などもよく類似する。3bの様相では、その技法から作出された剝片は先細りで、ナイフ型石器に利用されるものが多いようであるが、7-A地點からはそのような剝片は出土しておらず、a類から作出される剝片が必ずしも先細りでないようであることなど、異なる点もあるが、剝片剝離技術の類似は指摘できよう。

〈技法b類〉は小型の横長の剝片を得るものである。そしてその作業面はどこか一端に限定されることなく、前・後端、裏・表のすべての側面に設定される。このような技法を含む横剝ぎの技法

については、その概念規定などが混乱しているというのが実情であるが、最近平口哲夫氏が整理を行っている。ここではそれに沿う形で話を進める。平口氏は分類にあたり、作出される剝片が有底か否か、作業面が單設か否か、ということをあげている。そして第一から第三類(二、三類は更にA・Bへ細分)に分類している。b類に相当すると考えられるのが第三類Bである。平口氏は第三類Bを櫛石島技法とよんでいるが、b類をひとまず、櫛石島技法と考えることができる。しかし、瀬戸内地域に見られるような典型的な櫛石島技法の石核とは形態的な差異があり、製作工程上の類似を指摘するに止めなければならない。これらの他の石器に関しても検討を行いたいところであるが材料不足であり、ここでは描くこととする。

以上の比較作業から指摘できることを若干あげておこう。まず、柳田氏の3bの時期では、剝片剝離の技法としては、岩戸3bに見られるような剝片素材の石核の技法が主体となっているが、7-A地点では3bに相当するような技法と多様な剝片剝離技術が伴っていることが指摘できる。

また7-A地点の<技法a類>の位置付けに関しては、柳田氏の3bと同時期があるいはこれに前後するものと考えることもできる。後者の可能性を考える場合は、3bに見られる技法の祖形的なものとも、その崩れたものとも捉えることができる。いずれにしろ、岩戸3bの技法上の地方的、時期的変異の問題を考えておく必要がある。

次に縦年的位置に関してである。まず先に検討した技法の類似等から考えることにする。柳田氏の3b期は氏の言う石刃技法の見られる時期の最末期である。a類もその時期から大きく外れない時期と考えられる。平口氏の第三類Bつまり櫛石島技法についてはその技法自体の位置付けが不安定であるが、瀬戸内技法に後出する考え方を採用しておくと、柳田氏の3bへの比定と大きな矛盾はきたさないといえる。柳田氏の3a期に瀬戸内技法が見られることもその場合裏付けになろうか。

ところで最後に7-A地点全体としてどう考えられるかであるが、出土状況の中で指摘した通り、ブロック関係は明らかでなく、可能性のある幾つかの指摘を行っておく。まず全体を一まとまりのブロックと捉えた場合から考えていく。No283とNo284の同一個体関係や先程の縦年の位置付けもそれに沿ったものといえるが、その場合、a類、つまり東九州に見られる石刃技法の1類型である柳田氏の3bに相当するようなものと、b類、すなわち櫛石島技法に相当するような技法が伴っており、その外にも多様な剝片剝離技術が見られる地点として捉えることができよう。2もしくは3つのブロックに分かれる場合を考えていく。まず19区の一群が分かれる場合、それらの一群に何らかの技法的な特色等が見られるわけではなく、とりあえず7-A地点全体の位置付けに大きな影響はないであろう。6区の一群が分かれる場合では、技法b類がa類に共存しない可能性も考えられるようになり、b類の時期的位置付けが変化することも考えられ、技術的な系統関係を考えるうえでも違いが出てこよう。

以上の諸点についてのさらに進んだ検討が望まれるが、資料数・層位・分布などのデータ不足は否めず、いくつかの可能性を指摘するに止めざるを得なかったというのが実情である。